## 南国太平記「上」(直木三十五)

## 呪殺変

暗くて、密生した灌木と、雑草とが、未だ濡れていた。康そうに喜んでいたが、鬱々とした大木、老樹の下蔭は、薄高い、梢の若葉は、早朝の微風と、和やかな陽光とを、健

くらいに延びていた。枝が、草が、人の胸へまでも、頭へまでも、からかいかかるから、ほんの少しのあか土を見せているだけで、両側から、樵夫、猟師でさえ、時々にしか通らない細い径は、草の中

裾を端折って、紺脚絆だ。を腰に垂れていた。二人とも、白い下着の上に黄麻を重ね、白髯の人で、後方のは供人であろうか? 肩から紐で、木箱は、裏金だから士分であろう。前へ行くその人は、六十近い、は、裏金だから士分であろう。前へ行くその人は、六十近い、その細径の、灌木の上へ、草の上へ、陣笠を、肩を、見せ

登って行った。 撫でたり、供の人も、同じように、草の中を注意しながら、 老人は、長い杖で左右の草を、掻き分けたり、たたいたり、

家の末の島津家で、玄白斎は、その秘法を会得している人で家から、源家へ伝えられたが、それを秘伝しているのが、源弟の和田仁十郎だ。博士王仁がもたらした「軍勝図」が大江老人は、島津家の兵道家、加治木玄白斎で、供は、その高

あった。

六年、 首のない獣と、 まって、二人に道を譲って、御叩頭をした。が赤黒く凝固し、毛も血で固まっていた。 だった。そして、小脇の獣には首が無かった。疵口には、 猟師が二人を見て、ちらっと上げた眼は、 を引きずるように持ち、小脇に、重そうな獲物を抱えていた。 立止まった。仁十郎も、警戒した。現れたのは猟師で、 ようになると、 薬草園を開き、 修道者として、 とを基礎とした呪詛、調(伏術の一種であった。だから、その ンストンの「阿蘭陀本草和解」、「薬海鏡原」などが訳される 行手の草が揺らいで、足音がした。玄白斎は、 口伝玄秘の術として、明らかになっていないが、医術と、祈祷、ヾでんげんび 初夏から秋へかけて、いつも山野へ分け入っていた。 薬草に興味をもっていて、隠居をしてから五 薬学の心得のあった玄白斎は、島津重豪が、 蘭法医戸塚静海を、藩医員として迎え、 猟師の眼とに、不審を感じて 猟師は、 赤くて、 玄白斎は、その 杖を止めて 悲しそう 一寸立止 ∃ |

「それは?」

「わしの犬でがすよ」と、聞いた。猟師は、伏目で、悲しそうに獣を眺めてから

「犬が――何んとして、首が無いのか?」

い。てころがった。疵は頸にだけでなく、胸まで切裂かれてあった犬を置いた。犬は、脚を縮めて、ミイラの如くかたくなっ、猟師は、草叢へ鉄砲を下ろして、その「側」へ首の切取られ

て吠えて行ったまま戻って来ねえで――」そこの岩んとこで、焚火する奴があっての、こいつが見つけ「どこの奴だか、ひどいことをするでねえか、御侍様、昨夜方、「どこの奴だか、ひどいことをするでねえか、御侍様、

猟師は、うつむいて涙声になった。

「長い間、 忠義にしてくれた犬だもんだから、庭へでも埋め

てやりてえと、こうして持って戻りますところだよ」

玄白斎は、じっと、犬を眺めていたが

「よく、葬ってやるがよい」

玄白斎は、仁十郎に目配せして、また、草叢をたたきなが

ら歩き出した。

「気をつけて行かっし――天狗様かも知れねえ」

草の中に手をついて、二人に、御叩頭をした。

れていた。小一町登ると、左手に蒼空が、果てし無く拡がっ いて、杖を力に――だが、目だけは、左右の草叢に、そそが 細径は、 杉の老幹が矗々と聳えていた。そこは狭いが、 急ではないが、 登りになった。玄白斎は、 うつむ

って、谷間へ突出した岩が、うずくまっていた。

大きく呼吸をして、玄白斎は、腰を延すと、 杉の間から、

藍碧に開展している鹿児島湾へ、微笑して

「よい景色だ」

と、すぐ、微笑を消して、 と、岩へ近づいた。そして、海を見てから、岩へ眼を落す 、 岩と、 岩の周囲を眺め廻した。

「焚火を、しよりましたのう」

る焚木の片を拾う。 仁十郎が、こういったのに答えないで、岩の下に落ちてい

「和田――乳木であろう」

と、差出した。和田は手にとって、すぐ

「桑でございますな」

乳木とは、折って乳液の出る、桑とか、柏とかを兵道家の

方で称するのであった。

玄白斎は、岩へ、顔を押当てるようにして、岩から、何か

の匂を嗅いでいたが

「和田、嗅いでみい」

仁十郎は、身体を岩の上へ曲げて、暫く、鼻を押しつけて

いたが

「蘇合香?」

と、玄白斎へ、振向いた。玄白斎は、 ちがった方向の岩上

を、指でこすって、 「竜脳の香もする」 指を鼻へ当てて

「そう、竜脳\_

和田は、すぐ、その方へ廻って鼻をつけて

と、答えた。

「これは、塩だ」

平地があ

玄白斎は、白い粉を、岩の上へ、指先でこすりつけていた。

に、身体を曲げて、手を延した。そして、何かをつまみ上げ 仁十郎は、谷間へのぞんだ方の岩の下をのぞいていたが、急

て、玄白斎へ示しながら 「先生、蛇の皮が――」

と、大きい声をした。玄白斎は、険しい眼をして

人髪は?」

「髪の毛はないか」

仁十郎は、あたりを探して

をしたため、黒く焼けている岩肌を眺めていたが 二人は、向き合って、暫くだまっていた。

玄白斎は、

焚火

「和田、この岩の形は?」

「鈞品の形?」 召金剛炉に似ているであろうがな」

和田は、 ちらっと岩を見て、すぐ、その眼を玄白斎へ向け

て

「似ております」

と、答えた。

「牧は、江戸へ上ったのう」

「はい」

人命

調伏じゃ。この法を知る者は、牧の外にない」 呟くようにいったが、その眼は、和田を、鋭く睨んでいた。

和田は、自分がとがめられているように感じて、 面を伏せる

「この品々を、拾って――」

玄白斎は、 岩の上の木片、 蛇皮を頤で差した。 和田が拾っ

ていると

「他言無用だぞ」

の声とも思えぬような凄い悲鳴が起ってすぐ止んだ。 やさしくいった。その途端――下の方で、それは、

は、 たなら、判断しようとした。暫く、 もう一度聞こうとした。何んのための叫びか、もう一度聞え もう一度眼を合せると、和田が ちらっと、眼を合せて、すぐ、全身を耳にして、 黙って突立っていた二人

「斬られた声でしょうな」

玄白斎は、答えないで、下の方へ歩き出した。

四辺に気を配って――油断してはならん」

玄白斎は、 脚下の岩角を、 たどたど踏みつつ、 和田に注意

した。

「今のは猟師でしょうか」

「そうかも知れぬ」

た。あんな大きい、凄い悲鳴が起ろうとは、 二人の脚音と、 衣ずれの外、 何んの物音もない深山であっ 神も思えないく

らいに、 静かであった。

止めて、四方を眺めた。そして、小声で玄白斎が 二人は、声がしたらしいと考えた場所へ近づくと、 歩みを

「この辺と思うが

と、振返ると

「探しましょう」

「下手人が、 和田は、肩から掛けていた薬草の採取箱を卸そうとした。 未だ、うろついておろうもしれぬ。 用心して

ながら、薄暗い木の下蔭へ入って行った。玄白斎は よぎ、梢の風にも、注意した。和田は、杖で草を、 和田の置いた箱のところへ杖を立てて、玄白斎は、草のそ 枝を分け

「径から、余り遠いところではあるまい」

が見えなくなると の草叢へ、森の中へ、出たり、入ったりしていたが、暫く、 と、背後から、声をかけた。 和田は、小径を中心に、

「先生、先刻の猟師です」

草を揺がして、陣笠が、肩が――和田が、小走りに戻って来落ちついた大声が、小半町先の草の中から起った。そして

って、木の間からの陽光が斑に当っていた。近づくと、虫が、飛び立った。死体は草の間にうつ伏せにな二人が、小径から覗くと、背の着物だけが少し見えていた。

って、疵口には虻が止まって動かなかった。骨が白く見えていた。着物も、頸も、下の草も、赤黒く染ま赤黒い口を開けていた。肉が、左右へ縮んでしまって、肩の着物が肩から背へかけて切裂かれて、疵口が、惨たらしく、

「犬に、鉄砲は?」

立上って、和田にいった。
玄白斎は、髻と、頤とを掴んで、猟師の顔を検めてから、

和田は、径の方を見て、二三歩行くと「径から、ここへ逃げ込んだのだから―

|この辺に||-

玄白斎は、杖の先で、着物を押し拡げ、疵口を眺めて、と、呟いて、左右の草叢を、杖で、掻き分けた。

ф

糊を杖の先につけていた。和田が

「見つかりました」

と、径に近い草の中から、こっちを見た。

いが――一刀で、往生しとる。余程の手利きらしい」「血が、十分に凝固っていぬところを見ると、斬って間も無

「下手人は、

未だ遠くへ走っておりますまい、探しましょう

かの」

と、いうと

そういった玄白斎の眼は、「脣」は、決心と、判断と「見つけたとて、捕えられる対手ではあるまい」

く輝き、結ばれていた。そういった玄白斎の眼は、「脣」は、決心と、判断とに、

鋭

その調伏を成就して、多数の人々が幸福になれば、 に供し、自分の命をさえ、仏に捧げて祈りはしたが、それは、 神であった。 が救われ、 とは、正義の味方を勝たしめることで――それは、 の無いものである。仮えば、一人の敵将を呪い殺すというこ て、一人、二人の人を殺す調伏は、呪道の邪道であり、 法であって、大悲、大慈の仏心によるものであった。 の虫を殺して、 こうって、 と患、 大慈の仏心によるものであった。 私怨を以島津家に伝えられている呪詛の術は、 治国平天下への一秘 だから、術者は、外に憤怒の形を作り、残虐な生犠を神仏 ひいては天下のためになることで――つまり、 大の虫を助ける、 というのが、調伏の根本精 生犠は仏 一国一藩

れないものであった。か、怒りでは到達のできない信念で、正義に立たなければ現か、怒りでは到達のできない信念で、正義に立たなければ現活動以上の不思議さを、常に示した。それは、小さい怨みとそして、その信念は、完全に、精神を昂揚し、普通の精神に化すという決心と信念とからであった。

人の人に私怨をもって、調伏を行うような愚かな人間ではなするのであったから、その智慧、知識、人格から見ても、一長い、大きい、深い、苦痛と、修練をして、その秘術を会得長っして、加治木玄白斎にしても、代々の兵道家にしても、

- 4

かった。そんな人間では、修行のしきれる呪術ではなかった。

「薬草取りは?」

をかけると

「止めた――戻ろう」

もしないで、うつむき勝ちに、足早に歩き出した。和田は玄と、玄白斎は答えて、もう、左右の草叢へは、何んの注意

を、対の先で深しながら、黙ってついて行った。白斎の心がわからないらしく、忠実に、草の中の薬草の有無

だんだん木が、疎になって、木床峠へ出る往来が近くなった。を、 杖の先で探しながら、 黙ってついて行った。

右手の前方に、桜島が、朗らかな初夏の空に、ゆるやかに煙

をあげていた。

「はい」

仁十

玄白斎は、こういったまま、また、暫く黙っていた。

「先生――何か?」

「ふむ――事によると、のう」

何を考えているのか、玄白斎は、なかなか語り出さなかっ

「何か、大事でも――」

「うむ、容易ならぬ企てがあると、わしは思うが」

と、いって、突然、振向いて

「近々に、牧に逢ったかの」

一向に――」

「噂をきかぬか」

「ただ、江戸へ参られました、と、それだけより存じません」

斎は、隠居をしているのであった。牧仲太郎とは、玄白斎の後継者で、

牧に職を譲って、

玄白

「もしか、牧が――」

玄白斎が、呟いた。

「牧どんが?」

公日寄は、首と張っていいや――」

「今日のことは、和田、極秘じゃ」玄白斎は、首を振って

街道へ出てからも、玄白斎は、考えながら歩いているらし

るのを考えると、何か、大変なことが起っているように感じ大抵の雨にも、雪にも、薬草採りをやめない老師が、急に帰く、いつものように、左を見、右を見しなかった。和田は、

られた。

としたなら――何んのために――誰を――)(牧より外に、あの秘法を行う人間はない筈だ――牧の仕業

(もし、自分の考えが、当っていたとしたなら――島津家の

玄白斎は、険路も、汗も感じないで、考えつづけた。

興廃にかかわる――)

玄白斎の考えは、次のようなことであった。

立、それによって、南国片僻の鹿児島が、どんなに進歩した村に薬園を作ったし、演武館、造士館、医学院、臨時館の設は、シーボルトが来ると、第一に訪問した。それから、大崎当主斉興の祖父、島津重豪は、英傑にちがいなかった。彼

彼自らは「琉球産物誌」「南山俗語考」「成形図説」を著し、

し、それは、悉、く、多大に金のかかることであった。洋学者を招聘し、鹿児島の文化に、新彩を放たしめたが、

た。そうして、最後に、彼の手元には、小判はおろか、二朱吉原の大門を、模倣して立てた。洋館を作った。洋物を買っまた重豪は、御国風の蛮風を嫌って、鹿児島に遊廓を開き、

して、彼は隠居をした。に渡って、食禄が頂戴できないまでに窮乏してしまった。そばかいは、の質を売り、女は、「簪」を売って献金し、十三ヶ月金一つしかないことさえできるようにもなってしまった。

隠居させ、斉興を当主に立てた。 政策に、激怒した。そして直ちに、秩父を切腹させ、斉宣を然し隠居をしても、濶達な重豪は、自分に面当のようなこの斉宣は、秩父太郎季保を登用して、極端な緊縮政策を行った。って、苦難したことを忘れることができなかった。だから、次代の斉宣も、士分も、人民も、この重豪の舶来好みによ

行って、極度の藩財の疲弊を、あざやかに回復させた。彼の献策によって、黒砂糖の専売、琉球を介しての密貿易を予興は、茶坊主笑悦を、調所笑左衛門と改名させて登用し、

て、家来が 夷派で、従って極端な洋学嫌いであった。尊王派の頭領とし 然し積極政策では、重豪と同じ斉興ではあったが、大の攘

「西の丸、御炎上致しました」

と、いった時

ただ、焼けたと申せ」 「馬鹿っ、炎上とは、御所か、伊勢神宮の火事を申すのだ。

と、怒鳴る人であった。家来が恐縮しながら

「就きまして、何かお見舞献上を――」

然

比奴。可んでもよハ、見舞をくれてやれー「献上? 献上とは、京都御所への言葉だ。未だ判らぬか、

その時、三田の薩摩邸は、徹宵、能楽の鼓を打っていた。翌《ルリが来た時、江戸中は、避難の荷物を造って騒いだ。此奴。何んでもよい、見舞をくれてやれ」

たの大出来物」と書いてあった。 下の大出来物」と書いてあった。 日、門に大きい膏薬が貼ってあるので、剥がすと、黒々と「天

である。
の隠居を望んでいた。斉興が斉彬をよく思わないのは、当然の隠居を望んでいた。斉興が斉彬をよく思わないのは、斉興府は、斉彬を登用して、対外問題に当らせようとして、斉興の情として、父斉興とは、親しみが淡かった。その上に、幕られて、洋学好みの上に、開国論者であった。そして、自然斉 彬は、この父の子であった。だが、幼少から重豪に育て

折角の金をまた使わせるのだとも考えた。怨みを幕府へもっている人々は、幕府が、斉彬を利用して、また、重豪の轍を踏むであろうと、憂慮した。木曾川治水のそして、斉興も、家中の人々も、斉彬が当主になっては、

- 6

聡明な子の上に、斉興の手元で育てられた。の。竈を一身に集めていた。そして、お由羅の生んだ久光は、そうして、斉彬の生母は死し、斉興の愛するお由羅が、そ

(斉彬を廃して、久光を立つべし)

名白斎は考えた。(それは、斉彬の近侍の外、薩藩大半の人々の輿論であった。)

玄白斎は考えた。

(斉彬を調伏して、

藩を救う――

然し――)

老人は、山路を、黙々として、麓へ急いだ。

和田田

を、 と、呼んで立止まった。和田が、解しかねる玄白斎の態度 いろいろに考えていた時であったから、ぎょっとして

」 は い

と、周章てて、返事して、玄白斎の眼を見ると

「その辺に、馬があるか、探してのう」

「宀っ走り、急いで戻ってくれぬか」 こういいながら、腰の袋から、銭を出して

い、と思うと、ほんの少しでもいいから、それが、何んなこ和田は、何か玄白斎が、非常の事を考えているにちがいな 慧もあり、判断もつくと思った。それで とだか、知りたかった。それさえ判れば、 自分にも多少の智

御用向は?」

たい――居ったら、それでよい。もし居らなんだ節は――」 「千田、中村、斎木、貴島、この四人の在否を聞いてもらい

「何時頃から居らぬか?――何処へ行ったか? 誰と行った 玄白斎は、髯をしごきながら

処へ行ったか? ―それから、便りの有無――よいか、何時、 便りがあったと申したなら、 何時、 誰と、何 何処か

ら、と、これだけのことを聞いて――」

玄白斎は、

一人も、 もし、居らなんだなら、 高木へ廻って、 高木を邸

小首を傾けて、まだ何か考えていたが

呼んでおけ。それから」

玄白斎は、 和田の眼をじっと見ながら

.何気なく、遊びに行ったという風で、聞きに行かんといか

玄白斎は、こういって、静かに左右を見た。 そして、

声で

「牧は斉彬公を調伏しておろうも知れぬ」 和田は、 口の中で、はっといったまま、うなずいた。

なかったなら、一刻も猶予ならん。すぐに延命の修法だ」 「わしの推察が当って、もし、貴島、斎木らが四人ともおら

「 は い

きたださぬと、わしの手落になる」 も、秘法を行っている上は、何んのために行っておるか、聞 君を調伏しておるとすれば、許してはおけぬし、左はなくと ことは、兵道家として、不逞、不忠の極じゃ。君の悪業を諫 めるには、別に道がある。もし、牧が、軍勝の秘呪をもって、 「斉彬公の御所業の善悪はとにかく、臣として君を呪殺する

く果したいと、気が、急いてきた。それで、 して、判った以上、すぐに、命ぜられた役を、出来るだけ早 和田は、玄白斎の考えていたことが、すっかり判った。そ 大きく、幾度も

うなずいて

「それでは、一走りして。谷山には、 馬がござりましょうか

お先きに」 和田は、木箱を押えて

「わしも急ぐ ――」

と、いうと

箱を――」

と、玄白斎は、 手を出した。

「はっー -恐れ入ります」

て走り出した。土煙が、和田と一緒に走り出した。 和田は、 急いで採取箱を肩から卸して、手渡すと、

肌着をべっとりと背へくっつけ、汗を拭き拭き、小走りに 芝野の百姓小屋が、点々として見えてきた。和田仁十郎は、

(馬——馬

も早く急ぎたかったし、暑かったし、心臓も、呼吸も、 と、思いながら、馬の動きを、馬の影を求めていた。 一刻

(早く、馬を)

と、求めていた。土埃が、額へまで、こびりついた。

「この辺に馬がないか」

雑貨を売る店へ怒鳴って立止まった。

「馬?」

と、店先にいた汚い女が、首を振って

「谷山まで、ござらっしゃらぬと、この辺には、無いですよ」

済まぬが、水を一杯」

仁十郎は、肩で呼吸をしながら、ようようこれだけいった。

水なら― **一たんと―** 

て、容器を取りに入った。 女は、薄暗い勝手から、 つづけざまに飲んだ。 桶をさげて来た。 女が、茶碗を持って、 和田は、身体を曲げると手で掬っ 和田の前 小走りに来 へ置い

た。

投げつけるようにいって、もう、灼い陽の下へ出てい

茶店へ来たが、いつも、茶店の脇の、大きい欅の木の下に、て、苦しそうに、小走りに走りつづけた。谷山の村へ入って、 らなかった。和田は、 一二疋ずついる馬が、 暑い、この頃の陽の下を旅する人は少いから、戻り馬も通 俯向いて、口を開きながら、 一疋も見えないので、欅の下蔭は、 眉を歪め 淋

しかった。

(出払いかしら)

- 婆さん」と、失望と、と、思うと、失望と、 怒りを感じて

と、茶店の奥へ怒鳴った。

「馬は?」

「馬かえ」

ともわかっていそうなものだ、 婆は、 いつも、 馬のいるところに、影が無いから、 というような態度で 聞 かず

「居りましねえが」

馬子は?」

「馬子も、居りましねえ」

和田は、この婆が、意地悪く、 馬を皆、隠したように感じ

「急用だに

「そのうちに、戻りましょう」

和田は、渇と、 疲れに耐えられなくなって、 腰をかけた。

|水を一杯|

「水は悪うござるよ。熱い茶の方が――」

「水でよい」

のところから、爺が、顔を出して

家が四人、急ぐからと――つい今し方、 「つい、今し方まで、四五疋遊んでおりましたがのう。 乗って行かっしゃり 御武

「何処かに、爺――野良馬でも、工面つくましたよ。ほんの一足ちがいで、旦那様」

- 野良馬でも、工面つくまいか」

一さあ ――婆さん、 松のところの馬は、 走るかのう」

和田は

(走らぬ馬があるか、気の長い)

と、じりじりしてきた。

て行こうと、疲れた腰を上げて、葭簾の外へ、一歩出た。いなかったが、和田は、町人か、百姓なら、話をして、 人通りの無い、灼熱した街道に、 小走りに馬が、近づいて来た。 誰か、 鉄蹄をかつかつ反響させ 乗っているにちが 話をして、借り

玄白斎が、 木箱をがたがたさせながら、半分裸の馬子を、

゙馬がないか」

馬側に走らせて、

近づいて来た。

一疋も、ござりませぬ」

一馬子」

馬子は、 呼吸を切らして、 玄白斎を、 見上げただけであっ

「もう一疋、都合つかぬか」

馬も、馬子も、 茶店の前で止まった。 馬子は、 胸を、 顔を、

忙がしく拭いて

「爺さん。四疋とも、行ったかえ」

四疋とも、行ったよ」

「旦那、ここには、四疋しか居りませんのでのう」

和田は、馬側へ近づいて

「一足ちがいで、家中の者が、四人で――」

と、まで云うと、

玄白斎が、大きい声をして、和田を、 鋭く見た。 和田は、

玄白斎のそうした眼を見ると同時に

(そうだ。猟師を殺して、一足ちがいに)

そう感じると、すぐ

「爺――その内の一人に、背の高い、 禿げ上った額の、 年 齢

三十七八の侍は居らなんだかの」

「額の禿げ上った、背の高い? 婆さん、 あの長い刀 の御

玄白斎は、手綱を控えたまま、茶店を覗き込んでいた。

武家の背が、 高かったのう」

「一番えらいらしい――」

婆は、首を振って、仁十郎を、じっと見て

「けれど、四十を越していなさったが

玄白斎が

「その外のは、三十前後ではなかったか?」

「はい、 お一人だけは、二十八九

**゚**はいはい、 玄白斎は 小肥りの、

愛嬌のある―

それは、

少し、太ったー

馬子っ」

と、叫んだ。 馬子は

「へっ」

と、返事をして、茶店の中から、 周章てて飛び出した。

「それが取計う」

玄白斎は、和田を、顎でさした。そして、和田

すぐ、続け」 「馬子に手当してやれ。わしは、彼奴を追うから、都合して、

半分は、馬が、歩み出してからであった。馬子が

旦那っ」

た。玄白斎は、手綱を捌いて、馬を走らしかけた。 と、叫んで、馬の口を取ろうとするのを、 和田が、 引戻し

て来なかった。

「いけねえ、旦那っ」

「手当は、 取らすと申すに」

和田は、力任せに、馬子の腕を引いた。

間――邸が、部屋が、急に、しいーんとした。 人々の立去った足音、最後の衣ずれが、聞えなくなった瞬

恐ろしい空想を、 あった。七瀬は、 んだ、丁度、 それは、いつも感じたことのない凄さと、無気味さとを含 真暗な、墓穴の中にいるような、 ちらっとさせた。 肌をぞっとさせ、 頭の中へ不吉なことや、 凄い静かさで

(何を、怯けて

彬の二男、寛之助の眼を、じっと眺めた。 と、自分を叱って、すぐ膝の前に、よく眠入っている、斉

睫毛も動かさないで、 下らない、艶々と、紅く光る頬をした四歳になる寛之助は、 新しい蒲団を三重にして、 眠入っていた。七瀬が耳を寄せると、 舶来の緋毛布に包まれて、熱の

ていた。

物音一つしない静かさで、七瀬一人が灯影のゆらぐ下に坐っ は、次の間か、遠くないところにいるにちがいないのだが、

少し開いた口から、柔かな、穏かな呼吸が聞えた。

(この分なら――)

誰かが顔を出しそうなので、じっと眺めていたが、 うに感じたが、睨むと、何んでもなかったし、屏風の蔭から、 い天井を、じっと凝視めていると、じりっと、下って来るよ 抗するように、 にかかった。その静かさに、それから、自分の臆病さに、 と、微笑して、身体を引くと、また、余りの静かさが、 わざと灯の影の暗い天井を仰いだ。 暗い、 何も、 反 出

るような気がした。 の中から、鬼のような、化物のような奴が、こっちを見てい 大事な役を勤めておりながら、何んという臆病な――) (なぜ、今夜に限って、こんなことが、気にかかるのか? と、自分を励ましたが――そう思う次の瞬間に、後方の襖

が、物音も、話声もしなかった。 左右の次の間には、典医と、侍女と、宿直の人々とがいた - 10 -

出て、近侍も、 てしまった。そして、徹夜をして詰めていた侍女が、更代に 蘭法医の寺島宗英も、漢法医の延樹方庵も、控えの間に退っ 起きているので、その部屋の方へ行った。英姫が、 寛之助の母の英姫は、寛之助が安眠したのと、斉彬が未だ 七瀬に頼んで休憩に下るし――それらの人々 去ると、

って、 つかなかったが、 長男の菊三郎は、生れて一ヶ月日に死んだので、誰も気が 原因不明の病で死んだから、人々の記憶には、 澄姫と、 邦姫の二人は、三歳と、 四歳にな 十分残

っていた。

いっぱいに、恐怖の色を見せて、小さい掌に汗を出していた十日程前から眠入っていても、出し抜けに泣いたり、眼の中ているのであった。時々、熱を出して、よく怯えて――このこの二人の死ぬ前の症状と、寛之助の近ごろとが、よく似

「怖いっ」

医者がと、近いて、飛び起きたり――それは、前の二人の時にもと、泣いて、飛び起きたり――それは、前の二人の時にも

こ、ゝっこが、斉彡り工寺りここは「御弱い上に、熱が高いと、恐い夢をよく見ます」

と、いったが、斉彬の近侍の二三は

|然し||--

人々の言葉を思い出してと、いって、うつむいて、何か考えていた。七瀬は、そのと、いって、うつむいて、何か考えていた。七瀬は、その

「調伏?——」

瀬の心臓を、どきんとさせた。 と、ちらっと、考えた時、ぴーんと、木の裂ける音が、七

七瀬は、裁許掛見習、仙波八郎太の妻であった。そして斉

「何うも、可怪しい、何か、悪い企みがあるのではないか」を仰せつけられたのであった。あったから、寛之助の病が、悪化してくると共に、その看護彬の正室、英姫の侍女でもあった。誠実で、聡明で、沈着で

された。澄姫が、亡くなった時にも、熱がつづいて、医者は、と、いう疑いが、まず、お目付兼物頭、名越左源太から起「何でも」可怪しい。何だ、悪い立みだまるのではないだ」

首を振るだけで

「さあ――」

手を、出し抜けに、蒲団の中から出して、誰かに、縋りを求が判らなかった。澄姫は、死ぬ少し前から、小さい、痩せたと、臆病そうな目を上げるだけであったが、今度も、病状

「怖いっ、怖いっ」

めながら

ら、侍女へ抱きついて、顔を、その懐へ差込んだ。ってしまって、いじらしい程、恐怖の怯えを眼にたたえながと、絶叫した。身体が、がたがた顫えて、瞳孔が大きく据

「夢でございますよ――何も、おりませぬ」

澄姫は、がくがく顫えて、しがみついたままであった。と、侍女は、怯えている澄姫を、正気にしようとしたが、

怖れだしてきた。昼間の、陽の明るい折の枕許にいたが、澄姫は、だんだん、夜になるだけにでも、英姫は、余り、いじらしいので、自分が夜を徹して、澄姫

「寝てから、何を、見るの?」

、聞くと、それだけでさえ、もう、顔色を変えて

「鬼――」

と思うと、斉彬の冷淡さに、腹が立ってきた。を捨てておけなかった。もう一度、あの恐怖に怯えさせるかを消太は、その澄姫の死を想い出すと、可愛盛りの寛之助きないようであった。そして、だんだん衰弱して行った。と、答えると、それ以上のことは、怖ろしくて、説明もでと、答えると、それ以上のことは、怖ろしくて、説明もで

と、いうと、斉彬は、ホンフランドの「三兵話法」を、読「寛之助様、ばかばかしゅうござりませぬが」

- 11 -

「あれは、生来弱い」

しかし 御病状が、 異様でござります」

「病気のことは、医者に任せておけ」

医者の手ではおよばぬ

「なら、天命だ」

くはござりませぬ。典医、侍女の方は、『某』が、見張ります 「よもやとは思いまするが、例のあること。油断せぬに、し 左源太は、それ以上、斉彬に云えなかったから、英姫に

から、夜詰の人に、政岡如き女を――」

であった。病間夜詰と、きまった時、仙波八郎太は と、すすめて、そして、七瀬が、選まれることになったの

れたら、ここの敷居を跨げると思うな」

「寛之助様は御世継ぎじゃで、もしものことが、おありなさ

た、験が無かったなら、面目として、女房を、そのままには捨 めたなら、出世の。緒をつかんだことになるし、他人に代っ て置けなかった。 と、云い渡した。小身者の仙波として、七瀬が首尾よく勤

「心して、勤めまする」

に来るように感じた めながら、手を延そうとすると、部屋中が、急に薄暗くなっ になく、気が滅入って、 灯が、暗いようなので、心を切ろうと、じっと、灯を見つ と、答えて来たが、 畳 が、 夜の詰をして、三日目の今夜は、いつ 何うしたのか、怯け心が出て来た。 襖が、 四方上下から、自分を包み

七瀬は、 脚下から寒さに襲われた。 はっとして、 手を引く

> と、心を落ちつけようと、努力しながら、四方を見廻した。 の函があったし、洋式鉄砲、香炉、掛物の万国地図。それか 床の間には重豪の編 輯した「成形図説」の入った大きい木 棚には呼遠筒が、 薄く光っていた。

を見ると、前よりも薄暗いようであった。蝋燭の灯が、妙に 人を呼ぶのも恥かしかったから、心切りを持ち直して、燭台 誰かを呼びたい、ような気もしたが、自分の気の迷い で、

(和子は――)

黄ばんでいて、蔀屋の中が、乳白色の、霧のようなもので、

後へ、流れ込むように動いていた。 見定めようとすると、その乳白色の空気が、 睫毛さえ、はっきりと判ったから、安心して、部屋の異状を、 と、寛之助を見ると、よく眠入っているし、その愛らしい 薄暗い屏風の背

方が、屏風を透して見えているように思えた。 そして、屛風が、はっきりと眼に見えていながら、 分の恐怖心にまけまいと、それを、じっと眺めていると、霧 の固まりが屛風の背後で、ぐるぐる廻り出したように見えた。 七瀬は、蒼白になって、息をつめて、膝を握りながら、自 屏風の後

夢ではない)

押上がってくるように思えた。 たように感じられてきて、畳が、四方の隅から、 と、思った瞬間 ・部屋の中が、急に、四方から狭められ じりじりと、

眼は、 ると、霧が気味悪い、青紫色にぎらぎらと光るようにも見え 七瀬の手は、いつの間にか、守り刀の袋へかかっていた。 恐怖に輝きながら、廻転している霧を、睨みつけてい

眼が、 凄い眼が、それは、 光ったのは眼の迷いであるような――そして、自分の 何うかしていると、じっと、 人間の眼であったが、 眺めると、その霧の中に 悪魔の光を放って

「あっ」

いる眼であっ

と、叫んだが、声が出なかった。

(これが、寛之助様に

思ったが、手も、足も、 身体も、 動かなかった。急に、

囲に、 青紫色の光が、急速度で、廻転すると共に、その光る眼の周 人の顔らしいものが現れたように感じた。 痩せた、

い顔であった。

七瀬は、 動かぬ手を、全身の力で動かそうとしながら、

念を凝めて

(こいつを、退散させたら――)

と、全精神力を込めて、睨みつけた瞬間、寛之助が

一ああっ」

と、叫んで、 両手を、 蒲団から突き出すと、 顫えたまま、

左右へ振って

「こわいっー

汗をにじませて、 と、部屋は、前のように明るく、その灯の下で、寛之助が、 七瀬が、その声に、寛之助を眺めて、はっと胸を押される 恐怖に眼をいっぱいに開いているだけであ

「和子様っ」

て、しっかりと抱きついた。七瀬の頬に触れた寛之助の額は と、上から、抱くと、寛之助は、身体を、がたがた顫わせ

ただの熱でなく、熱かった。

起ったようにも思えたし――七瀬には、判断がつかなかった。 疲れから、夢を見たような気もしたし、本当に、 長いようでもあったし、短いようでもあった。ほんの瞬間、 奇怪な事が

ただ、鋭い眼だけは、頭の隅に、 閃いていた。

顔が見えると、 侍女が、つつましく、 襖を開けるのさえ、もどかしかった。

「方庵を

侍女は、 立って入ろうとした。

「方庵を、

侍女は、 七瀬の声と、顔が、ただでないのを見て、 襖を閉

め残したまま、 小走りに行った。

奥から叫んで、置かれまいとした。 - 13

「七瀬がおります。 七瀬がおります」

ら、七瀬は、眼の底、 に似ていると考えた。だが、似ているその誰かが思い出せな かった。 背を軽く叩いて、顫える寛之助を、安心させようとしなが 頭の隅に残っている今の幻像が、

寛之助が獅噛みつい 抱き上げていて、風邪をひかしてはならぬと思ったので、 ているまま、 寝床の中へうつ伏せになっ

(あの物の怪に、おって、毛布でくるんだ。 おそわれなさるのかしら)

考えたが、そんなことが、有るべきはずでなかったし、

自分の心の迷いから、幻に見たことを、迂濶に、 こともできなかった。然し、心の迷いにしては、 余りに明瞭人には話す

と、幻の顔が残りすぎていた。

之助の熱を出させたように、睨みつけて、枕辺に坐ると 奥小姓野村伝之丞とが、入って来た。三人とも、 微かに、足音がつづいて襖が開いた。方庵と、左源太と、 七瀬が、

「何かに、 おびえなされまして、 急に、 お目ざめになると、

このお熱でー

方庵が、額へ手を当てた。

七瀬が、身を引こうとすると

「こわいっ、いやっ――」

寛之助が、烈しく、身体を悶えて、小さい拳をふるわせつ

つ、七瀬の襟をつかんだ。

化物でも、打った斬りますぞ、 「左源太が、打った斬ってやりましょう。 若

寛之助は、 顔を埋めたまま、 いやいやをした。

「余程、 おびえていなさる」

と、伝之丞が呟いた。

「方庵、 澄姫様の時と、同じであろうが」

「うむ、 気から出る熱らしいが

方庵は、 寛之助の脈を取って

「宗英も、判らんといいおったが――」

「七瀬― -何んぞ、異状無かったか?」

か? それを見たといっていいか――本当に見たのか、夢を見たの 七瀬は、黙って左源太を見た。異状すぎた異変を見たが、 それさえ明瞭しないことを、いいもできなかった。

「異状は、ござりませぬが――」

っている牧仲太郎に似ているように思えた。ただ、牧は、も と、いった時、さっき見た幻の顔が、島津家兵道の秘法を司

っと若かった。 (調伏 七瀬は、こう感じると、冷たい手で、身体を逆撫でされた ――もしかしたなら)

ように、肌を寒くした。

何を御覧なされますな。左源太が、追っ払ってくれま

しょう。どっちから?――あっちから?」

ちらっと見て、うなずいた。左源太の指は、屛風の方を指し ていた。七瀬は、もう一度、頭の心から冷たくなってしまっ と、寛之助の顔をのぞき込むと、左源太の指している方を、

頼むえ」

左源太は、

鬼でも、

が、廊下の入口へ、ぴたりと坐った。そして、懐剣の紐を解 ていた侍女達が、頭を上げて、二人が、襖のところへ、三人 お由羅が、こういって、一間へ入ってしまうと、手をつい

お由羅が入ると、 青い 衣をつけた、三十余りの侍が、 部屋

の隅から、御辞儀をして

いた。

「用意、ととのうております」 部屋の真中に、六七尺幅の、 三角形の護摩壇が設けられて

茅草を布いた坐るところの右に、百八本の護摩木 あった。壇上三門と称されている、その隅々に香炉が置かれ、 にした乳木と、段木とが置かれてあった。 油浸し

Ł をかけてから、炉の中の灰を、 足の大指の上へ重ねる坐り方をして、炉の中へ、乳木と、 へ上って、蹲踞座と呼ばれている坐り方― お由羅が、 その男が、 これのでは、これでは、た手に金剛杵を持ち、首へ珠数、積み重ねた。そして、左手に金剛杵を持ち、首へ珠数する。これ間れる坐り方をして、炉の中へ、乳木と、段 壇の前へ 跪ず 黒い衣を、 背後から着せた。 いて、暫く合掌してから、 右手の指で、額へ塗りつけた。 -左の大指を、お由羅は、壇 立上る 壇 上

右

子と塩とを混じたものを、その上へふりかけた。 侍は、 付木から、護摩木へ、火を移すと、 お由羅は、 小さく、 白 芥

ぜる音がした。火花がとんで、すぐ燃え上った。

坐っている壇の下、 侍は、 一礼して退くと、索 縄と、刀とをもって、お由羅の 後方へ、同じように指を重ねて坐った。

ば、 そして、低い声で 月輪中に、 「東方阿閦如来、 閻吒羅火、 椎火、謨賀那火、邪悪心、邪悪人を燃尽して、結跏趺坐して、円光魏々、悪神を摧滅す。質けいかがざ 金剛忿怒尊、赤身大力明王、穢迹忿怒明王、 願わく 円明

Ł 祈り出した。 の智火を、虚空界に充満せしめ給え」

今、祈った仏は、 たのであったが、三角の鈞召火炉は、 寛之助の病平癒の祈祷をするといって、この護摩壇を設け 呪詛の 仏であった。 調伏の護摩壇であった。

うも の糞、 のは 牛の頭、 々 人を呪い殺すために、 牛の血、 人髪、 人 骨、 丁香、 白檀、 人血、 火に投じる生犠の形であっ 蛇皮、肝、 蘇合香、 毒薬などとい 鼠 め毛、 猪

れ、 黒煙が、 塩を振りかけ、 薄く立昇ると、 水をそそいだ。煙は、 お由羅は、 次々に護摩木を投げ入 濛々として、 生物

度に

くなった。 して来ると、 のように、天井へ突撃し、柱、 炉の中の火が、 燃え上って、 襖を這い上って、 部屋の中が、 渦巻きおろ

お由羅は、暫く眼を閉じて、何か念じていたが

命をちぢめ給え」 南 金剛忿怒尊、 御尊体より、

青光を発して、

寛之助の

と、早口に、 低く だが、 力強くいって

「相は?」

と、叫んだ。 と同時に、 侍が

「蛇頭形」

槍形、牙形というように、 と 叫んだ。 火炉 .. の 中 . の 火焔 焔 の形によって判断をするのが、 は、 蛇の 頭 の 形をして

調伏法の一つであった。

丁香とをそそぎかけて お由羅は、 、また、 眼を閉じて、 護摩木を投げ入れ、 毒薬と、

一色は?

と、叫んだ。

「悪じょう」「声は?」 黒赤色」 黒赤い、 凄さを含んだ火焔が、

ぱっと立ってい

それは、 焔の音を判じるのであった。

蛇の皮を、 煙と、 異臭とが、 犬の胆を、 部屋の中で、渦巻いた。 人の骨を、 炉の中へ投げ入れて、 お由羅は右手で、 その

相は?」

とか

「声は?」

っていた。 えて、いつもの、甘い、女の声が、狂人のように、甲高くなみ出していたし、眼は異常に閃いていた。手も、体も、ふるで判じて、調伏が成就するか、しないか――額は、脂汗が滲とか――火焔の頂の破散で判じ、音で判じ、色で判じ、匂

浅黒い、だが、張切った、艶々した腕が二の腕までまくりい眼を閉じて、右手を侍の方へ突き出した。へ廻った。そして、何か、口の中で呟いて、お由羅の手をと、った。東縄を、壇上へ置いて、刀を持ち直して、お由羅の右手

て、見る見る火の中へ、点々と落ちた。白く浮いている静脈を、すっと切った。血が、湧き上って来ーけは、こう叫ぶと、刀の尖を、手首のところへ当てて、青「南無赤身大力明王、穢迹忿怒明王、この大願を成就し給え」た。

上げられると、侍の手に引かれて、火焔の上の方へ、近づい

し戻した。 を押えて、火の中へ倒れかかろうとするお由羅を、後方へ押ま、壇上へ、片手をついてしまった。その瞬間、侍は、疵口だん、お由羅が、首を下げてきて、左手に金剛杵をもったま二人は、そのままの形で、俯向いて、何か念じると、だん

「大願成就、大願成就

と、いいながら、お由羅の両手を、胸のところへ集めて、

抱きかかえながら

「お方」

貼った上から、縛った。お由羅は、しびれた、痛む胸を、這を押えて、軽く、お辞儀をした。侍は、布を出して、膏薬を背を押して、叫んだ。お由羅は、眼を開けて、自分で手首

「火が、みんな、左へ廻りましたの」

うようにして、壇から降りて

と、微笑した。

「牧は、今夜あたり、お国の何の辺で、祈っておりましょう夜の内に、成就致しましょうか」「吉相にござります。焔頂、左に破散して、悪声を発す。今

侍は、壇の下から、護摩木を取り出して、積みながらか」

刀を握って、牛の眼へ、ぴったりつけながら右手に置いてあった、尖に、微かに、血のにじんでいる直白檀と、蘇合香とを、牛頭の上から、撒きちらした。が、部屋中へ充ちた。兵助は、口の中で、何か唱えながら、かに、火炉の中へ置いた。すぐ、毛の焼ける、たまらない臭兵助は、気味の悪い、鈍い眼をした牛の頭を、両手で、静

「南無金剛忿怒尊」

兵助は、左の眼も突き刺した。と、叫んで、眼を突いた。白い液が、少し流れ出て来た。

「お待ちに、ござりまするが」

三度目の使が、襖外で、恐る恐る、声をかけた。斉彬は

\_ | |-

と、いったまま、紫檀の大机に凭れて、書物をしていた。

そして、筆を走らせながら、

一今行く」

囲にも、書物と、書き損じの紙とが、散乱していた。と、大きいが、物やさしい声をした。机の上にも、膝の周

本に利益と、幸福とを齎して来るものであった。造令撤去建議案」とは、一日早く出来上れば、一日だけ、日ばならなかったが、今書いている「大船禁造解」と、「大船禁寛之助の臨終にも、同じ邸にいる父として、無論、行かね

ずであった。 おの中も、血の中も、大船を造ることを禁じるとい の頭の中も、血の中も、大船を造ることを禁じるとい がの頭の中も、血の中も、大船を造ることを禁じるとい

いた。ふっと、寛之助のことを思い出しても、自分の子の病、名、輿論に対して、ただ一人、この部屋で、こうして闘って雑な手続きを長々と調べたり――斉彬は、そういう役人、大幕府も、それを知っておりながら、反対論に怯えたり、繁

は

らぬものは癒らぬ)(医者が十分に手当をしてくれている。自分がいたとて、蜃死などは、窓外をかすめる風音ぐらいにしか感じなかった。

と、呼びに来られると、考えた。

になったとしたら、こんな光栄な死はない)この草案には代えられぬ。この草案のために、あの子が犠牲(自分が行かないために、よし、寛之助が死んだとしても、

けると、近侍が、廊下に手をついて待っていた。と、いうような理窟まで考えた。だが、立上った。襖を開

「もう、死んだか」

「いいえ、御重態のよしでござります」

へ戻らんがために、大股に、早足に、廊下を急いだ。 斉彬は、愛児の見舞に急ぐよりも、早く見舞って早くここ

「お渡り――」

えに来た。と、いっている声が聞えた。侍女だの、医者だのが、出迎と、いっている声が聞えた。侍女だの、医者だのが、出迎

て、じっと、病児の顔を眺めた。は乱れて、眼が血走っていた。斉彬は、寛之助の枕頭へ坐っ姫の眼は、泣きはれて、蕾のようになっていたし、七瀬の髪病室へ入ると、誰の顔にも、不安さと、涙とがあった。英

がら、怯えながら、死と悪闘している姿を想像すると、斉彬者の力も、およばないところで、泣きながら、苦しめられな罪の無い、無邪気な幼児が、たった一人で、乳母の力も、医三日見ない間に、頬の艶がなくなって、痩せてしまっていた。寛之助は、眼に見えぬ敵と、何んなに戦ったのだろう?

- 17

若

石の如く輝いていた眼は、死に濁されて、どんよりと、細くしく呼吸に喘いでいる落ちくぼんだ胸、愛と、聡明とで黒曜と、叫んで、涙ぐんだ。血管が青く透いて見える手、せわ

「回復の望みは――」

白眼を見開いているだけであった。

「はっ」

胸から、頭の中までこみ上げて来た。見たく思ったかと思うと、熱い悲しみの球のようなものが、に、打ちくだかれて、斉彬は、幾度自分の名を呼び、自分を答えなかった。見ない前の心強さが、寛之助のいじらしい姿と、いって、三人の医者は、頭を下げたままで、何んとも

「痩せたのう」

ると、袖を口へ当てて泣き入った。掌へ感じたのは、熱と骨とだけであった。英姫は、それを見と、いって、斉彬は、意識のない寛之助の、手を握った。

(せめて――せめて正気のある間に、そうしてやって下さっ

たなら)

二日前英姫の懐の中で、熱っぽい、だるそうな目をしなが

「お父は?」

たにちがいなかった。と、聞いた時、幼児は、それが父に逢う最後だと感じてい

「見たいか」

と、聞くと、はっきり、強く

「お父は?」

まに热り中へ削れてしまったりであった。やったが、今行く、今行くと、とうとう斉彬の来ぬうちに、と、いって、頷いた。英姫は、すぐ、侍女に斉彬を迎えに

また熱の中へ倒れてしまったのであった。

(何んなに、顔を見たかっただろうか)

出されて来た。英姫は、袖を噛んで泣き入った。ぼと、果もなく、父を恋い、母を求めて歩いて行く姿が考え寛之助が、灰色の、広々とした中を、ただ一人で、とぼと

「寛之助――父じゃ」

と、斉彬が叫んだ。だが、幼児の眼は、もう動きもしなか

った。

「方庵」

「澄も、邦も、同じ容体で、死んだのう」「はっ」

「はい」

「未だ匙が届かぬか」

あったが、方庵には、どうしても解せぬ病であった。やさしいが、鋭い言葉であった。斉彬のいうのは、当然

「七瀬、疲れたであろう」

「病は、薬よりも、看護じゃ。こういう幼児には、余計にそ「いいえ」

うじゃで――|

ぬ大事であった。夫の肩身を狭くし、自分を不幸にさせ――あると共に、七瀬にとっても、仙波の家を去らなければならに聞いた。寛之助の死は、斉彬にとって、後嗣を失う大事で七瀬は、斉彬の称めてくれる言葉を、責められているよう

してして

ような表情であった。がでしまって、恐怖と、その苦痛とで、半分気を失っているわせた。脣は、痙攣して、眼は大きく剥き出し、瞳孔を釣上力の無い脚も、一度に、病児とは思えぬ程の力で突上げ、顫と、寛之助が叫ぶと、斉彬に握られている手も、身体も、

「寛之助っ」

せ細った手を握りしめて、がたがた顫えている子供の身体を、斉彬は、不意に、力いっぱいに振切ろうとした寛之助の痩

片手で軽く押えながら

「父じゃ――見てみい、父じゃ」

と、顔を、幼児の眼の上へ、押しつけた。

「見えんか――寛之助っ、父じゃ」

斉彬の声は、沈黙している部屋中へ響いた。涙声であった。

「七瀬 ――おそわれると ―― いつもこうか?」

「 は い

しくふるえているし、眼は白眼が多くなって、次第に細く閉寛之助の脣は、わくわくと開いたり、閉じたり、身体は烈

じられてきた。

‐まだ脈はあるが――」

斉彬は、医者の方を見て

と、口早に聞いた。何か手当の法が無いものか」

助かるものなら――

と、低く、呟いて、七瀬の眼を見た斉彬の睫毛には、涙が

「噂をすれば、影とやら――」

一人が、こういって、 隣りの男の耳を引っ張った。

「何をしやがる」

通るぜ、師匠が」

お由羅の生家、 江戸 、の三田、 四国町、 大工藤左衛門の家の

表の仕事場であった。 広い板畳の上で、 五六人の若い男が、

無駄話をしていた。

「師匠

常磐津富士春は、 湯道具を抱えて、 通りながら、 声と一緒

笑顔を向けて

「おやっ――」

立止まって

お帰んなさいまし」

小藤次に挨拶をした。小藤次とはお由羅の兄で、妹が、

斉興の妾となって、久光を生んでから、さらに取立てられて、

岡田小藤次利武と、 名乗っているのであった。

小藤次は、

袴も、

脇差も、

奥へ捨てたまま、

昔のように、

大あぐらで

「入ったらー

おめかしをして」

富士春は、媚をなげて、 素足の匂を残して行った。

らあ」

いい女だのう。

第一に、

鼻筋が蛙みたいに背中から通って

「おうおう、誰の仮声だ」「兄貴を、じっと見た眼はどうだ、 おめかしをして――」

師匠のよう」

「笑わせやがらあ、そんなのは、 糞色といってな

「俺、あのコモド子……」「鳴く声、鵺に似たりけりって奴だ」「鳴く声、鷺 あの口元が好きだ。きりりと締まってよ」

「その代り、裾の方が開けっ放しだ。しかもよ、 御倹約令の

出るまでは、 お前、 内股まで白粉を塗ってさ」

「御倹約令といやあ、 今に、清元常磐津習うべからずってこ

とになるてえぜ」

「そうなりゃ、 しめたものだぜ。 師匠上ったりで、 い よい ょ

裾をひろげらあ」

と、いった時、泥溝板に音がして、一人の若い衆が、下駄

を飛ばした、片足をあげて、 ちんちんもがもがしながら、 大 - 20

きい声で

「とっ、とっと―― 猫、 転んで、 にゃんと鳴く。 師匠が転べ

ば、金になる一

「庄公、来やあがった」 板の間で、それを見た一人が

と、呟いた。庄吉は、 入ろうとして、 小藤次に気がつくと

お帰んなさいまし」

と、丁寧に、上り口へ手をついた。

「今、酒買うところだ」

「丁度、師匠の帰りに、 酌ってことになるかの」

小藤次が

「へへっ、頭は木櫛ばかり、 「庄、どうだ、景気は?」 懐中は、びた銭、御倹約令で、掏摸

上ったりでさあ」

「押込なんぞしたら?」

「押込?—— 押込は、 若旦那、 泥棒でさあ。 品の悪い。 掏 摸

は職人だけど――」

のを掏ったことがあるか」 「はははは、そうか――庄吉、 いい腕だそうなが、 武士のも

「御武家衆にゃあ、金目のものが少くってねえ」

か? 「何うだ、 一両、 はずむが、鮮やかなところを見せてくれん

を読みながら、通りすぎようとしていた。 小藤次が、こういって、往来を見た時、 一人の若侍が、本

゙あいつの印籠は?」

朝飯前、 一両ただ貰いですかな」

庄吉は、 微笑して腰を上げた。

出て行こうとする庄吉へ、一人が

「へまやると、これだぞ」

と、首頸を叩いた。庄吉が、振向いて、自分の腕を叩いた。

斉彬から借りた、小関三英訳の「那波烈翁伝」であった。若い侍は、仙波八郎太の倅、小太郎で、読んでいる書物は、 はあったが、時々、斉彬に、拝謁することができた。 斉彬の若者好きとからで、小太郎は無役の、御目見得以下で 斉彬は、時々、そうした若者を集めては、天下の形勢、万 父の八郎太が、裁許掛見習として、斉彬の近くへ出るのと、

国の事情を説いて、新知識の本を貸し与えた。「那波烈翁伝」

は、

に、絣を着た小太郎を見て、 近頃、流行りかけてきた長い目の刀を差して、木綿の紺袴に、こうした一冊であった。 庄吉は

(掏り栄えのしない)

れていたが、黒塗で、蒔絵一つさえない安物であった。 と、思った。庄吉の狙った印籠は、小太郎の腰に、軽く揺

(仲間の奴が見たなら、笑うだろう)

と、そうした安物を掏る自分へ、嘲ってみた。

(然し、一両になりゃあ――)

三尺、二尺――近づいて、 印籠を落す、という、掏摸の第一課の仕事であった。 を、右手の掌の中へ隠して、紐を指先で切ると同時に、掌へ、 込んで来るのが、常であった。そして、今の仕事は鋭利な鉄 が、腕を延すと、その品物の方から、庄吉の掌の中へ、飛び 庄吉は、ぐんぐん近づいて行って、鋏を指の間へ入れた。 庄吉の冴えた腕は、掏ろうとする品物を生物にした。庄吉 鋏を動かすと-- ほんの紙一重の

(侮っちゃあいけねえ)

差であろう、鋏は、空を挟んで--

一庄吉は

指を動かすと、紐は、指先へ微かに感じるくらいの、もろさ だ。庄吉は、満足した。 で、切れて、印籠は、 と、感じた。そして、次の瞬間、も一度、鋏を突き出して、 嬉しそうに、 庄吉の掌の中へ落ち込ん

庄吉の眼と正面から衝突した。侍が、立止まった。 体が侍から、一尺と離れぬ内に、侍が振向いた、険しい眼が、 だが、それは、ほんの瞬間だけのことであった。庄吉の身

- 21 -

庄吉は、それでも、腕に自信があった。掏ったとわかって、

で、振返ったのだと思った。 振返ったのではなく、自分が余り、近づきすぎたのを怪しん

だが、それも、ほんの瞬間だけにすぎなかった。庄吉の、

った。 引こうとした手が、侍の手で、 しっかり握りしめられてしま

(ちえっ)

と、心の中で、舌打ちをして、生若い侍から侮辱されたよ

うに感じて、憤りが湧いてきた。

(小僧のくせに、 味な真似を――)

じっと、睨み合っていた。振切って、横っ面を、一つなぐっ 逃げてやろう、と思った。 思った。そして、手を握られたまま、小太郎の眼と、 だが、 右手を、 十分に取られ

「済みません」

ていて、勝手が悪かったので

るのも癪であった。 と、油断させておいて――とも、思ったが、こんな小僧に、詫。

「何うするんでえ」

庄吉は、 睨みつけた。小太郎は、 静かに、懐へ入れて 微笑した。そして、

「さあ、何う致そうかの」

と、答えた。

庄吉も、微笑した。

「江戸は物騒だから、 気をつけな」

小太郎の顔に、さっと、血が動いた。

「何っ?」 力任せに引く手首を、ぐっと、内へ折り曲げると共に、庄

吉の手首から、頭の中まで、 血の管、 筋骨を、 一時に引きち

ぎるような痛みが、 走った。

(手首が折れる)

(商売が、できなくなる)

を覚え、怯じけ心を感じたが、その瞬間――ぽんと、鈍い、と、頭へ閃いた刹那、庄吉は、若僧の小太郎に、恐ろしさ

低い音がして、庄吉の顔が、灰土色に変じた。眉が、脣が、

歪んだ。

たし、弱味を示したくもなかった。 分の住居に近いだけに、自分の仕事を人に見られたくなかっ 往来の人が、立止まって、二人を眺めていた。庄吉は、自

れた。そして、一足退って しびれるように痛む手に、 左手を添えて、 懐へ、素早く入

「折ったなっ」

小太郎が、嘲笑して

「江戸は物騒だ。気をつけい」

左手

「印籠は、くれてやる」

強い力が、ぶっつかって-まろうと、手を振って、足へ力を入れた刹那、足へ、大きい、 つけようとした時、何かが、胸へ当ってよろめいた。踏み止 庄吉は、口惜しさに逆上した。左手を、小太郎の頬へ叩き 大地へぶちつけていた。手首の痛みが、全身へ響いて、 ―青空が、広々と見えると、背中

庄吉は、 歯をくいしばって、 暫く、 動こうにも、 動けなかっ

(取乱しちゃ、 笑われる)

ちらちらと、 富士春の顔が、 閃いた。

野郎コー -殺せっ」

いきり蹴った。 そうとでも、 起き上ろうとすると、 怒鳴るより外に、仕方がなかった。足で、思 手首が刺すように痛ん

「殺せっ」

庄吉は、首を振った。 小太郎の後姿が、三四間先に見えた。

待てっ」

飛び起きて 左手をついて、 起き上ろうとして、尻餅をついたが、すぐ、

· やいっ」

白に変り、 走り出した。背中も、 脣が紫色で、 眼が凄く、 土埃にまみれて、顔色が蒼 血走っていた。 小太郎が、

「用か」

振向いて

庄吉は、 小太郎の三四尺前で、睨みつけたまま、 立止まっ

引込めるけえ。元通りにするか、殺すか、このままじゃあ、 動かさねえんだ-「元の通りにしろっ。手前なんぞに、なめられて、このまま おいっ、折るなら、 首根っ子の骨を折っ

てくれ」

庄吉は、 じりじり近づいた。手首がやけつくように、 痛ん

(早く手当すりゃ、癒らぬこともあるまい)

籠一つと、かけ代えに、商売道具を台なしにされたと思うと、 と、思ったりしたが、 意地として、後へ引けなかった。印

怨みと、怒りとで、いっぱいになってきた。

「返事をしろ、返事をっ」

小太郎は、 黙って、歩き出した。かっとなった庄吉は

一うぬっ」

たたっとのめり出ると、 小太郎の体が沈んだ。延びた左手を引かれて腰を蹴られると、 小太郎の髻を、 左手で、引っ掴もうと、躍りかかった刹那、 膝をついてしまった。

「大変だ 若旦那

表に立って、庄吉の仕事振りを見ようとしていた若い者が、

叫んだ。 「何うした?」

「やり損って――あっ、突き倒されたっ」

二三人が、 跣足のまま、土間へ飛び降 けりて、 往来へ出た。

「喧嘩だっ」 庄吉の方を眺めていた。

往来の人が、皆、

「やられやがった」

藤次が、往来へ出ると、庄吉が、起き上ろうとしているとこ 口々に叫ぶと、走り出した。残っていた若者と一緒に、 小

「生なっ」

ろであった。

侍は、

早足に、歩いて行っていた。

小藤次が、 呟いて、 走りかけた。 人が後方から

一刀っ」

小藤次が、振向いて

早く、持って来いっ」

若い者は、「鋸」、「鑿、棒を持って、走り出した。近所の若いと、手を出した。二人が、泥足のまま、奥へ走り込んだ。

者が、それについて、 同じように走った。

した。 小藤次は、受取った刀を差しながら、その後方から走り出

「喧嘩だ」

「喧嘩だっ」

叫び声が、往来で、軒下で、家の中でした。犬が吠えて走

った。子供が走った。

て、小太郎の後姿を、 庄吉は、手首の痛みに、言葉も、脚も出なかった。立上っ ぼんやり眺めていると

「庄吉っ」

若い者が、前後からのぞき込んで

「何うした?」

掏った」

低い声で、答えて、 懐中から、印籠を出した。小藤次らが、

追いついて来て

「庄吉、何うした」

「えれえ事をやりゃあがった。痛えっ」

庄吉は、左手の印籠を、一人に渡して、左手を添えて、袖

だらりと、手が下っていた。 口から折れた右手を、そろそろと出した。手首の色が変って、

゙折りゃあがったんだ」

一人が叫んで

その男は、鋸を持って走り出した。

「掏摸が、右手を折られりゃ、 河童の皿を破られたんと、 お

んなじことさ」

小藤次は、自分の言葉から、一人の名人を台なしにしたこ

とに、責任を感じた。

「待ってろ、 、庄吉」

「逸まっちゃならねえ」が一勝次が、行きかけると、若い者が、走り出した。

小藤次は、 その後方へ、注意して、自分も走り出した。

振向くと、一人の男が、鋸を構えて 小太郎は、小半町余り、行っていたが、走り寄る足音に、

「待てっ、おいっ」

小太郎は、眼を険しくすると、 その後方からも、得物をもった若い者が、走って来ていた。 一軒の家の軒下へ、たたっと、

走り込んで、身構えした。

「あいつ――何んとか――」

「俺んとこの、家中の奴だ。何とかいった」 走りながら、小藤次が呟いて

と、自分の横に走っている若者へいった。

「御存じの奴ですかい」

そう答えながら若い者は、小太郎の前で、 走りとまった。

「小藤次氏

岡田小藤次は、仙波小太郎の顔に見覚えのあるほか、 姓も、

身分も知らなかったが、小太郎は、お由羅の兄として、家中 お笑い 草として、大工上りの小藤次利武を、 十分に知っ

ていた。

ながら、走って来た息切れと、怒りとで、言葉が出なかった。 小藤次は、そういって微笑している小太郎の顔を睨みつけ

(何を、 を、吐かしゃあがる)心の中では

でも可笑しかった。そして、自分では、可笑しかったが論、得意ではあったが、岡田利武という鹿爪らしさは、 叫んでい 小藤次にとって、士分になったのは、 可笑しかったが、 、 自 分 勿

「利武殿

から

とか

小藤次氏\_

かく、軽輩から ているように聞えて、 とか、呼ばれるのには、腹が立った。軽蔑され、冷笑され 上役の人々からそう呼ばれるのはとに

「小藤次殿」

などと、呼ばれると

面白くねえ、 岡田と呼んでくんねえ」

わざと、職人言葉になった。

若い者が、じりじり得物を持って、威嚇しにかかるのを、

「手前、誰だ」手で止めて

「仙波小太郎」 小藤次は、 十分の落ちつきを見せていった。

役は?」

無役?」

近所の人々の手前、 く懲さなくてはならぬように思った。 往来の人々が、職人の後方へ、群がってきた。小藤次は、 この小生意気な若侍を、何んとか、うま

四寸も、 齢は、 高かった。蒼ざめた顔に、笑を浮べて、 小藤次より、二つ三つ下であろうが、身の丈は、三 鯉口を切っ

たまま、 小藤次の眼を、じっと、凝視めていたが

「御用か」

如何にもって、 \_如何にも——]

一体、何うするんだ。

人間にゃ、出来心っ

「用だから、来たんだ。 手前、 さっきの人間の手を折ったな」

人間の出来心ってのは、こんな日和には、ふらふらと起るもから、大殿様へ御願えしても、相当のことはするつもりだ。 に、始末をつけてくれ、 心だ。なあ。それに、手を折って済むけえ。納得の行くよう のだ。それに、手を折るなんて――」 て奴があるんだ。 出来心って――つい、ふらふらっと、出来 始末を――始末をつけなけりゃ、俺

「何っ」 小藤次の顔が、さっと赤くなると

「ふらふらっと、出来心じゃ」

んだ。 職人が、じりっと、一足進み出た。

この野郎、人の手を折っときゃあがって、出来心だ? 「出来心だ?― 出来心で、殺されても文句は無えな。馬鹿にするねえ、 出来心で、人様の手を折って――じゃあ、

- 25

心が聞いて呆れらあ」

「親方、 やっつけてしまいなせえ。 野郎の手を折りゃ、 元 々

職人が、喚いて、得物を動かした。

猫、 河童の屁」

と 通りがかりの男が大きい声をして、人々の後方から覗

き込んだ。

除きな」

と、人々の肩を押分けて、 前へ出て来た。人々が、振向い

て、男を見て、笑った。

「よう、先生っ」

と、見物の一人が叫んだ。

「南玉、しっかり」

頼むぜっ」

南玉は、麻の十徳を着て、 扇を右手に握って

一今日は、若旦那」

と、小藤次に、挨拶をした。小藤次は、振向いて、南玉の

一寸うなずいただけで、すぐに、

小太郎を睨み

つけた。 顔を見ると、

「今日は」

小太郎は

やあ」

と、答えた。桃牛舎南玉という講釈師で、町内の馴染男で

あった。小太郎の隣長屋にいる益満休之助のところへよく出

入しているので、知っていた。

「喧嘩ですかい、ええ?」

南玉が、こう聞いたのに返事もしないで、 小藤次が

「おいっ、何うする気だ」

振向いて、庄吉の顔から、左手に光っている短刀へ、ちらっ ら、庄吉が、土色の顔をしてのめるように出て来た。職人が、 群集が、どよめいて、南玉の立っている後方の人々の中か

と、目を閃かして

「若旦那っ、庄吉が――」

庄吉は、職人の止めようと出した手を、 小僧っ」 身体で掻き分けて

南玉が、 両手を突き出して 「さあ、殺すか、殺されるか、

**゙**いけねえ」

と、叫んだ。

「庄っ、待てっ」

小藤次が、周章てて、庄吉の肩を押えた。

「待て、庄公」

同じように、職人が、肩をもった。

っ込んじゃ、仲間へ面出しができねえや 「手前なんぞの、青っ臭えのに、骨を折られて、このまま引 ——若旦那、 止めち

ゃあいけねえ。後生だから――」

庄吉は、乱れた髪、土のついた着物をもがいて、職人の押

折りなすったのですい」 ようなもんだからのうー えている手の中から、 「無理もない。大工が、 小太郎へ飛びかかろうとした。 手を折られちゃ、俺が舌を抜かれた ― 小旦那、どうして又、手なんぞ、

聞 い た。 小太郎は、微笑しただけであった。

「放せったら、こいつ」

と、庄吉が叫んで、一人の職人へ、泣顔になりながら、

鳴った。

「だって、お前、お役人でも来たら」

「来たっていいよ。放せったら――」

庄吉は、口惜しさと、小太郎の冷静さに対する怒りから、「ジュー」

涙を滲ませるまでに、興奮して来た。二人の職人が、短刀を

持っている手を、腕を、押えていた。

「放せっ――放してくれ、後生だっ」丼 ・ いきょう

庄吉は、泣声で叫んだ。

「話は、俺がつける。庄吉」

小藤次は、こういって、職人に、眼で、庄吉をつれて行け、

と指図した。

「庄公、落ちついて――取乱しちゃ――」

「取乱す?――べらぼうめ――放せったら、こいつ、放さね

えか」

庄吉は、肩を烈しく揺すって、一人を蹴った。

「とにかく、ここで、話はできねえ、俺んとこまで、一緒に

来てくれ」

「仙波っ、何をしている。寛之助様、お亡くなりになったぞ」小藤次が、こういった時、群集の後方から、大きい声で

と、口早に叫んだものがあった。

小太郎も、小藤次も、その声の方へ、眼をやった。群集の

肩を、押除けているのは、益満であった。

小太郎は、益満の顔を、じっと見ながら、庄吉を無理矢理

に押して行く職人の、後方を、益満へ足早に近づいて

「何時?

怒

と、叫んだ。それが、事実であったなら、父母は、離別し

なければならないのであった。

「今し方」

「誰から聞いたか?」

二人は、群集の、二人を見る顔の真中で、じっと、お互に、

胸の中の判る眼を、見合せた。

「名越殿から――すぐ戻れっ。下らぬ人足を対手にしておる

時でない」

いた。それよりも、今の、寛之助が死んだ、という言葉が、ての益満と、才人としての益満とを、見もしたし、聞いても益満は、小藤次の顔を睨みつけた。小藤次は、乱暴者とし

小藤次の心を喜ばした。

(妹が、喜ぶだろう)

うな身分になれるんだ、と考えた。そして、そう考えると、ったなら、俺は、益満も、この小僧も、ぐうの音も出ないよと、思うと同時に、もし、妹の子の久光が島津の当主にな

益満が

「下らぬ人足」

ってきた。だが、二人が、群集の中を分けて行こうとするのと、いったのも、小太郎の振舞も、大して腹が立たなくな

. .

「何うするんだ」

庄吉の方を顎で指して、何か云った。と、浴せかけた。益満が、仙波に、何か囁いた。仙波が、

|利武つ|

と、益満が怒鳴った。

分があれば、月番まで申して出い。掏摸の後押しをしたり、「大工の守利武なんぞに懸け合われる筋もないことだ。申し

ってかかって参れ、材木を削るよりも、手答えがあるぞ」お妾の尻押しをしたり――それとも果し合うならな、束にな

次は士言葉で、巧妙な啖呵を切る益満に、驚嘆した。 益満の毒舌は、小藤次の啖呵よりも、上手であった。小藤ってかかって参れ、材木を削るよりも、手答えがあるぞ」

押し、妾の尻押し、なんぞ――うまいことをいやあがる)り奉る言葉じゃあ、用件も、満足に足せねえのに、掏摸の後(おれなんぞ、職人言葉なら、相当、べらべら喋るが、御座

と、思った。途端に

「ようよう」

と、南玉が、叫んで、手をたたいた。

「何っ――もう一度、吠えてみろ」

小藤次が、睨んだので、南玉は

いえ――」

外へ出て、群集に、見送られながら、小太郎と、足早に歩き、周章てて、益満の方へ、走り寄った。益満は、もう群集の

テート かけていた。

「あら、何奴で」

と、職人が、小藤次に聞いた。

「あれが――益満って野郎だ。芋侍の中でも、名代のあばれ

者で、二十人力って――」

「若い方も、強そうじゃ、ござんせんか」

゙あいつか」

鮮かな女が、出て来てニ人が、湯屋の前を通り過ぎようとすると、暖簾の中から、

「おや、休さん」

「富士春か」

「寄らんせんか」

ちらっと見たまま、先へ歩いて行った。益満は、小太郎を追富士春は、鬢を上げて、襟白粉だけであった。小太郎は、

いながら

「急用があって」

と、答えた。

「晩方に、是非――

と、富士春が、低く叫んで、流し目に益満を見た。

南玉が、ついて来ることも、忘れていた。小太郎は、自分の歩いていることも、益満のいることも、

寛之助様が亡くなったとしたなら、母を離別するだろう。医(父は、きっと、家中への手前として、自分の面目として、

南玉は、二人の背後から、流行唄の中を悲嘆の中へ突き落して――それが、武士の道だろうか)自分の申し訳を立てるだけで、妻と別れ、子と引放し、一家うするだろう?――母に何んの罪もないのに、ただ、家中へであったにしても――そして、離別されて、母は、一体、ど者の手落であっても、御寿命であっても、又、噂の如く調伏

君は、高根の白雲か

浮気心の、ちりぢりに

流れ行く手は、北南

昨日は東、今日は西

「小太」

Ł

唄ってい

益満

小太郎が、 振向くと、 益満 は、 微笑して

又とない機が来た」

小太郎は、父母のことで、いっぱいだった。

ならぬのは、 「関ヶ原以来八十石が、未だ八十石だ。それもよい。 家柄、 門 閥 ―薄のろであろうと、頓馬であろ 我慢の

で、土下座、頓首せにゃあならぬ。郷士の、紙漉武士の、土 家柄がよく、門閥でさえあれば、吾々微禄者はその前

うと、

百姓のと、卑まれておるが、器量の点でなら、家中、 々若者に歯が立つ。わしは、必ずしも、栄達を望まんが、そ 誰が吾

い。それにはいい機だ。又とない機だ。この調伏――陰謀が、 ういう輩に十分の器量を見せてやりたい。器量を振ってみた

くしてもよいと思うし、真実でなければ、 何の程度か判らぬが、小さければ、わしは、わしの手で大き わしが、 真実にし

てもよいとさえ思うている。

「うむ」

益満は、

小太郎の顔を見た。

何を考えている」

わしは

小太郎は、益満の眼を見ながら

「父は、 例の気質じゃで、 今度の、 お守りのことで、

別するにきまっている」

或いは ―然らん」

益満が、うなずいた。

「大分、こみ入ってますな」

南玉が、 後方から、声をかけて

「智慧がお入りなれば、 上は天文二十八宿より、下は色事四

十八手にいたるまで、いとも、 丁寧親切に御指南を

「うるさいっ。貴様、先へ行って待っていろ」

益満が、 振返って叱った。

「承知」

南玉が、 手を上げて、 小太郎へ挨拶して、 足早に、 行って

しまった。

「わしに、 一策がある。 母上が、戻られたなら、 知らせてく

れ

「一策とは?」

益満は、声を低くして、小太郎に、何か囁いた。 小太郎は、

幾度もうなずいた。

「これが外れても、未だ他の手段がある。所詮は、 手柄立てさえすればよいのではないか こういう機 八郎太が

手柄や、 二手柄——」

益満は、 怒っているような口調であった。三田屋敷の門が

見えた。

八郎太は、 自分の丹精した庭の牡丹を眺めながら、 腕組を

していた。

母を離

らぬ人の悲しい態度であった。 と、小太郎がいっても、 寛之助の死を知り、心ならずも、 振向きもしなかった。それは、 妻を離別しなくてはな

処分を妻に加えて、 責任は重 過ぎたくらいの賢夫人であった。それだけに、今度のことの の儕輩よりも群を抜いていた。八郎太の妻としては、 しみが多かった。 母としての七瀬は、 **一かった。それだけに、** 自分の正しさを家中へ、示さなくてはな そして、 三人の子にとって、父八郎太よりも、 英姫の侍女としての七 八郎太としては、 容赦の 瀬は、 或い 無 は い

「寛之助様のことは――」

らなかった。

「聞いた」

八郎太は、なお、牡丹を見たままであった。

「母上のことにつきまして――」

「お前は、文武にいそしんでおればよい」

父は振向いた。

「髪が乱れて――何かしたの?」

「掏摸を懲らしてやりました」

「下らぬ真似をするのでない」

小太郎には、父の苦しさ、悲しさが、十分にわかっていた。(八郎太は、これだけいうと、又庭の方へじっと眼をやった。

(益満のいった手段を――)

そして、母の苦しさ、悲しさもわかっていた。

と、思った時、玄関で

「お母様」

るにちがいのない、夫婦、母子の生 別の場面を想像して、心した。八郎太は、眉一つ動かさなかった。小太郎は、すぐ起と、姉娘綱手の声――すぐ、つづいて妹深雪の、笑い声が

しめつけられるように痛ませた。

いった。

卸車亰見れば小手を、かざして

これである。 御陣原見れば

武蔵鐙に、白手綱

鳥毛の御槍に、黒纏

指物、素槍で、春霞

が聞えて来た。

- 益満の家から、益満の声で、益満の三味線で、朗らかな唄

お馬揃えに、花吹雪

桜にとめたか、繋ぎ馬

別れまいとの、印かや

ええ、それ

車童 ここと、 製き ) 点流れ螺には、押太鼓

陣鐘たたいて、鬨の声

黄金の鍬形、白銀小実――さっても、殿御の武者振は

妻の顔 く、尽すべきことを尽して、そして、 した怒りに似たものと、 いっぱいになってきた。 いっていいか、 八郎太も、小太郎も、 母の顔が、今すぐに見えるのかと思うと、 何を考えていいか、 黙って、 取りとめのない悲しいものとが、 その唄を聞いていた。 わからなか 離別されに戻って来た った。 いらいら 罪もな 何

「お帰りなされませ」らしながらを見るのさえ辛かった。振向いて、眼を外だと思ったが、顔を見るのさえ辛かった。振向いて、眼を外でしましい足音が聞えてきた。襖が開いた。小太郎は、母

- 30 -

としていた。小太郎は、うれしかった。 そういった七瀬の声は、小太郎が考えていたよりも、 晴 々

のお眼鏡に叶って、御乳母役に取立てられたのに、その若君何も、妻の手落ちばかりというのではないが――重役の方々 事を明らかにするためには、とにかく当分の離縁の外に方法 がおなくなり遊ばされた以上は、のめのめ夫婦揃って、 がない。そのうちに、誰かが、仲へ入ってくれるであろうが に上ることもできん。妻の不行届を御重役に詫び、わしの心 (医者が、侍臣が十分に、手を尽しても、助からぬのだから、 勤め

眼を赤くして、げっそりとやつれていた。眼の色も、干いて、して負うより外になかった。振返って七瀬を見ると、七瀬は 悪くなっていた。 八郎太は、その面目上から、立場から、妻の責任を、こう

あった。 か、七瀬の背負っている運が、曲っているようで、不快でも どんなに肩身が広く、出世ができるか?(と思うと、何んだ が、もし、寛之助様の病がよくなったのだとしたら、自分は、 こいつの性質として、十分に努力はしただろうと思った。だ 八郎太は、慰めてやりたかった。可哀そうだ、とも思った。

お詫びの申し上げようもござりません」 七瀬は、 部屋の中へ入って、 後ろ手に襖を閉めた。 そして

両手をついて、 頭を下げた。

> 「ただ一つ、不思議な事がござりまして、 八郎太は、低く、短く、こういったきりであった。 それを申し上げた

、取急いで、戻って参りました」

たのであろう。それならば、 小太郎は、ほっとした。何か、母が、証拠でも握ってくれ それを手柄にして、 円満に行け

「どういう?」

ば――と、母の顔を見た。

なく、凄い幻を見ましたが、これが、若君を脅かすらしく 「一昨日の夜のことでございます。夢でもなく、うつつでも

幻が出ますと、急に――」

八郎太の眼が、険しく、七瀬へ光った。

「たわけっ」

八郎太は、 睨みつけた。

何を申す、 世迷言を一

その声の下から

言も申しませぬが、貴下へ、せめて――」 にも、誰にもいえぬ、奇怪な事がござりますゆえ、 「御尤もでござります。お叱りは承知致しております。人様

「たわけたことを申すなっ」

少しどうかしたのではないか、と思った。 えてきた。常は、こんなではないのに、余り大事の役目で、 八郎太は、七瀬が夢のような事をいい出したので、怒りに顫

「然し、父上―― 母様、 もう少し詳しく、 腑に落ちるように

お話しなされては」

「黙れ、そちの知ったことではない」

小太郎が取りなした。

然し

黙らぬか」

「 は い

して、玄関 小太郎は立上った。益満を呼ぶより外にないと思った。 の次の間に行って、妹の深雪に

そ

「すぐ益満を呼んでー ―母が戻って来たからと」

深雪の背を突くようにして、せき立てた。

急に、 その面影が、牧仲太郎様に、 りませぬが、 一形を、 御部屋の中が暗くなりまして――齢の頃なら四十余り、 確かに、この眼で見たにちがいござりませぬ。 見極めもしませずに、話のできることではござ 似ておりましたが――」

「牧殿は三十七八じゃ」

に涙をためた眼で、 綱手が、 小太郎の後方から入って来た。 八郎太を見ながら、両手をついた。 そして、 っぱ

「お父様」

急いで片付け、 「七瀬、予て、申しつけておいた通り、勤め方の後始末を取八郎太は、綱手に、見向きもしないで すぐ、 国へ戻れ。許しのあるまで、 二度と、

「はい」

この敷居を跨ぐな」

「お父様\_

綱手は、 泣声になった

お母様に お母様に

お前の知ったことでない、 妾に は ――」 あちらへ行っておいで」

散して、

「それから、手廻りの品々は、

船便で届けてやる。早々に退

人目にかからぬように致せ」

意地だと、八郎太には思えた。この恩愛の別離の悲嘆を、 罪のない妻を、こうして冷酷に扱うということが、 武士の

らえることが、武士らしい態度だと、信じていた。

又、妻をこう処分して、武士らしい節義を見せるほか、こ

の泰平の折に、忠義らしい士の態度を示すことは、 った。こうすることだけが、 唯一の忠義らしいことであった。 外になか

ざんば岬を

後にみて

袖をつらねて諸

泣いて別るる旅衣

益満が、大きい声で、唄いながら、 庭の生垣のところから、

覗き込んだ。

「お帰りなさい」

七瀬に、挨拶して、 生垣を、 押し分けて入って来た。そし

綱手の顔を見ると

「何を叱られた?」

綱手は、

袖の中へ、顔を入れた。

よりの御三人の御病症と申し、 お亡くなりになったと申しますが、 ただ事ではござりますまい」 小父上 -前々

或いは

七瀬は 七瀬殿を幸い、 離別じゃ」 奥の機密を、 探っては?」

そのまま、

益満は、 腕組をして、

唇を尖らせた。

32

'止むを得まい。 仙波の家の面目として」

面目が立てば?」

「キネホッ゚に、今夜一晩、この話を、゚立てば?」 おあずけ下さらんか。 小太

郎と談合の上にて、 聊か考えていることがござる」

「何ういう?」

にお任せ下されませぬ 「それは ーのう、 小太。 か 云わぬが、花で。小父上、 若い者

八郎太は、益満の才と、腕とを知っていた。

齢を超越して、 尊敬している益満であった。

「益満 様

七瀬が、 膝すすんで

「只今も、 叱られましたところで―― 怪力乱神を語らずと申

しますが、不思議な事が、御病室でござりました」 小太郎も、益満も、 七瀬の顔を、 じっと眺めた。

「五臓の疲れじゃ。埓もない」

八郎太は呟いた。

「何うした事が?」

「幻のような人影が、 和子様へ飛びかかろうとして、それが

うも、 現れると、和子様はお泣き立てになりましたが、それが、ど 牧様に ただ齢が、五つ、六つもふけて見えました

が

その小太郎の眼へ、 益満は、うなずいた。小太郎は、 益満は 益満の眼を凝視していた。

(そうだろうがな)

語った。

「聞き及びますと――」

益満は、 膝の上に両手を張って、 肩を怒らせながら、 八郎

太から七瀬を見廻して

ります。その幻が、 法者は一人につき、 「当家秘伝の調伏法にて、人命を縮める節は、 二年ずつ己の命をちぢめると、 牧仲太郎殿に似て、 四十ぐらいとあれば その 聞いてお 行

牧殿は

益満が指を繰った。八郎太が

牧殿は、 七八であろう」

益満は、

腕を組んで俯向いていたが

牧殿は、 お 由 羅風情の 女に、 動かされる仁ではござるまい

- 小父上」

「うむ」 \_ さすれば——」

たり、膝を見たりして、 そういって、益満は、 黙っていた。 黙ってしまった。 座の人も俯 向い

「斉興公が」

小太郎が、 当主の名を口へ出すと共に、 八郎太が

小太っ」

「濫りに、 ٤ 睨みつけて、叱った。益満は、 口にすべき御名ではない。 慎め」 うなずいた。

「 は い

おるが、 「次に、調所笑左衛門 国許は知らず、 調笑に惚れ込んで、己の倅を大阪の邸にあずけて ---これが、右の腕でござろう。 江戸の重役、その他、 重な人々は、 そし

恐らく、斉彬公を喜んではおりますまい――のう、小父上」

ーそう」

『三兵答古知幾』を拝借して退って来ると、御座敷番の貴島引立てになるのが、気に入らぬ。この間も、御目通りをして、 重豪公の二の舞を、何故、貴公達諫めんかと、こうじゃ」 太郎兵衛が、何を持っているか――突きつけてやると、又、 「悉く、斉彬公のなさる事へ反対らしい。第一に、軽輩を御

木曾川治水で、金を費わされたのと同じに見ている、 「斉彬公を外国方にしようとする幕府の方針を、彼奴らは、 調所さ

え、そうじゃものなあ」

小太郎は、 顔を、心もち赤くして、静かにいった。

益満休之助の貧棒だ。こう太くなっては、振り廻せぬ 二百万騎、百万騎なら一繰りだが、槍繰りしても、八十石、 せと云っても、押してくる武蔵鐙に、白手綱、その勢、凡そ ますと、いやあ 「とうとうとうと、 御陣原へ出まして、小手をかざして眺め 押しも寄せたり、 寄せも、 押したり、

大声で、怒鳴り立てていた。 綱手が

一人ぼっちになった南玉は、薄暗くなってくる部屋の中で、

「南玉さん?」

いこけた。 と、益満を見て、微笑むと、深雪は、袖を口へ当てて、笑

「はははは、この盆が越せるやら、越せぬやら」

益満は、笑って

ぬにせよ、大阪表へ行って、調所を探る気はござりませぬか」 一時に、七瀬殿、某と、 小太との計が、うまく行く、行か

「さあ、話に――よっては――」

来た。深雪が振袖を翻・ 眺めていた。廊下へ、灯影がさして、女中が、 七瀬は、 八郎太の顔を見た。八郎太は、黙って、庭の方を して、 取りに立った。 燭台を持って

「のう、綱手殿」

「 え え ? 」

綱手は、周章てて、少し、耳朶を赤くしながら、

益満を見て、すぐに眼を伏せた。

「母上と同行して、大役を一つ買われぬかのう」

「大役? どういう?」

「操を捨てる――」

が

「それは?」

益満は、 強い口調で云った。綱手は、真赤になった。 七瀬

倅とも通じる」 「場合によって、 調所の妾ともなる。又、時によって、 牧の

「益満――」

ら、よく守って来たと称められるより、小野の小町だと、嗤などと、たわいもない、七十になって、未通女だと申したな 「夫の為に、捨てるものなら、家の為に捨てても宜しい。 と、八郎太が、眉を歪めた。益満は、平気であった。

「然し、益満さま、あんまりな

われよう。棄つべき時に棄つ、操を破って、

操を保つ

七瀬が、やさしく云った。

ざる。某なら、そういう女子こそ、好んで嫁に欲しい」 「いいや、女が、男を対手に戦って勝つに、その外の何がご

はははは、 益満らしいことを申す。それも一理」

八郎太が、 微笑して頷いた。綱手も、 深雪も、俯向い

てい

泥

「そろそろ暗うなってきた。小太、小者にならぬと、 咎めら

ぬか」 れると思うが、 その用意をして、例の一 師匠のところへ来

「心得た」

益満が、立上った。

ござんせんか。あっしゃ、 「猫、鳶に、河童の屁とは行かない蚊だ――益満さん、油は 夜になると、 眼が見えない病でね

南玉が、廊下へ立って叫んでいるらしかった。

「今、戻る」

益満は、庭へ出た。

闇だの、小太」

振向いて、 すぐ、 歩いて行った。

襖を開けた次の間で、 常磐津富士春は、常磐津のほか、 若い衆が、 流行唄も教えていた。 三人、膝を正して

錦の金襴 唐草模様

お馬は栗毛で、金の鞍

さっても、 見事な若衆振り

そう – ―それ、紫手綱で」

せて、合の手になると、称めたり、戯。談をいったりして、調富士春は、少し崩れて、紅いものの見える膝へ三味線を乗

子のいい稽古をしていた。

がら、四方山話をしていた。眺めたり、格子の外に立っている人を、すかして見たりしな 表の間の格子のところで、四人の若い衆が、時々富士春を - 35

だよ。 。 「その毛唐人がさ、腰をかけるってのは、膝が曲らねえから 膝さえ曲りゃあ、ちゃんと、畳の上へ坐らあね

南玉が、表の格子をあけて、提灯の下から

一今晩は ―益満さんは?」

「まだ見えていないよ」

「そうかい、もう見えるだろうが、見えたら、これを渡して」 と、風呂敷包を置いて、出かけようとする後姿へ

·先生、一寸一寸」

「何か用かの」

「毛唐の眼玉の蒼いのは、 夜眼が見えるからだって、本当か

「話説す。目の当り、奇々怪々な事がありやした」

景を掌にさすことができる、遠眼鏡の短いようなものでの。「怎生、これを何んぞといえば、呼遠筒と称して、百里の風「又、諸葛孔明が、とんぼ切りの槍を持ってあばれたかの」

先も見えんというので発明したのが、覗眼鏡に、呼遠筒、詳つまり、毛唐人の眼は夜見える代りに、遠見が利かん。一町

しくは、寄席へ来て、きかっし」

南玉が出て行くと

「八文も払って、誰が、手前の講釈なんぞ聞くか」

の心を切った。 富士春の稽古部屋では、時々、小さい女が出入して、蝋燭

王様宗だが、死んだら一つ、今の合の手で「この流行唄は、滅法気に入ったのう。俺の宗旨は、代々山

お馬は栗毛で

金の鞍

ってんだ」

富士春が、媚びた眼と、笑いとを向けて

「お静かに」

と、いった。

を乗せての、馬の廻りは、万燈を立てらあ。棺桶の前では、「東西東西。お静かお静か。それで、その馬へ、綺麗な姐御

この吉公が、ひょっとこ踊りをしながら、練り歩くんだ。手

「よし、心得た。友達のよしみに、今殺してやる。手前殺す前の面が、一生に一度、晴れ立つんだ。たのむぜ」

「ぶるぶるっ、今の眼は、笑ったのか、泣いたのか」

に刃物はいらぬ、にっこり笑って眼で殺す」

稽古場か

と、一人が怒鳴った時、誰か表から入って来た。「 煩 い」

「よう」

と、一人が、のびやかに迎えて、会釈をした。

「今日は、少いのう」

益満は、刀をとって、部屋の隅へ置いた。富士春が、軽く、

挨拶をした。

「病人の見舞で\_

「寅んとこの隣りの大工が、人にからかって手首を折りまし「誰か、病気か」

てな」

「庄吉という男か\_

「御存じですかい」

「わしの朋輩が折ったのだ。あいつは、掏摸でないか」

「ええ、時々やります。しかし根が、真直ぐな男で、悪い事

って、微塵もしませんや」

「悪い事をせぬて。掏摸でないか」

っさりした、気のいい男ですぜ。あいつの手を折るなんざ、「だって、掏摸と、泥棒たあちげえますぜ。庄吉なんざ、あ

「全く」可哀そうだ」

稽古部屋の人々が出て来た。富士春は、小女の出す湯呑を

一口飲んで

「休さん、南玉先生から、さっき、御土産が――\_

「そうそう」

と、一人が風呂敷包を渡した。益満が、開けると

「何んだ。薄汚い」

一人が、こういって、益満の顔を見た。

「山猫を買いに行くのには、これに限る」

富士春が

「悪い病だねえ」

「師匠の病気と、何れ劣らぬ」

と、いいながら、益満は、袴をぬいで

、〕〕:、、・・「小道具を、一つあずかって置いてもらいたい。猫は買いた

し、御門はきびし」

て、脇差だけを差した。そして、両手をひろげて益満は、そういいながら、部屋の隅で、汚い小者姿になっ

「三両十人扶持、似合うであろうがな」

と、笑った。

富士春は、次の稽古の人々へ、三味線を合して

「主の姿は、初鮎か、青葉がくれに透いた肌、小意気な味の

と、唄いかけた時

握り鮨と。さあ、ぬしいの」

頼もう」

と、低いが、強い声がした。そんな四角張った案内は久し

古をしに来なくなったし――富士春は、唄をやめて、不安そって三味線を弾くくらいで、益満一人のほか、ぴたりと、稽く聞いたことがなかった。御倹約令以来、侍は土蔵の中へ入

(役人が、又何か、 煩 いことを)

と、思った。

「入れ」

益満が、答えた。格子が開いたので、富士春も人々も、

大

提灯のほの暗い蔭の下に立った人を眺めた。

(あいつだ)

と、人々の中の二人――昼間の喧嘩を見ていた人は思い出

した。富士春は

(まあ、いい男――休さんの朋輩には、稀らしい――)

と、じっと、小太郎の顔を眺めていた。

一つ――芝中門前町を出て、増上寺の塀の闇の中を、御成門――芝中門前町を出て、増上寺の塀の闇の中を、御成門 益満と小太郎とは、小者風であった。脇差を一本、提灯を

の方へ、歩いて行った。

忍だ。『正忍記』など、ただ、この忍耐だけを説いている」「多少、聞いてはいるが、忍術の忍は、忍ぶでなく、忍耐の

「奴さん、遊んで行かっし」

闇の中から、女の声がした。

「急ぎの御用だ。戻りに、ゆっくり寄らあ」

小太郎が

「これが、夜鷹じゃ」「何者だ」

ほの白く、顔が浮いて

「いい男だよ。ちょいと――」

「無礼なっ」

小太郎は、

袖を握られて、振払いざま

女は、高い声で

- 37 -

「あっ、痛っ」

٤ 叫

「いい男振るない。泥棒、かったい、唐変木」

ら、遠くから声をかけた。小太郎は、気まり悪さと、 浴せた。寺の塀の尽きるところまで、女達が、 近くか 怒りと

で、黙って急いだ。益満は、時々受け答えしながら

「諸事節約になってから、だんだんふえてきた」

Ł

独り言をいっていた。

の邸に沿

って曲り、 土橋へ出ないで、 新し橋の方へ進んだ。御成門から、植村出羽

内の邸 斉彬は、多忙だったので、三田の藩邸にいずに、幸橋御門 ―元の華族会館 に起臥していたので、寛之助も、

そこにおったのであった。

「夜中、憚り様、将曹様へ急用」大きい門の闇の中に立って、高い窓へ

門もんかん

と、益満が叫んだ。

門鑑を改めただけで、二人の顔は改めなかった。改めように た。窓のところへも、提灯が出て、門鑑を調べた。門番は、 益満が、 門鑑を突き出して、提灯を、その上へもって行っ

音と、錠の音とがして、くぐりが開いた。 灯がとどかなかった。二人が、小門に佇んでいると、足

御苦労に存じます」

「有難う、ござります」

益満は、 二人は、御辞儀をしつづけて、急ぎ足に、曲ってしまった。 提灯を吹き消した。そして、木の枝へ引っかけた。

二人は、手さぐりに――様子のわかっている邸の内を心に描

(ここを曲って)

(この辺から、植込み)

中居間の方へ近づいて行った。 益満は草を踏むと

這って」

を撫で、一尺ごとに、手をのばして、手に触れるものを調べ ながら、御居間の方へ近づいた。灯の影もなく、人声もなく、 ただ、真暗闇の世界であった。 危険が少かった。二人は立木を避け、 と、囁いた。庭へ入ってからは、歩くよりも、這った方が、 植込みを廻り、飛び石

「山一のことが―― 思い出される」

益満が囁いた。小太郎は、床下へ入った時に、そのことを

思い出していた。

「褒美の代りに減し児を禁じてもらいたい」あったのに、その褒美を与えようとしたのに際し、山田は それを、肥料汲みにまでなって、床下から探し出したのが山金を与えなかったから僧侶が意地の悪い事をしたのである。 紛失したと称した事件があった。島津家が、窮乏の極の時、祠堂 てあった島津家久の木像を、高野山の僧侶が床下へ隠し 田一郎右衛門であった。そして、それだけの功でも、相当で 山一とは、山田一郎右衛門のことであった。高野山 口に納め て、

満の如き小身者は、 るとすぐ殺す習慣をいった言葉である。山田のこの建議によ って、幾人、幾十人の英傑が、救われたか知れなかった。 と、いった。減し児とは、子供が殖えると困るから、生れ 当然、減らされた一人かも知れなかった

かった。だから床下へ入って、 小太郎の後進の下級の若い人々は、大抵減され残しが多 しめっぽい土の香を嗅ぐと、

(首尾よく行ったら、

すぐ、山田の功績を思い出して

自分の手柄も、 山田に劣らない)

Ł 考えた。

間も、這って来た時、益満は静かに、燧石を打って、紙燭に床下の土は、じめじめしていて、異臭が鼻を突いた。七八

方ぐらいが、。朧げに見えた。それで足りないと二本つけ、三 火を点じた。紙撚りに油をしましたもので、一本だと五寸四

本に増す忍び道具の一つであった。

らなかった。二人は、 調伏の人形を、埋めたとすれば、土に掘った跡がなくてはな 二人は、微かな光の下の土を、 一本の柱を中心にして、残すところの 克明に調べかけた。 もし、

立てぬように這った。 よう二人の袖で、火を囲んだ。 微かに足音がしても、這うのを止めた。紙燭の灯の洩れぬ 一寸、二寸ずつ少しの物音も

ないように這い廻った。

片手で、灯をかばいながら、片手で土を掘った。 近づいた。土が盛上って、乱れていた。二人は、向き合って、 指さした。益満が、うなずいて、大きく足を延して、一気に 小太郎が、益満の袖を引いて、その眼と合うと、前の方を 十分に叩か

嬉しさに、微笑していた。 小太郎が

小太郎は、

袖に包んだ箱の中を想像しながら

れていないらしい土は、

指で楽々と掘り返せた。

と、低くいうと

·それに、ちがいあるまい」

箱は、すぐ軽くなった。 だんだん形を現してきた。二人が、両手をかけてゆすぶると、 益満は、両手で土を掻いた。白い箱が、土まみれになって、 一尺に五寸ぐらいの白木で、厳重に

釘づけにされていた。

「開けて」 と、小太郎が、益満を見ると

「開けんでも、わかっとる」

益満は、土を払って、箱の上の文字を見た。梵字が書いて

あって、二人にはわからなかったが、梵字だけで十分であっ

た。

(何か、不意に事が起りはしないだろうか) と、二人とも思っていた。門の外へ出るまで

(余り、うまく行きすぎた)

気がした。門を出て、植村出羽の邸角まで来ると にも引捕えはしないだろうかと、追っかけられているような と、忍び込む前とちがった不安が、二人の襟を、何かが今

「やれやれ」

買いに行った戻り客を待っている燗酒屋だけであった。 とだけであった。それから、灯が街へさしているのは、 にうろついているのは、 益満が、笑い声でいった。幸橋御門を出ると、 野犬と、夜泣きうどんと、火の用心 もう、

めにも、 (これで両親も、 自分のためにも 別れなくて済むし、自分の手柄は、 それよりも、 斉彬公が、どんな 父のた

と、頭の中も、胸の中も、身体中が、明るくなって来た。

「小太、先へ戻って、早く喜ばすがよい。 わしは、さっきの

ところへ寄って、刀を取って行くから-

小太郎が、答えない前に、益満は、駈け出していた。

「なるべく早く――」

その後姿へ、小太郎が叫んだ。

「猫、鳶に、河童の屁、というやつだ」

立つと、もう提灯は消えていた。だが、まだ眠っている時刻 益満は、大きな声で、独り言をいいながら、富士春の表

ではなかった。

誰方?」とはまた、単上寺の鐘が鳴り出した。益満が、戸を叩いた途端、増上寺の鐘が鳴り出した。

まの字に、 ま? ぬの字に、けの字だ」

益満は、大きい声を出すと

「やな、益さん」

小女が、戸を開けて

お楽しみ」

と、からかった。

「師匠の方は?」 襖の内に、二三人、

一首尾は如何?」 一人が、声をかけた。 半分開いた襖の中に、 酒が、 肴<sup>t</sup>が並

未だ宵の男が残っていた。

「お帰んなさい。丁度よいところ」

富士春が、顔を少し赤くして、裾を崩していた。 益満は、

暗い次の間に立っていた。

「へへへ、だんだんよくなるところで、ええ、 お出でなさい

まし」

一人は酔っ払って、両手をついた。

「刀は?」

さ――中でも、薩摩の芋侍は野暮のかたまりで、こいつにか かっちゃ、流石の師匠も? 「刀?――刀なんぞ野暮でげしょう。野暮な邸の大小捨てて 歯が立たねえって――へへへ、

御免なせえ」

益満が、富士春の持って来た刀を取ろうとすると、女は、

手の上へ手をかけて

「ゆっくりしたら」

「そうは勤まらぬ」 と、媚びた眼で見上げた。

富士春は、益満の手を、 力任せにつねった。

かさえ判らなかった。 小太郎は、嬉しさで、いっぱいだった。何処を歩いている

(陰謀が、自分の手で暴露されたなら、斉彬公は、何んなに

何を仰しゃるだろう?――そして、父は、 喜ばれるだろうか?あの柔和な眼で、 あの静かな口調で、 恐らく、自分が手

柄を立てたよりも、喜ぶであろうし、母は、父よりも嬉しが って、きっと、涙をためるにちがいない。二人の妹は―― 小太郎は、次々に、いろいろのことを空想しながら、

- 40

を、 (然し、箱の中に、何も証拠品が入ってなかったら?) 小脇に抱えて、小走りに、夜の街を急いだ。ふっと

と、不安になったりしたが、ことこと中で音がしているし、

その右に、藩邸が、黒々と静まり返っていた。八時に、大門 将、監橋を渡ると、右が、戸田采女、左が遠山美濃守の邸で、病室の床下にあったのだし、疑う余地はなかった。

ò を閉して、通行禁止になるのが、 悪所通いをする若者などは、塀を乗越えて出入した。益 一般武家邸の風であったか

満など、その大将株であった。

たところから、攀じ登って、邸の中へ入った。長屋の入口で、 小太郎は、その塀越しの出入口と決まっている切石の立っ

ことこと戸を叩くと、すぐ、足音がした。

(未だ、寝ないで、自分の帰りを待っているのだ)

と、思うと、 頭の中で

(証拠品を持って帰りました。今すぐに御覧に入れます)

Ł 叫んだ。

「兄様?」

次の娘、深雪の声が聞えた。小太郎は、戸を一つ叩いた。

た。

一只今——」

の綱手が上り口に立って、 二人の足音がした。 門 が外れた。 手燭をかざしていた。深雪が 戸が引かれた。上の姉

「首尾は?」

低い、早口であった。

上々」

「姉様、

深雪は、 小兎のように上り口へ、走り上って

綱手が、微笑んで、廊下を先へ立った。

「お父様は、お臥みだけれども、お母さんは、未だ」

深雪が、小太郎の後方から、口早に囁いた。薄く灯のさし

ている障子のところで、綱手は手燭を吹き消して

「お母様、お兄様が、 いい終らぬうちに、 上々の首尾で、ござりますって」 小太郎が、部屋の中へ入った。七瀬は、

小太郎の膝を見て

「ひどい泥が――」

と、眉をひそめた。二人の妹が

「ああ、 深雪が立って、何か取りに行った。 あっ、袖も――ここも――」

|その箱は?」 七瀬が、

眼を向けた。

「若君の御病間の床下にござりました。 調伏の証拠品

両手で、母の前へ置いた。

「お父様に、 申し上げて来や」

綱手は、 裾を踏んでよろめきながら、 次の部屋の襖を開け

八郎太は、 むずかしい顔をしながら、 じっと、 箱を眺めて

いた。

「小柄」

七瀬が、

刀懸から刀を取って、

吸をつめて、 箱の隙目へ小柄を挿し込んで、静かに力を入れた。四人は呼 じっと眺めた。ぎいっと、 小柄を抜いた。八郎太は、 箱が軋ると、 胸がど

(調伏の人形でなかったら?――)

が開いた。を込めた。ぐぎっ、と音立てて、半分余り口を逆にして、力を込めた。ぐぎっ、と音立てて、半分余り口ようであった。釘づけの蓋が、少し開くと、八郎太は、小柄・小太郎は、腕の下に、汗が出てきた。顔が、逆耳せて来る

いてない、素地そのままの、泥人形であった。白い、大きい眼が、薄気味悪く剥き出していて、頭髪さえ描た。五寸余りの素焼の泥人形――鼻の形、脣の形、それから、白布に包まれた物が出て来た。八郎太は、静かに布をとっ

とに、朱で点を打ってあった。背の方を返すと、八郎太が人形の額に、梵字が書いてあって、胸と、腹と、脚と、

「ふむ――成る程\_

と、うなずいて

相違ない」

を取巻いていた。書かれてあって、その周囲に、細かい梵字がすっかり寛之助四人が、のぞき込むと、一行に、島津寛之助、行年四歳と

ぱいになってきた。小太郎は、八郎太が、一言も、自分の手たく、大の字形をしていた。七瀬は、それを見ると、胸いっ眼を大きく、白く剥いて、丁度、寛之助の死体のように、か人形は、白い――というよりも、灰色がかった肌をして、

「父上、如何で、ござりましょう」柄を称めぬので、物足りなかった。

八郎太は、小太郎の眼を、じっと見つめて

こ頭が「他言する事ならぬぞ」

広いのに――」「まあ、よかった。よく、見つかったねえ、床下といっても、

「お兄様――蜘蛛の巣が

「これで、母も安心できました。ほんとに、大手柄――」形を間のように包んで、膝の上へ置いて、何か考えていた。

そういう七瀬の顔を、睨みつけて

「支度」

七瀬が、恐る恐る聞くと「お出まし?」この夜中に」

「名越殿へ参る」

手

よく判っているのだと思った。だが、何んだか物足りなかっ格な気質から見て、口へ出しては称めないが、肚の中では、一言も称めもしない父へ不満であったが、小太郎は、父の厳七瀬が立上った。綱手も、深雪も、折角の小太郎の手柄を、

- 42

七瀬は、次の間の箪笥を、ことこと音させていたが

八郎太は、箱を置いて「お支度が出来まして、ござります」

「元のように入れておけ」

と、小太郎へやさしくいって立上った。

郎 が、 ゆらめいたくらいに危くもあった。 向うの峰、下の谷が眺められて、いい景色であったが、仁十 に、奥座敷として、建てられてあった。その大きい切窓から、 丸木のままの柱、 赭っ茶けた襖 疲労によろめいて、どかりと腰を降ろすと、座敷中が ――そういう一部屋が、 蜘蛛の巣のかかった、煤まみれの低い天 崖に臨んだところ

焔のあかりに浮き上らせていた。 の、真暗な中で、竈の下を吹きながら、 けてある腰掛を並べて、店ごしらえをしていた。婆は、 茶店の爺が、早朝からの客を、奥へ通して、軒下に立てか 皺だらけの顔だけを、 土間

玄白斎は、 眼を閉じて、髯をしごきながら、呟いた。仁十

しましょうな

「間根ヶ平で、七ヶ所

牧殿のお力なら、調伏は、

成 就致

郎が

玄白斎は、 暫くしてから

是非も無

それも、 - 粥は未だ出来んか」 元気の無い、低い声であった。

「婆あ

へ、声をかけた。

はい、只今、すぐ、 煮えますから――」

もう二十日近くなっていた。日数の経った修法の跡から、だ 三人が、牧を追って、牧の修法している山々を調べてから、

> のが、栗野山の頂上であった。玄白斎は、それを見て んだん、追いつめて、昨日、修法をした跡だと、判断できた

修法が、 まで、 たもの、 通るか、通らぬかを待とう。もし、通らぬ時は、城下へ戻っ た脚で、行けようとも思えぬ。この上は、 「間根ヶ平が、最後の修法場であろうが、今から、この疲れ 修法するか、それとも、御城下へ戻るか―― 明日の四つ刻にすむとすれば、久七峠へ出て、 通るとしたなら、話によっては、 牧が、国外に出て そのままには差し 間根での

であった。 ら、大口へ、 どたどしい脚を、 と、いった。和田仁十郎、高木市助の二人は、老師の、た 大口から、淋しい街道を久七峠へ登って来たの 左右から支えながら、夜を徹して、栗野か

置かぬ」

から、少し降ったところに、この茶店があった。 久七峠には、島津の小さい番所が置いてあった。 その番所

「牧殿の返答によっては

仁十郎は、 こういって

(斬っても、よろしいか)

た兵道家として、子の無い老人にとっては、子よりも可愛い も、よくはいっていないが、秘蔵弟子として、 と、つづけたいのを止めた。玄白斎は、牧を追跡し、口で 師よりも優れ

仲太郎であった。仁十郎には、よくそれが判っていた。

が、そのために自分の手で、牧を殺す、 う罪は、 玄白斎は、仮令、斉興の命なりとも、 兵道家として許しておけぬと、 返答によっては――捨て置けんかも知れぬ」 臣として、幼君を呪 という気にはなれな 頑強に考えてはいた

てくれたら――玄白斎は、自分の老いたことを感じたり、心かった。牧がうまく自分を説き伏せ、家中の人々を感心させ

弱さを感じたり、兵道家の立場の辛さを感じたりしながら

「疲れた――疲れたのう」

と、眼を閉じたまま、額を、握り拳で叩いた。

「爺っ」

一人の侍が、軒下から、大声に呼んだ。

「今、十二三人、見えるから、支度せえ」

「はいっ」

爺が、周章てて、走り出ると、侍はすぐ、番所の方へ登っ

て行った。

「先生――牧の一行でござりましょうか」

玄白斎は、俯向いて、眼を閉じていた。

うむ」

「十二三人とは、人数が少し、多すぎまするが――」

「多くない」

「はい」

市助が立って、暗い台所で、何か水に密していた。そして、

持って来た。

和田田

包んで、いつでも鉢巻にできるよう、折り畳んだ。二人は、と、云った。水に漬けた真綿であった。仁十郎は、手拭に

乱闘の準備をした。

「さあ、出来ました。お待ちどおさまで」

婆が、こういって、大儀そうに、上り口から、土鍋を運ん

で来た時、しとしと土を踏んで近づく音と、話声とが聞えて

来た。

前のまま、俯向いて、眼を閉じたきりであった。爺が、表和田と、高木とが、眼を見合せてから、玄白斎を見ると、

出て、下を眺めて、すぐ入って来た。そして

「婆、ござらしたぞ」

と、云った。

「先生、芋粥が――」

玄白斎は、頷いた。そして、眼を開いて、身体を起して

「わしには判らん――

と、呟いた。

何が?」

「いや、食べるがよい」

馬上の士が一人、駕が一、梃、人々は、悉く脚絆掛けで、三三人が、茶碗へ手をかけると、表が、騒がしくなった。

い刀を差していた。茶店の前で立止まって、すぐ腰かけて、

「疲れた」

脚を叩いた。

「ふ、きょうのぎららい」と、一人は、股を拡げて、俯向いた。

「芋粥なら丁度出来ておりますが、「爺、食べる物があるか」

「お髯の――幾人の

下方のお連れではござりませぬか」

あ

のお髯の御武家衆は貴

「御三人」

士は、土間から出て、軒下の腰掛にかけている一人に侍は、首を延して、奥を覗いたが、襖で何も見えなかった。

長

「斎木」

「うむ」

「玄白斎が、参っておるらしい」

低い声であったが、こう云うと同時に、人々は、 動揺した。

「玄白斎が――」

間へ入って来て、三人の草鞋を見るとと、一人が怒鳴った。馬上の士が、馬から降り立って、土

一これは?」

Ł 爺の顔を、咎めるように、鋭く見た。

「はいはい、 これは、 奥にいられます、三人の、 お侍衆の

三人の?」

御一人は、 御立派な、こんなー

爺は、 髯を引張る真似をした。

家老、 島津豊後の抱え、 小野派一刀流の使手、 山内重作が

斬るか」

と、大きい声をした。斎木と、貴島が

「叱っ」

眼で押えて、頭を振った。 重作は、二人を、じろっと見て、

土間へ入って、突っ立った。

所の調伏を終り、大阪蔵屋敷へ、調所笑左衛門を訪いに行く、 馬から降りた侍は、 豊後の用人、飽津平八で、七日、七ヶ

牧仲太郎を、 国境まで、保護して来たのであった。

するためには、 玄白斎が、 自分一人で、牧を追うのとちがって、牧を保護 家老も、目付もついていた。烏帽子岳から、

> 牧の足跡を追って城下へ入り、高木市助をつれて、大箆柄山 へ向ったとき、もう目付の手から、 牧へ、玄白斎の行動は、

報告されていた。豊後は、 手紙で

「玄白斎が、修法の妨げになるなら、 何うでも、 処分するが

と、さえいった。だが、牧は

「老師を罰するが如き邪念を挟んでは、 兵道の秘呪は、 成就

致しませぬ」

くなってきた。 祈っている、凄惨な様を見ると、 ている人々は、 と、答えた。然し、 牧の、 厳粛な、自分を棄てて、主家のために 玄白斎が、牧を追いかけていると知っ それを邪魔する玄白斎が憎

髯が、玄白斎が、独りで、ずかずかと出て来た。土間に立っ それは、 ている山内が、睨みつけているのを、平然と、横にして、 奥の間に、人影が動いたので、 婆が立つ姿であった。が、すぐ婆の後方に― 人々が一斉に見た。だが、 白い

んなものを、 い表の間 - 駄菓子だの、果物だの、 埃と一緒に積み上げてあるところへ来て、立っ 草鞋、 付木、 燧石、

たまま

と、呼んだ。

「貴島、

「老先生、 二人は、 御壮健に拝します」 御叩頭をした。

「 は い」 牧は?

飽津が、 玄白斎の前へ行った。

ます。 「加治木老先生、拙者は、島津豊後、用人、飽津平八と申し 牧殿は、大任を仰せつけられて、連日の修法を遊ばさ

趣き、某代って、承わりましょうが、御用向きは?」 「いや、御丁寧な御挨拶にて、痛み入る。余人には語れぬ用 只今御疲労にて、よく、御眠み中でござります。 御用の

向きでのう」

「ははあ」

飽津が、何かつづけようとした瞬間、 玄白斎が

「牧っ、出いっ」

と、大声で、呼んだ。

玄白じゃっ」

土間の、山内が、刀へ手をかけて、つかつかと、近づいた。

斎木が、眼と、手とで押えて

「老先生っ」

と、叫んだ時、駕の中から

「先生」

低い、元気の無い、 皺枯れた声がして、 駕の垂れが、 微か

に動いた。

貴島が駕 へ口をつけて

垂れを、上げますか」

と、聞いた。

'出してもらいたい」

垂れが、ふくらんで、細い手が、その横から出た。 人々が

周章てて手を出して、集まった。飽津が

「牧氏、その御身体で――」

れながら、斎木と、貴島に、左右から抱えられて、牧は駕か から、頭を出していた。駕につかまり、人々の手にささえら と、いった時、牧は、 痩せた脚を、地につけて、垂れの下

ら立上った。

悩みに、肉を削った人の面影であった。力と、光の無くなる ろう。それは、身体の病に、痩せた牧でなく、心の苦しみに、 一寸見たきりで逢わない彼であったが――何んという顔であ 玄白斎は、牧の顔を、じっと、睨んでいた。三月余り前に、

うに薄気味悪くさえ、感じられるものだった。 皺は、思慮と、判断と――頬骨は、決心と、果断とを――そ を示しているようであったし、眉と眉との間に刻んだ深い立 の乱れた髪は、諸天への祈願に、 幾度か、逆立ったもののよ

土色に変るべき肌は、澄んだ蒼白色になって、病的な、

べき眼は、却って、凄い、

怪しい力と、光に輝いていた。

玄白斎は、憎さよりも、不憫さが、 骨立った手で、駕を掴みながら、よろめき出たのを見ると、 胸を圧した。

(よく、こんなになるまでやった。お前ならこそ、ここまで、

一心籠めてやれるのだ)

(死んではいけないぞ。お前が、死んでは、この秘法を継ぐ 唯一人の、優れた愛弟子に対して、玄白斎は、 暫くの間

ものがない)

と、思って、 牧は、俯向いて、 痛ましい姿を、 よろよろとしながら、腰掛のところまで ただ、じっと眺めていた。

行くと、左右へ

- 46

と、低く、やさしくいった。

「大丈夫でござりますか」

牧は頷いた。そして、腰掛へ、両手をついて、玄白斎に叩

頭をした。

「御心痛の程

「某ー これだけいうと、苦しそうに、肩で、大きい呼吸をした。 ―今度のこと――先ず以て、先生に、談合申し上げん

所存にはござりましたが ――さる方より――火急に、火急に、

との仰せ、心ならずも、そのまま打立ちましたる儀、深く御

詫び申しまする」

牧は、 丁寧に、頭を下げた。

「ちと、聞いたことがあってのう」

玄白斎は、やさしくいって、 髯を撫でた。

「はい、 何んなりとも」

奥へ参らぬか」

飽津が

「牧殿、 ちと、 御急ぎゆえー

手間はとらせぬ」

いや、 然し――\_

牧が、 頭を上げて

「斎木、 奥まで、頼む」

腰掛に手をついて、立上ると、 よろめいた。

「おお、

和田も、

高木も――\_

と、呟いて、支えた。

して声をかけた。二人は、 奥の部屋の中の二人を、 ちらっと見ると、 狼狽して、軽く、 すぐ微笑 頭を下げ

「御苦労をかけた」

た。そして、膝へ手を当てて、 いるのへ、こういって、手を振って、あっちへ行けと、命じ 斎木と、貴島が、 牧を案じて、 大儀そうに坐った。暫く、 部屋に近い上り口に待って

人は、そのままで黙っていたが 「烏帽子で、護摩壇の跡を見た」

と、玄白斎が、 口を切った。牧は頷いた。

「お前の外に、 あれを、 心得ておる者はない」

牧は、又頷いた。

一そうか?」

「 は い

|猟師を斬ったな|

牧は、 静かに、

「斬りませぬ」

犬は?」

「犬は、斬りました|

猟師は、 誰が殺した?」

「余人でござりますが 然しながら一 お叱りは、

某が受

けまする」

貴島が

玄白斎は、又、暫く黙っていた。 牧の、 素直さに、 鋭く突

っ込みたくなくなってきた。

「聞くが、牧、 鈞召金剛炉の型のある以上、 人命の呪咀だの

ー はっ 」

「誰を、呪咀した?」

しさい、力い、光いり溢れに艮であった。 牧は、はじめて眼を上げた。澄んだ、聡明な、決心と、正

しさと、力と、光との溢れた眼であった。

「御幼君、寛之助様で、ござります」

分の想像していたように、斉彬を呪っているのではなかったも無いのみか、自信と、力とさえ入っていた。玄白斎は、自牧のそういった言葉には、少しの暗さも、少しのやましさ

「御幼君をな」

ので、軽く、失望したが

と、いって、すぐ

「前の、お姫、お二人は?」

「存じませぬ」

「しかと」

「天地に誓文して」

「御幼君のこと――誰が、申しつけたぞ」

「そのことは、兵道家として――よし、師弟の間柄とは難も、

明かすことは――

せぬを以て、 義の大小ではない。仮令、 られたる時には、 小によって行うものではない。斉彬公が、又、御幼君が、よ つ、一死を以て、これを諫め、容れられずんば、腹を裂く。 「よし、わかった。その言はよい。然らば、聞くが、 御当家のため邪魔であるにしても、これを除けよと命ぜ 主は主でないか。そもそも、 吾等の道と心得ておる。このことは、 兵道家はただ一つ――採るべき道はただ一 いかなることたりとも、 兵道の極秘は、 、不義に与る よく、説 御幼君 義の大

いた筈じゃ。牧」

は、すぐ、言葉をつづけた。いた。牧は、眼を閉じたまま、身動きもしなかった。玄白斎高木と、和田とは、刀を引寄せながら、黙って、俯向いて

ていた。山内は、上り口で、いつでも、駈け上れる用意をしていた。山内は、上り口で、いつでも、駈け上れる用意をし中を引締めていた。表の人々は、一人残らず、こっちを眺め「高木と、和田とは、何う、牧が答えるか、じっと ――身体

は、 う兵道の修法は、 ば死す。兵道に尚ぶところ、これ一つ、兵道家の心得として 黙視するとは、その罪、 逆った罪をお詫びして死ぬぞ。これがよし、 うべきではない。牧、わしなら、皺腹を掻っ裁いて、上命に にかけて、一方がやや軽いからとて、不義は、不義じゃ、従 人は知らず、兵道家としては、久光殿と、 ても、寛之助様を、 り考えると、これが大勢じゃ。然し、よし、これが大勢にし 久光殿を、 も、これ一つ。わしは、常々申したのう。心正しきものの行 上意にしても、主君をしてその孫を失うの不義をなさしめて、 「斉彬公を――いや、斉彬公を調伏せんにしても、 百 万 の悪鬼にも等しいと―― お世継にしようとする大方の肚であろう。 百万の勇士にも優り、心邪なる者の修法 お失い申すことは、不義に相違ない。 悪逆の極じゃ。 憶えておろうな。何う 諫めて容れられずん 寛之助様とを、秤 斉興公よりの御 所詮 は

牧は、俯向いたままで、微かに、肩で呼吸をしていた。何玄白斎は、静かに、だが、整然として、鋭く、牧に迫った。

なかったが、もし二人がいなかったなら、この愛弟子の肩を玄白斎は、高木と、和田の前で、自分の気の弱さを見せたくや、五年でなく、既に、死病にかかっている人の姿であった。の命を三年縮めるというが、この疲労、このやつれは、三年まるで違った疲労した牧であった。一人の命を縮めると、己ういう苦行をしたのか? 玄白斎が、想像していた牧とは、

「牧、何うした?」

抱き、手を執って

、ほう、、は、は、いっという、務として、牧を、こうして咎めたが、心の中では、と、慰めてやりたかった。自分の立場として、兵道守護の

(牧が、うまく返辞をしてくれたなら)

と、祈っていた。和田が

「牧殿――御返答は?」

えなかった。山内が、咳をして牧は、眼を閉じて、手を膝へついて俯向いたまま、未だ答

「手間取るのう」

と、土間で、無遠慮なことをいった。

「お答え申し上げます」

牧は、静かに顔を擡げて、澄んだ眼で、玄白斎を見た。

「ふむ――」

ぬ。然しながら、某自ら命を断つに於ては――この兵道の秘「君を諫めて自殺する道、御教訓として忘却してはおりませもの、鋭さが、眼にも、身体にも溢れて来た。 玄白斎が頷くと、牧は、身体を真直ぐに立てた。牧のいつ

法は、

おります。人間業に非ざる修行を重ねること二十年。それで、

今日限り絶えまする。又兵道は、只今、

せられて安穏に送るほか、何一つとして、功を立てたことはに、秘呪と称せられるのみにて、ここに十六代、代々、扶持一人として、その偉効を顕現したことはござりませぬ。徒ら頂にて和と判じて大功を立てて以来、代々の兵道方、先師達、ざりましょう。二百五十年前、豊公攻め入りの節、火焔の破が法を会得しても、一代に一度、修法をするか、せぬかでご

牧は、澄んだ、然し、強い口調で、熱をこめて語り出した。

ござりませぬ」

いった。用人が、上り口へ来て番所の役人らしいのが、大股に降りて来た。用人に、何か

「牧氏、まだか」

牧は、振向きもしなかった。

に毛の生えたものと――就、中、斉彬公、並にその下々の人々呪法の如きは、あるまじき妖術、御山行者の真似事、「「野巫女「又、御先代よりの洋物流行、新学、実学が奨励されて以来、 49

の如きは――

機に呪法の偉力を示して、人々の悪口雑言を醒すのも、兵道御当家二分して相争う折は、正について不正を懲らし、その特の秘法として、門外不出なればこそ重んぜられまするゆえ、に、又、老師の御所信に反きまするが、当兵道は、島津家独「よい時期と、心得まする。御家長久のために、兵道のため「じゃによって、呪法の力を人々に、示そうと申すのか」

「黙れ」 のために――

危地に陥って

和田と、高木とが、一膝すすめた。飽津がまた

「こみ入った話ならば、後日になされとうござるが」

の動くような――牧、浅はかではないか? より軽んぜら 「当兵道への悪口雑言などと、それ程の、他人の批判で、心 牧は答えなかった。玄白斎も対手にならなかった。

事に当って、はじめて、これを発するこそ、大丈夫の覚悟と 下より蔑まれても、 黙々として内に秘め、ただ一期の大

申すものじゃ。三年名を現さずんば忘れ去るのが人の常じゃ。

二百五十年、修法の機がなければ、雑言、悪口、当り前じゃ。 先師達は、それを、黙々として、石の如く、愚の如く、 堪え

の修法を行う機も無い。然し己を信じ、法を信じて来た――」 て来られた。 「先生――先師十六代の二百五十年間よりも、 わしも、秘呪を会得してこの齢になるが、 この十年間 一 度 の

方が、 世の中も、 人心も、激変致しました」

「万象変化しても、 秘法は不変じゃ」

「人の無いところ、法はござりませぬ。秘呪の極は、人と法 融合して無礙の境に入る時に、その神力を発しますが、

その人心が

「ちがってしまったか?」

「自ら独り高うする態度と、 兵道を新しくし、拡張し、 盛大

にせんとする心と――」

命を削って、 っと、純一無垢な態度でなくてはならぬと信じていた。 って、それは、不正な、便法でしかなかった。兵道家は、 「わしは、それを愚かしいと思うが――」 牧は、御家のため、師のため、己のため、兵道のために、 調伏の偉効を示そうとしていたが、玄白斎にと

「兵道のために尽そうとするお前の心は、よくわかる。

するか、 その雑念、邪念が入っていて、果して秘呪が成就するか 当兵道興廃のわかれるところ。 わしの修法に力があるか―― わしも、 その心のお前が成 一世一代の修

就

法、お前と、 秘呪をくらべてみようか」

「はっ」

「諸天を通じて、夢幻の裡に逢おう」

「 は い

前を、斬れんわい、 「返答によっては、 兵道の興廃よりもお前が可愛い」 斬るつもりであっ たが、 しは、

玄白斎も、涙をためていた。 牧は、だんだん、うつむいて行った。膝の上へ涙が落ちた。

それよりも、牧の処分に対して、 いう苦しさからであった。 の疲れが一度に出て来たせいもあったが、玄白斎にとっては、 牧の一行が立去ってからも、玄白斎は動かなかった。連日 強い態度を取れなかったと

苦を見ると、唯一人の自分の後継者を、自分の手で失いたく 和田も、高木も考えていたが、玄白斎は、牧に逢い、牧の辛 玄白斎の日頃からいって、もっと、 烈しく叱るであろうと、

|自裁しろ|

はなかった。

和田の、高木の前もあったが、

何うしても

が黙っているだけに、 とは、云えなかった。 玄白斎は、 和田も、 高木も、 自分の矛盾した心に、 黙っていた。

なければならなかった。

「脚でも、 仁十郎が、こう云った時 お揉み致しましょうか」

「爺っ――牧の一行が、通らなんだか」

۷ 表で、 大声がした。そして、大勢の足音が土に響いて

来た。

「はい、今しがた、お越しになりました」

爺が、台所から、 表へ小走りに出て行きながら

「どうぞおかけ下さいませ」

端折った若者が、八人ばかり、 和田が、襖のところから、眼を出すと、鉢巻をしめ、裾を 軒下に立って、何か囁き合っ

ていた。

「行けっ。一走りだ」

「遠くはない」

和田が

「先生っ、若い者が、牧氏のあとを追いよりますが」 玄白斎は、 眼を開 いて

「そうらしい」

Ł 静かにいった。立とうともしなかった。

余人が斬るなら、斬ってもよい。わしには、仁十郎 「わしには、牧が斬れぬ。然し、 あの若い者なら、斬れよう。 斬れ

ぬ

飲まないで、すぐ登って行った。 手を入れてやさしくいった。表の若者達は、爺の出した茶も 俯向きがちに、 髯もしごかないで、玄白斎は袴の下へ、両 話声だけ、 暫くの間聞えて

いいやー | 和田] いたが、玄白斎が顔をあげて

と、大きい声をした。

あの無分別な、若い者では、 覚束ない。牧は斬れぬ。 止め

るがよい」

「止めに参りましょう」

仁十郎が立上った。

くなって来たが――ここで、朋党の争いを起しては 一待て ―何んとしたものか、高木、わしには判断がつかな 斉興公

引止めて参れ。呪法での調伏は、 張り止めなくてはならぬ。高木、 の命のある限り、そう、牧の自由にはさせぬ」 のお耳に入った時、斉彬公方の人々は、極刑に逢おう-仁十と二人で追っかけて、 呪法にて破りうる。 玄白斎 | 矢

仁十郎と、市助とは、頷くと同時に立上った。

「爺、草鞋の新しいのを――」

蹄の響きを残して、山の上へ影の如く過ぎ去った。 している時、二三人の馬上の人々が、二人の眼を掠めて、 二人は、刀を提げて上り口へ出た。そして、草鞋の紐を通

右手は、雑草と、熊笹の茂りが、下の谷川までつづいてい

た。左手は、杉の若木が、幾重にも山をなして、聳えていた。 斉彬に目をかけられている家中の軽輩、下級武士の中の過

激な青年達が、牧を襲撃するという噂が、 に拡がってい 後方を振向いた一人が いつの間にか相当

「あれは?」

た。

て来ていた。 振向くと、 山角の曲りに、白い鉢巻をした人々が、

走り出

「山内、斎木、安堂寺、貴島」

と、馬上から、飽津が叫んだ。

四人が、振向いて

「 何 ?

と、いうよりも先に、彼等の眼は、 その近づいて来る人々

を見た。山内は、 大きい舌を出して、

唇をなめながら

「来よった」

と、笑いながら、袖の中から、 襷を出した。

駕、 急げっ、先へ行け」

と、二三人が、同じことをいった。 駕は小走りに遠ざかっ

斎木は、道幅を計って

「山内と、二人でよろしい」

半町しかなかった。山内と、斎木が第一列に、少し下って貴 追手は、木の間へ一寸隠れて、すぐ又現れた。もう間は小

島と、北郷が、第三段に安堂寺と、飽津とが、並んだ。

追手の先頭に立っているのは、二十二三の若者で、 白地の

稽古着に、紺木綿の袴をつけていた。山内が 「牧殿が入用か」

Ł 怒鳴った。 追手は、それに答えないで、 四五間まで近

寄った。そして

きましょうか、それとも、御伝達下さりましょうか」 「吾等有志より、牧殿に申し入れたい儀がござる。御面謁で

無礼な、その鉢巻は、 何んじゃ」

お互でござろう」

\_ 何 ?

したか? 好んで、 その返答を、 争い を求めませぬ。 お聞き下されい」 牧殿に、 何故、 御世子を調伏

戻れっ」

若者の背後の人々が

問答無益」

「奸賊

斬れっ」

斬れっ」

若い人々は、お互に、 興奮しながら、他人を押し除けて前

へ出ようとした。

「山内を存じておるか」

山内が、崖の端へ立って、若者へ笑いかけた。

「お手前など対手でない。引込め」

と、前へ出ると、若者達は、二三歩退いた。 山内は、さっと赤くなった。刳形へ手をかけて、「牧に尻っぽを振って、ついて参れ」 つかつか

「恐ろしいか」

い一人の若者が、 山内は、真赤な顔をして、睨みつけた。その瞬間、背の低 水に閃く影の如く、 人々の袖の間を摺 り抜

けて出て

「ええいっ」

胃をかたくして、 懸声と同時に、 ちゃりんと、刃の合った音がした。人々は、 柄を握りしめた。

した方を見た。 人々が、額を蒼白くして、腋の下に汗を出して、 刃の音の

青年は、だんだん肩で呼吸をするようになった。青年の背後 でいた。 小柄な青年は、狂人のように眼を剥き出して、山内を睨ん 山内は、脣に微笑を浮べて、正眼に刀をつけていた。

から、一人が、何かいいながら、青年の横へ出ようとした。

その瞬間だー

「ええいっ」

人々の見ている前で、自分から斬込んでおいて、よし、山けようと、熱塊の如く、ぶっつかって行くのと同じであった。叩きつけるように――それは、手負の猛獣が、対手を牙にかして響き渡った。青年は、その声と一緒に、身体も、刀も、それは、声でなく、凄じい音だった。谷へも、山へも木魂

て、全力的な攻撃であった。いくらかでもいいから、対手を斬ろうとする絶望的な、そしることは、面目として出来なかった。自分の命を捨てる代り、内が、何んな豪の者にもせよ、一太刀も斬らずに、引きさが

「おおっ」

うに砕けて降りかかった。する水のような勢いで、真直ぐに奔騰した。そして、雨のよと人々の眼に閃いた瞬間、血が、三四尺も、ポンプから噴出山内は、強く、短く、唸った。二つの刀が、白く、きらっ

血を噴出させて、黒い影を、人々にちらっと示したまま――一間余りの後方に立っていた。真赤な顔であった。青年は、山内は、血を避けると同時に、次の敵のために刀を構えて、

て、左手を柄から放した。そして、後方へ小声で敵も、味方も、暫く黙っていた。山内が、右手に刀を持

谷へ落ちたのであろう、何処にも姿が無くなった。

「布は無いか」

傷したか」

指を二本、落された」

「おお、どの指を――」

山内が、右手片手で、刀を構えて、指を後方へ示した時

「山内、見事だ。おれが、対手になる」

「見た面だのう」

より伝わったものという)特異の構えである。られる示現流(一名、自顕流、自源流。自源という僧、天狗られる示現流(一名、自顕流、顛戸口備前守が発明したと伝えを開けた。薩摩独自の剣法、瀬戸口備前守が発明したと伝え 若者は、答えないで、刃尖を地の方へつけて、十分の距離

二三人が、振向くと、三人の士が、馬を走らせて来ていた。馬蹄の音が、向う山に響いて、青年の背後へ近づいて来た。

「邪魔の入らぬうち――」

「斎木殿、御対手申す」と、一人が叫んだ。

牧の人々も、一斉に、鞘を払った。 最先にいた若者が、刀を抜いた。それと同時に、若者も、

「兵頭はおらんか、兵頭っ」

遠くから、馬上の人が叫んだ。その刹那

「何がっ、兵頭っ」

の刃尖が、山内の頭へ、浅いが割りつけた。 兵頭掌から腕へ響いて、左手が柄から離れた。刀が下った。兵頭握ってはいたが、指を二本無くした掌であった。びーんと、った。避ける暇は無かった。がちっと受けた。しっかと柄をえていたのへ、兵頭は、こう叫ぶと、雷の如く、打込んで行え手薙ぎと [#「片手薙ぎと」は底本では「片手雉ぎと」] 構山内が、受けると見せて避け、対手の身体の崩れるのを、

つ

山内の頁から、頁〜、冒のL\、トールト、ロルが高ってトドに。 腕で斬るのでなく、身体ぐるみで斬りかかった刀だった。

「別にう」、別にようない、山内の頭から、額へ、眉の上へ、赤黒く血が滴って来た。

「池上っ――池上はおらぬか」

と、馬上の人の叫ぶ声が、近づいた。

「新納殿だ」

二三人が、呟いた。

「ええいっ、ええいっ」

力を放射する穴のようなものだった。凄惨な、殺気とでも名みつけた。お互に、それは、物を見る眼でなく、人間の全精兵頭は、刀を真直ぐに右手の頭上へ構えて、山内の眼を睨

「来いっ――さ、来いっ」

づけるような異常な光が、

放たれていた。

こう答えて、又暫く、二人は、黙って睨み合った。

れるかの時だった。敵も、味方も、狭い道の背後から、隙がと、触れて、音立てた時には、どっちかが、傷つくか、殺さ刀と刀との間が、未だ二三尺も離れてゐた。それが、かちっ斎木も、同じように、黙って、正眼に構えたままであった。

あれば、一太刀でも助けようとしていたが、何うすることも

「引けっ、刀を引けっ――山内っ、斎木っ」

できなかった。

の位置に対し、無抵抗でいなければならなかった。新納は、若者の中へ、馬を乗り入れて来た。若者は、

「兵頭っ、刀を引け――引かぬかっ」

「はっ」

兵頭が、こう答えた刹那、新納が

「山内っ」

と、叫ぶのが早いか、山内の打込んだのが早いか――兵頭

「おおっ」

は

さっと、引くと、新納の馬へ、どんと、ぶっつかった。

ょ

ろめきながら、閃いた刀を、反射的に受けて

「何をっ」

「山内っ、おのれっ、たわけ者がっ」

げながら、二三尺、山内の方へ胸を突き出して、脚踏みした。新納が、山内の前へ、馬をすすめた。馬は怖じて、頸を上

「卑怯者っ、それでも、剣客かっ」

一人が、兵頭の後方から、山内へ怒鳴った。

引け、

引揚げいっ」

人々の後方にいた二人の馬上の士が、近くの若者へ、頭を

振って、引揚げろといった。

「斎木、早く行け、牧は行ったか」

「御無事に」

新納は頷いて

「由利が殺されました」「池上、兵頭、戻れ」

兵頭が、馬の横から、蒼白な顔で、

「何処に」

「鉾こ?」「谷へ、斬落されました」

「誰に?」

|山内に---」

愚図する。戻らぬと、おのれら、厳重に処分するぞ」「総て、戻ってから聞こう。戻れ、皆戻れっ――何を、愚図

.池上—— -おお、 無事か、新納様

お前は?」

加治木玄白の門人、 和田仁十郎と申しまする」

加勢か」

いいや、 師の仰せにて、 押えに参りましたが、 無事の体に

「そうか、わかった。 玄白に、新納が静めたと申しておけ、

「はい」

御苦労。池上、

兵頭、

拙者と同道せい」

新納は馬を廻した。

一同志の名は、 明かすまいぞ」

うん

Ł いった時、 板戸が、 埃と一緒に軋って開いた。

|池上--出ろ|

歩み寄った。 池上は、 声に応じて立上って、ずかずかと、その侍の方へ 薄暗い廊下に、もう二人の侍が立っていた。

「ついて参れ」

とが並んでいた。 廊下の突当り、中戸を突きあげると、履脱に、庭下駄と、草履 人々が、 庭下駄を履いたので、池上がその

「草履だ」

上へ足を下ろすと

と、背を突いた。

「 何 ?

睨みつけた。

·草履を履くのだ」 池上は、 振返って、

> いえばわかる。何故、 背中を突いた」

黙って、 早く行け」

「行かん。俺は、罪人でないぞ。軽輩だと、 お主達は侮る気

先に、庭へ降りていた一人が、

「ここで争っては困る。殿が、待っておられるで。池上」

よろしい」

って行った。広縁のところへ来ると、一人が、縁側へ手をつ 池上は、赤い顔をして、眼を光らせて、植込みの中を、

いて

「召連れました」

暫くして、障子があいた。 と、いった。二人は、池上と共に、庭へうずくまっていた。 新納六郎左衛門が、 小姓と、 近侍

とを従えて坐っていた。

「それへ上げろ」

新納は、 縁側を、扇で指した。

「御意だ。すすむがよい」

挙、一動をじっと、見ていたが、 履脱から、 池上の後方の士が、囁いた。池上は、 縁側へ平然として上って行った。 池上が坐って、 一礼して立上って、 新納は、その一 、礼をしてし

まうと

「七八人、

人数がおったのう」

「はい」

「誰と、誰と―

「忘れました」 新納の眼に、 怒りが光った。 池上は、その眼を、

少しも恐

55

れないで、正面から、じっと凝視めていた。

「なぜ― 忠い 出さぬか?」

「出しませ ん

池上は、言下に、明瞭と、答えた。

「よし、それでは、思い出させてやろう。 釘をもて--粉が 河ゎ

その方共、そいつの手足を押えい」

少し蒼白めてきた。一人が、池上の右手をとって、上四人の近侍が立上った。池上は、微笑した。だが、 池上の右手をとって、上へ引い 顔色は

膝頭を片脚で蹴りながら

「打つ伏せになれ」

いった。池上は、その男を下から睨み上げて

「打つ伏せ? 怒鳴ると、 右手を振り切って、仰向けに、大の字に、 薩摩隼人は、 背を見せんものじゃ。馬鹿め」 手足

を延した。四人が、一人ずつ手と足を押えつけた。

「釘を、持参仕りました」

親指を責めてみい ――池上、ちいっと、痛むぞ」

えながら、爪におしつけた。 爪の生え際へ、釘のさきを当てた。そして、少しずつ力を加 一人が、押えている池上の掌を、板の上へ伏せて、親指 の

こうとした。足の指は、皆内部へ曲って、苦痛をこらえてい 池上の顔は、 が微かにふるえて、一人の力では押え切れぬくらいの力で動 きい息が、喘ぐように、呻くように、鼻から洩れかけた。脚 れ上って来た。 上の顔は、真赤に染まって、米噛の脈が破裂しそうにふく爪は、暫く、赤色になっていたが、すぐ、紫色に変った。 額に、あぶら汗が滲み出て来て、苦しい、

た。眉も、眼も、脣も、頬も、苦しそうに歪んで来た。

「池上、何うじゃ、 同志の名を聞こうか」

た。 の腹が、波打つように動き、 煙管をはたきながら、静かに、声をかけた。 頭髪が、目に立ってふるえてき 池上

「池上」

きが、池上の口から洩れて出た。手足を押えている四人の侍 は、手だけでなく、 うむーっ、と、苦痛そのものが、洩らしたような、凄い 身体と、脚とで、池上の一本の手、 呻

の脚を押えていた。

うに、高く、低く、 が、短くなってきた。仰向いている腹が、人間とは思えぬよ 響いていた。顔色が、灰土のように、 中へまで、痛みが、命を、 集めて、苦痛を耐えていた。指から、 池上は、脣を噛んで、 波打って呼吸をしかけた。 眉も、 骨を削るように、 眼も、 鼻も、 腕中、 蒼ぐろく変って、呼吸 しんしんとして 腕から、頭の真 くちゃくちゃに

「池上」

池上は、黙っていた。新納は、 吐月峯を叩いて

「うっ」

よかろう」

と、いった刹那、

池上が

が、胸が五寸余りも浮き上った。人々が、池上の上へ、のし かかった。 奥の方から出た音のようなものであった。そして、 |突き抜けました| それは、 池上の爪へ、 呼吸のつまったような、咽喉からでなく、もっと 釘を押し当てていた侍が 池上の腹

- 56

かすれた声でいった。 額に、冷たい汗をかいて、 蒼白い顔をしながら、 小さ

「手当をしてやれ ―気絶したか」

「はは、 新納が、人々の蔭になっている池上の顔を見ようとした。 ははは は

い声は、 人々は、冷たいもので、背中を撫でられた。池上のその笑 幽鬼のような空虚で、物凄い笑いだった。

「あははは、 生きていたか ――池上、流石に薩摩隼人だ。よ

く耐えた」

やってくれ。ただ――ただ、無謀な振舞だけはするな。世の 中は広大じゃで、 い眼をして、こういうと、次の瞬間、 「池上、お前達の世の中じゃ。その心を忘れずに、しっかり、 新納が、池上の、灰色の顔を見て、睨みつけるように、 一家一国の争いなどに、巻き込まれるな やさしい声になって 鋭

-感心したぞ――えらいぞ」

新納の眼に、微かに、涙が白く浮いていた。池上は仰向い 眼を閉じたまま、大の字になって、身動きもし なかった。

体も、 際までになっていた。それが急に放たれて、称められて、肉 池上は、何をされても、黙って、眼を閉じて、 かった。又、出来なかった。苦しさに、痛みに、気を失う間 医者が来て、釘の突き抜けた疵口を洗って、 ぼんやりとして、 疲れきっていた。医者が立 繃帯をした。 身動きもしな

「兵頭を呼べ」

去ろうとすると、

新納が

「兵頭」

四人の者が、片膝を立てて、もし、主人に乱暴でもしようも のなら、と池上の眼を、手を、 と、呟いた。そして、首を動かして、起き上ろうとした。 脚を、 油断なく見つめていた。

「新納殿

「裁許掛でもないお身が、何故、 池上は、灰色の顔色の中から、 濫りに、 新納を睨みつけ 人を拷問なされた」

新納は、 口に微笑を浮べて

今、兵頭が参ったなら、改めて話すことがある」 「書生の理窟じゃ。ま、理窟はよい、わしが負けておこう。

薄汚い着物が、庭の中でも、 と、いった時、 庭石に音がして、兵頭が案内され 部屋の中でも、目に立った。侍 てきた。

が、兵頭に、 囁くと

「御免」

と、いって、ずかずかと、 池上の側へ坐った。そして、新

納へ、挨拶した。 「兵頭」

「はっ」

「今、池上を爪責めにした――」 兵頭は、 両手をついた。

兵頭は、頭と、 手を、さっと上げると、正面から、

新納を

睨んだ。そして

めていた。近侍が、悉く、 「ここの親爺とも覚えぬ」 と、大きい声を出した。新納は、微笑を納めて、 兵頭を睨みつけた。 兵頭を眺

「爪責めは愚か、八つ裂き、牛裂きに逢おうとも、 一旦口外

- 57

すまいと誓ったことを、破るような――あははは、ここらの から、拷問も御入用じゃ。吾等、軽輩、秋水党の中に、 方々には、爪責めで、ぺらぺら喋る人もござるのじゃろ。だ 拷 問

右脚を、新納の方へ投げ出した。そして、 などと申すものはござらぬ。 一座の人々を、じろりと、 爪責め? 見廻して、いきなり、 何う責める?」 右手で、足の親指

「爪を責めるだけか?― ぐっと、逆にとった自分の親指 ――見ろっ」

を握って

「えいっ」

ぽきっ、と、音がした。

ぼれたかっ。脚でも――」 ふるえあがるから、吾等も白状するかと、 うなどと、恥を知らぬかっ。おのれが拷問にかけられると、 「新納、見そこなうなっ。吾等薩摩隼人に、拷問をかけて問 ははははは。 老い

兵頭は、腕をまくって突き出した。

死命あり論ずるに足らず、一死只報いんとす、君主の恩」 「腕でも ---斬るなり、突くなり、折るなり-池上っ。 生

だまっていた。身動きもしなかった。 兵頭は、足を投げ出したまま、大声に、詩を吟じた。誰も、

「武助、 御暇致そう」

少し、 顔色を回復した池上が、 静かにいった。

新納殿、 御無礼致しました」

しもう、 兵頭は、 夜に近い。急ごうよ」 脚を引いて、御辞儀もしない

> 舞に、 一座の人々は、一座を、新納を、余りに無視した二人の振 何う判断していいか、 ぼんやりしていた。兵頭が、 立

ちかけると、新納が 「兵頭、 引出物を取らそう」

と、叫んだ。

|引出物?|

兵頭が、新納を睨んで、 身構えた。新納は、 自分の脇差を

抜き取って

「主水正じゃ。差料にせい」

の顔を見ていたが、 と、兵頭の脚下へ投げ出した。 静かに坐った。そして、 兵頭は、暫く黙って、 手をついて 新納

「お許し下されますか」

じっと、新納の眼を見た。

"池上、そちにも取らそう。 大刀を持て」

۷ 小姓へいった。そして、兵頭へ

にある。よく、斉彬公を輔佐し、久光公を援けて、この天下等如き老境の者の仕事ではない。悉くかかってお前達の双肩 る。それを支え、 どで、あったら命を捨てるなよ。近いうちに天下の大難がく ただ、池上、兵頭。噂に上っている牧、或いは調伏のことな があったら、新納が、感服していたと、申して伝えてくれい。 「斉彬公が、軽輩、若年の士を愛する心が、よく判った。 切抜け、 天下を安きに置くは、もう、

一人は、だんだん頭を下げた。

といかん」 者風情を、

の難儀に赴かんといかん。

お前ら多数で追っかけるような匹夫の業は慎まん

一家の内に党を立て、

るがよい。 「同志の者によく申せ――これ、馬の支度をして、送ってや お前達が、 次の天下を取るのじゃ。大切にせい。

髪の毛一本でも粗末にするな。指は、一本だけ折ればよいぞ。

「 は っ 」

兵頭」

兵頭は、泣いていて、顔を上げなかった。

ます。 「斉彬公よりも、天下に動乱のあること、よく承わっており 御教訓、 しかと一同に申し伝えまする」

と、池上が、挨拶した。

の人々が、二人を眺めていた。 いろいろの顔が、ちらちら二人を覗いたし、玄関にも、 う、黄昏になっていた。廊下つづきの、 二人が、引出物の刀と、脇差とを持って廊下へ出ると、も 左右の部屋部屋から、 多勢

けて、門を出ると、 提灯を片手に、馬丁が、 もう、 夜であった。門の軒下を、 馬の右に立った。 人々の挨拶を受 曲ると

―二つの影が

「五郎太」

武助

Ł 叫んだ。馬丁が、 その方へ提灯を突き出した。二人の

おお、西郷」

青年が、見上げていた。

「大久保。今頃まで、何していた」

待っていた。 無事だったな」

大久保の声は、微かに、明るく、 顫えていた。

「引出物まで頂戴した」

武助は、 脇差を、 かざしてみせた。

> 「何んとー 黒塗りの床柱へ凭れかかって、家老の、碇 山 将 京で辻君、大阪で惣嫁、江戸で夜鷹と、夕化粧 ・ する が

- かの。それから?」

流行唄を唄っているのは、 の側役伊集院伊織である。 金砂子の襖の前で、腕組をして、微笑しているの 岡田小藤次であった。 その前に、膝を正して、 小声で、

意気は本所、 仇は両国

うかりうかりと、ひやかせば

ここは名高き、御蔵前

足、 渡しに、のりおくれ

危さ、 夜鷹の舟と、気がつかず 恐さ、気味悪さ

小藤次は、 眼を閉じ、脣を曲げて、 一くさり唄い終ると

「ざっと、こんなもので」

扇を抜いて、忙がしく、風を入れた。

将曹が、柱から、 身体を起して 「世間の諸式が悪いというに、唄だけはよく流行るのう」

京でえ、辻君

「ツンテレ、ツンテレ

か、

のう。

ツンテレ、

ツンテレ、

「トン、シャン」

小藤次が、 · 扇 で、 膝を叩いた。

「申し上げます」

「大阪で、惣嫁」 廊下から、声がした。

「テレ、ツテツテ、ツテテンシャン」

「えへん――江戸で、 |申し上げます| 申し上げます」 将曹が、 扇で、ぽんと膝を叩 夜 !:\_ て うかり ちと、内談を ひやかせば 内談か、聞こう」

申しかねまするが、 御人払いを

将曹の顔が、一寸険しくなった。

人払い?」

- 余人はおらぬ、 申してよい」

「待て」

何んじゃ」

伊集院が、立って行って

名越左源太、仙波八郎太殿御両人、

内密の用にて――

゙゙テレトン、テレトン」

床柱から、身を放すと、二人をきっと眺めた。 小藤次も、

一人の方へ、膝を向けた。

「では

膝の上へ置いた。 名越左源太は、右手を、 そして、 後方へ廻して、包み物をとって、 中から、 箱を取り出して

「これを御覧下されたい」

蓋の梵字を暫く眺めてから、蓋をとって、 右手で、押出すと、伊集院が、将曹の前へ置いた。将曹は、 人形の包を、 手早

く開けた。そして

二人を見た。

「これが?」

「御長男様を、調伏した形代と心得ますが――」

三人の眼が光って、

一時に、

人形へ集まった。

左源太が

「裏側を・ 声に応じて、将曹が、人形を裏返した。小藤次が、首を延

して、覗き込んだ。 「或いは、調伏の人形かもしれぬ――どこで、手に入れたな」

「はっ」

仇は、両国

――もっと、近う」

った。

取次が、

障子をしめると、二人は、

御辞儀をした。

「意気は、

゙テレ、トチトチ、ツンシャン」

障子が、静かに開くと、敷居から一尺程の中へ、二人が坐

意気は、

本所」 本所\_

将曹は、

うなずいて、

また、眼を、閉じた。小藤次が

'名越と、 夕化粧、 将曹は、 御家老」

仙波とが、何か話があって、

お目にかかりたいと

ツンシャンー 細目を開いて

―何んじゃな」

ただ今、唄の稽古じゃ」

小藤次が、 口三味線のまま一寸振向いて、二人を見て、す

ぐ

「うかりうかりと――

- 60 -

「御病間の床下から――仙波の倅が、手に入れました」

のじゃー 「これが、 うつむいている仙波へ、じろっと、眼をくれて 調伏の形代として、誰が、 一体寛之助様を呪うた

将曹を、じっと見たまま、 暫く黙っていた。 左源

存じます」 「その儀は、 この人形を埋めました者を詮議すればわかると

「心当りでもあるか」

「ございます

申してみい」

小藤次と、伊集院とは、二人を、見つめたままであった。

|恐れながら|

「この二つの筆蹟から判じまするに、牧仲太郎殿の仕業と、 仙波が、懐から、紙を取出して、伊集院の方へ押しやった。

心得まする」

将曹は、人形を持った手を、 膝の上へ、落すように置いて

「牧だとー

「その、書状の筆蹟を――」

Ł までいうと、少し、 赤い顔になった将曹が

似せて書いたとされても、弁解の法が立つか」 「仙波 ――名越。この人形を、その方共が作り、 牧の筆蹟を

「奇怪な――仰せられる御言葉と+名越が、さっと、顔を赤くした。 ―仰せられる御言葉とも思えぬ。某が――」

を陥れんがために、計ったこととも考えられるではないか。 物の道理じゃ。貴公がせんでも、牧に怨みのある奴が、

余のことではない。軽々しく、

調伏の、牧の仕業のと、平常

「お姫様から、御長男様まで、御三人とも、奇怪な死方をなの、貴公に似ぬ振舞だ」

も、不念とは申せますまい。もし、その人形が、余人の手に された上は、 一応、軍勝図を秘伝致す牧へ御取調べがあって

島津壱岐殿も、牧の筆と御鑑定になりましたが、一応、 なったものなら、不肖ながら、某等両人切腹の所存でござる。

ございます」

の有無を、

御取調べ願いたいと――

内密の用とはこのことで

名越は、声を少しふるわせていた。 将曹が

左源太」

叫んだ。

左源太は、少し怒りを含んだ眼で、 将曹に膝を向けた。 将

曹も、左源太を睨みつけながら

「申し上げました通り-御病間の床下から

「この形代は、一体どこから、持って参ったな」

「如何して、取出した?」

如何してとは?」

「床下へ、忍びこんだので、あろうな」

ば、何故忍ぶべからざるところへ、忍びこんだと、 められても、 仙波も、名越も、暫く黙っていた。忍び込んだ、 弁解はできなかった。然し、名越は 強い、 逆にとが といえー

瞭とした調子で

いかにも 小藤次も、 伊集院も、 御床下へ、忍び込んで、手に入れました」 名越の大胆な答えに、じっと、顔を

見つめた。

「誰が、許した――誰が、忍び込めと、許した

名越は、眼の中に冷笑を浮べて

「許しを受ける場合もあれば、受けんと忍ぶ時も、ござろう。

御家の大事に、一々――」

将曹が

「黙れっ、許しが無くば、重い咎めがあるぞっ」

じっ、こっここ、分は悪いっつこ創品(ころう。卩でこ)、「あはははは、命を捨てての働きに――あはははは。仙波も、

扱いなさるなら、最早それまで。某等は、某等として、相当れようか、ははは。いや、御貴殿が、この品を軽々しくお取ような証拠品を手に入れるに、一々、御重役まで、届け出らかる大不祥事あって、悪逆の徒輩が、横行致しておる節、か某も、とっくに、命は無いものと覚悟しておる。御家に、か

の手段をとって、飽くまで、牧殿を追及する所存でござる。扱いなさるなら、最早それまで。某等は、某等として、相当

貴殿御月番ゆえに、一応の御取調べ方を御願いに参りました

に、当方を御咎めになるらしい口振り、裁許掛ならいざ知らが、思いもよらぬ御言葉。この大事を取調べようとせず、逆

掛役人にて取調べされるよう御指図なさるのが、月番の貴殿の品が偽り物ならば、偽り物、真実ならば真実と、一通り、ず、月番の御役にしては、ちっと役表に相違がござろう。そ

名越は、大きい声で、一息に、ここまで喋ると、将曹が、

の役では

真赤になったかと思うと

と、叫んだ。「黙れっ、黙れっ」

「無礼なっ。何を、つべこべ、講釈を披げるか?)かようの、

に

あやふやな人形を、証拠品などと、大切そうに――」

殿も、 と断じて、裁許掛の手へも、 ないと、 やふやか? のか? 牧仲太郎でも召捕えて、 「奇怪なっ、この人形が、 同じ穴の、 仰せられるのか? 高の知れた泥人形ゆえに、あやふやと申される むじなと見てよろしゅうござるか?」 あやふやとは?―― 御廻しにならぬとすれば、 取調べもなされずと、 白状させれば、あやふやで 何が故に、 あやふや

「何?」

静かな足音が、広書院の方に近づいて、障子の開く音がした。(名越が、赤い顔をして、仙波へ、振向いた時、七八人の、「仙波、直々、裁許掛へ願い出ることに致そう」

「持って戻れっ」

名越の前へ投げ出した。がちゃんと音がして――人形の片手将曹は、脣と、頬とを痙攣らせながら、人形と、箱とを、

「何をなさるっ」がもげた。仙波が

「 何 ?

八郎太は、頬をぴくぴくさせ、拳を顫わせていた。そして将曹は、こういって、仙波を睨みつけながら、立上った。

「お待ちなされ」

将曹の行手へ、膝をすすめた。

「軽率なる御振舞、何故、証拠の品を、毀し召された」

将曹は、少し、額を、蒼白ませながら、小藤次と、伊集院

- 62

御渡りになったらしい」

Ł い って、 襖へ手をかけようとした。

待たれいっ」

八郎太は、 手を延した。

将曹殿

八郎太が、片膝を立てて手を延し、 将曹の袴の裾を掴むと

同時に

室中に轟く、「無礼者がっ」 曹は、 掴まれている方の足を揚げて、八郎太の腕を、 大きい声であった。 そして、真赤になった将 蹴った。

放すと共に、 無念さが、胸の中へ、 熱い球のように、 押し上

って来た。

八郎太は、

将曹の、

意外な怒りに、

態度に、

掴んでいた裾を

「何んと心得ているっ。け、 八郎太の、下から睨み上げている眼へ、 軽輩の分際を以て、 憤怒と、 無礼なっ」 憎悪を浴

「仙波、 無益の事じゃ。対手による。 戻ろう。戻って――」

せながら、将曹は、襖を少し開けた。

将曹は、 襖を少しずつ開けつつ

両人とも、 退れっ」

立ったままで叫んだ。

٤

|伊集院っ、此奴を退げろ|

将曹の声は、 顫えていた。二三寸、 隙間の開いた襖から、

浮き立ってみえる、 笑いながら、 中の模様 こっちを眺めていた。その横に、 が見えていた。六十に近い、 脇息に手をついて、坐りかけながら、将曹の声 厚化粧のお由羅が、 ほの暗い部屋の中に、 当主の、 侍女を従えて、立っ 島津斉興が、

ていた。

「お退り召され」

公の顔と、 伊集院が、膝を立てて、仙波にいった。丁度、その時、 名越の顔とが合ったので、 名越が、 平伏する。 仙 老

波も、すぐ平伏した。

「お退り召され

二人は、平伏したまま、 暫く、 じっとしていた。

将 何んとした」

斉興が、声をかけた。 将曹は、 襖を開けて、入りながら

「只今、 言上」

Ł 坐って、後ろ手に、 襖を閉めた。

早く ——」

Ł 伊集院が、三度目に促すと共に

゙煩いっ」

左源太が、低いが、鋭く叫んで、伊集院を睨んだ。 毀れた人形を包んで入れた。 仙波は、

木箱の中へ、

「退ろう」

と、名越を振向いた時

「両人共、待てっ」

足音と共に、 斉興 の部屋から、 呼び止めた人があった。

襖を開けたのは、

横目付、

匹

ツ本喜十郎であった。

後ろ手

に閉めて、 二人の前 へ坐ると

「ござります――これなる-

何か、

証拠の品が、あると申されるか」

仙波が、 膝の上で、包みかけていた箱を、

「暫時 —— ]

眺めて、腕組をしていた。小藤次は、扇を、 二人は、膝へ手を置いて、黙っていた。伊集院は、天井を 四ツ本は、そのまま向き直って、膝行して、書院へ入った。 ぱちぱち音させ

ていたが、立上って、

う処置するか? 四ツ本が がつづいてから、足音がしたので、二人が、俯向いていると、 く音が、静かな書院中へ、響いていた。暫く、そうした沈黙 何う憎み――自分達の真心を、何う考えるか?――煙管を叩 てきた。仙波と、名越とは、斉興が、あの証拠品を見て、 斉興の部屋からは、低い話声が、誰のともわからずに洩れ 自分の孫を、 廊下へ出て行った。 呪い殺した下手人に対して、 何

「拙者の詰所まで」

Ł いって、 襖のところへ、立っていた。

|詰所へ?|

「御上意によって、承わりたいことがござる」

「心得た」

名越が、膝を立てた。 仙波が

| 只今の品を――\_

一只今の? 御前にあるが

「御持参御願い申したい」

四ツ本が、 襖を開けて、 膝をついて、 敷居越しに

申し上げまする」

将曹が

何じゃ」

·その証拠の品を戻してくれいと、 申しておりますが

> 向いている二人を、 斉興が、鋭く、 四ツ本の後方に、頭の端だけを見せて、俯 睨んだ。そして、 脇息越しに、 手を延し

て、人形を掴んで

「これか」

が、ころころと、 った人形は、又首を折った。白灰色の眼が剥き出した首だけ 大きい声と一緒に、四ツ本の前へ、投げつけた。 四ツ本の前へ転がってきた。 片手を折

と眼を挙げたが、近侍の人々しか見えなかった。 突かれると同時に、人形を投げつけたらしい気配に、 名越と、仙波とは、ただの調子でない斉興の声に、 心臓を ちらっ

(何うして、御立腹になったのかしら?)

と、二人の心が、 心もち、蒼白めて、冷たくなった時

「不届者がっ」

顫えて、 しゃがれた大きい声がした。

二人は

「はっ」

と、いって、見えぬところであったが、平伏した。

斉興は、首を延して、二人を見ようとしながら、 両手で、

脇息を押えて、ぶるぶる両手を顫わしながら -これっ、不届者 聞け

と、叫んだ。

斉興の、 思いがけぬ烈しい罵声に、 手をついてし

まった。

「不届者っ――こ、これへ参れっ」

甲高い、怒り声であった。

おのれら、不所存な。 二人は、平伏しているより外に、 何んと思いおる。 仕方がなかった。 たわけがっ」 四ツ本

お由羅は、 薄明りに金具の光る煙草盆を、 膝のところへ引

、二人と同じように手をついていた。

寄せて、銀色の長煙管で、 いっては、侍女と一緒に、朗らかに笑った。 とした部屋の空気を、 少しも感じないように、 煙草を喫っていた。 そして、 侍女に、 何 白々 か

「実学党崩れ、 又 秩父崩れ 家中に党を立てて、 相 5争う

ことは、それ以来、 存じておりながら―― きつい法度にしてある筈じゃ。それを、 こともあろうに、由羅がどうの、 調伏

がどうの

غ |

おのれら、身を、

何んと見ておるのじゃ。

当

ゃ、床下へなりと、天井へなりと、 したり、身に陰謀を企てたりする奴等がおったなら 家は身のものじゃぞ。これっ――身が当主じゃぞ。身を調伏 奥へなりと忍び込め そり

れば、 それは、 それも許してやろうが、 忠義な所業じゃ。又倅の側役として、斉彬に事があ 高が、斉彬の倅一人の死に、

陰謀が何うの、 人扱いにして、 人などと-由羅は、身の部屋同然の女でないか。それを、謀反、こうの――申すにことを欠いて、 由羅が張本 それで、 おのれら、 功名顔をする気か 公

に聞えて、

当家の恥辱にならんと思うの

か

たわけっ、

思慮なし。 ものを楯にとって、 の所 石ころ同然の手遊人形一つを証拠証拠と、 : か | 家中に紛擾を起して、 それが、 心得ある 左様の

一気に、ここまで喋って、 そして、 呟き入った。 疲れたらしく、 水飲み

恐れながら一

響かせた。 沈黙している一座の中へ、八郎太が、 斉興は、 湯を一 口飲んで、首を延して、 低い が、 強 名越の背 い声を、

後をのぞき込みながら

「おのれは、 何んじゃ」

小藤次が

「裁許掛見習、仙波八郎太と申します」

忍び込んだ罪ぐらいは、 「これっ ―― 裁許掛を勤める程のものなれば、 濫りに、

存じておろう

恐れながら――」

の分際として、 | 黙れっ | ---斉興が、興奮した手から、湯を溢そうとするのを、 直々の差出口、誰が、 老職へ、 強談するの 許したっ。 か、 身に 不届 -身に-者。 由羅が、

手を添えて

「将曹― 二人を退げてたもれ.

退れっ」

斉興が、 八郎太の方を睨んだ。

御身体に障ります」

お由羅が、 人々を叱るように叫んだ。 仙波が

「八郎太」

口早に 膝退ると、 Ĺ١ って、 目を配 が せた。 八郎太が、

ておれ、

叫んだ。 小藤次が俯向 い て、 にゃっと笑った。

がら、 曹、伊集院平、仲吉利へ、押えきれない憎しみと、怒りとを墨を磨りながら、御仕舞に連署している三人の名――島津将 感じてい して、 目付、 八郎太の手もとを見ていた。八郎太は、 承でする という 大力 不 将 儀 有 之、 大力 不 将 儀 有 之、 左の隅へ、自分の名を書いた。その奉書の右の方には た。 洞川 手先の顫うのを二人に見せまいと、気を静めな .右膳と、添役、宝沢茂衛門とは、沈んだ顔付を 食禄を召上げ、 暇被下者也、 赤い顔をして、 月日、

川が、受書をして、二人の前へ差出すと、一見してから、洞太が、受書をして、二人の前へ差出すと、一見してから、洞へれから、その三人の名が、書いてあるのであった。八郎

「それで――」

と、一寸、いい淀んで

「三日の内に、退転されるよう」

三日?」

「左様」

- 八郎太の顔は、怒りで、だんだん赤くなってきた。

洞川は、宝沢に合図して、立上った。次の間で、「承知仕りました。御苦労に存じます」

小太郎が、

玄関の供へ

「お立ち」

しなかった。

と、叫んだ。八郎太は、坐ったまま、見送りに立とうとも

びしさであった。たし、三日限りで、出て行けというのも、情け容赦のないきたし、三日限りで、出て行けというのも、情け容赦のないきた。多少の咎めは覚悟していたが、追放とまでは考えなかっ、小太郎の手柄も、八郎太の訴えたことも、総て逆転して来

家であった。 余分の実入とて無かったから、御暇が出れば、すぐにも困る余分の実入とて無かったから、御暇が出れば、すぐにも困る行の渡らないことさえあった。それに裁許掛見習などの役は、重豪公の放漫から、七八年前まで、藩財窮乏のために、知

次の間で、行末の「七瀬――皆も参れ

次の間で、行末の不安に、おののいていた七瀬らが入って

来た。

「聞いたであろう」

「 は い

元兇調所を、一つ、さぐって欲しい」たい。それに就いて、一つ頼みがあるが、益満の申す如く、

「何れにせよ、別れる運命になった―

「はい」

になるかもしれぬ」 太郎と共に手段をめぐらそうが、或いは、これが一生の別れ「わしは、名越殿と談合の上、お国許の方々と策応して、小

二人の娘は、俯向いた。深雪は、もう、袖を眼へ当ててい

「存じております」留守かも知れぬが、何処にいるか、心当りを存じているか?」留守かも知れぬが、何処にいるか、心当りを存じているから、て――小太郎、益満を呼んで参れ。ひっそりしているから、「すぐ召使の者に手当して取らせい。目ぼしいものは売却し

- 66 -

国許へ戻ってもらい

くようでは、父の子でないぞっ。泣くなっ」 「深雪、何を泣く。女は女として、又一分の勤めがある。泣

いた。 「綱手、門前の道具屋へ、深雪は、古着屋を呼んで来てたも」 廊下へ集まっているらしい三人の召使の一人が、すすり泣 七瀬は、ふらふらしそうな頭で――だが、元気よく

「私がついでに」

文書を破り棄てにかかっていた。 小太郎が立上った。八郎太は、 もう手箱から、不用の

つづけながら、黙っていた。 「お父様、妾にも、何か御用を仰せつけ下さいませ」 涙曇りの声だ。八郎太は、 手箱から出てくる文書の始末を

「何んなことでも致します。何んな、辛い辛抱でも致します」 八郎太は、手をついている深雪の眼の涙を、 いじらしそう

に見た。深雪は、湧いてくる涙を、睫毛で押えつつ

「お父様、決して、御手纏いにはなりませぬから――」 お前は、 江戸へ残って

「ええ? 江戸へ残って――お父様、残って? 一人で残る

のでございましょうか」

るか」 「いいえ、お父様、 「話をよく聞かずに、何んじゃ。そんなことで手助けができ 妾一人残りましても、 御申し付けのこと

八郎太は、うつむいている綱手に

は仕遂げます」

お前は、 母について国許へ参るがよい」

「はい」

母の家も、親類達も、皆そこにある」 の憶えもあるまいが―― 「生れて三歳までしか居らなんだから、国と申しても、何ん よいところじゃ。 お前の生れた家も、

「道程は、ざっと三百八十里、女の足で二月はかかろうか」「幾日ぐらいかかりましょうか」

「まあ、三百八十里?」

悪い雲助のことや、果のない野原、 綱手も、深雪も、安達ヶ原の鬼の話や、胡麻の蠅のことや、 知らぬ道の夜、 険しい山

などを、いろいろと、心細く、悲しく、 想像した。

「母と二人で行けるか?」

「ええ、参ります。そして、妹は?」

「深雪には、深雪の役がある」 「何んな役? お父様<sub>-</sub>

七瀬が、襖を開けた。 召使が、 膝を揃えて平伏した。

「お暇乞に」

きましたが、これは、御返し申します」 「いいえ、お暇乞でござりませぬ。ただ今、 又蔵は、金包の紙を、敷居の中へ押しやった。 七瀬が、そういって、中へ入ると、 小者の又蔵が この御手当を頂

よいところへ御縁のきまるを見てと、それを楽しみに こんなに御成長遊ばしますまで、ええ、その長い間、何うか、 「六年と申せば、短いようで長い―― お嬢様が、 十二三から、 何

う訳だが、どう思う、と、旦那様、 を教えて頂きますのも、こんな時に、又蔵、こうこうこうい も、今更になって、手当だの、暇だのと、それは一期、 の奉公人のことで、手前は、憚りながら、坊ちゃんに、 一言ぐらい仰しゃって下

さっても

又蔵の涙声が、だんだん顫えて来た。

「い、いきなり、手当をやるから、出て行けって――」

「又蔵、よくわかった。忝ない。然し、明日から雇人を置く

身分ではなくなるのじゃ」

「さあ、旦那、そこで――手前は、や、雇人じゃござんせん。

ゃれば死にます。 何故、主従は三世の、家来にして下さいません。死ねと仰し 出て行けと仰しゃれば――そいつだけは、

「うめえことを、云やがったのう。古人って奴は」

一人が、小藤次の家にいる源公の顔を見て、大声を出した。 富士春の坐っている長火鉢の、前と、横にいる若衆の中の

「何が?— 途方もねえ吠え方をして、何を感ずりゃあがっ

「そら、千字文の初めに、天地玄黄、とあらあな。源公」

「何を云やあがる、そりゃ、 論語の初めだあな」

「無学文盲は困るて。それは、大学、喜句の章だ」「糞くらえ、論語の初まりは山高きが故に尊からずだあ」

「喜句の章じゃあねえ、団子の性だ。 団子の性なら転げて来

師匠の性なら、金持って来い」

「おやっ、もう一度唄って御覧な」

「東西東西、それで、天地玄黄が、何うしたえ」 口で笑って、眼で睨んだ。一人が

に、源公は、色が黒いって、古人って奴が、ちゃあんと、物 「天地玄黄の、 玄の字は、黒いって字さあね。 、それ、千年前

の本に書き残してあるんだ。豪気なもんじゃあねえか」

「成る程、それで感ずりましましたか」

「へへへ、雀ら、嫉め嫉め、師匠の側にくっついてるから羨

ましいのだろうよ。もそっと、くっつくか」

源公は、富士春の方へ、身体を寄せた。 白粉と、 舞台油の

匂が、微かに、源公の血の中へ流れ込んだ。

あ。未だあるぞ、九郎判官義経って、 白い福の神があるか? 「色が黒いって、福の神は、大黒天って、こら、三助。色の 師匠のような別嬪は、 源頼光さんの弟だ」 玄人って云わ

「大伴の黒主ってねえ、源さん」

「師匠っ、上出来っ。天下を睨む、 大伴の」

「九郎助

稲荷大明神」

「こんこんちきな、こんちきな」

め、一人で、煎餅を食っちまゃあがった」 「置きあがれ、馬鹿野郎 ――おやおや、喋ってる間に、定公

「手前の洒落より、 煎餅の方がうめえ」

格子の開く音がして

頼もう」

若い侍の声であった。 それに応じて、 富士春が

と、店の間をすかして見た。若い衆が 士連中の弟子入りが無かったが

一おやっ」 と、呟きつつ、御神燈の下を眺めた。

富士春は、裾を押えて立上った。二三人が、 押えている裾

で見えるのが、こうした女の風俗であった。そして、 前幅を狭く仕立てて、歩くと、居くずれると、膝から内らま のところをちらっと見た。倹約令が出て、いくらか衰えたが、 富士春

は、今でも、内股まで、化粧をしている女であった。

剥き出しにしていた。 く返した胸のところへ、 と、小太郎の前に立った富士春は、紅縮緬の裏を媚めかし わざと手を差入れて、 胸の白さを、

「益満は?」

休さん?」

富士春は、こう云っておいて、すぐ

「もう見える筈――お上んなさいましな」

小太郎は、土間へ眼を落したままで

「間もなくで、ござろうか」

える時分、 「今しがた、 町内の御若衆ばかりゆえ、御遠慮はござんせん」 南玉先生も、お尋ねに見えて、いつも、もう見

源公は、 小太郎をじっと眺めていたが

「不憫や、この子も」

と、大声に云って

素浪人」

と、小太郎に、聞えないように、 小さく呟いた。そして

お上んなせえまし」

おもしろい方ばかりで――」

-暫時、では、ここにて、待ちましょう」-゙ゼネ゚ピ

小太郎は、上り口へ、腰をかけた。

ーそこは

させた。富士春は、 富士春は、両膝をついていたが、こう云うと、片膝を立て 、乱れた裾から、 白い肌、 小太郎の耳朶の赤くなったのに、 紅縮緬が、小太郎の顔を、 微笑し 赤く

て

「では、こちらへ」

前に重ねてある座蒲団を取るために、 小太郎の、腰かけている後方から、小太郎の後方の格子の 手を、 身体を延すはず

み、左手を、軽く、小太郎の腰へ当てて

「少し手が――憚りさま」

延していた。小太郎は、周章てて、 ぐっと、小太郎の背中へ、身体を押しつけて、 身体を引きながら、 届かぬ手を、

く、横にある蒲団をとった。

「えへん、えへん、えへん」

一人の若いのが

「きゅっ――きゅっ」

と、大きい声を出した。源公が、 出し抜けに

「浪人って、いいものだのう」

「芝居で見ても、・ 小意気なもんだ」

「然し、扶持離れになると――」

ような感じがして、腹が立ってきた。

小太郎が、じっと、その方を見た。

自分へ当てつけている

「源さん、憚りさま、お湯を一つ」

「へいへい、一つと仰しゃらず、二つお揃いで、持参致しま

す。憚りさまやら、茶ばかりさん」

源公が、湯呑を二つ両手にもって、店の間へ出た。そして

## 「へへへへ、何うぞ」

喚いていた男だと思った。 すぐ、いつか、掏摸の手首を折った時、正面に、鋸を持って、 小太郎は、何っかで見た顔だと思った。そして、考えると、

(浪人、扶拝離れ)

と、いう言葉は、十分に意味がある、小藤次から聞いたの

て来た。途端、荒い足音が、近づいて、手荒く格子が開いた。 であろう――と思うと、怒りで、頭が濁って来た。張りつめ

「おやっ」

益満が、土間へ入ると、 小太郎を見て、すぐ、源公へ、じ

ろっと眼をやった。そして

「富士春、罪なことをするなよ」

と、笑った。

「仙波、今聞いた、御暇だとのう」

いが、 「それについて、父が、何か智慧を借りたいことがあるらし 同道してくれんか」

益満は、 土間に立ったままで、腕を組んだが

断ろう」

小太郎が、 眼を険しくして、立上った。

逢うたが‐ 何故」 何故か? 陰謀などと跡方も無いことじゃ」 わしらの見込みがちがうらしい。 名越にも今

富士春が

「休さん、話なら、ゆっくりと上って」

源公は、じっと聞いていたが、立上って、奥へ入った。だ

が、敷居際で、じっと、耳を立てていた。

手出ししては損じゃ。小太のところは、然し、気の毒ゆえ、 「それに、斉興公が、このことについて、 大の御立腹だから、

だが、 餞別を集めるつもりで、実は今まで、駈けずり廻っていたの 小太 | 斉彬公のお袖にすがって、 御助力を願ってみ

ぬか、それなら、 わしも――」

「断る」

小太郎は、赤くなっていた。 富士春

「何んの話か、妾には、判じられんが、休さん、折角の-

「婆あ、 黙っちょれ」

まあ」

と、いった途端、 小太郎が

「御免っ」

立上ると、益満の肩に、 ぶつからんばかりにして、 開けた

出て行ってしまった。

ままの格子から、

「もし」 富士春が、素早く、格子のところへ立って、 往来へ叫んだ

が、姿も答えも無かった。

みろ。男はよいし、 「親爺相伝の、野暮天野郎だ。富士春 身体はよいし、 抱き甲斐があるぞ」 ―あいつを射落して

「情夫に持とうか」

益満は、上って奥へ入りながら

「よい男じゃが、下らぬことをしでかして、 御払箱に、 なり

よった」

浪人?」

「引取って、 養ってやってくれ」

随分——」

では、 町内会議を、開くか。 お集まり、 御歴々の若い衆方

々、富士春が、人形を食べたいと申します」

益満が、こういって、人々の挨拶を受けながら、 坐ると、

源公が

ゃござんせんか」 「あの方には、御器量よしの妹さんがお二人あるという話じ

「うむ、それで、 「貴下との御関係は?」 、わしらの住居を、 小町長屋と申すのう」

**わしか、わしは、** 御国振りで、 あの小太郎が、 よか雅児、

二世さんじゃ」

「それに、又、何うして、ああ手強く」

真平だ。この師匠なら、 「いくら可愛くとも、あいつの浪人と一緒に、食わず交際は、 食わんとも可愛がるか知れんが」

「ええ、そうとも、浪人の、一人や、二人、達引く分にゃあ

「町内から、追い出してしまう」

「そんなことをいうと、ここから、追い出す」

「そいつあいけねえ」

益満は、じっと、天井を眺 めてい たが

‐もう二三軒、餞別を集めてやろう。後刻に又――」

立上って、すぐ、 表へ出てしまった。

なった時に、 益満の気紛れ、奔放は、十分に知っていた。然し、いざと 利欲につくのは 益満だけに、 許しておけな

かった。

富士春のところを飛び出して来たが、 小太郎は怒りに顫えながら、不信の態度に歯噛みしながら、 ふ と 、 佇むと

(引返して斬り捨ててやろうか)

と、思った。

郎に、気もかけず、急ぎ足に、 重い空から、 小雨が降りかけてきた。 小走りに 往来の人々は、 ―すぐ、ちらちら、 小太

傘をさす人さえ見えてきた。

った。頭の底に、重い怒りが、沈んで燃えていた。 小太郎は、歩いているのか、 走っているのか、 わ 血管の中 からなか

の血までが、 怒っていた。その時

可愛や、あの子は、 浪人かあ

頭を、針のように突き刺した。小太郎が振向 大きい声であった。浪人と、いう言葉が、その怒っている いて、 声の

家を、 睨むと

不憫や、明日から、野伏りかあ

往来を見ながら、 二人の職人が、 家の中の板の間へ坐って、 小太郎の振向 いた顔へ、 にやっと笑った。 雨の降ってくる

独り言だろう、と、思っていたのが、自分への当てつけら

しいので

「何 ?」

と、小声で、叫んで、立止まった。職人が、それに応じて

「何んでえ」

太郎は、一足踏み出したが、 職人のからかいとしては、 余りに乱暴な態度であった。

小

(たわけた――

思い直して、歩もうとすると

「馬鹿野郎っ、素浪人の、痩浪人、口惜しかったら出て来い

二人の職人は、腕捲りをして入口まで出て来た。小太郎はっ」

店をじっと見ると、顔の色が変った。(此奴ら、何処の、誰か――)

怒りの中から、二人の不審な態度に、

疑いを抱いて

(小藤次の家だ)

手が、脚が、顫えてきた。

(この職人づれまでに、もう、浪人になったことが判ってい

る以上、小藤次の指金――それは、お由羅の指金――)

とは、出来なかった。小太郎は、脇差を押えて、小走りに、に感じた。こういう侮辱を受けて、そのまま、通りすぎるこそう思うと、小藤次が何っかの蔭から、冷笑しているよう

その家の軒下に走りよった。職人が

「やあい」

と、叫んで、一二間、板の間を逃げ込んだ。小太郎が、入

「出ろっ」

口に立って

と、叫ぶと、別の声で

「出てやろう。へへ、お主ゃあ、俺を見忘れたか。手首を、

折られの与三郎だあ」

材木の積んであるところから立上ったのは、掏摸の庄吉であ口で、おどけながら、凄い目をして、両手を懐に、木屑、

った。

日から日干しの蛙だ。はいつくばって、ぎゃあと鳴け。頭か「うぬは、おれの仕事を叩っき折りゃがったが、うぬも、明

ら、小便ぐれえ引っかけてやらあ」

「何っ」

「何は、難波の船饅頭

庄吉は、ぺろりと舌を出して、眼を剥いた。小太郎は、憤

怒に逆上した。

「たわけっ」

下駄のまま、板敷へ、どんと、片脚踏み込んで、側の木片

を握った時

「小太郎っ」

小太郎は、木片をもったまま一障子が開いて、小藤次が、次の間から板の間へ飛び降りた。

「不埓なっ、通るを見かけての罵詈雑言、勘弁ならぬり、こり、こうとう、カラス

一人の職人が、木片を、かちんと叩いて

馬鹿っ」

「東西東西、この場の模様は、いかがに相成りまするか」

「えへん」

たし、小太郎の手は、平素の修練で、咄嗟に、延びていた。く棒とを見た。その瞬間、小太郎は、反射的に、身体を伏せ振向くか、向かぬかに、跳りかかる一人の男と、その手に閃一人が、空咳をした時、小太郎は後方に人の動きを感じた。

(しまった)

「ええいっ」と、よろめき、小太郎が、腕に、重みを感じた時と、よろめき、小太郎が、腕に、重みを感じた時

小太郎自身が叫ぶよりも、腕が、咽喉に叫ばしたのだった。

男がよろめいて、前へのめる力を、そのまま引いて、さっと、 からんと、 に響いて、 太腿を払った引倒しの一手。どどっ、 板敷へ音立てて転がった。 男はうつ伏せに、 倒れてしまった。 板の間に、壁に、 小太郎は蒼白な顔をしまった。棒が、からん 天井

「やいっ、仙波っ、小倅」

突立った。

小藤次は、 刀へ手をかけて怒鳴った。

えて、自身番へ渡されるのを知らねえか。この野郎」 あがって、この泥棒め。勝手に、人の宅へ入りゃあ、 「うぬは、 もう、 素浪人だぞっ。土足のまま人の家へ入りゃ 引っ捕

小太郎は、 前から企んでいた。計だと感じた。

いけない、長居しては

一人を叩きつけたので、いくらか、 胸が納まった。

板の間へ叩きつけられた男は、 起き上らなかった。 小太郎

が、出ようとすると

「殺しゃあがったなっ 人殺し」

と、一人が叫んだ。

「えらい血だ」

医者っ」

'役人を呼んで来いっ」

奥からも、 向い側からも、 人が走り出して来た。

逃すな」

頬も、 抱き上げられた男は、 額も染まっていた。 眼を閉じて、唸っていた。何を叫 から血を流していたし、 鼻血 で、

んでも、

返事しなかった。

間へ集まった。庄吉は懐手のままで、 に駈けつけた。そして、 往来の人々が叫んだ。 雨の中を近所の人々が、傘もささず 小太郎を恐ろしそうに避けて、 微笑して立っていた。

小太郎は、 動くことができなかった。

「除けっ、除けっ」

その声と共に一

御役人だ」

Ł

人々が、呟いた。

小太郎は、立っている大地が、崩れ て、 暗い穴の中へ陥っ

て行くように、絶望を感じた。だが

(取乱してはいけない)

態度をとりたいと感じた。 と――父のこと、母のことよりも先に、 武士として立派な

「何うした」

太郎を、 自身番に居合せた小役人は、小藤次と顔馴染であった。 じろっと見たまま、 職人にこう聞いた。 小

「そいつが、常を殺しゃあがったので」

役人は、 小太郎に

「何れの御家中で –

薩藩

・一昨日来やがれ、この乞食侍」で、巫山戯るねえ。得体の知れ口に出して、黙ってしまった。そ 得体の知れねえ馬の その途端

曾

のくせに、

薩藩? 庄吉が怒鳴った。 小藤次が

昨日までは、俺んとこの下っ端だったが、 不都合をしゃあ

くれ。 がって、お払箱になった代物だ。一つ、しょっ引いて行って 人の骨を折ったり、 殺したり、 近所へ置いとくと、 危

くっていけねえ」

役人は、小太郎の手を握って

「とにかく、番所まで――」

抵抗したとて、素性の知れた身として無駄であった。だん

だん多くなってくる群集に、見られたくもなかった。

小太郎は、無言で、役人と肩を並べて歩き出した。群集が、

左右へ分れた。

びたびたかかる雨の中を、人々の眼を、 い 、つの間にか、跳足になっていた。髪が乱れていた。頭から、 雨は少し烈しくなって来て、道が泥濘んできた。小太郎は 四方から受けて、自

身番の方へ、 「常っ」 引かれて行った。

うむ」

「死んじゃいねえや」

「ぺっ」

常公は、唾を吐いた

「こいつ、物を云ゃあがる。死んだんじゃあねえや、やいっ、

しっかりしろ」 「しっかりしてらあ。ああびっくりした。眼から火が出るっ

て、本当に出るもんだのう」

「こん畜生っ、びっくりさせやあがって」 一般あ、殺されると、思ったよ。死んだ振りを、常公が起き上った。 していたが」

あれっ、前歯が折れてやがらあ」

常は、指を口の中へ突込んだ。小藤次が

て、いい気味だ。庄っ、溜飲が下っただろう」 「よかった。仙波の小倅め、 常公、睾丸がちぢみ上っちまったぞ。 しおしおと引かれて行きあがっ

だらけの面をして、 眼を剥きあがって」

「溜飲は下ったが、

血

眼をくれながら、 人々が、笑いかけた時、表口に集まっている人々の背へ、 益満休之助が、傘を傾けて、 急ぎ脚に、 通

って行った。

高く売ろうと、押問答をしていた。 玄関脇の部屋で、又蔵が、古着屋を相手に、 いくらかでも

無垢まで持ち出してしまったので、新調の振袖も、 綱手と、深雪とが、七瀬が、旅着と、その着更のほ 総刺繍の

京染の帯も、惜しんでおれなかった。

打掛も、

綱手は、甚三紅の絞りになった着物を、肩へ当てて、「これは、二度着たっきり――」

見せた。 の帯、小太夫鹿子の長襦袢、朧染の振袖と、つづらから出し 深雪は、涙ぐみながら、 大久保小紋の正月着、

て、 積み上げた。

込んでいた。 細見」の折本を披げて、大阪までの日数、入費などを、 七瀬は、夫の着物を出して、えり分けた。八郎太は「 道 中

らしいのを五六人呼んで来い。 ょろこ町人め。又蔵、日影町へ一っ走りして、もそっと人間 「十五両? 馬鹿申せっ、人の足許へ付け込んで。 わしが売ってやる」 この 素ち

大きい声を出していた。そして、荒い足音がする

と

「小太っ、 怒ったか」

Ł 怒鳴って、 襖が開い

「おお、 益満\_

'これは<u>|</u>

益満が、御辞儀をした。

「足下を探しに参ったが「小太郎は?」

はて

益満は、坐って

たので、小父貴だの、小太郎を毒づいて、お由羅の耳まで入 「そこの遊芸師匠 |の家で| ―丁度小藤次の若い奴がおりまし

ての、かんかんになって駈け出して行ったが、戻らないとは」 るよう、一寸、小刀細工をしたが、 小太め、 本気にとりまし

「たのみがあるが――」

何を——」

「暫く、深雪は あずかってもらいたい」

そして、小父上は?」

「妻に、 調所のもとを調べさせ、 わしは、 牧の在所を突き止

のために、その父君を、 仕様のないことで、 「御尤もながら、今度のことは、一人二人の手で、何んとも べてわからぬこともないが、さて、何うそれを処分するか? しこれに、斉興公が御同意なら、取りも直さず、斉彬公 証拠も握れましょうし、陰謀の形跡も、 罪に処すことになる。 同志の苦慮す

るところはここで――」

益満は、 声をひそめた。

万一の時には、 久光殿を

指を立てて、斬る真似をした。

「禍根は、ここにござりましょう」

極秘、 八郎太は、返事をしないで、益満の顔を眺め 未だ同志にも語りませぬが、 久光様の御側小姓を一 7 い

引入れて――」

れぬ、そして、大胆な計が、少し薄気味悪かったし、益満は、 一本気なこの老人に、ここまで話していいか、 二人は、 じっと眼を合せた。八郎太にとって、 悪いか 益満の 底知

郎太の様子をうかがった。

「まあ、 雨がひどくなったのに、小太郎は」

七瀬が、 独り言のようにいった。

雛 人形を、 膝の上で、髪を撫でたり、 襟をいじったりして

いた深雪が、 「お迎えに行って参じましょうか」 七瀬の声に、 周章てて

「四国町の、 人形を、箱の中へ入れて、じっと、眺めていた。 湯屋横町に、 常磐津の師匠がいる。 そこからこ 益満が

の町、心当りを聞けば、 判るであろう」

「 は い 」

深雪は、 人形に、小さい声で

「これで、 お別れ致します。他所 の可 愛 い お嬢さんに、

と可愛がってもらいなされ。さよなら」 両手を、 人形箱の前へついて、 御叩頭した。 薄い涙が眼瞼

に浮いていた。

「行って参じます。 お母様、 妾の戻らぬうちに道具屋を呼ん

でおいて下さいませ

襖越しに、こう云って

ああ」

うるましているようであった。深雪は、雛の頭を撫でながら、 出して、頼ずりをした。一尺余りの古代雛は、澄んだ眼を、 Ł 七瀬の気のない返事を聞くと、 もう一度、 人形を取り

もう一度自分の頬を頬へくっつけていたが、

「手柄を立てて、元の身分になるまで、辛抱して下されや」 雛の耳に囁いた。そして、撫でて乱れた髪を、 自分の

櫛で解いて、そっと、 箱へ納めた。

「もう、売らねえ」

「そういわずに、三十両で」

らって、主家の品を安く売る男と思ってるのか」 根性が、腐ってるから厭だ。 おれが、一分や二分も

を出た。表門から、往来へ出ると、雨合羽、饅頭笠の人々が、 又蔵が、古着屋に怒っていた。深雪は、傘をさして、 門口

急ぎ足に行き通っていた。

のが厭なので、傘を傾けて通った。 四国町の自身番の、 何か覗き込んでいたが、深雪は、 粗末な、黒い小屋の前に、人が集まっ 人から、 顔を見られる

湯と、 沿いに入って行くと、軒下に、小さい紅提灯がつるしてあっ 大きい達磨を書いた油障子の立ててある髪結床の前に、 横板の看板のかかった湯屋があった。その横町の泥溝 一坪程の土間に、 大提灯が、 幅をしめてい 薬

た。

中を覗くと、

「あの――」

男が、大勢坐っていたので、どきっとしながら

一仙波と申します者が、 お宅に

男達が、ざわめいて、二人、同時に立上った。 人は、

「ええ?

人を、手で押して

お出でなさいまし。 至って、 おとなしいのが揃 つ

ていやすから、ずっと」 「あの、仙波と申す若い侍が」

「師匠っ。さっきの方は?」

富士春が立上って、小走りに出て来て

貴女様は

「仙波の妹でございます。先程、 益満様を尋ねて、 こちらへ

参りましたが、もしか、まだ――」 富士春は、黙って、深雪に見とれていた。

まあ」

暫く顔を見てから、 富士春が

「お妹様で――まあ.

「お宅へ伺いましてから、 何処へ参りましたか、 御心当りで

泥溝板が、ことこと鳴って ございましょうなら

「猫、鳶に、河童の屁か」

大声で、怒鳴りながら、 庄吉が

一今日は」

格子口から叫んだ。 そして、 深雪を見ると、 身体を避

けて

|御免なすって|

おとなしい口をきいて、御辞儀をした。

「珍しい。手は直ったかえ」

「人形の首を、飯粒でくっつけるようにゃあ行かねえや」

庄吉が、 深雪を盗み見して、その横を、 そっと上って行っ

いましたか」 「さあ、手前共から、 お出ましになって、 何処へいらっしゃ

と、富士春が云った時

「へえ、そうかい、お嬢さんが

達が、自分を、じろじろ眺め、 庄吉は、源公へこう云って、 深雪の方を見た。深雪は、男 噂をしているので、少しでも

早く、出て行きたかった。

「では、御邪魔致しました」

深雪が、お叩頭をした時

「お嬢さん、 一寸、仙波の小太さんを、 お探しですかい」

「 は い

に受けて、白々と浮き出している深雪の顔を、 庄吉は、こう云ったまま、入口からさす薄曇りの光を、背 じっと、 凝視

「あっしゃあ、お行方を存じていますんで」

めていたが

「兄は、何ちらへ?」

それがね――」

「おい、庄っ、おかしな考えを出すな」

-それが -一 寸

庄吉は、こういって立上った。そして、富士春のいるとこ

ろへ来て

だし―― 「訳ありで-御案内旁々、お話し申しやしょう」 話をせんと判りませんが―― ええと、 外は雨

源公が

「庄公っ、よせったら」

「うるせえ、手前、そんなら、行方を知ってるか」

「そんなことあ――」

「知らなけりゃ引込んでろ」

庄吉は、土間へ降りた。

せんか。手が、いけねえんで。 「お嬢さん、すみませんが、傘を一つ、差しかけて下さいま 済みませんが――つい、 近所

で||」 庄吉は、武家育ちの深雪の態度と、その美しさとに気押さ

れて、軽い口をききながらも、眼は伏せていた。 富士春が

「庄さん、本当に知っているのかい」

「知っているとも 俺、こんなお嬢さんに、 嘘を吐くよう

な悪じゃあねえ」

「そら、そうだけど」

ろはあったが、白昼、 を人に見られるほか、安心していてもいいと、 深雪は、庄吉の、いうこと、することに、腑に落ちぬとこ 町の真中であったから、 二人の相合傘 考えていた。

そのねっ」

庄吉は、格子戸を出ると

「ひょんなことがありましてね――」

庄吉は、泥溝板を、ことことさせながら、こう云ったまま、

黙ってしまった。深雪は、自分から、 口を利きたくなかった

「ひょんなこととは?」

「それが、その――実、全くの、ひょんなことでね」

庄吉は、こう云ったまま、又、黙ってしまった。往来へ出

ると、人々が、二人を振向いて眺めた。

「急ぎますから――」 「ええ、お嬢さんは、今、お邸からいらっしゃいましたか」

「 は い

「四国町の自身番に、人だかりがござんしたでしょう」

「はい」

「それなんで ―― お兄上様は、其処にいらっしゃいますが

胸が、ぎくりとした。

深雪は、庄吉の顔を見た。

一自身番?」

「ええ、それがね」

·やってやがらあ」

゙やいっ、庄公っ」

二人が通りかかった小藤次の家の中から、 一人の職人が、

であった。

怒鳴った。

「お話し申さんと、判りにくうござんすが」

薄暗い家の中から、 小藤次が、じっと、深雪を眺めていた。

そして

「庄公、一寸」

庄吉は、ちらと振向いて

すぐ、後から---

そして、深雪に

、御存じですかい」

深雪は、家の中へ振返った。小藤次と、眼が合った。

「いいえ――彼処は、お由羅様の、御生家でござりましよう」

「ええ、今のが、兄貴の、岡田小藤次利武でさあ」

汚らしいものを見るような気がした。 深雪は、もう一度、しっかりと顔を見ようかとも思ったが、

「話さんと判りませんが、あっしゃあ、実は掏摸でござんし

てね」

「掏摸?」

「巾着切り、人様の――」

深雪は、傘と、身体を、庄吉から放した。庄吉は、周章て

て、手を振りながら

「ここから、話さんと、よく判りゃせん。お嬢さん、掏摸は、

細かに、今、申し述べやすがね、この手を」 ――お兄さんとは、一方ならん関係のある、あっしで、こと悪者じゃあござんせんよ。小藤次なんかと一緒になすっちゃ

といって、片手を、懐から出した。大きく布で手首を包ん

こいつあ、確かに、あっしが悪かったんでげす」 「こいつを、お嬢さんの、兄さんが、折ったのでござんすが、

自身番の前は、まだ、人だかりであった。深雪は、本当と 嘘とも判らぬ話を、 妙な男から聞いているよりも、

兄のことを確めたかった。

「お嬢さん、お供いたしまして、お兄さんの前で、申しまし

て、ついて行った。 庄吉は、こういいながら、じっと、深雪の頬、襟足を眺め

なり合って、入口も、屋根も見えなかった。 辻番所の前には、まだ人が集まっていた。傘と、傘とが重

「ちょいと御免なさい――お前さん、ちょいと、肩を片づけ

てくんな」

手で、肩で、言葉で押し分けて入って行った。 生吉は、右手を懐に、頭から雨に濡れながら、群集を、

「やいっ、肩を押しゃがって、何んだ」

「お嬢さんのお供だ、おっかない顔をしなさんな」

人、腰かけていた。薄暗い中の方に、四五人の士姿が見えた。た。人垣を抜けると、番所の入口に、仲間が一人、番人が一庄吉の後方に、傘をすぼめて、顔を隠した深雪がついてい

庄吉が

「今日は」

怪訝そうにじっと眺めた。 番人は庄吉への挨拶をしないで、その後方に佇んだ深雪を、

「まだ、お調べ中かい」

「うん」

「何んだか、大勢、見えてるじゃないか」

「三田の御屋敷から、今見えたのだ」

て、その顔をちらっと見た。番人は、庄吉の蔭になっているとしていたが、今の番人の言葉を聞くと、胸をどきんとさせ深雪は、一心に、中の方を見て、兄の姿、兄の声を知ろう

深雪の顔へ、顎をしゃくって

「何んだえ」

と、庄吉に囁いた。

「あの士の妹さんさ。ちょっと、逢いてえが、いいかい」

「願ってみな」

庄吉は、土間を、中戸の方へ行って、小腰をかがめて

「御免なさいまし」

元の方へ顔をやった。庄吉は一人が、振り向いたが、じろっと庄吉を見たまま、黙って、

(こん畜生っ、何を、威張ってやがる)

左

と、憤りながら

「何んだ、貴様は――」「一寸、お願い申しやす」

っと、その顔へ、見入ってしまった。庄吉は、心の中で前に、浮絵のような鮮かさで立っているのに気がつくと、じ又、その侍が振向いて、睨んだ。そして、深雪が、群集の

と、冷笑しながら(この甘酒野郎。女の顔を見て、とろとろにとけてやあがる)

「ただ今のお侍衆へ、あの、お妹さんが、一寸お目にかかり

たいと――」

「あれが、妹か」

へ眼をやった。深雪は、それに気がついて、俯向いてしまっそういった時、中の三人の侍も、深雪に気がついて、入口

「不埓なっ」

その時、出し抜けに大声がして

|邸へ戻って、御差図を待て|

出て来たのに周章てて立上った仲間と、二人の侍をつれて、の中から姿を現した。そして、深雪を見た。そして、主人の早口の、怒り声が聞えると、横目付四ツ本が、二三人の侍

に開く中を出て行った。深雪は、暗い内部に動く人影があっ深雪の叩頭に、軽く御辞儀と一瞥を返しながら、群集の二つ

(兄?)

たので

眼を外らした。暗い中から出て来た。深雪の顔と合った。二人はすぐお互にら、思った時、小太郎が、蒼白めた頭に、怒った眼をして、

「探しにか」

はい

群集は、二人を見て、何か囁き合った。

「何うなされました」

「傘を貸せ、話は戻ってからだ」

に俯向いている庄吉に

「いろいろと、お世話でございました」

「何ね」

庄吉が、そう云って顔を上げた途端、妹の今の言葉に

(誰に、礼を云っているのかしら)

り合った。小太郎が鋭くと、思って振返った小太郎の眼と、庄吉の眼とが、ぴった

「深雪っ」

深雪は、もう一度、庄吉に頭を下げて、群集の眼の中を出

て行った。

「何んだ、庄公か」

人が出て来た。 小太郎の出て来たうしろから、証人に呼ばれて来ていた職

付が来てね。邸から、明日とも云わず、叩き出すって―― 俺シネムの別嬪だなあ――庄、上々に行ったよ。お邸からすぐ、横目

「そうかい」のとしたよ」

「こいつ、何をぼんやりと――庄公っ、あの女に惚れやがっ

たな」

「いい女だなあ。屋敷者には、一寸、稀らしい玉だぜ」職人が、太い声をした。辻番人が

「女郎に売ったら儲かるだろうな」

恐みもねえのこ、あの小太と一堵こ、良人こなつて――鄒を(あの兄貴の野郎にゃあ、怨みがあるが、妹にゃあ、何んのて、番所近くの人々が、四五人しかいなかった。 庄吉は、黙って、往来へ出た。群集は、どんどん散り始め

うなってもいいが――うんにゃ、兄貴の野郎が何うにかなる にしても、男として、 くったって、あの妹一人だったって、怨みもねえのに、これ 追い出されて| から、浮世の苦労をさすってことは も、何うにでもなるが、 怨みもねえのに、あの小太と一緒に、浪人になって-一人きりが、ひでえ目に逢わなくちゃ、物の理前が合わねえ。 妹も何うにかなる――こいつあ、 ―待て待て、俺は一人だから、片手折られて 寝醒めがよくねえや。兄貴の奴あ、 あいつのところは大勢 ――俺一人の仕業でない いけねえ。 あん畜生、 ―大勢でな 一邸を 何

に合わねえことはしたくねえ――)られたのに――掏摸だって、庄吉あ、真直な男だ。物の理前られたのに――掏摸だって、庄吉あ、真直な男だ。物の理前たんだろう。早く知ってたら、小藤次の告げ口だって、止め畜生っ ――何うしてあんな別嬪の、可愛らしいのがいやがっあの女に手を折られたのじゃねえ、だから怨みもねえのに、罪も、咎も無い、あの別嬪が、巻きぞえ食うなんて――俺あ、罪も、咎も無い、あの別嬪が、巻きぞえ食うなんて――俺あ、

に言は、雨の中を、軒下伝いに、ぼつりぼつり歩き出した。 に言は、雨の中を、軒下伝いに、ぼつりぼつり歩き出した。 に言は、雨の中を、軒下伝いに、ぼつりぼつり歩き出した。 に言は、雨の中を、軒下伝いに、ぼつりぼつり歩き出した。

火灯時に近くなってきた。

「仙波八郎太は、在宅か。横目付四ツ本だ」

「わしが行く」安そうな眼を交えて、立とうとした。八郎太が、眼で押えて安そうな眼を交えて、立とうとした。八郎太が、眼で押えて、関で、大きな声がした。七瀬と、綱手とが、八郎太に不

立ったままでの使か判った。憤った血が、米噛でふくれ上った。八郎太はに、小者が四人ついていた。八郎太には、すぐ、何んのため、すぐ立って行った。八郎太が玄関へ出ると、四ツ本の後方をで立って行った。八郎太が玄関へ出ると、四ツ本の後方

|何用か?|

たがい方をした八郎太に、暫く、物もいえぬくらいに怒っていいい方をした八郎太に、暫く、物もいえぬくらいに怒ってい四ツ本は、一言の挨拶もなしに、いきなり、そういう物の

トから、八阝太丘見こげて見しご。八阝太は、覚吾して、今から、屋敷払を命ずる。すぐ立退け」「小太郎に、上を憚らざる、不届の所業があったゆえ、ただ

た。然し、こんなに早いとは思わなかった。 下から、八郎太を見上げて睨んだ。八郎太は、覚悟してい

貴公一人の所存からか」 「それは――お上からのお沙汰か? 重役からか、それとも、

「何?—

が、今の口上は、お上から出た沙汰か――それとも、外から屋敷払いに、三日の猶予を置くことも、慣わしになっておる「扶持のお召上げは、お上の心、お指図によらねばならぬし、

「何れにてもよろしい。すぐに、退去せい」

かと申すのだ」

「聞かぬうちは――ならぬ、断ってとあらば、対手するぞ」八郎太は、鯉口を握った。小者達が、驚愕の眼を動かした。

「対手に?」

「食禄を離れた以上、貴公等一存の指図を、受ける訳がない四ツ本は、八郎太の鋭い気配に押されまいと、身構えた。

ゆかりも無い浪人者を、住まわしては置けぬ」ここは、島津家の御長屋だ。それに、一時たりとも、縁も「食禄を離れた上は、指図を受けるも、受けんもあるか?

「こ、この、たわけっ」

八郎太が、大声を出した。四ツ本は、すぐ、鯉口へ左手を

かけた。

役目の表として、恥でないか、役目を汚したと判らぬか」「横目付ともあろうものが、よくもたわけた横車を押したな。

八郎太は、口早に、たたみかけた。

これ、 破り、浪人までも支配しようと申すのか。四ツ本、汝の支配 軽んじ—— のは、 を受ける八郎太でなくなっておるぞ。 以上浪人だ。その浪人の拙者に、島津家が、 公でもあるまい。又、浪人者と――いかにも、 も受けたか? 斉彬公の直臣、 命ならば、 「食禄召上げ程度の者には、三日五日の立退き期間を与える 八郎太は 独り、御当家のみならず、天下の憤わしだ。慣わ 掟より重い。その掟を、 これを止めるが道でないか? しかも、拙者は、 いいや、上を傷つける不忠の振舞。もし、 度の処分をしようと申すのか。 怒りに顫えて、 まさか、かかる不法の振舞を、 一言でも、斉彬公にこの事を計って御許しで いい終ると、 目付風情如きが破るは 町奉行同道にて参れ」 自分を押えて冷笑 天下の慣わ 天下の掟を破 お許し 扶持離れした なさる お上の しは、 上を しを

い。(八郎太の冷笑へ、四ツ本も、蒼白な顔の脣に、微笑をのせ)

「成る程――

「この処分は、その方へではない。小太郎の不届に対して暫く、こういったまま、黙っていてから

「小太郎が、どこで、不届をした」

不届でないか?(それとも、知らんとでも申すか?」「岡田小藤次の家へ土足のまま乱入し、弟子を傷つけたのは)

「倅から聞いた。不届千万じゃ」

「よって――

ツ本、いつから、 働きになったなど、 するなど、近頃以て、奇怪千万。島津の目付が、町奉行の下 その目付が、自ら、 家の横目付が出かけた。三田四国町の岡田小藤次ならば、 何んじゃ。人の不正を見て、これを正すのが役でないか? の職権を犯してまでも、 小太郎が、町家での所業を、わざわざ以て、何が故に、 って参ったのか? れとも、 た狼藉を、 由羅の方の兄であろう。主君の愛妾の兄の家ゆえに、町奉行 「だ、黙れっ。 南北町奉行所から、貴公に立会えとの御通知でもあ 何故、 いよいよもって奇怪至極。浪人者の倅の 町奉行の下役になった?」 島津家からわざわざ取調べに参った? 当邸内なら、 法を枉げて、 いつ頃からか、後学のために聞こう。 処置をしに参ったか? 軽々しくも、 いざ知らず、既に浪人した 辻番所へ出張 目付とは、 匹

を立てて、じっとその顔を睨みつけていた。は、四ツ本から見えるところへ、身体を出して、左手に太刀をやり込める父の言葉を微笑しながら、聞いていた。小太郎た。小太郎も、七瀬も、姉妹も、不安な胸の中にも、四ツ本仙波の表に、二三人の人が立って、二人の高声を聞いてい

わせていた。云い込められた口惜しさに、脣が、びくぴく痙わせていた。云い込められた口惜しさに、脣が、びくぴく痙いおうなどと、考えてもいなかった。蒼白になって、拳を顫 四ツ本は、八郎太が、こんな強硬な態度で、こんな理窟を

「よしっ――」

四ツ本は、鋭く叫んで、 身体を斜にした。そして

「道具を運び出せっ」

すと、八郎太が、式台へ片足を音高く踏み下ろして、脇差 小者の方へ、手を振って指図した。小者が一足踏み出

い刀を、どんと、 手をかけた。小太郎が、兎のように飛び出て来て、三尺に近 式台へ轟かした。 小者達は、そのまま止ま

ってしまった。

「何うなされた」

表に見物していた家中の一人が、入って来て、声をかけた。

四ツ本は、激怒で、口が利けなかった。 八郎太が

「人間、切腹の覚悟さえあれば、何も、 恐ろしいものはない

叩っ斬って腹を切るまでだ」

Ł 独り言のように、大きく呟いた。

四ツ本氏」

四ツ本は、 黙っていた。

仙波氏も、 穏かになされたら

Ł いった時

「よしっ、人数をかりても、処置はする」

まった。小者も、すぐ、四ツ本に蹤いて出てしまった。 八郎太と同じように、独りごちて、四ツ本が出て行ってし

「馬鹿がっ」

八郎太は、 身構えを解いて、 吐き出すように呟いた。

ころへ運んでおけ」 「小太郎、表を閉めて、 あらましの品を、 庭から、 益満のと

> 鎧櫃の一つを背負わせ、自分もその一つを背にして、垣根か八郎太は、こういって、小走りに部屋へはいると、小者に、 ら、益満の廊下へ運んだ。 益満は留守らしく、勝手口から、

爺が出て来て

\_旦那様\_

「物を運ぶから頼むぞ」

「手前も御手伝い致します」

きい包物を持って来た。小太郎が、仏壇を抱いて、よろめき つつ、廊下から降りて来た。 三人が、 垣根のところへ引返すと、 深雪は、 七瀬と、 人形の箱と、 綱手とが、大 位牌を持

って

「危い」

で、一度跨ぐと、裾がぐしょぐしょになった。父子が、 打たれながら、二三度往復した時 ていた。庭の土は、 小太郎の後方で、重さによろめく小太郎の脚へ眉をひそめ 雨で泥になっていた。 垣根は、 茂った葉

「開けろっ」

表が、けたたましく叩かれた。八郎太が、 縁側から

「深雪、早くっ」

と、叫んだ。深雪は、 周章てて垣根に袖を引っかけながら、

入って来た。

「たわけ者が又うせおった」

と、自分も、着物の濡れたのを拭きながら、 裾を、 屑を気

にしている娘に、小太郎に

「わしらのすることは、これからじゃで、今、何をされても、

手出しをしてはならぬ」

## そう云って、小太郎を見た。小太郎は

「よくわかっております」

の転がる音がした。い用心がしてないから、すぐ、閂が外れたらしく、土間へ棒戸が、苦しそうに、軋り音を立てた。御家の邸内で、厳し

「仙波っ――仙波」

が開かれた。した。玄関の襖が開いた。廊下が轟いた。次の間へ来た。襖した。玄関の襖が開いた。廊下が轟いた。次の間へ来た。襖誰も、答えなかった。どかどかと、踏み込んで来る足音が

が、雨にうなだれていた。庭の植込みは、すっかり暗くて、牡丹の花だけが、白く、だらのもう、暮れかかっていて、部屋の中は、夜色が沈んでいた。

四ツ本の上席にいる佐田がれるように、襖から入って来て、その両側へ、溢れ出て来た。襖の後方いっぱいに、足軽が、小者が――そして、水の溢

けを聞きたい」「仙波、即刻に立退くか、立退かぬか、何れか、この返答だ

足軽が、棒を取り直した。

「是非もない」

八郎太は、立上った。

足があって、すぐにも、御門前へ出られるが、この長持、諸「小太郎、長持を運べ――いや、待て――佐田氏、人間には

「道具類は、小者が持ち出そう」

道具と申す。輩には、不憫ながら、

足が無うて」

佐田は、仙波が、すぐ承知したのに、軽い失望と、大きい

安心とをしながら

「諸道具類を残らず、門前へ運び出せ」

「深雪、益満のところへ行っておれ、邪魔になる」仙波父子は、暗い廊下を、人々の中を、玄関へ出た。

「いいえ」

に立って、五人を看視していた。深雪は、泣声を出した。五人の足軽と、士分が一人、式台

(おや――)

塀から、板、廂を広く突き出し、雨だけは凌げた。夕方時から出て店を張っていた。車を中心に柱を立てて、土仲間対手の小さい、おでんと、燗酒の出店が、邸の正面へ、庄吉は、薄暗い、大門の軒下へ、不審そうに、眼をやった。

「分目のうっこう、副女」のこと、思った時、辻番所で、四ツ本が

と、いった言葉を思い出した。「今日のうちにも、追放する」

「親爺、いくらだ」

えて、紐を解いていたが、じれったくなってきたので生吉は、急いで、財布を出した。そして、それを口にくわ

めていた。

がちゃんと、

財布を板の上へ投げ出して、

門の方ばかり眺

「この中から取ってくれ」

改めなすって ――」 「ええ、確かに、二十三文頂きました。お改め ――旦那、お

庄吉は、返事もしないで、財布を懐へ押込んだ。六人の後

方から、長持が、小箪笥が、 の片隅へ、一人一人の手で、 屏風が、箱が――次々に、軒下 運ばれて来た。六人は、その側

|有難う|

に立っていた。庄吉は

ら、 のか判らないくらいに、軒下の人と、品物とを、凝視しなが と、いった亭主の言葉を、耳では聞いたが、何をいわ 雨の中へ出た。 小走りに、泥溝のところへ行って、夜色 れた

の中にまぎれながら、 表門の出窓の下へ入った。そして、 雨

を避けている人のように、しゃがみ込んでしまった。 六人は、 黙って立っていた。品物が、かなり、積み重な

「明朝まで、ここへ、差許す。早々に処分するよう」 庄吉の、しゃがんでいる出窓の上で、 小者達が、もう出入しなくなると、一人の士が、六人に 低い話声がした。

「別嬪だのう。もう、明日から拝めんぞな」「ああまでせんでええになあ」

「じゃあ、御供して

庄吉が下から

「つかんことを、お尋ねしますが」

窓の内部の門番は、 さっと、顔を引いた。

「あのー ―あれは一体-御引越しかなんかで――」

門番は、答えなかった。

てやがるー わかってるんだ。唐変木の糞門番 (薩摩っぽうって、恐ろしい、つき合いの悪い奴ばかり揃っ 手前に聞かねえでも、 追ん出したたあちゃんと

門の軒下で、 道具を運んでいた人々は、門内へ入ってしまった。暗い大 人通りの少い雨の往来であったが、時々通る人

> だまっちゃ、何んしろ、居れないことに、なって来やがるん は、立止まってまで、六人と、道具とを眺めて通った。 (何んと挨拶しゃあがるか――とにかく、ぶっつかってみろ。

庄吉は、勢いよく立上った。 そして、 真直ぐに六人の方へ

歩いて行った。

だからなあ)

「いつぞやの者でござんす」

庄吉は、 小太郎に、お辞儀をした。小太郎は、じっと睨み

つけたまま、口を利かなかった。 深雪が

つ

「ええ先刻の野郎でございます」

ああー

先刻の?」

と、深雪に、お辞儀してから

「手前、 お初にお目にかかりやす。 ええ、 仙波の御旦那様、

手前 庄吉は、 膝まで、手を下ろして

「巾着切の、 庄吉と申しやす。至って、正直な

「あっちへ参れ。用は無い。行けっ」

身体を立てて、八郎太と正面から、 八郎太が、静かにいった。庄吉は、その声と共に、 顔を合せた。 さっと、

だけ、聞いて頂きたいもんで。御存じの通り、若旦那に、こ の手首を――ねえ、 「御尤も様でございます。すぐ、あちらへ参ゆますが、一言 小太郎さん――手首を折られまして」

八郎太は、じっと、庄吉の顔を見た。

んしろ、巾着切が、手首を折られちゃ、 「実は ―本当のことを申しますと、怨みがございます。何 上ったりでげすから

す、 那、江戸っ子なら、 みも、縁も無い方が、こんなにおなりなさり奉ったのを、 え目に逢いやがるがいいや、と――これは、本当の話で、正 せん。そうでげしょう、ねえ、旦那。見ちゃいられませんや」 っしが、黙って見ておれるか、おれんか?(何うでげす、旦 直な、 ねえ旦那、随分怨んでましたよ。今だって、こん畜生、 ――人間誰だって、手首を折られて怨まん奴はござんせん。 旦那、このお嬢さんにゃあ、怨みはござんせん。その怨 気持を申し上げているんでげすが――然し、でござん 判りまさあ、見ておれるものじゃござん 、ひで 、あ

八郎太は、七瀬に

「支度をせんか」

綱手が手伝った。

七瀬は、風呂敷包の中から、旅支度の品々を、取り出した。

折られて、無念、残念、びんしけん、何んとか、この青ちょ なんだ。お侍対手に、うまくいえねえが――おかみさん、一 「旦那、待っておくんなさい。 聞いてやって下っせえよ。そう急がずに――その手首を あっしゃあ、これで一生懸命

なった。七瀬も、娘も、庄吉の顔を見た。 に、五月蠅さを感じていたが、岡田と聞いて、次を聞く気に八郎太も、小太郎も、ぺらぺら妙なことを喋っている庄吉

こ野郎め、御免なせえ―

- 大体、この方の印籠を掏れといっ

た奴は、

岡田小藤次って、野郎でさあ」

と取ってやるって――どうか、皆さん、怒らずに聞いておく あっしに済まねえと思ったのでしょう、庄吉、この仇はきっ ちまいました。小藤次野郎も、自分のいい出したことだから、 「ねえ、ところが、若旦那に、 御覧の如く、 手首を折られっ

> 随分、お力になりますが さっきから、何か、いい工夫がなかろうかと、おでんを食べ ねえが、巾着切仲間じゃあ、黙って見ていませんや。それで、 たのならとにかく、小藤次野郎の舌の先で、ぺろりとこの泥 旦那様、奥様まで――それが、何か大それた泥棒でもなすっ んながらお嬢さんにゃあ、怨みも、 や。ねえ旦那、そうでしょう。若旦那に怨みはある、然し、憚 だ。こんな、別嬪のお嬢さんを怨もうにも、 としやしたよ。全くね。ところが、さっきお嬢さんにお目に ら明日から浪人だと――あっしゃあ、 食べ考えていたんでげすがね―― の中へ転がされちゃあ、江戸っ子として、旦那、自慢じゃあ お嬢さんが、もう一人ふえて、お二人だ、 んなさい。するてえと、昨日、仇は取ってやったよ、あいつ かかりやした。あっしの怨みのあるのは、この若旦那一人に いい智慧が、ござんせんや、 罪も何んにもねえ。その 実のところ胸がすーっ それに又ふえて、 怨めやしません

庄吉は、 一生懸命であった。

「そうか 八郎太は、

笑った。

よくわかっ た

庄吉の顔を見てうなずいてから、七瀬に、

夜明ししおったと噂されては口惜しい。そちとも、 れる宿命でもあるし、ここからすぐに上方へ立て ―― 」 「何時までも、ここにはおれぬ。僅かの道具に未練をもって、 何れは別

旦那 庄吉が、 口を出した。 八郎太が、庄吉へ手を振った。

里にしても、 「あっちへ行っとれ 足を痛めて馬、 ――旅は急ぐなよ、八里のところは、六 籠などに乗るな、駕人足一人前 浪花講

の賃で、十五文の宿銭が出る。夜は必ず、御岳講か、 へ泊れ」

「それが、ようがす、 宿のことなら、 あっしが――」

「煩いっ」

「旦那、御尤もでござんす」

庄吉が大きな声を出した。そして、早口に

しょう。だがねえ、あっしら仲間にゃあ、 「あっしが、若旦那をお怨み申したように、あっしが憎うが 意地って奴と、 粋

興って奴とがござんしてねえ―― 」

小太郎が

「わかったから、あっちへ参れ」 いって、

庄吉の肩を、

静かに押した。

Ł

「ようがす。この御道具類は?」

「捨てて置く」

じゃあ、 あっしに頂かせて下さいまし」

八郎太が

「売って、手首の疵の手当にでも致せ」

んせん――じゃあ、皆様、あっしゃ、ここで失礼いたしやす」 「ところがね、へっへっへ、そんな、けちな巾着切じゃござ

丁寧に、御叩頭をして門番の窓下へ行って

庄吉は、

雨の中を、 と、怒鳴った。そして、何か、紙包を渡して、物を頼んで、 闇に融けてしまった。

主従六人は、もう顔も見えぬくらいになった闇の中

のかな、 に立っていた。八郎太は、話し出そうとして、妻の顔が、 輪郭だけしか見えぬのに物足りなくて

ほ

「 灯 を

と、いった。又蔵が

「 は い

小太郎の顔。七瀬は、それを深く、強く、自分の眼の底に、 燧石が鳴った。その火花の明りで、 ちらっと見た夫の顔、

胸の奥に、 懐の中に取っておきたいように、感じた。

ないと思っていたが、闇の中で、このまま別れることも、八 提灯は、すぐついた。こんなところを、余り人に見せたく

郎太には、流石に出来なかった。

らっと見たが、平素のように、 灯がつくと涙の顔を外向けた。八郎太は、二人の娘の顔をち 七瀬は、手甲、 綱手は、深雪に助けられて、旅支度をしていた。二人とも、 脚絆までつけて、いくらか蒼白めた顔を引 何を泣く、と叱らなかった。

悲しいものが、胸の底に淀んでいて、時々、 りでいっぱいだった。彼は、腕を組んで、胸を押えていたが、 く見えた。 き締めて、 小太郎は、親子の生別よりも、 夫の眼をじっと見た。いつもの七瀬よりは、 反対党に対する憤 押え切れないで 美し

湧き上って来かけた。

な気がしたが、その何れを、何ういっていいのか! 立てられるようで、いいたい事がいっぱい胸の中にあるよう しさと悲しさとが、 いっぱいにこみ上げてきた。 七瀬は、何をいっていいか、判らなかった。何かに、せき いいたいと思うことを、突きのけて、 | 苛 立 た

いろいろ――」

法な、 残を惜めたのにとも思った。そして、もう一言 の思いが、夫の身体へ滲み込むだろうと思えた。 たなら、せめて胸へでも縋ったなら、このいろいろの胸の中 それだけいうと、咽喉がつまってしまった。人目が無かっ 冷酷な仕打ちさえ無かったなら、今夜は、 四ツ本の ゆっくり名 無

「長々――」

いうと、涙声になった。八郎太も

うむ

片手で、母親の手を掴みながら、手を顫わして泣いていた。 ていた。暫くして、 小太郎は、涙の浮んで来るのを、そのままに、雨空を見上げ 顔を埋めていた。綱手は、その片手を、 と、いっただけであった。深雪は、門の柱へ袖を当てて、 七瀬は 、しっかりと握って、

策は、 「御看護に不調法を仕りまして申訳もござりませぬ。 必ず、上方にて取戻して御覧に入れます」 この失

抜かるな」

隙があれば咽喉を突け」 苦に逢おうとも、 ためには捨てるのじゃぞ。又、こと露見して、 「うむ――綱手、予々申付けある通り、命も、「み、深雪を、何うか――」 かまえて白状するな。敵わぬ時は舌を噛め、 操も、御家の いかようの責

綱手の頬は涙に濡れていた。七瀬が

深雪」

深雪は、

振向かなかった。

「何を、お泣きやる」

を叱る声であった。綱手は、自分の握っていた深雪の手を放 した。深雪は、顔に袖を当てたまま母の方へ振向いた。 深雪の泣くのを叱るよりも、自分の弱さと、

それに-ーそんなー ―よ、弱いことで――」

「お前・

ŧ

何れ、

綱手と同じように、

働かねばなりません。

の許にあずけるから、心配すな。小太郎、 「七瀬、道中、水当り、悪人足に気をつけよ。深雪は、益満 ――御身体、気をおつけ遊ばして」 申すことは無

別に

「お前も――」

「では行け。又蔵、たのむぞ」 小者は、地に両手をついて

「いろいろと、 御世話になりました。 命にかけて御供仕りま

「たのむ」

「では、御、 御機嫌、

「道中無事に――」

深雪と、綱手とはもう一度抱き合った。そして、 泣いた。

それから、 深雪は

「お母様

をぐっと抱き締めたが、 と、叫んで、胸へすがった。 七瀬は、 その瞬間、 深雪の背

声を立てて泣いていた。七瀬と、綱手は、手早く、 雨笠を手に、門から一足出た。深雪は、佇んだまま袖の中で やさしく、深雪の指を解いて、押し放した。そして、雨具、 雨支度を

「参ります」

「うむ」

「母上をたのむぞ」

が、すぐ、闇の中から込んだ。三人の者は静かだったが、すぐ見えなくなった。だく引留めた。そして、泣き崩れる深雪を自分の胸の中へ抱え、雪は、雨の中を駈け出した。小太郎が、追っかけて素早

「お父様

と、綱手の声がした。八郎太が

「未練者がっ」

と、怒鳴った。しめった声であった。

両党策動

無尽講だとの触込みで、雨の中の黄昏時から集まって来た一目黒の料亭「あかね」の二階――四間つづきを借切って、

群の人々があった。

ている人もあったし、木綿の絣を着流しに、跣足の尻端折で、人も混っていた。平島羽二重の熨斗目に、精巧織の袴をつけもう白髪の交っている人もいたし、前髪を落したばかりの

ぴたぴた歩いて来た人もあった。

間の敷居際には、軽輩の人々が、一列に坐っていた。左源太、その左右に御目見得以上の人々。そして、その次の並んでいた。階段から遠い、奥の端の部屋の床の前に、名越人々の前には、茶、菓子、火鉢、硯、料紙と、それだけが

「仙波が来ぬが、始めよう」

あった。 なところがあったが、口を開くと、底力を含んだ、太い声で名越左源太は、細手の髻、一寸、当世旗本風と云ったよう

「今日の談合は――」

と、云って、低い声になって

一人を討つか――この点を、計って見たい」女の如何に係らず、お由羅派を討つか、それとも、牧仲太郎て、御成長を待つか。又、それとも――女か――或いは、男もし、御出生が、世子ならば、その御世子を飽くまで守護し「御部屋様の御懐妊――近々に、目出度いことがあろうが、

居並ぶ人々は、黙っていた。

「つまり、成るべくならば、家中に、党を樹てたくはな

興派、 などより以上の惨禍が起るに決まっておる。 世子斉彬派などと分れては、又、実学崩れ、秋父崩れ 党を作ることの好きな慣わしの家中へ、御当主斉 これは御家のた

然しながら一

又漸く多事ならんとする天下のために、

「声が、 一人が注意した。 高い 左源太は、又、低声になって

久光公こそその大根か」 その根元はお由羅にあるか? 計画であり、 じゃ。ただー 久光公が在さばこそ、 討って、禍根を絶滅させうるか? 捨ておいて、 て出るか、 んと処置してよいか? するということは、 しかも、その歴々たる証拠までを見ながら、これを不問に付 「斉彬公の御子息御息女四人までを呪殺したる、大逆の 然らば、 斉彬公へ仔細に言上するか?――もし、このまま 御出生が男子なら、牧は又、呪殺するにちがい 斉興公も、 ーもしー 牧を討つか? 家来として、牧の仕業に等しい悪逆の罪 かかる無惨の陰謀も企てられるが故に、 -然しながら、この企てが、お由 福岡へ御縋りするか? 幕府へ訴え 御承知とすれば――吾等同志は、 調所にあるか? 或いは又、 然しながら、 牧の如きは一匹夫にして、 果して、 羅 何 の

源太は、 手段をとるならば、 「来る途上、 黙々と俯向いている人もあるし、 ここまでいって、腕組をした。 嘉右衛門とも、 今度の御出生の模様によって、 話をしたが、とにかく、 一々頷く人もあった。 そして もし、 穏健の 左 御

幼君ならば飽くまで、

守護する――」

「牧を斬ることに御異議ござらぬか」

「今迄でも、飽くまで、守護したではござらんか」

軽輩の中から、 益満が、 鋭 く、 突込んだ。

「然し、 「つくした」

無駄でござった」

そう

よろしくはない

「論はいらぬ。まず、 益満 は、 腕組して、 牧を斬ることが、第一」 天井を見ながら、 冷然といい放った。

として ― 「わしも、そう思う。然し―― 又、牧の居所が判ったにせよ、 牧を斬りに行くことは 益満、 毎日の勤め 牧が、 何処に を持っておる身 お るか?

「素より、浪人の覚悟

ると聞き及んでいるから、迂濶に行っては、身軽に行きかねる。その上、牧には、相当、 で、考えあぐんでおるが」 る。行った者のみでなく、 「そちの如き、軽輩は、それでよいが、 この同志の悉くが罪になる。 わしらは、そう手軽 警固 一切の破滅にな の人数もお それ

には、 ことに反対じゃから-二十日となっては、 は必定、 なら、 等の手で、上手に料理してしまいたいが、 何をしても、 「それが、何よりも困るところ― 十人の人数が要る。 斉彬公から、誰々は、何うしたか、と、 一日、二日なら病気でも胡麻化されようが、 気の儘じゃが、 免れぬ。 今、この同志より、 こっちは、 お由羅方は、 斉彬公にも明かさず、吾 斉彬公が、 少くも、 上が御承 すぐ聞かれる 十人が去った こういう 牧を討つ 知ゆえ、

益満が、嘉右衛門の顔を見た。

「それはない」

「名越殿には?」

「無いのう」

「方々には」

反感を持っていたが、こういうことにかけては、益満の才智(軽輩の、益満の一人舞台となって、上席の人々は、少し、

より外に、いつも、方法が無かった。

「大体、異存は無いが――」

「益満――名案が、あるか?」

よろしく、ただ、金子が、少々かかります」御当家の迷惑にならず、行くのは目付役として、拙者一人で「名案――と、申すほどでは、ござりませぬが、失敗っても、

「その案と申すのは」

益満は、前の硯函をとって、料紙へ

不逞浪人を募って

と、書いた。そして、人々の方へ廻した。益満の隣りにい

「成る程」

た軽輩達が、微笑した。

と、いって、人々は、紙を、つぎつぎに廻した。

「よし、まず、第一に――」

名越は、こういって、同じように、紙に

牧を斬る

と、書いた。

|第二に、国許の同志と、相策応すること|

御尤も」

「誰も、異論あるまいの」

国へ、使を出す事

「それには、仙波父子が、よろしゅうござりましょう」

雨は、小さくなったり、強くなったりして、風が交ってき「わしも、その肚でいるが――彼奴、何うしたか?」

た。庭の、竹藪が、ざわめいていた。

| うここ、「トッジベペト゚ト゚ペ、タセセザク、ヒロ゙ドロルルルロート゚ っここ、同な子の勝手方、雇女を見張る役が要るし、同志があれば此上とも加「それから――お由羅方の毒手を監視のため、典医、近侍、

上司へ、場合によっては、訴え出る用意をすべきこと――」えること、斉彬公へ、一応、陰謀の話を進言すること、要路、

と、名越が、書きながら、話していた時、下の往来の泥濘のまた。 はらりょう しょうじん 見える アランス

路に、踏み乱れた足音がして

「名越殿」

と、叫ぶ者があった。

「仙波だ」

と、一人がいった。

「どうした、おそいでないか」

一人が、立上って、廊下へ出た。

「只今、参るが――油断できぬ」

しく、下の女達のと、八郎太が、下から叫んで、すぐ、表の入口へ廻ったら

「お越しなされませ」

と、叫んでいる声が、聞えた。一才起したされませ」

「油断できぬ、と――嗅ぎつけよったかな」

名越が、呟いた。小さい女が、階段のところへ、首だけ出

して

「お二人、お見えになりました」

Ł いった時、八郎太と、 小太郎とが、 広い、黒く光る階

段を、登って来た。そして

「手が、廻っておるらしい」

と、低く、鋭く、叫んで、ずかずかと、人々の方へ来た。

「手が?」

八郎太も、 小太郎も、 興奮して、 光った眼をし、 袖も、肩

も、裾も、濡れていた。 八郎太が、 座へつくと、 小太郎は、

益満の後方へ坐って

「遅参致しまして、相済みませぬ」

と、平伏した。

「それで、手が、廻ったとは?」

「丁度、不動堂の横 安養院の木立のところで、 仙波と、

呼び止めた奴があった」

人々は、仙波を、目で取巻いた。

「顔は、この暗さで判らぬ。声も覚えはな いが、 わしと知っ

て呼び止めた以上、蹤けて来たのであろうか? 前から、 忍

判る理前が無い」

人々が、 頷いた。 んでおったのでは、

「それで、誰だ、と、こっちから咎めた」

人々が

「うむ」

と、又、頷いた。

こうじゃ。 「すると、今日、あかねの会合は、何を談合するのか? それが、いやに、落ちついての、談合?-٤

> 名乗らず、無礼でないか、と、 ではない、無尽講じゃが、何んの用があって聞くか。誰とも、 申したら――行け、 と。それ

て、今日の会合を、怪しんでおる者にちがいない。 院平に似ておるし、行けと、横柄に申す以上、勿論、家中の で、判ったが、その、行け、と、申した声が、どうも、伊集 上席の者で、わしを、よく存じておる奴にちがいない。 わしは、

嗅ぎつけられたと、思うが、方々の判断は? 「早いのう。成る程、油断できぬわい」

「それで、手間取ったのか」

本が参って、手籠めにして、道具諸共、御門外追放じゃ」 「いいや、 遅参致したのは ――つい先刻、出し抜けに、四ツ

「三日の間と、申すでないか」

「それが、 急に、今日中に、 出て行けと、 足軽の十人も引連

れて来たが――」

「無体なことをするのう」

「だから、軽挙ができぬ。 仙波は、形代を探し出したので、

れたとしたなら、 第一番に、睨まれておるのじゃ。今日の談合が、嗅ぎつけら わしらにも咎めが来ると、覚悟せにゃいか

ないか」

んぞ」

のことー そうなれば、 なるで、又、 おもしろいでは

が光っているようで、不安と、興奮とを感じてきた。 そういいながら、人々は、暗い、雨の申に、 お由羅方の目

「相談ごとは、相済みましたか」

談合

「済まぬが、

もし、嗅ぎつけられたとすると、

長居してはい

かん」

「左様、何ういう手段を取ろうも計られん。すぐ、退散して、

もう一度、回状によって集まるか」

益満が

「余のことは、お任せ申しましょうが、牧を斬ることは、決

まったこととして――\_

に参れ。したが、浪人は、集まるかの」「それは、よろしい。入用の金子は、明日にでも、すぐ取り

「町道場へ参れば、一束ぐらい――百人ぐらいは、益満が、笑って

立ちどこ

ろに集まりまする」

「立つか」

と、左源太が、指を立てて、斬る真似をした。

「相当に――」

人々は、外の雨脚の劇しいのを見て、尻端折になった。そ

して、雨合羽を着て

「まごまごしておったなら、打った斬るか。この雨の夜なら、

斬ってもわかるまい」

などと、囁き合った。

「それでは、一両日中に、改めて、会合するとして、今日は

これまで――途中、気をつけて」

上席の人々は、自分の供を呼んで、提灯をつけさせた。人々をした。軽輩は、すぐ下へ降りて、蓑笠をつけた。そして、と、名越が立上ると共に、人々が、一斉に立って、身支度

「この路になりましたからには、高下駄では歩けませぬ。どが降りると、料亭の主人が、草鞋を持って出て

うか、これを、お召しなすって下さいませ」

と、いった

「御一同、草鞋にかえて――途中のこともある」

人々は、袴を脱いで、懐中し、供に持たせ、身軽になって、

草鞋を履いた。

「何れ、物見に一足先へ」

と、いって、踏み出した一人が――何を見たのか

「待てっ」

四五人が、その声に、軒下に出ると――遠くに、足音が小さと、叫んで、雨の中へ、笠をかなぐり捨てて、走り出した。

くなるだけで、何も見えなかった。

「一向に、見かけませんが――」

「亭主、怪しい奴がうろうろしておらなんだか」

「油断がならぬ。一同、御一緒に」

人々は、刀を改めて、帯を締め直した。

と、一人がいって

「益満に、仙波は、

何うした」

「益満」

「少し、仙波殿と相談事があるで、かまわずお先に」と、二階の二人を呼んだ。益満の落ちついた声で

と、いった時、ぴたぴた泥を踏んで

「逃した」

と、呟きつつ、一人が、戻って来た。

追っかけたが、暗いのでのう」「見張らしい。わしの顔を見ると、すぐ、走り出したので、

人々は、心の底から、動揺しかけた。

(何うして、ここを嗅ぎつけたか)

十二三人の同志だけでは、 大勢の、 上席の人々を対手に、

何う争えるか?

(もう、ここまで、手を廻して)

心細さを感じると共に、 憎しみを感じたが、その代り、 張

合が強くなっても来た。

けながら、小太郎を、 火鉢をかこんでいた。女中は、 人々の去った静かな ちらっと、 -だが、 つつましく他の部屋を取片付 眺めては、笑ったり、 乱雑な、広間で、三人が、 背を

「女中、そっちの女中」

ぶち合ったり、していた。

と、益満が呼んだ。

「はい」

と、答えて、微かに、赤らみながら

「お召しで、ござりますか」

女中のついた手を、いきなり、 小太郎の手にくっつけて

「どうじゃ、いくらくれる?」

女中も、 小太郎も赤くなった。女中が、走り去ると

「とにかく、江戸は、斉興公贔屓が多い。

来ん。然し、国許には、御家老の島津壱岐殿、二階堂、赤山、 これでは仕事が出

この人々と、 山一、高崎、 近藤と、傑物が揃いも、揃って、 連絡すれば、 平や、将曹如き、 斉彬公方じゃ。 へろへろ家老を

倒すに、訳は無い」

調所は?」

調所は| このへろへろを除いてからでよい。よし、 此奴

> まい。それで、 が元兇としても、大阪におっては、大したことも仕出かしえ 小父上、 拙者は、 浪人を集めて、 牧を討ちに

参るから-

「牧は、わしが討取るつもりじゃ」

「小太郎と二人で?」

一うむ」

牧には、少くも、 十人の護衛がおりまするぞ」

成否は問わぬ、 意地、 武門武士の面目として.

「では、力を添えて下されますか」

わしも、 お前がおると、力強いで」

「それから、綱手は、調所のところへ、 あの又蔵を、 国許の

同志への使に立てたなら?」

「あれは、忠義者じゃし、心も利いておる」

「では、小父上は、 今からでも、立ちますかの」

「七瀬殿は?」

「ここへ泊って、

明日、早々にでも――」

゙もう、立ったであろう」

「可哀想じゃが-この雨の中を

初旅 に | |

お前は、 いつ立つ」

左様 ―浪士を集めて、 敵党の手配りを調べて、

三日が程

はかかりましょうか」

「深雪は、その間」

「南玉と申す講釈師に、あずけましょう」 講釈師、 あの、 ひょうげた?」

「あれで、なかなかの奴で、肚ができておりまする。安心し

てよろしゅうござりましょう」

と、いって、話が終ると

「そこな女中、この美少年が、お主に惚れて、今夜、泊ると

ょう」

「ああれ、また、譃ばっかり――」

八郎太が、苦笑して

「益満」

「あははは、では、拙者は、これにて――小太、上方で、逢

おう」

「うむ」

「どうれ、雨の夜、でも踊るか」

と、いって、益満は、裾を端折った。

「途中、気をつけて」

「闇試合は、女中と、小太に任せよう」

「あれ又、あんなことを――」

と、女中は、益満を睨んで、すぐ、その眼で、小太郎に媚

を送った。

七瀬等三人は、秋雨の夜道を、徹宵で歩いて行った。品川

「お泊りじゃござんせんか」

連れの三人に、不審さを感じながら――それでも

の旅宿の人々は、この雨の中を、

この時刻から、西へ行く女

いる人々は、綱手をのぞいてと、声だけはかけた。軒下づたいに妓楼を素見して歩いて

「よう、別嬪

て、身体を冷やしつつ、歩いた。同じように苦労をしなくてはならぬように感じていた。そした。夫に対し、父に対し、主人に対し、自分達も、その人とたが、江戸近くで泊るということは、夫に対して出来なかっと、叫んだ。三人は、この闇の雨の道を歩きたくはなかっと、叫んだ。三人は、この闇の雨の道を歩きたくはなかっ

屋の灯が、微かに洩れているのを見た時には、流石に気味悪来る響き、松に咽びなく風と、雨の音を聞き、仕置場の番小それでも、鈴ヶ森へかかって、海の鳴る音、波の打上げて

くなって

(品川で泊った方がよかった)

冷たく肌へ感じるくらいに濡れていた。そして、暁の冷たいく、降りも少くなって来たし、雲の脚が早く走り出した。で、ようよう雲に鈍い薄あかりがさし初めて、雨が上るらし深い眠りの中にいるうちに通った。そして、鶴見へ入る手前深い眠りの中にいるうちに通った。そして、鶴見へ入る手前と、思った。街道には一人の通行人も無かったし、これかと、思った。街道には一人の通行人も無かったし、これか

と、気軽に三人へ挨拶して、擦れちがって行った。綱手は「お早う、道中を、気をつけさっし」ら、二三人急いで来た。そしてら、二三人急いで来た。そしては、早立ちの旅人が、空を仰ぎながんら這っていたし、いろいろの朝らしい物音が聞えかけてき鶴見を越えると、道傍の、茶店などは起き出ていて、煙が

空気が顫えるくらいに寒かった。

(こんな人ばかりの道中ならよいのに)

と、思った。そのうちに断れ断れの雲間から、薄日がさし

すことにした。鰊、蒟蒻、味噌汁、焼豆腐で、一人前十八文出した。三人は、神奈川の茶店で、朝食を食べて、着物を乾

ずつであった。

もつづいた。七瀬は、その松並木が余りに長いので腹が立っ鮮かな肌をしていた。戸塚の松並木は、いつまでもいつまでってしまった。左手には、草のはえた丘陵が起伏して、雨にりきると、右手に富士山が、ちらちら見えるまでに、晴れ上この辺から、左右に、小山が連なって、戸塚の焼餅坂を登

亭主が、江戸からと聞いてているようで、腰も、足も立たなくなってしまった。茶店の松並木の下の、茶店で休むと、腓に何か重い物を縛りつけ

た。そして、すっかり疲れきった。

蔵が、七瀬の足を揉み、綱手が自分の腓を揉んでいる時、往を敷を開けてくれた。三人は、其処へ入った。そして、又へござって、足をよく揉んで、暫く、ちゃんと坐ってござれ」で、おまけに、初旅というのに――そんな無茶な――こちら「そりゃ、無茶だ。奥様、無茶というものでがすよ。女の脚

「やっと、見つかった」

来から、道中合羽を着た男が、覗き込んだ。

と、七瀬へ、笑いかけて、御叩頭した。

又蔵が、警戒するように、二人の前へ立って、男を睨んだ。

七瀬も、綱手も、坐り直した。

一体、どうなさるんで。旅ってものは、腹と一緒で、八分目ぴてでござんしょう。あの雨の中、もし、風邪でもひいたら、「無茶なことをなさるじゃあござんせんか――昨夜は、夜っ

分歩きゃあ、又へたばっちまいますぜ――又蔵さん、いい齢日、当り前なら六里歩けるところが、無理なすったため、半出た肉刺は、二日や、三日で癒らねえし、その脚じゃあ、今っしが、馬で急ぎゃあ、ここで追っつけるんだ。旅の初日にでござんすよ。昨夜よっぴて歩いたって、今朝、早立したあ

「そうともそうとも」をして、何んのためのお供だい」

茶店の亭主が、茶を汲んで来て、庄吉の喋っているのへ相槌

を打った。

えんだ」 「それくらいのことあ心得てらあ。ところが、そうは行かね

鬱金木綿の財布を、七瀬の前へ置いて、部屋の隅へ小さく「悪気で云うんじゃあねえ。怒んなさんな。所で――」起って来た。庄吉は、合羽の間から、懐へ手を入れてしたし、気ばかりあせって、旅慣れない自分に、軽い後悔も、又蔵が、不平そうに云った。七瀬は、又蔵へ気の毒な気がえんだ」

「ええ――これは、御道具を売った金でござんす」腰をかけた。

「何んという名であったか――そちの志は、よう判っていま三人は、一時に、財布と、庄吉の顔とを見較べた。七瀬が

えてんだ。お嬢さん、あっしのここを、買っておくんなせえ。もう少し――やくざ野郎だが、この胸んところを買ってもれ御返答申し上げ遊ばすおつもりでげしょうが、あっしゃあ、「うんにゃ、一寸もお判らねえ――何んとか、ござり奉って、

庄吉、死ねっと、仰しゃったら、死なんとも限らねえ野郎で

すぜ。失礼ながら、ぎりぎりの路銀しかお持ちじゃねえ。万 さる。この財布を、 、水当りで五日、 七日、無駄飯でも食ったら、一体何うな お持ちになるよりは、 もっと、 辛い思い

「何んのいわれ、因縁があって、差上げてもらったんで-「然し、あの道具は一旦、お前に、差上げた道具ゆえ」

をしますぜ」

あ御納め願います。 いや、お互に、唐変木は、よしやしょう。とにかく、こいつ ほんのあっしの志で――」

左手で、財布を、 七瀬の膝の方へ、押しやって、立上った。

お前

さよなら」

「これっ — - 又蔵 |

七瀬は、又蔵へ財布を渡して、庄吉を追わそうとした。表

口から、庄吉が振返って

ん。さよなら」 「深雪さんにゃ、手前がついていやす。御心配にゃ及びませ

ろうとした時、二人の馬上の武士が通りかかった。又蔵が、 口早に叫んで、 微笑した。そして、軒下から足早に走り去

駈け出して来た。七瀬が、上り口のところまで出て来た。

の武士が、七瀬を、顎でさして 馬を停めて、馬上から侍が呼んだ。 又蔵が振向くと、 人

「仙波の家内ではないか」

又蔵は、 不安そうな顔をして、馬上の人を見上げた。

馬から降りて、左手で編笠の紐を解きつつ

眼にかかりまする」

「仙波殿の御内室では、ござりませぬか。

久し振りにて、

お

「おお、池上」

国許で、小太郎の友達として、出入していた池上であった。

「どちらへ?」

貴下は?」

江戸へ」

|妾は、国許へ|

「亭主、ちょっと、

奥を借りるぞ」

池上は、こういって、 未だ馬上にいる兵頭へ

「降りて来いよ」

と、声をかけた。そして、奥へ入ろうとすると、 赭っ茶け

た襖の前に、花が咲いたような綱手が坐っていた。 「これは 御無礼致した。亭主、客人がいるでないか」

「いいえ、 お見忘れでござりますか、 あの綱手」

七瀬が

綱手が、

ああっ、 池上は、 少し赤くなった。そして、 綱さんか、わしは――」 小声で七瀬に

「寛之助様の、 御死去の折、たしか、 お守役と聞きましたが

- それに就いて、ちと、聞いたことがあって」 打裂羽織の裾を拡げて、腰かけた。兵頭が、

土間

の奥の腰掛へ、 大股にかけて

「初めまして、兵頭武助と申します」

と、挨拶した。 七瀬は、二人の丁度間へ坐って

- 97 -

国許では、 池上は、こういって、 御変死、と噂しておりますが 七瀬 の顔を、 じっと見た。

「はい、御変死で、ございます」

七瀬は、言下に、はっきり答えた。

ح 申すと、証拠でもあって」

出しましたが、そのために、八郎太は浪人-「調伏の人形が床下にござりました。 小太郎が、それを掘り — 妾は、 国許へ、

戻るところでござります」

池上は、暫く黙っていたが

るとは」 「それは又、 奇妙な――調伏の証拠を掘り出して、 咎めを蒙

池上は、 腕組して暫く黙っていたが

. 地頭には勝てませぬ。して、貴下様は、何用で、

「御内室を見込んで、お明かし申そうが-—加治木玄白斎殿

妊中の方に、もしものことがあっては、 牧仲太郎の調伏に相違無しと、見究められ、只今、御懐 と、江戸の同志の方

々と、 打合せのために参る途中

「上方へ参っておりましょう。 「そして、その牧は、只今、何処に――」 場合によっては、 某等の手に

て討取る所存でござる」

「赤山靱負殿、山田一郎」「国許の同志の方々は?」 今度の異変にて、 山田一郎右衛門殿、 夜の目も寝ずに御心痛でござる」 高崎五郎左衛門殿、 など

聞いたか」 七瀬は、又蔵に

っ は い

てたもらぬか」 「御国元ではお待ちじゃによって、妾にかまわず、 「でも 先に行っ

兵頭が

七瀬は、

黙って又蔵を睨みつけた。

判ったなら、 急ごうでないか」

「いや、江戸の気配も、 ほぼ、 判り申した。 忝のう存じます。

道中御健固に」

と、いって、池上が立上った。

「もし、名越様にお逢いの節は、 よろしくお伝え下されませ」

「して、仙波殿は

御江戸へ」

りましょうか」 「江戸におりましょうか、 それとも、 その辺まで、 参ってお

「その辺まで?」

「では、 と、池上がいった時、もう、兵頭は、馬の頸を叩いていた。 御免、もし、 仙波殿に、 途中で逢ったなら

池上は、歩き歩き振向いていった。

「無事とお伝え下さりませ」

三人は、 池上の馬に乗るのを見送った。

「御免」

二人は、 編笠をきて、すぐ、馬をすすめた。 三人は、 御辞

儀して、 又蔵、 座に戻ると、暫く黙っていたが 御苦労ながら、一足先へ立ってたもれ。大事の手紙

はい 然し、お二人では一

じゃで、

一刻も急ぐから

え、お前の心配に、無理は無いが、妾とても、十八九の娘でここにおっては、大事の書状が無駄になる。わかりましたか太郎に逢うて、牧の行方を告げましょう。それまで、そちが、江戸へ戻れるものでなし、ここで、こうしていて、夫と、小のことを、夫に知らせて、一手柄させて上げたいが、今から「今、聞いたであろう。牧が、上方へ、参っておると――こ

七瀬は、腹巻を引出そうと、手を入れた。俯向いていた又

蔵 が

はない

さ、心配せずに、

急いで立っておくれ」

「はい」

「路銀は――ここに」

と、庄吉の置いて行った財布を出した。

「それは、人様の金子でないか」

れを使います分にゃあ、申訳も立ちますし――あいつも、な五日、七日寝ましたなら、先立つものは金、又、手前が、こ「いいえ――あいつの申します通り、もしも、水当りででも、

「何程入っていますかえ」

かなか、おもしろい奴でございます。手前、これで参ります」

又蔵は、中を覗いてから

**゙**おやっ」

と、いって、掌へ開けた。小判と、銀子とが混っていた。

「ございますよ、八両余り」

「八両?――少し、多いではないか」

「ねえ」

「あれは巾着切であろうがな」

そう申しますが」

「もしか、不浄の金ではないかの」

又蔵は、立上った。

「もしもの時にゃあ、奥様、又蔵が、背負います」

いいえ。これをもって---

と、七瀬が金子を差出した時

「では、

御無事に

- すぐ又、大阪へお迎えに参ります。

お

嬢さん、気をおつけなすって下さいまし、水当りに――」

又蔵の声が湿った。走るように軒下へ出て、振向いてダスクーラです。

綱手は泣いていた。七瀬の眼も、湿っていた。茶店の旅人「祈っておりまする。奥さん、お嬢さん、行って参りますよ」

碇山将曹は、四ツ本の差出した書面を見ていた。それ

ŧ

亭主も、

両方を見較べていた。

大目付兼物頭 名越左源太 おかね」で、会合した人々の名が、書いてあった。

裁許掛中村嘉右衛門

`見習 近藤七郎右衛門

同なじく

同

新納弥太右衛門

蔵方目付 吉井七之丞

奥小姓 村野伝之丞

宗門方書役 肱岡五郎太遠方目付 村田平内左衛門

同人 弟 宗右衛門 宗右衛門 相良市郎兵衛

益満休之助

- 99

には

## 加治木与曾二

「この外に、仙波親子か」

大きい、 丸い眼鏡越しに、 四ツ本を見て

「はっ」

のを、 金網のかかった手焙――桐の胴丸に、天の橋立の高と、頷くと、眼鏡をはずして、机の上へ置いた。 -桐の胴丸に、天の橋立の高蒔絵した そして、

抱えこむように、

身体を曲げて

通謀させてはうるさい。 「これだけの人数なら、 それを取締って― 恐ろしくはない が、 - 時と、 国許の奴等と、 場合で、

斬り捨ててもよい。 と申しても、 貴公は弱いのう」

「恐れ入ります」

四ツ本は、平伏した。

「それから、これも、貴公では、手に余る獣じゃが、益休 此奴を、 油断無く見張ってもらいたい――と、 申しても、

お前で、見張られるかな」

「死物狂いで――」

ない。これも、よく含んでおいてくれ、ええと――」 それから、万々、内々のことじゃで、世間へ知れては面白う 「死物狂いでは、 見張れん。 添役に、一人、付けてやろう。

がして、取次が 将曹が、冷えた茶を、 口へつけた時、 次の間に、 荒い足音

「伊集院様

って来た。小姓が、 と、云い終るか、 四ツ本が、 終らぬかに、 その後方から、周章てて、 一座滑って、 平伏した。 襖を開けて、 伊集院平が入 座蒲団を持っ

寒くなって」

伊集院が、座につくと

越へ着いたのを、 「四ツ本ならよかろうが、 御存じかな。昨夜」 碇氏、 国許から暴れ者が二人、

「いいや」

碇 山 は、 身体を起して、 伊集院の方へ、少し火鉢を押しや

った。

の奴が参ったが、案ずるところ、国許の意見を江戸へ知らせ、 「例の、秋水党の、何んとか、池上に、兵頭か、そういう名

「打った斬ろう」

江戸の話を、国許へ持ち戻る所存らしい」

「 やるか」

網を張り、 「四ツ本、藩の名では後日が煩い。浪人を、十人余り集めて、 引っかかったら、引縛るか、 斬るか のう平」

「四ツ本、 斬れるか」

「只今も、それで、面目を失いました」

「はははは、 碇殿も、 流行唄は上手だが、 この方は、 向で

のう

Ł 平 は、 四ツ本の頭を打つ真似をした。

は、 い、欠伸をして四ツ本は、将 将曹の指令を受けて、 退出してしまった。 将曹

と、呟いて

「商魂士才で、

如才が無い、

薩摩の殿様お金が無い、

か

「これは?」

と、指で丸を作って、平へ、微笑した。

平は、 口重にいって、腕を組んで、首を傾けて

か 金を出す。 いていることは、よくわかっておるのに、すぐ、それには、 「調所の心底がわからぬ。 表面 そして、 ば、 久光公の御命令だが、裏に、斉彬公が糸を引 この御家の基礎を置こうとするには、 下らぬ大砲鋳造とか、 軍制改革と き

「真逆――」「真さかしておるのを、 数理に達者だからのう。 将曹が、微笑して、 ちゃんと知っておるかも知れぬ」 金網の間から、 あの爺 ―わしらが、その中 火を掻き立てつつ から

まって出し渋る」

かぬと、何を吼え出すかわからん」そうそう、彼奴の江戸下りも近づいたから、帳尻を合せてお 「この夏の二千両の内、 「いいや、金のことになると、 八百両、 お由羅とて容赦せぬからのう。 貴殿にお渡しした。 あの明

細が、未だ、届いていん」 芸妓に化けた」

届かぬ筈で、 ありゃ、 内二百両が、

又 出来たか」

出来たと思うたら、逃げられた」

将曹は、脣を尖らした。そして

百両也、 その代り、 端唄、 端唄を一つ覚えた。二百両 と書け。調所のかんかん爺には、 の端唄じゃ。 判るまい」

あはははは、 Ł 高笑いして、鈴の紐を引いた。 遠くで、

微かに、 鈴が鳴ると、 すぐ、 女の声で

召しましたか」 酒じゃ」

「 は い

「お高の三味線で、その二百両の唄を一つ聞かしてやろう」

平は、 丁寧に、 頭を下げて

有難い仕合せ.

膝の上で、 両肱を張った。 衣擦れの音がして、 襖が開

くと

「お久し振り」

返して、 将曹の愛妾、お高が、 支那渡りの黒繻子、 真紅の襟裏を、 甚三紅の総絞りの着物 濃化粧の胸の上に裏 の 裾を

引いて入って来た。

「高、二百両の端唄を、 お高は、 練沈香の匂を立てて、 今夜は、 坐りつつ 披露しようと思うが

「三文の、乞食唄?」

又 | |

「でも、 深川 あたりの流し乞食の―

オロシャ船、 「平、文句がよい 紅毛人のいうことにゃ、 巽に見えたあの白雲は、雪か、煙か、 日本娘に乗りかけて

お高が、 口三味線で、 近頃流行の猥歌を唄い出した。平は、

神妙に聞いていたが

(敵党には人物が多い。 こんなことでは)

俯向いて、 暗い心を、じっと、両腕で抱いていた。

- 101 -

## 己首に描く

けの住居であった。ただ幾鉢かの盆栽と、神棚と――それか南玉のところは上り口の間と、その次の六畳と、それった

ら、深雪が、明るく、光っていた。益満が

「退屈なら深雪、富士春のところへでも行くか」

「戯『談を――碌なことを教えませんよ。富士春は――」

「ごって、ちし帀至ら、上更斤ごさら、ごったしか。そしよ槍を持って、清正と一騎討ちをしたりはせん――」「その代り、お前のように、孔明字は玄徳が、 蛙 切りの名

「だって、あん師匠あ、辻便所じゃあ、ごわせんか。そんな

ところへお嬢さんが――\_

「小父さん、辻便所って、何?」

頃が、齢頃なんだから、こういうことは、すぐ感づきまさあ「そうれ御覧なさい――だから、云わないこっちゃねえ。齢

―-辻便所ってのは、お嬢さん――」

南玉は、両手の人差指で、鼻を押上げ、小指で、口を大き

く開いて

**゙**ももんがあ」

「あら。ももんがあが、お厠から出ますの」

「そうそう、三縁山の丑三つの鐘が、陰にこもって、ぐぉー

んーと、鳴ると――」

「成る程、拙い講釈師だの」

「便所の蔭から――」

「ちょいと、ちょいと」

南玉は、手で額を叩いて

出来ましたっ、夜鷹の仮声は天下一品

と、いった時、

「物申う、講釈師、桃牛舎南玉の住居はここかの」

南玉が

へい

と、いった途端、益満が

「真木か」

「益満」

格子を開けて、着流しの浪人が入って来た。そして、土間

に立っていると

「南玉、酒を買って来い」

銀子を渡して、益満が

「こちらへ」

雪に挨拶してしまうと、益満が、金包を出してと、いった。南玉は、勝手口から出て行った。浪人が、深く

「支度金」

「いや、忝ない」

浪人は、膝の上へ手をついて御叩頭した。

での、大酒、高声、放談も慎んで頂きたい」 での、大酒、高声、放談も慎んで頂きたい。仲間の喧嘩、口論は合うこと――誰も同じことで、某も覚えがあるが、苦しい時為掛として、某と、各々との間におって、事があれば知らせには、刀の中身まで替えたもの。もし、そういう仁があれば、活しい時のこと、道中、みだりに人との間におって、事があれば知らせ「一手五人として、三手――成るべくならば、姿をかえて、「一手五人として、三手――成るべくならば、姿をかえて、

浪人は、 一々、うなずいていた。

「出立は、

「左様、 明後日ときめて、万事、 某の指図をお待ち願いたい」

「では、支度に忙がしいゆえ、 これにて

浪人は、手をついて

「一同の人は、何処に。 貴公のところ?」

|揃うておりまする|

浪人は、そう云って、 腰を上げ

「では、明後日早朝として、某は神奈川でお待ち申そう」

益満も、 見送りに立上った。

益満は、 座につくと

「深雪」

と、正面から、 顔をじっと見た。

るため、今の浪人共を連れて上方へ立つ」 「わしは、予ての話の如く、明後日の早朝、牧仲太郎を討取

別れ これが今生の別れかも知れぬ。父に別れ、母に別れ、 き込まれず、打挫かれずに、正面から引組んで味わってみる みが押寄せようとも、 になった上は是非もない-「人を討つに、己のみが助かろうとは思わぬから、或いは、 深雪は、 その苦しさ、悲しさを凝視めてみるのじゃ。それに、巻 そうすると、何故、 今又、わしと別れて心細いであろうが、かかる運命 膝を凝視めて、鼓動してくる心臓を押えてい 必ず、勇気を失うなよ。じっと、耐え ―ただ――如何なる苦しみ、悲し 自分は、こんなに、苦しめられ 小太に

るのか?

悲しまされるのか、だんだんわかってくる。誰が

を、よく考えて、 の悪い運が、明るく開けてくる。よいか」 その苦しませる奴と戦う――ここから、

苦しめるのか?

何んのために、悲しまされるのか? それ

深雪は、頷いた。

「それで、小父上から、あずかっておい

益満は、袋に入った短刀を取出した。

に染むなよ」 泥水に咲いても、 に使うことはならぬ。又――朱に交れば赤くなる、と申すが、 己を突くか、由羅を突くか、二つに一つの短刀じゃ。その外 父のために、十分に耐えて――隙があらば、由羅を刺し殺せ。 じめることもあろうし、叱ることもあろうが、お家のため、 父と思って肌身離すな。奥女中は、片輪者の集まりゆえ、い 出るということ――もし、この話が成就したなら、 「小藤次が惚れておるのを幸として、お由羅 清い蓮の花は清く咲く。決して、奥の悪風 の許へ、奉公に

れぞれ身を捨ててかかっているのに、自分一人だけは、 のおどけた生活の中にいたので、日夜、そのために苦しんで いたが、益満の言葉で、 深雪は、身体をかたくして聞いていた。一家中の者が、そ 頭が軽くなった。

になった。 由羅を刺すというような大任ができるだろうかと、 同時に、齢端の行かぬ、世間知らずの娘が、そんな 心配

い心さえもっておったなら、道は、自然に開けてくる。明る い心とは、勇気のあること、苦しさに負けぬこと― 「人間というも 云った時、南玉が、ことこと戻って来た。深雪は、 のは、何んなことがあっても、 つも、 よいか」 明る

103

刀を押頂いて、懐中した。

「わしは、 これから、 富士春の許へ、一寸、行って来る」

刀を持って、立上りながら、勝手で、七輪への、

焚木を、ぷつぷつ折っている南玉へ

「客は、戻ったぞ」

しめたっ」

へべれけになって、 又、席を抜くなよ」

腰を抜く」

南玉は、こういって、障子の破れ穴から、 中をのぞいて、

益満が出て行きそうなので

杯やってから」

と、徳利を提げて出て来た。

「急ぐ」

便所なら、こっちにも

馬鹿っ」

益満は、笑い ながら出て行った。 深雪には何の事だかわか

らなかった。

富士春は、お惣菜の小鉢を、 裾分けに来たらしい女房が、 富士春は一人きりだった。 鼠入らずへ入れて、益満へ 益満が入って行くと、惣菜をお 周章てて勝手から出て行った。

「お見限りだねえ」

「何を――こっちのいう科白だ。 近頃は、 巾着切を、

込んでいるくせに|

富士春は、下から、媚びた目で、 益満を見上げて

お当て遊ばせな」

と、座蒲団を押しつけた。

「貴様でも、 遊ばせ言葉を存じておるか」

「妾は、元、京育ち、父は公卿にて一条の」

「大宮辺に住居して、夜な夜な、 人の袖を引く」

「へんっ、てんだ。何うせ、そうでございましょうよ。

もない、お嬢さんなんかと、くっついて」

富士春は、益満の眼へ、笑いかけつつ、茶をついだ。

「そのお嬢さんに、小藤次が執心らしいが、 師匠、 南玉の許に 一つ骨を

食客をしていては――」がそうろう。 父は浪人になるし、折って、奥勤めへでものう。 父は浪人になるし、

「本当にね、お可哀そうに――」

「などと、悲しそうな面あするな。内心、とって食おう、と、

思っているくせに――」

と、色とをごっちゃにして、売っている、 「やだよ、益公。与太な科白も、 ちょいちょい抜かせ。 泥溝板長屋の富士 意地

春を知らねえか」

「その啖呵あ、三度聞いた」

はお上手てんだ、益公。お馬もお下手で、胡麻摺りゃお上手。 「じゃあ、新口だよ。いいかい、 剣術あお下手で、お三味線

ぴーんと、痛いだろう」 「常磐津よりは、その方が上手じゃ。流石、

巾着切のお仕込

みだけはある」

外聞の悪い、

巾着切、

巾着切って」

と、云って、女は、声を低くして

人気にかかわるからね」 「お前さんにゃあ敵わないが、

知れんようにしておくんな、

「心得た――その代り、 二階へ一寸――」

富士春は、 ちらっと、 益満を見て

「本心かえ」

険しい眼をした。

「一緒に、というんじやあねえ、 わし一人で一 -その代り、

暫く、誰も、来んように」

富士春は、微笑して

屋根伝いに、お嬢さんが

まあず、その辺」

富士春は、手を延して、益満を捻った。

い の \_ 「たたたった――まさか、二階に、庄公が鎮座してはおるま

こっそり、 「はいはい、亭主は、人様が、お寝静まりになりましてから、 忍んで参りまする」

益満は、立上って、押入を開けた。狭い、急な階段があっ

狼共、来るかの」

「さあ、一人、二人は ――お由羅さんが、 お帰りなので、町

内中が、見張に出ているらしいから」

「ほほう、お由羅様が、お帰り?」

「あのお嬢さんを、奥勤めさせるなど――何うして、あちき

のところへ、あずけないかしら?」

階段の二段目から、首を延

「庄吉は、色男だからのう、危い」

云って、すぐ、階段を、軋らせて登ってしまった。

「お由羅さん、か」

は師匠となり、お由羅は、 春は、その反対であったが、反対であったがために、富士春 もあったが、物憶えの悪い、お由羅であった。そして、富士 富士春は呟いた。同じ、師匠のところへ、通って居たこと い つの間にか、 お部屋様になった。

富士春は、勝手の小女に

早く、 おしよ」

と、夕食を促した。

々は、悉く、里戻りのお由羅を見るため、 益満は、暮れてしまった大屋根へ、出た。周囲の長屋の人 家を空にして出て

いるらしく、何んの物音もしなかった。

軒下へ押しつけ、通行人を、せき立てて、手を振ったり、叫 屋根から往来を見下ろすと、町を警固の若い衆が、群集を、

出る手当の祝儀を、 提灯を片手に、腰に手鉤を、或る人は棒をもって、後からんだり、走ったりしていた。 何う使おうかと、 微笑したり、 長屋の小

娘に

「お前も、あやかるんだぞ」

と、云ったり、その間々に

「出ちゃあいけねえ」

「早く通れっ」

が、 の間に、金屛風を、軒下の左右には、家の者、 とか、怒鳴ったり一 提灯を股にして、ずらりと、居流れていた。 - 小藤次の家は、幕を引き廻して、板 町内の顔利き

益満は、ぴったりと、屋根の上へ、腹を当て、這い延びて、

駕が止まって、お由羅の立出るのを、一発にと、的を定めてた。片眼を閉じて、筒先を上げ下げしつつ、軒下の中央へ、短銃を、棟瓦の上から、小藤次の家の方へ、覘いをつけてい

いた。

二人、すぐ駕になって、駕脇に、四人の女、後ろに胡床、草なって覗くと――真先に、士分一人、挟、箱一人、続いて侍女て、雪崩れかかった。そして、若い衆に制されて、爪立ちにと共に、軒下の人々が、一斉に首を延し、若い衆の背を押し駕が近づいて来たらしく、人々のどよめきが、渡って来る

| From the Common Transfer T

された手振り、足付で、小藤次の家の正面へ来た。軒下に居並んでいた人々が、手をついた。陸、尺が、訓練

へと、照準を定めていた。手を引金へかけた。そして、籠から出て、立上った女の胸板(益満は、左手を短銃へ当て、狙いの狂わぬようにして、右

入口と、直角になった。そして、益満が(これ)であったまま、(くれ)、くれ、横づけにならず、陸尺の肩にかかったまま、)

(妙な置き方をする)

入れかけた。 と、思った時、そのまま陸尺は、土足で、板の間へ、舁き

(しまった)

上も、家の中へ入ってしまっていた。照準を直した時、駕は、侍女の蔭を通って、もう、半分以

(こっちに備えがあれば、敵も用心するものだ――流石に、

お由羅だ)

益満は、微笑して立上った。そして、瓦をことこと鳴らし

つつ、二階の窓から、入って来て

「ちんとち、ちんちん、とちちんちん、ちんちん鴨とは、ど

でごんす――」

と、唄いながら、段を下りた。富士春が

「騒々しいね」

「ちんちんもがもがどでごんす」

ょんぴょん、富士春の側へ行こうとすると、火鉢の前に一人益満は、片足で、三段目から、飛び降りて、そのまま、ぴ

の男が坐っていた。

黙してしまった。益満はそして、その男も、富士春も、二人ながら気拙そうに、沈

(庄吉だな)

感じた。その途端、富士春がと、思った。そして、二人を気拙くさせたのは、自分だと 106〜(月言がた)

人の手を折った人の、妹さんで、ござんしょう」「ねえ、益満さん、あの、貴下とこのお嬢という人は、

この

益満は、庄吉に

「初めて――でもないが、手前は、益休と申して、ぐうたら

侍

庄吉は、周章てて、座蒲団から滑って

になりましたそうで、いろいろと――」「恐れ入ります、お名前は、それから、以前此奴が、

お世話

富士春が、庄吉を睨んで、鋭く

「余計なことを喋らなくってもいいよ」

「ははは、逢えば、そのまま、口説して、と唄の通りだの。

それで、富士春、妹なら?」

「現在手首を折られた男の妹に惚れて――」

「手前は又、折った小太郎さんに思召しがあるんじゃあねえ

者を引取ってやったと――手前なんざ、不具者の外の亭主が 「仲よく二人で惚れたって、何んでえ。何んかといや、不具

富士春は、ぽんと、煙管を投げ出して、益満に

もてるけえ」

邪魔を入れてますのさ、この人が――奥へ入ると、逢えない 「その深雪さんが、小藤次の手で奥勤めすると聞いて、へへ、

もんだから――」

は、南玉爺一人に任せちゃあおけねえからだ。一手柄、俺のと、この胸が仰しゃるけどな、あのお嬢さんを追っかけるの んだ。俺、成る程、よく聞いてみりゃあ、深雪さんは好きだ 「て、手前、おれの気立を、うぬあ、まだ御存じ遊ばさねえ

手で立てさせ上げ奉っちまって、ねえ、益満さん、あの親爺 さんなり、小太郎さんに逢わして上げたら、何んなに肩身が

「体のいいこと云いなさんな」

広かろうと、これが、世に云う、そら、義侠心って奴だ」

「手前、何んでえ、小太郎の男っ振りに惚れやがって――」

「小娘じゃあないよ」

みろ、 をまくって、益満の旦那に見せてみろ、それ、見せられめえ」 何んな顔をするだろうねって――譃と思やあ、腕まくりして 「何を。 俺がつねった跡がついてるだろう。さあ、そっちの腕 昨夜も、 手前、 あの人は、まだ女を知らないだろう、

<sup>「</sup>ははあ、のろけか」

庄吉は、 笑った。益満が

仲裁をしては、あとで、 「まま、こういう喧嘩なら、大したことはあるまい。なまじ、 悪口を云われるものじゃて **―**その

内に、 、ゆっくり

と、立上った。

「旅をなさいますって?」

と、富士春が、見上げた。

「上方へ暫く」

「そして、深雪さんは?」 - 奥勤めができんなら、暫くは、 南玉の食客かの」

「庄吉が、くっつきましては?」

「それも、よかろう。庄吉、頼むぞ」

男ってものは

と、富士春は、口惜しそうに、羨ましそうに呟いた。

「男同士でなくっちゃあ、判らねえ」

庄吉は、そう、云いすてて、益満を送りに立った。

「お部屋様付になれたら、

俺のいうことも聞くか?

成る

て来て、自分の妾に、又は、妻にと話し出した。 小藤次は、常公と、二人で、南玉のところへ、深雪を尋ね

てもいい、と、こういいたいの」 たら、由羅付なりと、大殿付なりと、好きなところへ奉公し 「尤もだが、ま、俺からいうと、俺のいうことを聞 てくれ

常公が、頷いた。深雪は、頭から、 髪の中まで、 口惜しさ

でいっぱいだった。父に別れるとすぐ、浅ましい妾奉公など

惜しかった。 大工上りの小藤次から、 申し込んで来たのに対して、

(でも、これを忍ばないと――いい機なのだから――)

中になりたくはなかった。そうまでしないでも、 と、思った。然し、小藤次に肌を与えてまでも、 外に方法が 由羅付女

あるように思った。

然し、益満は

と、軽く-―それも、深雪には、口惜しかった。汗ばんだ

手に、懐の短刀を握って

(由羅付になって、由羅を刺すか、自分を刺すか) と、思うと、人々の見ている中で、芝居をしているように、

いろいろの場面が、空想になって拡がって行った。

(女の決心は、男の決心よりも強い。その今、流している涙

母の分、兄の分、姉の分を、自分一人で背負って、復讎するを十倍にして、敵党へ叩きつける決心をするのだ。父の分、 決心をしておれ

た。 次の下品な鼻、脂切った頬、 て、一日も早く、お由羅を刺そうかとも思った。だが、 と、云われたが、それを思い出すと、小藤次に、肌を許し 胸の毛を見ると、身ぶるいがし 小藤

町方たあちがって、 し、宿下りは年に二度さ、だから――」 「武家育ちだから知ってるだろうが、一旦、上ってしまうと、 なかなか、男など近づけるところでない

南玉が

そこを一つ、若旦那、 お由羅さんの兄さんという勢力で、

> 「不束者でございますが、お世話になります以上は、一気儘に逢引のできるよう、骨を折って下さるんでげすな」 めも致しとうござりますゆえ、 かけたいと存じます。それにつきましては、一通りの御殿勤 お世話になります以上は、一生を 一二年、 御部屋様付にて、

習をさせて頂きましたなら」 深雪は、一生懸命であった。頭も、顔も熱くなって、舌が、

ざらざらして、動かなくなるのではないかと思えた。

「利口なことをいうぜ」

ような頬、典雅な腰の線を眺めていた。 小藤次は、腕組をして、深雪の滑らかな肩、新鮮な果実の

「成る程、御尤もさまで――」

と、常公が、思案に余ったような顔をしていた。 侠気を見せます

な。何んにも云わねえ、行って来な」

「講釈流で行くと、ここで、岡田小藤次は、

南玉は、首を振って、仮声を使った。

次さま」 「てえことになると、 娘の方から―― ほんに、 頼もしい小藤

南玉は、娘の仮声をつかった。そして、常公に、しなだれ

かかった。

一うわっ、 と、常公は、身体を反した。 おいてけ堀の化物だ」

今晩あ ーやあ、 これはこれは」

庄吉が、暗い土間から、 奥を覗き込んだ。そして

若旦那、 今晩は」

と、云って上って来た。 小藤次は、 煙管を仕舞って

邸の中でも――出来ねえこたあねえが、窮屈だからのう、邸も、よく考えておいてくんな。そりゃあ、無理をすりゃあ、あ、それから先にして、俺あ、もう一度来るから、深雪さん「とにかく、奥役に聞いて、奉公に上れるか、上れんか、な

「話あ、きまりましたかえ」

勤めってのは

と、庄吉が、小藤次の顔を見た。

さんだ。じゃあ、師匠、又来らあ。お邪魔したのう」さんだ。じゃあ、師匠、又来らあ。お邪魔したのう」「庄公も、一つ骨を折っといてくれ。なかなか、利口なお嬢

「手前も、今夜、ゆっくり、口説いてみましょう」

「師匠の口説くなあ、講釈同然、拙いだろうの」

しめて俯向いていた。南玉も、上り口まで見送って来た。深雪は、まだ短刀を握り下と、いいつつ、深雪に挨拶して立上った。常公も、庄吉も、

の望みか、それとも、この南玉爺の」「お嬢さん――邸奉公なさるって――そりゃあ、一体、貴女にお嬢さん――の奉公なさるって――そりゃあ、一体、貴人た

めえ問答だ。明晩、席で、一つ喋ってやろう」物を盗っても、庄吉と、いうが如し、とは、これいかに。う「これこれ、爺とは、何んじゃ。齢はとっても、若い気だ。

利口ですぜ」「勤めなんぞより、お嫁に行きなせえ。早く身を固めた方が、「勤めなんぞより、お嫁に行きなせえ。早く身を固めた方が、」に吉は、南玉が喋るのを、うるさそうに聞きながら

庄吉は、じっと、深雪を凝視めつつ

ゃあねえんで――その懐の中、手のかかっているものは――」「だが、びっくりなさんな。こうすすめるのは庄吉の本心じ

深雪は、庄吉を見た。

「短刀でげしょう」

- 深雪の眼も、懐の手も、微かに動いた。

「商売柄判りまさあ。お由羅のところへ奉公に上って、その

と、いった時、一短刀が――」

「わしの、講釈よりも、筋立が上手だよ、のう庄吉」

南玉が

益満さんは、目が高えや、南玉。深雪さん、益満さんは、貴「誰も、俺を、巾着切だとおもって対手にしねえが、流石に、

嬉しゅうがすよ。十七や、八で、その心意気が――あっしの小藤次の色好みを幸に、御奥へ忍んで――ねえ、あっしゃあてまさあ。二つ合せて考えて、その短刀と三つ合せて考えて、明けて下さいましたぜ。床下の人形のこたあ、世間でも知っ女のお父さんが、牧を討ちに行ったと、あっしを見込んで打

庄吉の言葉は、二人を動かすに十分であった。だが、二人手が、満足なら、忍び込んで御手伝いしやすがね」

- 109

とも黙っていた。

ん、何かいいつけて下さんせんか――死ねとか、盗めとか」「あっしに、何か、一仕事――庄吉、これをせいと、お嬢さ

二人は、黙ったままであった。

――ねえ、お嬢さん」「立てさせて上げてくれるなら、そりゃあ、庄吉、この爺もけ致しやしょうか。そして、貴女に何か、一手柄――」「じゃあ――深雪さん、大阪のお母さんと、姉さんを、手助「じゃあ――深雪さん、大阪のお母さんと、姉さんを、手助

深雪は

「はうい」

と、答えた。

## 第二の蹉跌

里という計数で、七百文であった。へかかると、流石に高くなって、小田原から、箱根町へが四三里、二百八十文、平塚より大磯へ二十町、六十文。箱根路戸塚より藤沢へ二里、本駄賃、百五十文。藤沢より平塚へ

「駕屋、急ぎだぞ」

乗継ぎの催促をしていた。 五人の侍風の者と、商人風の者とが、藤沢の立場の前で、

「へい」

へかけると、侍の方へったと見えて、黒く、走って出た。そして、自分の駕を、肩と、いって、小屋の中で、籤を引いていた駕人足が、きま

「お待ちどおで」

七瀬は、小屋の横から、駕へ入る人を、一人一人眺めてい

たが

(あれは――家中の夫と近しい方――)

(夫のことを聞こうか、聞くまいか)と、思うと、一足出て見た。駕は、すぐ上った。七瀬は

かけに、七瀬は、御叩頭をして、小走りに駕へよってと、思案した時、その人も、七瀬を見つけた。それをきっ

「仙波氏は?」奈良崎は、七瀬を見て

「奈良崎様では?」

「さあ――ここで、待っておりますが」

奈良崎は

「待つ? 待っておる? 何を愚図愚図と――危険が迫って

おるに」

と、いって、すぐ

「駕やれ」

た。

態度、言葉からは、何かしら、大事が起るような、予感がし駕は、五梃つづいて、威勢よく行きかけた。奈良崎の急ぐ

ように、二人は、綱手の眠っている間に、行きすぎたかも知らぬと決まってはいなかった。自分達が、品川から夜道した一筋道ではあったが、八郎太と、小太郎とが、昼間しか通

(もしかしたなら、あの人々が、夫を追うのでは?)

張っては居れなくなってきた。れて戦っている、夫と、子とを想像すると、もう、立場で見れて戦っている、夫と、子とを想像すると、もう、立場で見と、思うと、そうも、思えた。七瀬は、多勢の者に取巻か

のか?)っているのか、自分に迫っているのか? 何故、危険が迫る(奈良崎の、あの、危険が迫っているという言葉――夫に迫

u。 った不運のことを考えると、何かしら大事が起るように思え 七瀬には、十分理由が判らなかったが、今まで引続いて起

「七梃だっ、急ぎ」

掘抜井戸があって、馬の、雲助の、飲み水になっていた。駄た。その中に、七瀬の顔見知りの人がいた。立場の横には、と、いう声がしたので、振向くと、侍が七人、怒鳴ってい

いっこ。賃をもらうと、駕を、軒下へ片付けて、雲助はその井戸へ集

まった。

「今し方、五梃、侍が乗って行かなんだかのう」

「行かっしゃりました」

「何の辺まで参っておろう」

「さあ、この宿を――外れたか、外れんかぐらいでござんし

ょう」

の侍は、軒下に陽を避けながら、何か囁いては、頷き合った。筆を、耳へ挟んで、立場の取締りらしいのが答えた。七人

「酒手をはずむから、急いでくれんかの」

「心得ました」

「てへっ、てへっ、今日は、女っ子が抱けるぞ。いい御天道

様だっ」

へ歩き出した。その時んとなく、だんだん胸騒がしくなってきた。そして、宿の方のとなく、だんだん胸騒がしくなってきた。そして、宿の方雲助達は、元気よく、駕を担いで走り去った。七瀬は、何

「ほいっ、ほいっ」

と、四人立の駕が、すぐ後方へ来た。七瀬が振向くと、駕

の中の人の眼が光って

何を愚図愚図

「トは?」と、叫んだ。益満であった。

「とっくに――今、敵の討手が、七人、吾々同志を追って参「夫は?」

ったであろうが――」

をかかげて走り出した。と、いう内に、駕は眼の前を行きすぎていた。七瀬は、裾

- 111

「追っつきましたぜ、旦那」

駕の中の侍は、 駕をつかまえて、身体を延した。そして

垂れを下ろして一

自分で、そういいながら、垂れを下ろしてしまった。 七梃

の中二梃には、 槍が立ててあった。

のは当然であったが、二人仕立同士の抜きっこは、止められ 同じ、宿場の駕として、四人仕立のが、二人立の駕を抜く

ていた。だが、酒手の出しようで、 駕屋は、 対手に挨拶をし

抜いてもよかった。七人の侍の駕は、 五梃の駕へ追いつ

くと

「 兄 弟、 頼むっ」

Ł 棒鼻が叫んだ。

おおっ — ―手を握ったか」

後棒が、振向いた。

「その辺

お互に、仲間の符牒で、話し合って、追い抜いてしまった。

大磯と、小田原の間、 松並木つづきで、左手に、遠く、

白く光っている所であった。

っていた。七百文の定賃に、三百文の酒手ではいい顔をしな 小田原から、箱根越の雲助は、海道一の駕屋として、 威張

を自慢にしていた。その裸の腕へ、雪が降っても、 いくらいであった。美酒、美食で、冬の最中にも裸で担ぐの すぐ、 、 消

「箱根泊りですかい、今から

えて行くのが、

彼等の自慢の第一であった。

不平そうな顔をして、 雲助がこういうのに対して

> をしながら、七人の姿を、ちらちら眺めていた。 と、云って、多分の酒手を出す外になかった。 雲助は支度

袷一枚に、兵児帯をしめて、二尺七八寸の刀を差していた。 七人は、軽装で、二人まで袴をつけていなかった。木綿の

「おかしな野郎だの」

駕屋は、仲間へ囁いた。

山 山 七梃の駕が、小田原を離れると共に、駕の中の人々が .へ入ってから、それとも―― この辺でもよいでないか」

とか

「その曲りっ角は

「山の中で、十分の足場のところでないと――」 話し合つた。だが、最初の駕にいる一人が

へかかった。駕屋は、 と、対手にしなかった。湯本から、登りになった。石段道 沈黙して、息杖を、こつこつ音立てな

- 112 -

がら、駕を横にして、

ゆるゆる登りかけた。

こで暫く休んだ。少しも、疲れていないようであったが、 一町か、一町半で、休茶屋があった。駕屋は、きっと、 そ

分に休んでからでないと、行かなかった。 右も、 左も杉林で、その下は雑草の深々としたところへか

かった。最初の駕の侍が 「駕屋、とめろ」

と、叫んだ。

此処まででよい 降りる」

駕屋は、 お互に

、怪しい奴だよ。 この野郎ら-

と、眼配せをした。

「吾々は、公儀御用にて咎人を討取る者じゃ。見物せい」

と、一人が、駕屋へ微笑して

「小田原の方へ降ることはならぬ。そっちへ――遠くへ離れ

ておれ」

と、命じた。そして、酒手を多分に出した。

「待て。駕屋、待てっ」

行手の叢から、侍が立現れて叫んだ。

をとった。そして、素早く、左脚を、駕の外へ出した。 最初の駕にいた男も、次の駕の男も、立てかけてあった刀

「奈良崎――」

草叢の中から出て来た侍は、こういって近づくと

「聞きたいことがある」

ら、奈良崎の背後に立って、その侍を、じっと睨みつけた。って、商人に化けた四人が出た。そして、四辺を見廻してか雲助が、急いで草履を持って来た。四梃の駕からも、刀を持、奈良崎は、黙って、刀を提げて、その侍の反対側へ出た。

木

奈良崎が、少し、顔を赤くして叫んだ。

「連れ戻るか、斬るかであろう」

一木は、冷たい微笑をして

は、

肩で呼吸をしていた。

「君公の命じゃ。何故、お主は無断で、旅へ出た」

一そういうことを聞きとうない」

「そうか――覚悟しておるのか」

「お身達、虎の威を借る狐とはちがう」

一木の顔色が動いた。

届出奔に及ぶ段、不届千万、上意によって討取る」「奈良崎、君公の御裁許も仰がず、濫りに私党を組んで

「そうか」

ら現れた。と同時に、草が動き、物音がして、人が、槍が、草叢の中かと同時に、草が動き、物音がして、人が、槍が、草叢の中か奈良崎が、足に敷いていた草履を蹴飛ばして、身構えする

「奈良崎、その外の浪人者も、手向い致すか」

七人は、槍と、刀とで、五人を取巻いた。

「たわけ――来い」

「芋侍なら不足はない」

五人は、刀を抜いて、背を合せた。

「そうか――是非も無い」

た。もう、走ることも、 ぼんやりと、だが、腋の下に、掌に、汗をかいて、 て来た。五人の駕屋は、立木の中へ入って、樹を掴みながら、 十二人は、無言で、お互の刀尖と、穂先とを近づけて行っ 一木が、こういうと同時に、六人の侍は、じりじりと迫っ 動くことも、 出来なくなっていた。 眺めてい

崎は、もう、額に微かに汗を滲ませていた。追手の内の二人一木は、右手に刀を提げて奈良崎の横へ廻って来た。奈良

誰も皆、蒼白な顔をして、眼が、

異常に光っていた。

かった。刀尖が二尺程のところまで近づくと、お互に動きも互に、最初の真剣勝負に対して、固くなっていた。懸声もなー槍は中段に、刀は平正眼に、誰も皆同じ構えであった。お

- 113 -

一木は、両手で、刀を持つと、刀尖を地につけた。示現流 勝負を決しよ

の使手として、斬るか、 斬られるか、 一挙に、

「やっ、やっ、やっ」

うとする手であったー

ように、斬り刻むように、両手で、烈しく振って 一木は、つづけざまに叫ぶと、刀尖で、地をたたきつける

ぐるみ、奈良崎へ、躍りかかった。 山の空気を引裂いて、忽ち大上段に、

振りかざすと、

身体

だった。

一ええいっ

来る手負獅子であった。後方へか、横へか-勢いを挫く外に方法がなかった。 木の攻撃は、 の極であった。それは、 避けて、その 躍りかかって

れずに、どっかを斬られるか、それだけであった。 もし、 受けたなら?-それは、刀を折られるか、 受けき

諸手突に、一木の胸へ、こっちからも、必死の突撃を加えるの斬込みに対して、斬らしておいて、突くという手である。 だが、たった一つ、相打になる手はあった。一木の、 決死

ことである。

はならなかった。 刀が、遅れたなら、 然し、それも、 冒険だった。 自分だけが真向から二つに斬られなくて もし、 一 分、 一秒、 奈良崎 の

れは、 の相違があればとにかく、 であった。生死の覚悟如何の問題であった。二人の間に格段 こういう時になると、それは技量の問題でなく、肚 場馴れているとか、 互角か、 いないとかの問題でなく、自分の 互角に近かったなら、 の 問 そ 題

命を捨ててかかった方が勝であった。

(ここを逃れて 牧を討たなくてはならぬ

と、考えている奈良崎に、この覚悟がなかった。

眼の凄さと、脚構えを見て

(さては —

最も、忌むべきものとされているものだった。疑う、惑う、 と、感じた瞬間、一寸、怯け心がついた。それは、剣道で、

怯ける――どの心が起っても、勝てぬものとされているもの

るのを見た。 生物の如く叫びながら、さっと延び、白く光って、 紫暗色をして、縮んでいた刀が、きえーっ、と、風を切って、 に、正面から飛びかかって来たのを見た。一木の両手の中に、 奈良崎は、一木の光る眼、輝く眼、決死の眼が、礫のよう 落ちかか

< った。それから、奈良崎の両手も、 一木の打ち込んで来る刀を支えようとした。 奈良崎は、避けた。それは、自分の命令で、避けたのでな 本能的に、反射的に、身体が勝手に、自然に避けたのだ 無意識に刀を斜にして、

片足を動かした時、 な光を放って、一木を睨んだ。その瞬間、 者の一人へ、身体がどんと、ぶっつかった。 たという感じとを受けて、 刀が、びーんと腕へ響いた。奈良崎は、 いた。奈良崎は膝をついた。そして、眼を剥き出し、絶望的 「卑怯、卑怯」 だがー - 奈良崎が、避けたはずみに、隣りの味方-太腿に、灼けつくような痛みと、突かれ 腰を草の上へ落してしまった。 膝を立て直そうと、 一木の打ち込んだ お互に、 よろめ 浪人

誰に叫んだのか、自分でも判らなかったが、こうでも叫ぶほ 奈良崎は、血走る眼、歪んだ脣、曲った眉をして、叫んだ。

か仕方がなかった。だが、一木は

「えい、えいっ、えいっ」

来た。奈良崎は、その隙間なく打降ろす刀を受けるだけで一 生懸命であった。二人とも逆上したように、憑かれたように、 る奈良崎へ、 それは殺人の魔に憑かれた人間のように、倒れかかってい 力任せに、つづけざまに、大太刀を打ち込んで

同じことを繰返していた。

「わーっ」

声であった。そして、すぐ奈良崎の頭へ誰かが斬られたらし い生あたたかいものが、小雨のように降ってきた。 それは、杉木立の中へ、反響して、空まで響くような叫び

「これでも――これでも」

一木は、歯を食いしばって、頭上のところで受けている奈

良崎の刀を、つづけざまに撲った。

人の絶叫と、懸声とが、人間の叫 びとは思えぬくらいに物

杉木立の中へ木魂していた。

眼は、ヒステリカルに光って、それは、物を見る穴でなく、 誰 の米噛もふくれ上っていたし、額からは汗が流れていた。

殺人的気魄を放射する穴に変っていた。

牧を討つのが目的であったし、もう一つ、地の利を対手に占 められていたし、 浪人達は、三重 第三は、 一の不利があった。 得物に槍の無いことと、 一つは、ここを切抜けて 人数の少

いことであった。

とうとするのと、その態度においてちがっていた。 負仕事で、一木以下の六人が隼人の面目をかけて、 だが、それよりも、もっと大きいのは、金で動いている請 対手を討

た。だが、 じりじりつめて来るのに対して、四人は、退るばかりであっ いた刀尖が、少し触れ、二三人は、懸声をしたが、 一木が、奈良崎に打込んだのを合図にして、双方の離 その中の一人は、 奈良崎が槍で股を突かれたのを 対手が、 れて

「何をっ」

見ると、

退いた浪人も、 と、絶叫して、その槍の浪人に斬りかかった。 草に滑った刹那 進む浪人も、

「ええいっ」

と鈍い音と共に、 右頭上八相に構えていた一人が、閃電 つつと上った血煙 の如く ぱあっ、

「うわっ」

叫んで、 と、遠巻にしていた旅人、駕屋が、自分が斬られたように 顔色を変えて、二三間も逃げた。

めいて歩み出て、すぐ、奈良崎の横へ倒れてしまった。 斬られた浪人は、首を下げて、手を下げて、二三歩、 よろ

うに、眼を剥き出して から血の噴出するのが遠くからでも見えた。 斬った男は、真赤な顔をして、 刀を振り上げて、悪鬼のよ

「こらっ、うぬらっ」

うに、狂的な獰猛さであった。 と、叫んで、三人に、走りかかった。それは、殺人鬼のよ 三人は、 同じように刀を引い

た。そして、逃げ出した。

「逃げるか、逃げるか。卑怯者、卑怯者」

走った。旅人は、周章てて、木立の中に飛び込んだ。追われる者も、草に滑り、石につまずき、凹みによろめいて、八人は、お互に絶叫して、猟犬の如く追った。追う者も、

「待て、卑怯なっ、待てっ」

に走れないので、こう叫ぶと、槍を差上げ(一人は、刀を押えて、槍を持って走っていたが、思うよう)

「うぬっ」

の腰に当ったが、石の上へ落ちて転がってしまった。蛇のように、穂先を光らせて、飛んで行った。そして、一人と、叫んで、投げつげた。槍は、獲物に飛びかかって行く

「馬鹿っ」

追手の一人が、振向いて、槍を投げた男に

「股を目掛けて、何故投げん」

――素早く、振向いたその男が、片手薙に、身体も、刀も、追いついて、片手突きに、その背中を突いたが、間髪の差と、睨みつけた。その途端、一人の追手が、浪人の一人に

背後から突かれたように、手を延したまま、どどっと、前へ廻転するくらいに払ったのが、見事、胴に入った。討手は、

「やったな」

れてしまった。

と、一人が叫んだ。

田原の立場でといって、すぐ、益満の後を追った。小七瀬は、綱手をせき立てて、すぐ、益満の後を追った。小

「箱根まで――

と、いうと、人足達は

「秋の陽は、短いでのう」

と、渋っていたが、それでも、七瀬の渡した包紙を握ると

「やっつけるか」

河原を、左に湯本へ行くと、駕屋は、草鞋を新しくして、鉢と、いって、駕を出した。荒涼とした、水のない、粗岩の

巻をしめ直した。

道は、木蔭の湿りと、木の露とで滑り易かった。 湯本から急な登りになる石敷の道は険しかったし、赤土の

「おう」

と、駕屋が、振向いて、後棒へ

「妙ちきりんなものが、現れましたぜ」

の侍は、八郎太と小太郎とを討取った戻り道のような気がしうに、道傍を、ゆっくり登って行った。七瀬も、綱手も、そ駕屋は斜にしていた駕を真直ぐにして、その侍を避けるよ持って白布で頭を包んだらしい侍が、急ぎ足に降って来た。その声に、綱手が、駕から覗くと、遠くの曲り角へ、槍を

- 116

「綱手、あの方は、御邸の一木様ではないか」

て、胸が高く鳴り出した。

コ頓がと、いった時、もう、一木は、駕のすぐ間近まで来ていた。

「はい、

お母様

七瀬が

足を出して、降りかけながらと、声をかけて、駕が止まるか、止まらぬかに、駕の外へ

「一木様一

と、叫んだ。

一木は、答えないで、七瀬へ、冷たい一瞥を送って、行き

すぎようとした。その途端、綱手が

「一木様っ――それは」

と、叫んだ。一木の左の腰に――それは、確かに、首を包

んだ包と覚しいものが、縛りつけてあった。七瀬は、駕を出

「卒爾ながら-

一子優かれ

一木は、七瀬を、睨んで立止まった。

「仙波八郎太に、お逢いではござりませんでしたか」

「仙波?」

一木は、右手の槍を、突き立て

「仙波とは――ちがう。仙波へは、別人が参って――」

別人とは?」

「別の討手――気の毒であるが、御家のためには詮もない」

「そ、その討手は、貴下様より、先か、後か?」

綱手は蒼白になって、七瀬の横に立っていた。駕屋は、眼

を据えて、一木の顔を見ていた。

「前後?」

一木は、脣で笑って

「敵の女房に、左様のことがいえようか。聞くまでもない。

無益なことを――」

口早に、いうと、ずんずん降って行った。二人は、暫く眼

「急いで――急いで」

を見合せていたが

と、憑かれたようにいいながら、駕の中へ入りかけた。

「合点だっ」

駕屋は、肩を入れると

「馬鹿っ侍、威張りやあがって」

と、呟いて、足を早めた。

「びっくりしたのう、おいら」

「何をっ。吃驚って、あんなものじゃねえや」

「何?」

「手前のは、ひっくり、てんだ。下へ、けえるがつかあ」

「おうおうおう、涎を滴らして木へしがみついて居たのは誰

だい

「それも、手前だろう」

旅人達は、一団になって、高声に話しながら降りて来た。

そして、七瀬と、綱手の駕を見ると、一斉に黙って、二人を、

じっと見た。七瀬が

と、一人へ声をかけて

「お尋ね申します」

「只今のお話、もしか、斬られた人の名を御存じでは――ご

ざりませぬか」

「斬られた人の名前を、知ってなさる人は居ねえかの」旅人は、立止まって、二人を眺めていると、駕屋が

「のう、名は判らんのう」

又っれこうだっていた。「名は判んねえが、齢頃は、三十七八だったかの、あの首を

取られた人は」

「三十七八? 何をこきゃあがる。二十七八だい」

「こいつ、嘘を吐け。昔っから、生顔と、死顔とは、変るも

のと云ってあらあ。二十七八と見えても――」

と美人に化け、 「物を知らねえ野郎だの、 人間 の首ってものは、十ぐらい齢をとるんだ。女が死ぬ 男が溺死すると、土左衛門と、相場がきまっ こん畜生あ。二十七八だが、死ぬ

「手前、首だけしか見ねえんだろう。俺、最初から見ていた

んだ」

てらあ」

七瀬が

「その中に老人が―

「老人も、若いのも、 いろいろいたがね。 奥様。まず、こう、

その駕、待あて、と」

「おうおう、芝居がかりかい」

「待てと、お止めなされしは?」

「音羽屋っ」

東西東西、静かにしてくれ、ここが正念場だ」

旅人は、七瀬が、綱手が、何う考えているかも察しないで、 じろじろ見ながら、 巫山戯ていた。

「その、果合の場所は?」

綱手を、

Ł 七瀬が聞くと

「この二三町上でさあ。 のう、 待てと、 お止めなされ しは

「おや、眼を剥いたよ。豆腐屋あ」

有難う存じました。 駕屋さん、 急いで

駕が上った。

いい御器量だのう」

「吉原にもいまい」

「ぶるぶるとするのう」

「首を見ては、ぶるぶる、女を見てはぶうるぶる」

ころに、旅人が集まっていて、菅笠や、手拭頭が動いていた。 話を、声高にして、行った。駕が、山角を曲ると、草叢のと 人々は、遠ざかった。行きちがう人々は、 悉 く、血 腥い

「あれだっ」

夫と、父とが、子と、兄とが、 いた。いないとわかっていても、 と、駕屋が、叫んだ。二人は、駕の縁を握りしめながら、 その中にいないように祈って 何んだか、どっかで、斬ら

れているような気がした。

四梃の駕が、急いでいた。そのすぐ後方から、一梃の駕が

頼ん」

た。一梃抜き、二梃抜き、三梃目のを抜いた時、 と、声をかけて、崖っぷちを、 擦れ擦れに追い抜こうとし その駕の中 - 118

の侍が

「待てっ、待てっ、待てっ。とめろ、 と、怒鳴った。駕屋が、周章てて、駕を止めると 止めろっ」

「益満っ、待てっ」

て、抜いて行った駕を、 三梃目の侍が、 刀を提げて、 追うと同時に、 駕から、 他の人々も、 跣足のまま跳び降り 駕を出

て、走りすがった。

「その駕。

待てっ、益満」

満が、 六七間のところで叫ぶと、抜いて行った駕がとまって、益 口から煙草の煙を吐きながら、 駕の中から振向いた。

そして

**゙**おおっ」

と、微笑して

「これは、御無礼」

追って来た侍は、真赤な顔をして、袴を左手で掴み上げな

「出い、駕を出い」

がら

が、腕捲りして、三人、益満を睨んで、三方から取巻いた。益満は、頷いて、刀を左手に、駕を出た。見知らぬ浪人者

駕屋が、恐る恐る、駕を人々のところから引出して、道傍で、

不安そうに、囁き合っていた。

「何れへ参る?」

「さあ、何れへ――」

益満は、ゆっくり、腰へ刀を差してから、喫い残りの煙管

「当途も無く」で、口へ当てて

「何っ、当途も無く?――御重役へ届け出でてお許しが出た

「いや、その辺、とんと、失念仕って――」

「こやつ、引っ捕えい」

侍は、一足引いて、浪人達に、顎で指図した。益満は、

煙

を吹き出しながら

『引捕える? 暫く暫く、一寸、一服して――こうなれば、

尋常に——

つと音させて、それから、懐の煙草をつまみ出して度叩いて、灰殻を落した。そして、舌の先へ当てて、ぶつぶと、いいつつ、大刀の柄へ、煙管を当てた。とんとん二三

「暫時。今一服」

いるの外になかった。益満は、燧石を腰の袋から取出してと、いって、雁首へつめ込んだ。四人の侍は、黙って見て

「ゆっくり眺めると、いい景色でござるが」

火をつけて、一口吸って、一人の浪人の顔へ、ぷーっと、

煙を吹っかけた。

「斬る」「何を致す」

えている手から、血が土の上へ洩れていた。はよろめいて、顔を押えて、よろめきつつ、走り出した。押かけた瞬間、益満の煙管は、一人の鼻へ当っていたし、一人三人の浪人が、この益満の言葉に、一足退いて、刀へ手を

げ出して、前へ転がってしまった。もう、遅かった。膝頭を十分に斬られて、刀を、草の上へ投直す隙もなく、片手で益満の返した刀を止めようとしたが、気ー人が、躓きつつ、後方へ退って、抜いた刀を両手で持ち

「手向い致すか」

侍が、絶叫した。

を向けた。浪人者は、煙管に打たれて、鼻血を出しながら、益満は、同屋敷の侍を振向きもせず、残りの浪人者に、刀「小手をかざして、御陣原見れば、か。行くぞ、行くぞ」

じりじり退りかけた。

真中まで出ると、自分の投げつけた煙管を左手に拾い上げた。ていた。益満は、片手で、刀を真一文字に突き出して、道の益満は、じりじり浪人を追いつめた。浪人は、蒼白になっ

れたように堅くなってしまって、恐怖心だけが、あふれていに、すっかり圧倒されてしまっていた。頭も、身体も、しび侍も、浪人も、二人を一瞬に斬った益満の腕と、その態度と

音させつつ、右手の刀を、浪人の咽喉の見当へ三尺程のとこ益満は、左手の煙管を口へ当てて、舌の先で、ぽっぽっと

方が危い、もっと、左へ、そうそう」「たって斬ろうと申さん。逃げるなら、逃げるがよい――

後

ろから、ぴたりと当てて

つけながら、微笑して取出した。そして、刀と短銃とを左右に持って、二人へ突き刃を左手に持ち直した。そして、懐へ右手を入れて、短銃をうに、ぴたりと膠着していた。益満は、煙管を口にくわえて、益満の刀の尖と、浪人の咽喉とが、何かで結ばれているよ

「駕屋っ」 えるように、感じられるだけで、何うする方法もなかった。か?――頭も、身体も、ただ、苛立たしさと、恐怖とが、燃ニ人は、駕屋さえ居なかったなら、逃げ出すか、謝罪する

益満は振向いた。

「勝負有ったのう」

「駕人足の云うことにゃ、か。陽は、暮れかかる。腹は、駕屋は、両手を膝までおろさんばかりにして、頷いた。

す

――駕っ」 く。勝負も、すでに見えました。私ゃ、本郷へ行くわいな

抱えて行ってやるがよい。今後、濫りにかかるなよ。仙波小「これは、往生しておる。そちらのは膝だけじゃ。二人で、

太郎などは、某よりも、業が早い」

「受い、て・こうでは、一つでいた。益満は、駕へ入ってげて、同じところに佇んでいた。益満は、駕へ入って善侍と、浪人とは、益満を、じっと睨んだまま、刀を下へ下

「吃驚、致したか」

と、駕屋へ笑いかけた。駕屋は、ぶるぶる脚を震わせてい

たが

「へえ」

膝も、がくがくふるえていた。と、答えたまま、容易に駕が上らないようであった。手も、

「何うした」

「へつ」

ようよう一足歩き出した。その時、益満が、丁度振返った。た。片膝を斬られて歩けない浪人は、左右から扶けられて、二人の侍は、倒れている浪人を、肩にすがらせて立上らせ

てして

「おーい」

「片脚ゃ、本郷へ行くわいな、と申すのは、そのことじゃて、と、呼んだ。三人が益満を見ると、益満は微笑して

あはははは」

は 小走りに走り出した。

妾ゃ吉三に惚れました、娘のお七のいうことにゃ、

月に一度の寺詣 ij

っていた。 益満は、 腕組して、 駕に凭れかかって、 小声に、 唄をうた

血が淀んでいた。その中に一つの、 草は踏み躙られていた。所々に、醤油のような色をして、 首の無い、醜くて、 滑稽

な感じのする死体と、 首のあるのとが転がっていた。

肩から覗き込んだり、 その周囲は、人がいっぱいで、口々に、話しながら、 血の淀んでいるところを探しては 人の

「ここにもある」

連れの男を、 と、叫んでみたり――女達は、そうしたことに騒いでいる 腹立たしそうに呼んで、眉をひそめたりしてい

下には、 一つの死体の胸には、小柄が突刺してあった。その小柄の

依御上意討取者也。薩藩士、一木又七郎、紙切が縫いつけられていて、それに

書かれてあった。七瀬と綱手とが、駕かち降りて、人

「心当りの者でござります。 と、挨拶して、人垣を分けた。 少し、 拝見させて下さりませ」

除けよ、この野郎。心当りのあるお嬢さんが御通行だ」

一人は、綱手の顔を見て、連衆の耳を引張って、道を

あけた。

「お嬢さん、首がござんせんぜ、判りますか

黙って、臍の上に、ほくろがあるんだ」

「おやっ、手前知ってるのか」

首を切られるか、 「毎朝、銭湯で逢わあ。 切腹するかにきまったもんだ。ちゃんと、 臍ぼくろって、臍の上のほくろは、

三世相に出てらあ」

一人は、 小声で

「どっちかの、御亭主だぜ。気の毒に」

「この間抜け、 一人は生娘だ」

「生娘だって、 亭主持があらあ ほうら、 娘の方が紙を引

っ張った」

「読めるかしら」

「手前たあ、学文がちがわあ」

「何を、こきあがる。俺だって、ちゃんと読んでらあ。斬ら

れた奴は、一木ぬ七って人だ」

人垣の外の人々が

綱手と、七瀬とは、

紙切を読んで、頷き合った。

その時

「来た来た、又来た」

を、駕の中へ入れて、灰色の顔をしながら、 を爪立ちして見てみた。五人の侍が、一人の手負らしい、 と、どよめいた。二人は、立上って、人々の眺め 急ぎ足に近づい ている方

て来た。

「ええ、あの方は あれは?」

二人とも、名は知らないが、同藩中で、 顔見知りの人が一

人いた。七瀬がすぐ近づこうとした。綱手が

「お母様、 もしものことが一

「でも、気にかかるゆえ――真逆、女を斬りもしまい」

七瀬は、こういいすてて、 懐剣の紐を解いて、すぐつづいた。群集が、ざわめいた。 小走りに駕の方へ行った。綱手

駕脇の一人が、一人の旅人に

「この辺に、二十七八の侍がおらなんだか」

聞いた。七瀬が、 歩きながら

「一木様は、先刻、お下りになりました」

いった。侍は、 二人の顔を見て、じっと睨んで

「仙波の家内か」

「そこの死体に、一木様が、何かお書付けおきなされました。 誰から

あの、 お疵は、 かがしてお受けになりましたか、

「左様のこと、聞かんでよい」

侍は、 ずかずかと、 死体の方へ歩いて行った。

お逢いなされましたか」

「煩いっ、ぶった斬るぞ」

振返って睨みつけた。

七瀬と綱手は駕を急がせた。

ああれ、又だ」

と、先棒が叫んだ。と、同時に、

おっかねえ。睨んでるぜ」

七瀬も、綱手も、 、道の傍に二人の侍が立っていて、 凄い眼 その真

一人がうずくまっているのを見た。二人とも、

中に、

をして、 駕の近づくのを、 じっと見ていた。 駕が、 二三間の

ところまで行くと

一御無体ながら

矢張り、 と、一人が叫んで、 同じ家中で、 見た顔の一人であった。 駕の中を見た。七瀬は、 Ł はっとした。 同時に、

その侍が

「待て、駕、待てっ」

と、道の真中へ出て、 両手を拡げた。

゙待ちやすっ」

顔色を変えた。

降りろ」 四人の駕屋は、

七瀬も、綱手も、懐剣へ手をかけた。 駕屋が

「旦那、手荒いことは

駕屋は、駕が血で汚れるのを恐れて、 二人が駕を出るが早

いか、木立のところへ運んでしまった。

| 駕屋、動くことならんぞ|

と、一人が、 刀を抜いた。 草の上にしゃがんでいる侍が、

一人を見た。

御用は?」

七瀬は、蒼白になって--だが、 静 かに聞

「御用? 一御用もないのに、 仙波の家内などに用はない」 何故、 降りよと、

仰せられました」

「 何 ?

駕屋つ、 侍は、七瀬を睨みつけておいて この手負を、 湯本まで運んで参れ」

これは、 御無体な、 この駕は、妾が――

侍は、七瀬にはかまわないで

「愚図愚図致すと、斬り捨てるぞ」

と、駕屋へ怒鳴った。

「へい」

駕屋は、顔を見合せて

「済みませんが」

と、七瀬へ、腰を曲げた。 侍 が、 棒鼻へ手をかけて

「早くせい」

へいっ」

駕屋が、駕を上げた。

「お侍ちなされませ、女と侮って、 薩摩隼人ともあろうもの

人の物を強奪して――」

「強奪? 無礼者」

一人は、駕から手を放すと、 七瀬の胸を突いた。 七瀬はよ

ろめいた。

「何をされます」

甲高く叫んだ。 綱手が

お母様

叫んで、七瀬の前へ立った。ぶるぶる顫える脣をしめ

て、侍を睨んだ。

「旦那、手荒いことは」

駕屋が、侍を止めた。

素浪人分際の女として、 無礼呼ばわり-

゙これが無礼でなくて――」

七瀬が、ふるえ声でいった時、一梃の駕が、手負のと

ころへ行き、一人が、手負を抱いて駕の中へ入れた。綱手は、

母を片手で押えながら

「駕は、二梃共、御入用?」

侍は、落ちついた綱手の態度と、その美しさと、 物柔かさ

とに、挫けながら

「一梃でよい― 一無礼な」

呟いて、駕の方へ去った。七瀬は、身体を顫わせてい

「お母様、 お駕へ。妾は、歩いて参ります」

「あれっ、彼処に一人死んでいる」と瀬は、涙をためて、侍の方を睨んでいた。

駕屋は指さして、低く云った。

遥かに、芦の湖が展開して来た。沈鬱な色をして、 低い灰

色の雲を写していた。

「益満氏、益満氏ではないか」

後方から、絶叫した者があった。益満が振向くと、右手に

右手を挙げた。浪人が、近づいて

刀を提げた三人の浪人が、走って来た。

益満が、駕の中から、

「奈良崎氏と、羽鳥とが、やられた」

「刀を拭いて――関所が、近い」

三人は、刀を拭いて納めた。

「ここへ来る道で、一人は膝を切られ、二人は無疵 で|

怪しいとは存じたが、

睨

み合ったままで、擦れちがった」 「逢うた。お互に、顔を知らぬし、

「女二人に、 一人は四十近い、一人は十八九の」

「それとは、死体の転がっていた辺で――」

「ゴージョ、貳川、益満は、頷いて

「何うじゃ、真剣の味は?」

「駕屋、咽喉が乾いたが、その水を」

一人が、駕の後方に、下げてある竹筒の水を指した。

「さあ、お飲みなすって。大層、血が――

「少しかすられた」

三人は、そういわれて、自分達の疵の痛みを感じてきた。

交る交る竹筒の水を飲んで、着物を直しながら

「凄かったのう、あの示現流の、奈良崎を斬った男の腕は」

「一木か、あれは出来る」

と、益満は答えて

と、盆流に答うて

「駕屋、もう六つ近いであろう」

「へえ、空の色から申しますと、もうすぐでござります」

駕屋は顔色を変えていた。

「関所の時刻に間に合うか」

駕は、急坂の石敷道へかかっていた。駕屋は、駕を、真横

担いにして、一足ずつ降りかけた。

「さあ、但州、何うだの」

「さあ、急いだら、然し、何うかのう」

益満は、手早く、金を取出して

「降りる。駄賃は、町までのを、これは、別に口止料」

「経」に思って。これだ、引いなっていつ。」と、いって、金を差出して、片手で駕をたたいた。

「降りて走ろう。走れば、間に合うであろう」

益満は、駕を出て、金を渡しながら聞いた。

「ええ、それなら、十分に。旦那、こう多分に頂かなくても、

喋りゃ致しませんよ――」

参ったなら、某は仙波へ、急を告げに参ったが、明朝すぐに日のうちに通らねばならぬ。それから、もし、仙波の妻子が「貴公達は、賽ノ河原辺で宿をとるがよい。某は関所を、今

「口早に、こういうと、益満は、駕屋の礼を後に、引返すからと、申し伝えておいてもらいたい」

急坂を走

雲が少しずつ暗くなりかけて、水色の沈鬱な湖面は、すっ

り降りて行った。

かり夜の色らしくなりかけてきた。

い、夕靄の薄くかかった中を、小走りに急いだ。かっていることを告げてやりたいと、湖を右に、杉木立の深であった。益満は、一足早く旅へ出た仙波父子へ、討手のか箱根の関所は、冬も、夏も、暮六つに、門を閉じる慣わし

た。門は、まだ開かれていた。 石垣、その上に、その横に連なっている柵、高札場が見え

面番所前の飾り武器、周章てて門を出て来る旅人。

(間に合った)

と、益満が思った瞬間、二人の足軽が、急ぎ足に門へ近づ

「待てっ」

くと、扉へ手をかけた。

と、益満が叫んだ。だが、門は、左右から、二人の足軽の

「急用だっ」手で閉りかけた。

益満が門へ着いた瞬間、門が閉まった。

「急用じゃ。済まぬが、開けてもらいたい」

益満は、

柵の間から、

足軽へ頼んだ。足軽は、

門を押えた

124 -

ままで

「公用か」

「公用ではないが――」

足軽は、 黙って、閂を入れた。

<sup>「</sup>命にかかわる事じゃから」

足軽は、 返事もしないで、錠をかけ、 鍵を持って去ってし

まった。益満は、すぐ。踵を返した。

汚かった。軒下の常夜燈の灯も、 関所手前の旅宿は二軒しか無かった。 薄暗くて、 二軒とも、 番頭も、女中も、 小さくて

無愛想で、足早に近づく益満

「お泊りかえ」

と、眠むそうにいっただけであった。

「今しがた、女が二人、着かなんだか」

女中は、首を横に振った。

「三人連れで、一人は侍、二人は商人風の者は?」

女中は、番頭を振返った。

その方なら、ただ今、 お着きになりました」

番頭は、 帳場の中で、 火鉢を抱いたままで答えた。

「そうか」

お連衆でございますか」

いいや」

益満は、それだけ聞い て、 表へ出た。

ちょっ、

狼が出るぞ」

と、番頭が、呟いた。 益満は、 その隣りの表から

|女連れ二人が泊っておらんか|

「十八九の美しいのと、四十がらみの」

いえ、 お泊りじゃござりません」

女中は、じろじろと、益満を眺め廻していた。

〈時刻から申せば、二人は、もうこの辺へ着かなくてはなら

んのに も負わされたか-一途中で、 - 今夜小太に逢えぬとすれば、せめて、二 悪雲助共に逢うたか、 討手の奴等に手で

人に逢いたいが――)

旦那、 お泊りじゃござんせんか」

「少し、尋ね人があって――」

なった湖畔を、提灯も無く、 かけているところを折れて、急坂にかかろうとすると、 益満は、そう答えて、街道へ出た。そして、すっかり暗く 歩き出した。角の茶店の仕舞い

の灯が見えた。

(あれかも知れん)

と、足を早めて、提灯を見ると、それは駕屋のものでなく

定紋入りの提灯であった。益満は、素早く杉木立の中へ入っ た。人声が近づいた。提灯のほのかな灯でみると、それは、

大久保家中の人々らしく

「ようよう着いた。慣れた道じゃが、疲れるのう」

「薩摩っ坊め、下らぬごたごた騒ぎをしやがって、 彼が 女との

約束が、ふいになってしもうた」 「それは、 御愁傷様、 拙者には又、

箱根町に馴染があっての

「又、色話か」

った時にたのむ」 「話は、これに限る。 貴公の、 斬口の、 鑑定は、 女と手を切

「然し、見事に斬ってあったのう。薩州の示現流

人々は、 話しながら、通ってしまった。

日取調べられるであろう――いいや、この身も危い。 (もう、小田原から役人が来た。宿にいる三人は、 旦、二 山越に、

今夜のうち、三島まで、 のすか)

て来た。 小さい提灯が一つ、ゆっくり、 坂途を降り

していた。 提灯の、 益満は、ずかずかと、 微かな灯影の中にでも、綱手の顔は、 近づいて 白く浮き出

お出迎えに――」

と、いって、びっくりして、益満の顔を見た綱手の眼へ、

合図をしながら

すが、うっかりしたことは出来ませぬ」 いましたそうで、たゞ今、役人が、その侍を取調べておりま 「心配致しました。 余り、 お遅いので。途中で斬り合がござ

口早に、 小腰をかがめて、 七瀬と、 二人にいった。

「ほんにー

二人は、益満の肚がわかった。

駕屋、済まんのう」

いいえ」

「さあ、 お嬢様、 手前、 そこまで背負って参りましょう」

いいえ」

から、 られた。だが、綱手は 益満は、背を出した。綱手は、赤くなった。益満の、着物 頸筋から臭う、 汗と、 体臭とが好もしく、 綱手に感じ

「歩きます」

けて、 引寄せると、よろめいて、 手を、益満の肩へかけて、 身体を反らしたが、そのまま、背へのせられると、思 いった。然し、益満が、綱手の腰へ、後ろ手に手をか もたれかかった。そして、 胸を、 脚を、 益満の身体へ

押しつけた。そして、真赤になった。

「いいえ、歩きます」

ると、すぐ、次の瞬間、二人の肌も融け合い、 自分の暖かみと、益満の暖かみとが一つに融け合うのを感じ であった。このまま、じっと抱きしめて欲しかった。綱手は、 綱手は、足を開くのが恥かしかった。だが、 二人の血が一 離れるのも厭

(誰も居なければ、よいのに――)

つになって、流れているような気がした。

と、思った。だが、 すぐ、 右手で益満の肩を押して

歩けます」

強くいった。

「では

益満は、曲げていた身体を延し、綱手の腰から手を放した。

綱手は

(放さない もっと、 強く、 長く、 抱き締めていてくれた

と、思った。

もう、 すぐでございますから 駕屋、 そろそろと、

てくれ」

益満は、 先に立った。 綱手は

(益満様に、 恋をしたのであろうか-隣同士の家にいる内

は、 ただ好きな人であったが)

と、思うと、母に顔を見られるのが、 気まり悪くなってき

らのう」

た。益満が、いつか

「娘時分と申すものは、手当り次第に、 間近い男に惚れるか

と、小太郎と、話していたのを思い出して、胸を打たせた。

(益満様なら、不足のない)

思うと、同じ家中で、 許嫁などとなっている人々のこ

とを思い出して、八郎太が

「益満はよいが、品行が悪いし、家柄がちがうし――」

いった言葉が、恨めしくなってきた。と、 同時に、益

満が

「御家のためには操をすてて」

いったのも、恨めしくなってきた。

小太郎にお逢いなされて?」

七瀬が聞いた。

刻限がきれて 然し、 明日、 もう一追い仕りまし

よう

宿の前に人だかりしているのが見えた。 さっきの茶店は、店を閉じてしまっていた。 角を曲ると、

するため、 益満が、その隣りの旅舎に駕をつけると、隣りの騒ぎを見物 と、荒い足音と― の人影がうごめいていた。それから、 宿の表は、三つ、四つの提灯の、ほのかな灯の中に、 軒下に立ったり、往来へ出て見たりしていた宿の ―表の人々は、口々に、騒ぎ合っていた。 家の中には甲高い叫び

> 番頭が、 周章てて、 駈け寄ってきた。

「お疲れ様で」

「先刻のお方様で」

とか、という御世辞を聞き流して、奥まった部屋へ入った。

七瀬とは、不安そうに、宿の人々が、部屋から出てしまうと、 表の人声と、ざわめきとは、 未だ止まなかった。

七瀬が

「まあ、嬉しいやら、びっくりやら― ―何んと思うて、あの、

下僕の真似など?」

「隣りの騒ぎを御存じか」 「御存じか、とは?――騒いでいるのは、判っておりますが

が、 世の中の常で、一つの仕事を成就させるには、こうした蹉跌 に一寸遅れたばかりに、小太郎にも逢えず――然し、これが、 「わしの手下の者が捕縛されたのじゃ、 いろいろと起る。綱手、そいつにめげてはならぬ」 小母御。 関所の刻限

して現れ出づ、男子の真骨頂。いよいよ益満が、軽輩を背負 「国乱れて、忠臣現れ、家貧しゅうして孝子出づ。苦難多く

益満は、脚絆を畳んでいる綱手を見ながら、茶を飲んで

って立つ時が参った」

ら、こう云って笑っているのを見ると、 んとなく、心丈夫であり、頼もしく思えた。 益満が、三尺余りの長刀を撫して、柱に凭れて腕組しなが 七瀬も、 綱手は 綱手も

(益満様なら、夫にでも――)

と、心の中で囁きながら、さっき山の中で、生れて初めて、

ぴったり、肉に、肌に、 した。そして、益満を、 そっと盗み見した。 血に触れ合った男の暖かさを思い出

ば、 いて、 行けば、大井川までは、首尾よく参ろう。ここを無事に通れ 石の如き親爺がついておる。これが、一見頑固無双に見えて 七人を対手にして、斬られる奴でもない。それに、こつこつ にもせよ、 「討手は、小太郎に、もう追いつく時分でござりましょうか」 「追いつくかもしれぬ。追いつけぬかもしれぬ。然し、何れ 京までは、 なかなか変通なところがある。 、小太も、 相当に、心得はある。やみやみ、五人、 本街道を避けて、裏を

こういっている時、 先ず無事――」 旅舎の番頭が

それから、関所切手――なかなか、きびしゅうござりますゆ か御便宜を 「明日、早朝お立ちでございましょうか。御弁当の御用意、 もし、 御都合で、お持ちがなければ、手前共で、何んと

といって来た。

人足とを、御頼み申します。時刻は、六つ前 「切手は、持っております。 御弁当と、それから、 達者な駕

「かしこまりましてござります」

隣りも、下も、もう、蒲団を布く音を響かせてきた。 番頭が立去ると、早立の客達は、風呂へ入って寝るらしく、

ながら、廊下を、 敵党に根本的打撃を与える方法を のことを、それから、二人で暮している空想を 七瀬は、小太郎のことを、八郎太のことを、綱手は、 轟かせて蒲団を運んで来る女中達の足音を、 ――お互に、それぞれ考え 益満 ば、 益満

黙然と聞いていた。

刺客行

てい 大井川 の川会所の軒下には、 薄汚れの した木の札がかかっ

帯上通水、九十五文
おびうえとおしみず、

暗い奥の方、会所前の茶店の辺には、川人足が群れていて、 が、横柄に、旅人の出す金と、 旅人の川札を眺めては からであった。汚い畳敷の上へ台を置いて、三人の会所役人 書いてあった。今日の川水は、渡し人足の帯まで浸す 川札とを引換にした。その横、

「荷物は、 何れでえ」

とか

「甲州。われの番だに、 何を、 ぞめぞめこいてやがる」

とか、怒鳴っていた。

带上通水、带通水、带下水、股通水、股下通水、膝上通水、 大井川を渡る賃金は、水嵩によってちがっていて、乳下水、

賃金は、 膝通水と分れていた。そして、一番水の無い、膝通水の時の 人足一人が四十文で、乳下水に少し水嵩が増すと、

川止めになるのであった。

川会所の前には、そういう人々でいっぱいだった。 水嵩が増しそうな気配だと云うので、旅人達は急いでいた。 役人が

と、叫んで、

元気よく答えて、だらだらの砂道、 木札で、台を叩いた。五六人の人足が 草叢の中に置いて

ある平輦台の方へ走って行った。一人の人足が、群集の前に、

編笠を冠って立っている二人の侍に

一あちらへ」

と、御辞儀した。

「急ぐぞ、人足」

の方へ降りて行った。その会所の前の茶店から、 そういって、侍は、すぐ、その人足の後につづいて、河原 一人の若侍

が立上って、二人の侍の後姿を見ながら

「父上、あれは、池上氏と、兵頭氏では\_

Ł 振向いた。

「似ている、そうらしい」

「見届けましょうか。何んなら、同行しても――」

さ|

川会所前の群集の中へ、割込んで来て、駕の中から 小太郎が、一足出ようとした時、 勢 いのいい 五梃 の駕が、

「輦台、五梃、急ぐぞっ」

素早く、駕の外へ出た。八郎太は、歩きかけた小太郎に と、怒鳴る声がした。そして、垂れが上ると、一人の侍が、

「待て」

そして、二人は、街道を背にして、低い声で から出て来る侍を見て、急いで茶店の中へ入って、腰かけた。 と、声をかけた時、小太郎は、その侍の顔を見、 次々の駕

四ツ本の下の奴でないか」

「 は い

急ぐ模様だが 二人は、五人の侍に見つからぬように、 顔を隠して

と、云った時、一人の侍が、川の方を見て

居る、 あの二人が一 相違ない」

と、四人の者に、 川を指さして振向い

人足、 急ぐぞっ」

一人は、刀を押えて、 磧の方へ小走りに歩み出した。

「今渉るところだ」

「川の中で追っつけよう」

人が、前の二人の連衆だと思っていたが、 人々は、群集の中で、声高に、こう叫 んだ。 仙波父子は 旅人達は、 五

「討手だ」

と、信じた。

「小太、油断がならぬ

八郎太は、手早く編笠をきた。

ŧ 池上と、兵頭との輦台は、川の中央まで出ていた。二人と 刀を輦台へ凭せかけて、腕組をしていた。

冷たい秋の川水の小波を、 いていた。 川人足は、行きちがう朋輩に声をかけながら、臍の辺に、 白く立てつつ、静かに、平に、歩

に乗って以来、何十年目かの肩車に、 水へ届きそうになるのを気づかいつつ、子供の時、父の肩車 つつ、川水を乱し立てて、 その穏かな川を渉る人々の中を、 人足の肩に跨がり、 頭に縋りついている旅人達は、 突進した。 五台の輦台が、 不安を感じていた。 声をかけ 着物の

いう懸声の間々に ほいっ」

「頼むっ、頼むっ」

輦台は突進して行った。その上に乗っている人々は、刀を押と、肩車で渉って行く、渉って来る人足に、注意しながら、

えて、誰も皆、前方を睨みつけるように見て

「急げっ、急げっ」

と――中の一人は、刀の鐺で、そういいつつ、こつこつ、

川人足の肩をたたいていた。

の中から、この七台の輦台を眺めている。仙波父子は、茶屋の横へ廻って、松の影の下の小高い草叢

「五人では討てまい」

| 「下下が、玄・この | 「下下が、玄・この

八郎太が、呟いた。

'助けに参りましょうか」

大事の前の小事じゃ。わしが指図するまで、手出しはならぬ」「求めて対手にすべきではない。よし、二人が殺られようと、

「益満は、何うしておりましょう」

の考え通りに行くものでもない。日取りからいえば、もう、「あれも、一代の才物じゃが、世上の物事は、そうそうあれ

以上、妻も子も、助かるとは思えぬ。恩愛、人情、義理をす追っつく時分じゃが、お上からも、こうして討手の出ている

てて、ここは、京まで、万難を忍んで、牧を討つべき時じゃ」

「はい」

も、身の破滅になる」「それに討手は、主持ち、わしらは浪人者じゃ。一人殺して

「心得ました」

「あれっ、あれっ」と、いった時

「喧嘩だ」

に近い、どよめきとが起った。と、いう声と同時に、人々の走り降りて行く姿と、鬨の声と、いう声と同時に、人々の走り降りて行く姿と、鬨の声

「やるっ」

しく、きらきらと光る刀が、五人の手に、躍っていた。へまで近づいた二人の輦台は、五人の輦台に追いつかれたら、八郎太が、低く叫んだ。向う河岸へもう四分というところ

「斬合だっ、斬合だっ」

誰も、彼も、川を渉るのを忘れて、眺めていた。川水を乱して逃げ出しかけた。少し離れて、危くない人々は、の輦台の四辺に、川を渉ろうとしていた人々は、周章てて、「戸岸の人々も、川中の人々も、一斉に、どよめいた。二組

「斬った、斬った」

「未だだっ、未だだっ」

「あっ、やった、やった、やった」

かされるので、川水の中に、よろめきながら、岸へ、早く近上で、居合腰であった。川人足は、輦台の上で、足を踏み轟振りあげていた。池上と兵頭とは、後向きになって、輦台の群集は、興奮して、怒鳴った。五台の輦台の上では、刀を

「父上」

づこうとあせっているらしかった。

小太郎は、声をかけたが、八郎太は、無言であった。

「もっと踊れ、御神楽武士め」

来る追手へ、独り言のように呟いた。兵頭との間は、三間余池上は、片膝を立てて、微笑しながら、自分の前へ迫って

別々に討取るように、楔形になって、追って来た。その、専りも離れていたから、五人の輦台は、二人を、左右へ放して、 先にいる武士は、輦台の上へ立上って、刀を振りながら 真

「早く、早く」

は、顔を歪めて、舌打をしながら と、叫んで、手を、 脚を動かしていた。 そのたびに、 人足

「危い」

とか

「畜生っ」

ちにしてくれようと、身構えていた。 かまったり、立ったりして、刀が届く距離になったら、 とか、怒鳴った。それにつづく四人は、輦台の手すりにつ

て、左手に提げながら、少しずつ近づいて来る討手へ 兵頭は、手すりへ、片脚をかけて、鞘ぐるみ刀を抜き取っ

の上で、余り四股を踏むと、 「周章てるな。周章てるな。日は長いし、川原は広い。 人足が迷惑するぞ」

「黙れっ」

襷へ一寸手をかけてみたり、目釘へしめりを、 たりして、両手で、 二つの距離は、三間近くまで縮まって来た。討手の人々は、 刀を構えかけた。 もう一度くれ

|池上っ|

「おい」

やるか」

へ手をかけて、立上った。 池上が頷いた。そして、袴の股立をとり、襷をかけて、刀

荒い事を自慢にし、喧嘩好きの人足達であったが、頭の上

った。 で、刀を振り廻されて、 、前の人足は もしもの事があったら、 大変だと思

「おーい」

中へ投げ出して、逃げようかと、 た。後方の人足達は、いよいよ始まったなら、輦台を、 と、叫んで、後方の人足へ、余り早く近づくなと、合図し 眼で合図した。だが、二三 川 の

人の人足は、眼でそれをとめて

「大井川の人足の面にかかわらあ」

は、二度と、川筋では、働くことができない掟であった。 と、元気よく叫んだ。それに、故意に、輦台を顛覆させて 追手の人足は、額の汗を拭いながら、時々、声をかけたり、

後方を振向いたりして、なかなか近寄らなくなった。

「うぬらっ、早くやらぬと、これだぞ」 最先の一人が、一人の人足の肩へ白刃を当てた。

「無、無理だよ、旦那. 一人が、振向いて

「今日は、 帯上だから、 そう早く、 歩けるもんじゃあねえで

がすよ」

最先の侍の輦台が、池上の輦台の間近まで勢いよく突進して 達は乳の下まで水に浸して、 池上と、兵頭との輦台が、急に深処へ入ったらしく、人足 速度がぐっと落ちた。その時に

「止めろ、止めろ」

よろめいて、歩みをゆるめた時、 池上は、足で輦台の板を踏み鳴らした。人足が、その力に 最先の追手は一間余りのと

ころまで迫って

上意」

と、叫んだ

その瞬間だった、池上の脚が、手摺にかかり、左手で刀を

押え、右手を引く、と――見る刹那

「ええいっ」

た。それは、余りに思いがけない池上の奇襲だったからだ。追手は、斬るよりも、突くよりも、周章てて、身体を避け

池上は、猛犬の飛びかかるように、自分の輦台を蹴って、追

手の輦台へ、飛び込んだ。

飛沫を、つづく味方へ浴びせかけて、川の中に陥った。池上の体当りを食った追手の一人は、脚を天へ上げて、白い

「たたっ」

ち直した。池上は、輦台が傾いたので、倒れかかったが、手人足は、顔を歪めて、肩へ手を当てた。そして、輦台を持

「うぬっ」

摺へつかまって、立上りかけると

白く閃くものが、顔から、二三尺のところにあった。池上

は立上った。

「弱ったな、土州」

「やっつけるか」

) 温… くと、人足が、叫んでいるのを、聞きながら、池上は、云

の追手へ

義経、八艘飛び」「輦台の上での勝負は珍しい。今度は、貴殿のところへ、源

七八間も行きすぎていた。と、微笑して、手摺へ、足をかけた。兵頭の輦台は、

「池上っ」

と、いう声と

一あとへ、あとへ」

「一人でよい、一人でよい」と、兵頭の叫んでいるのが聞えた。池上は、右手を振って

と、叫んだ。

「小癪なっ」

池上に川へ落された侍も、立上った。二人は、刀を抜いて、ろめいて、ようよう、押流されて、立上った。丁度その時、ころであったが、水流は烈しかった。その侍は、二三間、よは、臍のところまでしか水に浸っていなかったから、浅いと輩台の上から、一人が叫ぶと、川の中へ飛び込んだ。人足

「いけねえ」

川下から、迫って来た。

人足が叫んだ。そして、二三尺進むと、乳の上まで水のあ

る深いところへ入った。

「待てっ」

迫りながら、川下へ浮んで出るべき池上の姿にも、気を配っ手は、無言で、川中にいる二人の後方を、横を、兵頭の方へで来る水の中を、よちよちと、兵頭の方へ進んだ。三台の追兵は、じっと、川面を眺めていた。二人の追手は、胸ま同時に、池上は、輦台の上から、川上の方へ飛び込んでいた。那、一人の人足はびっくりして、肩から輦台を外した。と、一人が、水中から、池上を目がけて、刀を斬り下ろした刹

ていた。

兵頭が、 

池上が顔を出して、頭を振った。髪をつかんで水を切りなが

「わしは、歩いて行く」

と、兵頭を見上げて

歩けるのう」

と、人足へ笑った。

「ええ」

「旦那っ、強うがすな」

池上の輦台人足は、 走るように近づいて来て

「お乗んなすって」

Ł いった。

「大勢かかりやがって、何んてざまだ。やーい、どら公、し

っかりしろいっ」

人足共は、 小人数の方へ味方したかった。

島田の側も、 金谷の側も、磧は、人でいっぱいであった。

強いな」

「兄弟、もう一度、行こうぜ、輦台二文って、このことだ」

「江戸へ戻って話の種だあ、九十六文、糞くらえだ」

と同じで、 「何うでえ、五人組は、手も、 お葬いか、お祝いの外にゃ、用の無え、よい 足も出ねえや。町内の五人組 よい

野郎だ」

「二人の野郎あ、水の中で、刀をさし上げて、おかか、これ さんまがとれた、って形だ。やあーい、さんま侍」

「おおっ、加勢だっ」

八郎太と、小太郎とは、

微笑しながら、

川を眺めていると

「八人立で、こいつあ、

棒を持っているぜ」

「馬鹿野郎、 ありゃあ槍だ」

「こん畜生め、穂先の無え槍があるかい。第一、太すぎらあ」

「川ん中で、 芋を洗うのじゃああるめえし、 棒を持ってどう

するんだ」

小太郎が

「父上、あれは、 休之助ではござりませぬか」

「ちがいない」

「一人で――」

い飛沫を、乳の上まで立てながら、ぐんぐん走っていた。 と、いった時、八人仕立の輦台は、川水を突っ切って、 白

「小手をかざして見てあれば、ああら、怪しやな、 敵 か、 味

方か、別嬪か、じゃじゃん、ぼーん」

「味方の如く、火方の如く、これぞ、真田の計、どどん、ど「人様が、お笑いになるぜ」

しん

「丸で、 南玉の講釈だの」

「あの爺よりうめえやっ、やや、棒槍をとり直したぜ」

「やった」

断して、池上の方へ近づいた。もう、金谷の磧へ、僅かしか が、足を払われて、見えなくなった。何か、叫んでいるらし 益満の輦台が、追手へ近づくと、長い棒が一閃した。一人 一人を水へ陥れたまま、益満の輦台は、追手の中を、中

- 133

五人は、益満一人に、拒まれて、何か争っているらしく、動まって、二人は、どんどん磧の方へ、上って行った。追手のて、二人と一つになると、すぐ、益満の輦台だけが川中に止なかった。水の中で閃く刀、それを払った棒。追手を、抜い

没しては出て、川下へ流されていた。川下へ急いでいた。時々、頭が、水から出ようとしては没し、二人の人足が、益満のために、川へ陥った一人を探すため、

かなかった。

に分れた。役人らしいのが、二人に何か聞いて、二人を囲ん池上と、兵頭とは、磧へ上ってしまった。磧の群集が二つ

で、だらだら道を登って行った。

延して押えているらしく、その輦台が止まった。 益満は、一つの輦台が、右手へ抜けようとするのを、棒を

「益満め、舌の先と、早業とで、上手に押えたと見えるな」

と、八郎太が微笑した。そして

「この騒ぎにまぎれて渡ろう。何ういう不慮の事が起きんで

いた。

→太郎は、川会所へ行った。川札はもなし、水嵩も増すようであるし──」

乳下水、百十二文

4が、薄黒く重なり合っていた。雨が降っているのだろう。と、代っていた。どんより曇った空であった。山の方には、

走った。

・
島田の宿は、混合っていた。風呂の湯は、真白で、ぬるぬ

「へん、ってんだ」

大井川はとま雨は降る降る

飯盛りゃ、抱きた大井川はとまる

隣 り の —

を落して

娘で間に合わそ、

Ł

唄って、七瀬と、

綱手の部屋の隣りの旅人は、

急に声

雨の十日も、降ればよいてな、事なら、何うであろ

それから、大声になって

と、怒鳴った。「とこ、鳶に、河童の屁」

て、夫と子供の無事と、自分ら二人の道中の無事を、祈って七瀬と、綱手とは、お守袋を、床の間へ置いて、掌を合せ

腹がへっても、空腹ゅう無い「やーあい、早くう、飯を持って来う」

可哀や、朝顔お眼めが無い大井の川衆にゃ、着物が無

それは、譃だよ、一俺の懐、金が無い

まっごらも! 娘に惚れたで、お眼めが無 それは、譃だよ、案じるな

「お待ちどお様」

手前の面には、鼻が無い女中が、膳を運んで来た。

女中は、膳を置いたまま、物もいわないで行ってしまった。

七瀬と、綱手とが、声を立てんばかりに笑った。 廊下も、 上も、下も、喚声と、足音とで、いっぱいであっ

**|**ええ||\_\_]

た。

番頭が、手をついて

衆を一つ、相宿ということに、お願:何分の川止めで、野宿もなりませず-て 「まことに申しかねますが、御覧の通りの混雑でござりまし - それに、ただ今、急に、 お侍衆が七人、是非にと―― お願い致しとう存じますが ―済みませんが、女子

番頭は、手を揉んで、 御辞儀した。

相宿とは?」

「この御座敷へ、もう一人、 御女中衆をお泊め願いたいので、

母娘は、顔を見合せた。い」

何うか、へっ。お隣りの唄のお上手な方へも、 「品のいい御老人で、つまり、 お婆さんでござります。是非、 御三人、お願

い致すことになっておりますので、 へい\_

隣りの旅人が

「やいやい番頭、六畳へ、四人も寝られるけえ」

「へへへ、子守唄を、一つ唄って頂きますと、よく眠ります」

「おうおう、洒落た文句をぬかすぜ」

んだ。 旅人は、立上って廊下へ出て来て、二人の部屋をのぞき込

「今晩は」

二人は、返事をしないで、番頭に

「では、そのお方お一人だけ――」

「へいへい、決して、もう一人などとは申し上げません。

有

難う存じました。それで、 お唄の旦那\_

「いやな事いうな」

「済みませんが、お侍衆を、お二人、割込ませて頂きます」

一 侍 ? 」

「薩摩の方で、今日の喧嘩 のつづきでさあ。 後から後詰 の方

が、追々参られるそうで」

せかけた。 七瀬と、 綱手とは、 身体中を固くして、不安に、 胸を喘が

に、七瀬が、障子を開けて、 って、七瀬を見ると 隣座敷へ入った侍が、湯へ行くらしく、廊下へ出ると同時 その前へ進んだ。 侍は、立止ま - 135

「おお」 一ま — 御無礼を致しました」

七瀬は、一足、 部屋の中へ引っ込んだ。

「お一人かな」

「いいえ、娘と、 同行でございます」

「八郎太殿は」

ますが、何う致しましたやら」 途中から江戸へ引返しまして、 「夫は、何か、名越様と、至急の打合せ致すことが起ったと、 もう、 追いつく時分でござり

ははあ

「丁度、幸の川止めで、 明日一日降り続きましょうなら、こ

の宿で落合えるかと存じております。貴下様は、 御国許へで

も ? — 「うむ、 国許へ参るが――小太郎殿も、父上と御同行か」

「今日の昼間、ここで、 果合があったとのこと、お聞きかの」

「何か、 大勢で――」

「はい」

「いや、 一風呂浴びて―― 何れ、 後刻、ゆっくり――妙なと

ころで、 逢いましたのう」

て行った。 侍は、振返って、そういいながら、微笑して、階段を降り

この辺にいるとすれば、八郎太父子も、この辺にちがいない きっと、益満であると考えた。そして、池上らと、益満とが、 に、池上と兵頭にちがいなかったし、その二人を援けたのは 七瀬と、 綱手とは、人々から聞く、二人連の侍とは、 確か

でも、 敵党の者と知って、仙波父子二人が遅れて来ると、欺いたが、 らなかったなら、明日か、明後日は、八郎太に追っつけるの 降り出した雨が、自分等二人の涙のように思えた。雨さえ降 と、考えられた。そして、そう考えてくると、夕方近くから の周囲に潜んでいるようにも感じた。七瀬は、二人の侍を、 追手だの、伏勢だの、役人だの、 - 箱根で遅れ、ここで遅れ、天も、神も、仏も、何処ま 仙波の家だけは、助けてくれないもののように思えた。 いろいろの者が、自分達

八郎太と、小太郎とが、馬に乗って走っているのを描いた。

自分達は、何うなるか?

て、もし、ここを離れなかったなら? それが偽りとわかっ うまく欺きおおせるか、もし自分等二人と落合うものと信じ

夜道の雨の中を、強行して行く姿を想像した。そして

(無事で、牧を探してくれますよう)

(もう一度、逢えますよう。 もう一度、夫の顔、子の顔が見られたなら、もう二度と、 Ł 誰に、祈っていいかわからない祈りを捧げた。 無事な顔が見られますよう)

れてしまったことが、幾度、思い直してみても、悲しかった。 こんな未練な心は起さないと誓った。四ツ本が、玄関へ来て からの、急な追放、ろぐろく口も利かぬうちに、闇の中で別

(こんな雨の夜、 川止めの日、ゆっくりと、別れの言葉を交

したなら――)

に感じられた。 悲しませたり、羨ませたりしたさに、降って来たもののよう と、思うと、しとしと降っている雨の音までが、 自分等を、

「綱手、考えても無駄じゃ。臥みましょうか」

た時、薄汚い婆さんが、 七瀬は、こういって、うつむいている綱手に、 濡れた袖を拭きつつ 言葉をかけ

「御免なされ

と、入って来た。そして

「おお、美しい女中衆じゃ、年寄一人だから頼んます」 図々しく、坐った。 二人は、 この婆が、 自分達の家を

呪う悪魔の化身のように思えた。

わ って来て 施米に群れている群集のどよめきが、 調所の居間まで、 伝

跡部山城は、 れでも、 米が一両で、六斗だ。その高い米でさえ、品が少く、城代 一両で六斗だ。 大阪からの、 米の移出を禁止してしまった。 そ

には、 江戸では、 天保三年に不作で、 暴騰して、囲米厳禁の布令が出て、 窮民のお救い小屋さえ出来た。 <u>|</u>・厳禁の布令が出て、米施行があった。 四年の米高に暴徒が起った。五年の秋

がら、 調所は、 祐筆に、 金網のかかった火鉢へ手を当てて、猫背になりな 手紙の口述をしていた。

当分に至り、猶以て、 諸国和製砂糖殖え立、 直下げの方に罷成り、旧冬より直段、礑 礑た ij と下落致し、

った。 遠雷に似た響きがした。群集のどよめきが、 調所が考え込んだので、 祐筆が 寸 一 一 高くな

「何んの音で、ござりましょうか」

めて響いた。廊下に、 Ł 云った時、又、 物のこわれるような音が秋空に立ちこ 忙がしい足音がして、障子越しに

見届けて参りますか」

何んじゃな」

Ł

一人が聞いた。

暴民のように心得まする」

て走り出した。 言葉の終らないうちに、 門前の施民の群が、 鬨の声を揚げ

> 調所は、 金網から、身体を起して

しつけておけ」 「見て参れ 加納に、 すぐ邸を固められるように、 手配申

聞えて来た。 二人の去る足音に混って、 大勢が往来を走る 騒ぐ音が

「起る、起ると、前々から噂立っておりましたが!

ある」 窮民も、 無理はないし――と、 いって、 金持にも、 理前が

手になっただけであった。 六十万両を貸付けていた浜村孫兵衛が、 阪へ来た時、大阪町民は一人も相手にしなかった。 調所は、こういって微笑した。財政整理の命を受けて、大 催促しがてら、 一人で、 話対

生きが、 から、 だった。 生蝋、鬱金、朱粉、薬種、二十三四万両の黒砂糖を、 調所は、 力を貸してくれと、 孫兵衛を前にして、 自分の企画が成立しなかったら、切腹するつもり 薬種、 牛馬、 頼み込んだ。 一手販売にさせることから、米、 年々十二万斤の産高、 雑紙等も、 一手に委任する 金にして

は 孫兵衛は、 というので、 そして、孫兵衛が承諾するのを見て、密貿易の利を説いた。 余り事が大きいから、重豪に一度、拝謁してから 江戸へ同道して、渋谷の別邸で引合すと、

に臥てしま 孫兵衛、 路頭に立つと申すことがあるが、 っておるのじゃ、 あはははは。 万 事、 今の予は、 調所と取計 頭

ってくれ」 と 孫兵衛は決心した。 いった。 将軍家斉の岳父である、

重豪の言葉であった

- 137

くべき方法をとった。孫兵衛は、人々に、どうせ取れぬ金だ、 している五百万両の金を、二百五十ヶ年賦で返す、という驚 調所は、こうして利を与えておいてから、大阪町人に借金

金が来た。つづいて、町人の奢侈禁止が発布された。だが、 窮民共は、 町人が、 このへとへとになっている町人へ、米高の罵声を 余りの仕儀に怒っているところへ、幕府からの献

仕方がない、と、説得した。

浴せかけた。

というのは、少かった。 窮民といっても、本当に、 その日の朝から一粒の米も無い

「貰わんと、

Ł 一人が、笊を抱えて出ると

えて行ったろ」 「こんな着物でも、 くれるやろか。 もっと汚れたのと、 着更

と、頑強な男が施米所へ走り出した。

だ、と聞くと、 の窮民は僅かで、乞食と、無頼漢とが、勝手に暴れているん そういう人々は、 自分の財産を守るのに、 鬨の声、火の手、 煙 周章てていた。 ーそれから、 本当

「お梅、早う、天井へ、隠れんかいな」

ながら、 と、母親は、大風呂敷の中へ、入りきらない大蒲団を包み 怒鳴った。

「あて、天井へ入れて、 焼けて来たら、 死ぬがな」

を変えていた。 娘は、顔を歪めて、自分の晴着を、 抱きしめながら、 顔色

愚図愚図云わんと、 早う、隠れさらせ」

父親は、店の間から怒鳴った。

「お尻、押して上げるさかい――この子、旱来んかいな」 娘は、裾を合せて、天井へ這い込んだ。 母親は、娘の白い、

張りきった足を見て

(早う養子を貰わんと、こんな時に、 かなん)

と、思った。女中は、

台所の上げ板の中に、早くから、

ぐっていた。

べきん、 わーっと、鬨の声が上った。非人と、 、めりっ、と、戸を、木を折り、 挫く音が聞え出 窮民中の無頼の徒

とは、煙の下から、勝手に四方へ走って、 して、近所の人々と、ついて走って来た弥次馬とは、 町家を襲った。 戸が破

れ、品物が引きずり出されると

「やったれやったれ」

いで逃げたりした。乞食は、英雄のように、突っ立って、 と、懸声しながら、 乞食の脚下の品物を懐へ入れたり、 担 棒 - 138

を振りながら

"御仁政じゃ、御仁政じゃ。 皆んな寄って、 持ってけ」

下へ積んで、家内中が

と、叫んでいた。気の利いた人は、

ありったけの米を、

「施しじゃ、施しじゃ」

と、蒼くなって叫び立てていた。暴徒は、こういう家の前

へ来ると

「ここの嬶、

「米の代りに、嬶くれえ」

とか、怒鳴った。そして、家の人々が逃げ込むと、戸がめ

乞食が女の手を握るくらいで済んでしまった。ちゃめちゃになったが、耐えていると、米だけ持って行くか、

に、食い止められてしまった。しかけて、浮浪の徒は、侍屋敷の人々と、町方の人足のため、奉行の手から、鉄砲を打ち出す頃になると、暴民は、退却

の旗に丸に十の印をつけて、整然として、二尺ずつの間を開て来た無頼の一隊が、角を曲ると、薩摩の侍が、四角い白地憑かれたように、手を振り、棒を振って、喚きながら歩い

「侍がいよる」

けて、槍を立てていた。

と、遠く、後方から声援した。だが、士が槍を引いて、鞘「やれやれ」と、立止まると、流れるように、くっついて来た弥次馬が

を外して、穂先が光ると、

乞食も、

人々も、

雪崩れ出した。

な――然し、そうしなければ、あの時は、仕方が無かったかった。窮民の暴徒が起ったのも、少しはわしの罪もあるか(五百万両を、帳消し同様にしたのは、今から思えば、ひど

「良介、西の宮へ泊ったことを憶えているか」調所は、思い出して、声を立てて笑った。

「いや、あの時には――」

なってきた。けたたましい叫びと、車の音がした。二人は、声を合せて笑った。往来を走る人がだんだん多く

宮へ宿をとると、大阪町人が一度に押しかけて来て借金の催済興は、借金取のために、大阪に泊れなかったので、西の

促をした時の、可笑しさを思い出したのであった。

びていて、士が刈って馬にやっていた。人が、荷物を担いだ。邸の修繕は玄関までで、庭には草が延歩いた。道中人夫は、薩摩と聞くと対手にしないで、士分の――その当時は、駕人足さえ雇えなかったので、使は、誰でも

野宿坊を初め、京の錦小路の邸の修復、三都には、斉興御来こうして坐っている大阪上、中、下邸の新築、日光宿坊、上芝、高輪、桜田、西向、南向、田町、堀端の諸邸の壁の白さ、そういう十年余り前のことを思うと――今は、何うだろう。

の金を使うようになったなら、それこそ、御家滅亡の時だ斉彬は、年が若い。幕府の狸の手に、うまうま乗って、こ台場の築造、道路、河川の修繕――)(未だ仕事が残っている。琉球方用船の新造、火薬の貯蓄、

いておりますが、御城内よりは、支配方が繰出しましてござ「申し上げます。窮民共が、米屋、両替を、ぶちこわしに歩邸の表に人声が、騒がしくすると、廊下へ荒い足音がして

りまする」

「十分でござります」

「邸の手配はよいか」

「水の手の支配は、佐川に申し付けえ。竜吐水を、邸の周囲

六十を越したが、未だ年に二度ずつ、大阪を出て、江戸か

置いて」

- 139

ら、鹿児島へ巡廻して来る元気のある調所は

「馬の支度」

「御前が――」

「見に参る。何ういう様子か」

「危うござります。お止めなされませ」

近侍が、眉をひそめて、こういった時

「御国許より、牧仲太郎殿、御目通を願いに出られましたが

と、襖越しに、物静かな声で、取次侍が、知らせてきた。

「牧が――」

調所は、半分立ちかけていた腰をおろして

「すぐ案内せい、鄭重に――」

物をこわす音が、少し低くなった。時々、鉄砲の音が、気

短く、はぜては、すぐ止んだ。

「もう、退治たか。早いの」

牧が、眼を向けると、すぐ平伏した。 と、調所が、笑って、左右の人々へ云った時、襖が開いて、

調所が

「一同遠慮致せ――牧、近う参れ」

と、機嫌よく云った。

「何か――容易ならぬ騒ぎが起っておりまする」

「そうらしい――秘呪は、見事であったな」

「はっ――米が、両六斗では暮せますまい」

然し、この暴民等は、五人口、八人口で、無闇矢鱈に、子を「一人口は食えぬが、二人口は食える、ということがある。

とった方がええ。大阪も、それを布令ろ、と、跡部に申した財政が立直ったからよいが、よい子を残して、悪い奴は摘み像の手柄で、「減し児をしてはならん」といいよった。まあ、子供をまびく外に方法はないと思うた。減し児、減し児と、生んでは食えん。国で、御手許不如意になった時、わしは、生んでおる。夫婦二人でなら、どうしてでも食えるが、子を

「はい」になったのう」

が、

彼奴には判らん――ところで、又、盛之進様が、

「頼むぞ」

じっと見ての、だが、皺一つにも、威厳と、聡明さの含まれている顔を、の、だが、皺一つにも、威厳と、聡明さの含まれている顔を、牧は、伏目になっていたが、眼を上げて、調所の、深い皺

らせて参っております」し、江戸よりは、三組の刺客が出ました由、長田兵助より知の時、秋水党と申す、軽輩の若者共が、斬込みに参りました「国許、江戸表共、党派が目立って参りました。某、国越え

「わしも聞いた」

ませぬ」 されが、或いは、一生の御別れになるかも知れざりますが、これが、或いは、一生の御別れになるかも知れ生命がけにござりまする。当兵道のためには、究 竟の機でご老師を倒すか、何れにしても、呪法の上における術競べは、ておりましょう。老師が、これを行う以上、某が倒れるか、「その上に、某の老師、加治木玄白斎が、延命の呪法を行っ

牧は、痩せた頬に軽く笑った。久七峠で、玄白斎に逢った

時とちがって、 はしていたが、 旅に、陽を浴び、温泉に身体を休めて、回復 生命を削っての呪術修法に、 髪は薄くなり、

皺は深くなっていた。

「斉彬公は

調所は、目で、その後の言葉の意味を伝えた。

「前に申し上げました如く、かの君の、御盛んなる意力、 張

りつめた精力へは、某などの心の業は役立ちませぬ」

い。斉興公と、わしとが、何んなに苦しんで、金をこしらえ 「そういうものかの。 いや、斉彬公は、えらい。ただ、お若

判りなく、舶来品をこちらで作ろうとなさっている。至極よ たか? この金を、何時、何に、使うか、この辺が、よくお

だてては、 いことだが、 いろいろのことをなさるのも、よろしくない。何 物には順序があってのう。それに、久光を、 お

せにゃならん――それで、 -術を競べて――」 牧、今申したのう、これが、

うも、

重豪公の血をお受けなされて、

放縦じゃで、何んとか

別れ

いいや、秘術競べのみでなく、 或いは反対党の刺客の手に

かかるやも計られませぬ」

人数を添えてつかわそう」

有難う存じます」

「倅に逢うたか」

「未だ、只今、着きましたばかり――

よい若者になったぞ」

が鳴った。 調所は、 鈴の紐を引いた。 遠いところで、からからと、鈴

「船で参れ。 陸は人目に立つ」

「はい」

仲太郎の親心からであった。 ていた。 万一の時に、調所の手で適当な処置を取って貰おうとする、 牧の倅の伴作は、 主を、主の筋に当る人を呪っている牧の倅として、 調所の許へあずけられ、百城月丸と改め

「ひどく、おやつれになりましたが-

月丸は、不安そうな口吻で聞いた。

痩せた」

わって来た倅を見て、 牧は、 壮健に ――暫く、見ないうちに、 調所 大人らしい影の加

「御世話を焼かせましょうな」 と、微笑した。

は。あはははは 「何、捨ててお いても、 嫁を、貰うてやろうかと、考えておるが 大きくなる。 犬ころじゃ、この時分

のう。存じておろう、浜村孫兵衛」

した?」 「当家のためには、 恩人でござりますな。只今、 何うなりま

中になろうも知れん」 よい娘がある。 て侮れんぞ。こう金が物をいうては、追っつけ、町人の世の 「泉州、堺におって、内々、 町人だが、 これからは、牧、 わしが見ておるが、この浜村に、 月 丸 町人と

よう しいと存じます。この縁組、 「そうなろうと、なるまいと、 よろしく御取計らい下さいます 刀を棄てることは、 至 極 |よろ

月丸は、 黙って、 俯向いていた。

- 141

「そうか。 すぐ承諾してくれて何より――」

ぎりじゃと――」 「 月 丸 国許を立つ時に申した、軍勝秘呪は、 わし一代か

んがため――天下は広大で、効顕さえ現せば、後継者も現れ い立ったのも、この秘呪を、 人知れず伝えるばかりじゃ。今度、 ければ、百年でも、二百年でもそのまま心に秘めて、ただ、 よう会得しても、平常には何んの用も為さぬ。家に火事が無 厳寒の瀑布に修行し、炎天に咀し、熱火の中に坐して、よう 心伝心と、 で得られる道でもなく、言って伝えられるものでもない。 お前にも、 ぬ。もし、 と呪法競べになれば、十年、二十年の命をちぢめるかも 後か、一年後か、とにかく、遠からぬうちに、死ぬであろう。 一人の命を呪うて、己の命を三年縮めるが、もし、玄白斎殿 「呪法の功徳を示して、わしは、玄白斎殿も、 はい 、秘法を譲ろうと思うたが、時が無うなった。学んわしが、三十年、五十年、平穏無事に暮せるなら、 刻苦修練と、十年、二十年、深山に寒籠りをし、 秘呪の効顕を、 調所殿の命を受けて、思 広く天下に示さ 明日か、 知れ 一 月 以

> これが、お前に与える、わしの遺言じゃ。忘れるな るな。万事、 わしの子で、兵道の家に生れたが、決して、わしを見習うな。 か、わしのように、流行物に反対するとか、愚かな真似をす 調所殿の御指図に従って、世の中に順 応せい。

静かに、だが、力のある言葉で、牧は教訓した。

「さあ、もう、八軒家やで」

朋輩の肩を揺さぶった。 船べりに凭れて、ぼんやりと、 綱手の横顔に見惚れている

咋夜から、じっと、こう見たままや。 て 俺の顔を見て、はあ、ああああ」 か、欠伸する時に、お前、こう袖を口へ当てて、ちらっと、 「見るは法楽や。俺は、お前みたいに、盗見なんぞしえへん。 「判ってたら支度をしんかいな。 知ってるが、御城が見えたら八軒家や。きまってるがな」 何んぼ、見たかてあけへん 何遍欠伸をしやはった

「人が、笑うてはるがな。ええ、こいつは、 乗合の爺さんが 少し色狂人で」

なる。こう、袖を口へ当てはって、 「いやいや、あんな綺麗な人を見たら、わしかて、 ふあ、ふあ、ふあ」 色狂人に

とくっつき合って寝たりしていたが、初めての乗合船で、人 荷物に凭れて仮眠をしたり、身体を半分に折って、隣りの人 々の中で――それから、明日の役目を思うと、眠れなかった。 石の夜船に乗って、 四辺の人が吹出した。七瀬と、 一睡もしなかった。乗合衆は、船べりの 綱手とは、伏見から、三十

町人になる覚悟で、御奉公をせい。決して、父の後を継ぐと

お前は、

調所殿の仰せの通り、

乗合衆は、

いろいろの夜風を防ぐものを持っていたが、二人

しても、長くはあるまいが、

呪法のためか、刺客のためか、死ぬか、殺されるか、何れに のために、悪鬼となっても、秘呪の偉効を示したい。もしも、 したい。天下のためでもなく、

御家のためでもない。己の職

しは、最後の兵道家として、命にかけて、この理外の理を示 は、実学と理学ばかりで、理外の理が、侮蔑されている。 ようし、門人等も懸命になろう。調所殿の前ながら、

世の中

わ

- 142 -

ので、それを膝へかけて、二人は、 には、それさえなかった。船頭が、 一晩中坐りつづけてい 薄い蒲団を貸してくれた

高麗橋から出た上り船が、そろそろ漕ぎ上って来た。その中人々が起き出して、川の水で顔を洗う頃になると、八軒家、

「朝っぱらから、結構なことや。何んやの、かやのいうて、

士ばかりの一艘が、杯をやり取りしていた。

人の金を絞り取りよって――」

金を、 やと、 大名への貸金が、千六百万両、これを、二百五十年賦にされ 大きい声でいわれんが、長いことないで。京、大阪で、お前、 さんでもええ、ということになりよるで。こう無茶したら、 か。今に、徳政ってなことになって、町人から借りた金は返 えたけど、当節は、ただ召上げや。薩摩なんて国は、 「今度の御用金は、鴻。池だけで、十万両やいうやないか。 十万両献金したら、倍にも、三倍にもなる仕事がもら 何んと、二百五十年賦---踏み倒すようなもんやない 借りた 昔

七瀬も、綱手も俯向いていた。

つかえ

たら町人総倒れや。町人が倒れたら、

武家だけで、

天下がも

ぬ貧しさであった。

あの船は、 お前 薩摩やで-

「そや、薩摩や、あいつが、大体いかんね」 上り過ぎた船 一人が眺めて

いった。

七瀬は、 そっと、 顔を上げて、 その船を見た。 そして

と、口早に囁いた。

あれは

顔を左、右に動かして、遠ざかり行く船の中から、

「よいか」

何かを求めていた。

「母さま

「牧では

牧ではないかしら」

綱手は、延び上ったが、 牧の顔を知らないし、 もう、 船は、

かなり遠ざかっていた。

「よく似た顔じゃが

七瀬は、 人影で見えぬ牧の顔を、もう一度確めようと、 い

つまでも、 眼を放さなかった。 船頭が

「着くぞよーう。 荷物、 手廻り、 支度してくれやあ」

と、叫んだ。

敷の美しさに、びっくりした。 江戸へ出る時に見た荒廃した蔵屋敷の記憶は、新し 蔵屋

邸の中へ入ると、若侍達が薄汚い着物の裾を捲りあげて、庭 七戸前の土蔵の白壁は雨風に落ち、屋根には草が茂っていた。 の草を刈っていた。 十年近い前に見た邸は、朽ちた板塀、 草取りの小者さえ、 倹約しなければなら 剥げ取られ た土塀、

日に冴えている土蔵の白壁、玄関までつづいている小石敷 のように立派な門ではなかったが、広々と取廻した土塀 一つの柱、小石の一つからでも、気押されそうな気がした。 それが蔵屋敷であったから、 七瀬は、これを悉く、 そして、自分が、その調所を敵にするのだ、と思うと、 裾を下ろし、 髪へ手を当てて押えてから、 調所笑左衛門が一人の腕で造り上 三田の本邸、大手内の装束邸

――決心、覚悟、生別などが、この中には、含まれていた。と、振向いた。短い言葉であったが、すべての最後のもの

綱手は、俯向いた。胸が騒いだ。

「御用人様へ、御目にかかりに通ります」

手にある内玄関にかかった。取次に、名越左源太からの書状と、門番に挨拶して、広々とした玄関の見えるところの左

を渡して

「御用人様へ」

坐った。 な部屋へ通された。二人は、入ったところの隅にくっついていくつも曲り、中庭をいくつか横にしてから、陰気な、小さと、いうと、暫くの後に、女中が出て来て、薄暗い廊下を

戸棚と、掛物。障子から来る明りは、二坪程の中庭の上からい部屋であった。二方は、北宋の山水襖、床の方にも同じ袋女中の足音が、廊下の遠くへ消え去ると、物音一つ聞えな

「よう、覚悟しているであろうな」

来る鈍い光だけであった。

「はい」

七瀬は、そういって、暫くしてから

でないが――もう、或いは、一生の間、逢えぬかと思うから、「こう云うのは、何んであるが――母の口から云うべきこと

綱手は俯向いて、真赤になった。七瀬は、ちらっと、それ

申しますが、お前――益満さんを」

「――ではないかと、母は思いますが」

を見たが、見ぬような振りをして

綱手は、俯向いているだけであった。

を見て ―― 岡手 | 「益満さんは、ああいう方じゃが ――もし、そうなら |

機

を見て――綱手」

「厌なりごはあるミハー七瀬は、綱手を覗き込んだ。

「厭なのではあるまい」

綱手は、頷いた。

「然し、お母様、妾は――」「わかりました――」

綱手の声は、湿っていた。

「いいえ、心配なさんな――妾には、益満さんのお心は、よ

う判っております」

「でも、一旦、操を――」

と、云った時、廊下に、忙しい足音がして

「よいよい」

と、いう声がすると、障子が開いて、老人が入って来た。

二人は、平伏した。

「よう来た。わしは、調所じゃ」

に出て来るとは、二人の考えないことであった。 二人は、平伏したまま、身体を固くした。調所が出し抜け

- 「御家老様とも存じませず、無調法を致しまして――

「何々、この娘子は、お前のか」

「美しい女子じゃが、嫁入前かの」「はい、至って不つつかな――」

「はい」

らはお前達、町人の世の中だぞ。金の物云う世の中じゃぞ。「よい聟があるが何うじゃ。侍でないといかんかな。これか

ると、 肩肱、 同意せずと、 お前の夫は何か騒ぎ立てているらしいが、そんな夫に 張って騒ぐより、算盤を弾く方が大事じゃ。手紙でみ 離別されて、こうして国へ戻る方が、 人間 は利

口じゃ」

りますが、元家中の者のよしみをもちまして、このこと御願 ぐ迎えに参じましょうと、御無理な、 い致しとう存じまする」 お留めおきを願い、その間に、妾一人国許へ戻りまして、 うござりまするが、これを暫く、女中代りになりと、此処へ したような訳、 がいがござりましょうか、二人だけがこうして離れて参りま 下に、もう一人妹がござりますが、姉妹同士でも、 「何う諫めましても聞き入れませず、妾は離別、 国許へまでの路銀が足りませぬゆえ、 虫のよい御願いでござ 又 意見のち 申し これ す 難 の

「徒党を組んでおるのは、幾人程かの」

「さ、少しも、夫は、妾に洩らしませぬゆえ」

「成る程――そして、 此後、 何んとするな、 お前 達

国へ戻りまして」

居候か」

「親族もおりますことなり」

くのは、易いことじゃが、仙波の娘とあっては、万一の時に 裁許掛見習では、 嫁入しては ――一片づきに片付くではないか。ここへ置 親族も、 大したことはあるまい。 何うじ

のう。若侍だのは 七瀬と、綱手とは、 顔へ出すまいと、俯向いて、必死に押えていた。そして、 色仕掛の間者という言葉に内心の騒ぎ

――と、申すのは色仕掛の間者など、よく芝居にもある手で

を、

到底、女二人の智慧ぐらいで対手のできる人でないかもしれ

ぬと考えた。

しも、 がよい。これからは、町人の世の中 出来すぎじゃ。 陰謀のと、猫の額みたいなことに騒いでいる奴の娘にしては、 てやろう。このくらいの別嬪なら喜ぶであろう。なかなかあ 物がおるように、町人の方が、近頃は武士よりもえらい。 町人と蔑むが、国の軽輩、紙漉武士等に、却って天晴れな人 町人の方がよいぞ。ここへ世話をしてやろう。 その倅の嫁を、わしに頼んでおる。二百石、三百石の侍より、 村の智慧を借りたのじゃが、それが訴訟になってのう。 は、歴とした町人じゃ。 でやかじゃ。裁許掛見習などを勤めて、四角張って、調伏の、 め、気の毒に敗訴して、大阪所払い、只今、泉州堺におるが、 してもよい。存じておろう、浜村孫兵衛。 からの借財を二百五十年年賦ということにしたのは、この浜 「――気が早いから、万一の時に困るで――何うじゃ、 何れ程、町人から学文したか判らん。浜村へ世話をし ゆっくり、長屋で休憩して、 この調所が太鼓判を押す。 わしが、 よく考えてみる 一口にお前ら 名を明か 大阪町人 対 手

と、云って、立上って

·町人の世の中じゃぞ― と、廊下へ出て、独り言のように云って、何っかへ行って 今、長屋へ案内させる」

しまった。二人が

あるまいか) (調所様は、 こっちの企みをお察しなさっておられるの では

所が戻って来た。そして と、胸をしめつけられてきた時、 二三人の侍をつれて、 調

案内してやれ

自分は侍達と、何っかへ行ってしまった。 と、その後方からついて来ている女中に命じた。 そして、

弾きながら、分厚の帳面に何か記入していた調所が、筆を置 大きい眼鏡をかけて朱筆をもって、時々、机の上の算盤を

「袋持、別嬪じゃろうがな」

と、振向いた。袋持三五郎は、紺飛白の上に、黒袴をつけ

たままで

「何者でござりますか」

調所は、それに答えないで、机の向う側に坐っていた二人

に

二人が、算盤をとって、指を当てた。

飛んで九百三十六両-「一つ、鬱金二万三千二百八十五両也。一つ、砂糖、十一万 ― 百城、異国方槍組へ、廃止に就いて

御手当を渡せと、定便で、差紙を出したか、何うか、納戸方

で聞いて参れ」

百城が立って行った。

いところじゃ。金に、吝って、小刀細工が上手で、 「いろいろに、小細工をしよっていかん。薩摩隼人の極く悪 すぐ徒党を

「何か、江戸で騒いでいる模様でござりますが――」

彬公に、早く家督を譲って、それで己が出世しようという 「今の別嬪も、その片割れじゃが――何うも、斉興公が、斉

·斉彬公を取巻く軽輩には、多分にそれがある」

「然し、島津の家憲では、御世子が二十歳になられたなら、

家督をお譲り申すのが常法でござりませぬか」

袋持は、調所に、遠慮のない口調で、いい放った。

阿部閣老あたり、それとなく匂わしておるが―― 一得一失で 「幕府も、いろいろ手を延して、早く、斉彬公の世にしてと、

のうし

「一得一失とは」

「お前には判らん」

百城が廊下へ膝をついて

「まだ差立てませぬと、申しておりました」

「いかんのう――兵制を改めて洋式にしたので、異国方め、

ぶうぶう申しておる最中に、廃止手当を遅らせては――」

調所は、国許の反由羅党、反調所党の顔触れを見た時、す

就いての不平者、斉彬が当主になれば出世のできる青年の多 ぐそれが斉彬擁護の純忠のみでなく、兵制改正、役方任廃に

いことが目についた。 (そうだろう。そうそう忠義ばかりで、命を捨てられるもの

ではない。万事は金、原因は何うあろうと、今度の動機は利

結果も、利害で納まるだろう)

「別仕立で早く、渡してやれと、申しつけい」 調所が、百城に命じた。

害のこと――

やっと見込みのつくまでに三年かかった。それから、江戸、 時までー す時には、三十ヶ年かかると思うた。朝五時に起きて、夜十 「立身出世は、あせってはいかん。わ ―町人に軽蔑され、教えられ、幾度も死を決して、 しが、この藩財を立直

『『放い』に残った』、『『『い』』の『はど』のルでう。にこれだけになった。三ヶ所に積んだ軍用金が三百万両、日本大阪、鹿児島と三ヶ所を、年中廻って、三十年が、二十年で

いかん。斉彬公の世にならんでも、役に立つ奴は、判ってい同じ人間に、そう奇想天外の策のある訳はない。周章ててはれを顧みると、ただ辛抱と、精力と、この二つの外に出ない。中を敵として戦っても、三年、五年の程は支えられよう。こ

なさがあった。の一面には、ひどく敬服していたが、一面に又、深い物足りの一面には、ひどく敬服していたが、一面に又、深い物足り袋持は、調所が、軽輩から登用した若者であったが、調所

る。袋持、そうでないか」

「お前の嫁にも丁度よいの」

と、調所は云いすてて、すぐ又、帳面をのぞき込んだ。

いた。屋が近いらしく、ことこと踏み鳴らしている蹄の音が聞えてが、そのあたりに小忙しく餌をあさっていた。それから、馬女中達の溜りからは、薬草を植えた庭が、見えていた。鶏

じめたりした。ことを囁き合った。そして、出て行ったり、道具の手入をはへ坐って、俯向いていた。女中達は、すぐ、お互に、二人のとめて、二人を眺めた。二人は丁寧に御辞儀しながら、片隅一人が親子を案内して来ると、女中達は、手をとめ、足を

七瀬も、綱手もそういったことを考えて、自分の身の破滅のくらいは、御発明かもしれぬ)いらっしゃるかも知れない。島津の家を助けた方だから、そ(御家老は、二人の――いいや、夫の心の底まで、見抜いて

を空想するくらいに、怖れていた。そして

(いいや、まさか――)

と、打ち消してもみたが、到底、自分達女の手には及ばぬ

「町人へ嫁入りせんか」人のように思えた。だが

とは、思えた。そして、その時の調所の眼、言葉つきを考えと、いう言葉は、調所が、本当に、親切からいったものだ

「計談」「以下のでしてもいいようにも感じた。出すと、二人は安心してもいいようにも感じた。

「母様――妾――お嫁入り致しましょうか」

綱手が、低くいった。

「ええ」

七瀬が、眼を上げると、綱手は、俯向いたままであった。

「御家老様の仰せに従わぬと――」

「でも――あの御様子では、油断も、隙も」「それもあるが――嫁入りして仕舞うては」

「妾は――

それだけいって、

二人は黙ってしまった。

綱手は、やっとしてから

「何事も、諦めております」

一生安楽に、せめて、綱手だけでも送らせてやったら、と思人のことを、想い出すと、調所のいう通り、町人へ嫁入させ、七瀬は、道中での、いろいろの危険、斬られた人、斬った

とて、御家のために、さして働ける身でもなし――)(そして、このことは、自分が探るとして――国許へ戻った。

思った時、一人の女中が

い声を立てて、肩を突っついたり、 い侍が、廊下を足早に通りすぎていた。女中達が、甲高い笑 ている方を見ると、さっき、ちらっとだけ見た、若い、美し (妾等二人に較べて、この人達は、楽しそうに――) Ł 朋輩にいって、 声を立てて笑った。七瀬が、 膝を打ったりしていた。 女中の見

いるらしかった。 Ł 七瀬が、 娘を見ると、綱手は、身動きもせずに坐って

へ出ることができた。

とか? 広い世界に、たのむのは、綱手ばかり――) (深雪は、何うしたことやら? 夫も、小太郎もどうなるこ 思い かけると、 かたい決心が、だんだん悲しく、 崩れ

、益満と、 もっと早く、許婚にでもしておいたら――) て来るようであった。

お湯を、 お召し下されませ」

女中が、後方で、 手をついていった。七瀬は、 振返って

はい

周章てて御辞儀した。 綱手は、 顔もあげなかった。

径を、爪先登りに半里以上も行くと、 侶が通るほか、 径 根本中堂の上、杉木立の深い、 ― そこは、 殆んど人通りの無い、 比叡山の山巡りをする修験者か、 熊笹の繁茂している、 比叡の頂上、 険路であった。その小 時々に、 四明ヶ岳

ら十人、国許から守護して来た斎木、 うと――大阪からの警固の人数の上に、 十四人が、夜の明けきらぬ白川口から、登って行った。 牧仲太郎は、その頂上で、斉彬の第四子盛之進を呪殺しよ 、山内、 京都留守居役の手か 貴島、 合してニ

ŧ すぐ快諾して、僧侶が二人、見張役として、案内役として、 たいから、余人を禁じてもらいたいといって、金を包むと、 ついて来てくれることになった。 根本中堂で、島津家長久の大護摩を焚き、 いささか心得ているから、四明ヶ岳で、兵法の修法をし そして、自分等

- 148

驚嘆したが、すぐ袖を掠める烈風に、顔をしかめて、寒がっは、瀬田から、伏見、顧みると展開している京都の町々に、 は、瀬田から、伏見、 のできる大津から比良へかけての波打際と、 って来た。頂上へ出ると、人々は、 熊笹の茂った、木の下道を行く時分から、袷では肌寒にな 一望の下に指呼すること 太湖 の 魚景、 寒がっ

で 其処、此処を歩き廻ってから、斎木と貴島とを呼ん

を張ってくれ」

引いて、七間四方の区画を作った。牧は、その真中へ、自分 とを包から取出すと、他の人々が杭を四方へ打ち込み、 と、草の中へ線を引いて指図した。二人が用意の杭と、縄

から、 りを眺めたり、景色を見廻したりして、寒さに震えていた。 そして、中の草を焼き、塩を撒き、香を注いで、土を浄めて ったが、他の人々は、何うしていいか判らないので、その祈 杭を打ち、縄を三重に張って、三角の護摩壇を形造った。 跪いて、諸天に祈った。斎木も、貴島も同じように祈

その他の人は、此処にいて、万一のために、 てもらいたい。寒かろうが、酒は禁断」 置して、二人は根本中堂の上に、四人は中堂と此処の途中に、 「余人を、一人たりとも上げないように――人数を三段に配 四方を戒めてい

牧が、祈りを終って立上った。

その身体から、何か人を圧迫するものが放射されていた。 剣をもって立つと、すぐ対手の感じる、人を圧迫するような 気魄であるが――牧は、対座している間にでも、その眼から、 牧の、いつも、人を圧倒するような気魄、それは、剣客が、

「誰々が下へ、誰々が上へ」

と、天童がいうと、

「よろしいように」

と、答えて、側がたわら の僧侶に

"水のあるところは

「あの、 こんもりと茂った木立の 遥かの下の白い路を指さした。

聞けば、 判ろう」

こういい放った牧は、 もう一直線に、枯草の上を、 急斜面

を、鹿のように、降りていた。

「危いっ」

一人が叫んだ。牧は、見る見る、転落して行く石のように、

直線に、 小さく、 小さくなっていた。一人が

「天狗業じゃ」

と、呟いた。天童が

呪法も、武術も、窮極したところは、同じじゃ。 見事な」

腕組して、牧の後姿を、 眺め入っていた。

澄み上った秋空だったが、仙波父子は、宿屋の一間に閉じ

籠ったままであった。

に 阪から、二人を途中に討取るため、又人数を繰出しているか (池上と、兵頭とは、危く脱したにちがいないが、 お由羅方の手が廻っているとすれば 或いは、京、 あれまで 大

も知れぬ)

二人の身の上を案じる外に

前とは、 うが、益満は、何うしたか? (牧を討つために出た二隊までが恐らくは、 一人になっても、生き残るであろうが――名越等、 この刺客隊の全滅を知っているだろうか あの男の豪胆と、機智と、腕 全滅したであろ

江戸の同志は、 いるとすれば、第三隊が出たか、出ぬか――) 京の藩邸、 大阪の藩邸にいる同志に、牧の消息を

聞き、その返事を待っていたが

二人は、

は (もし、第三番手の刺客が派遣されたとして、 牧の在所を突き留めて討ったとしたなら、 -目的は 立場は 一切が崩壊だ) 自分等より早 自分らの面目

動静を、 都の宿へ足を停めて、 を借りずに、 唯一つの、そうして最後の御奉公として、 あった。 益満の生死より、七瀬らの消息より、このことが重大事で 友喜礼之丞から、知らせてもらうことにした。 浪人させられた武士の意地として、 自分等二人の手で討取りたかった。二人は、 大阪の消息を、 袋持三五郎から、 牧仲太郎は、 斉彬に 報い 人手 京の

て侘しく、床しい、 黒ずんだ、 磨きのかかった柱、茶室造りに似た天井 古い香の高い部屋であった。 総

中で醒めきっていなかった。 としてしまった。 長してきた小太郎は、 二十年余り、何一つ、世間のことを知らずに、侍長屋 総ては、 この一月足らずに起った激変に、 見残した悪夢であって、 未だ頭の 呆然 で成

#### 「小太」

小太郎 が、 眼を開け て、 腕組を解いた。

今度の旅にも、 牧が国を出る時に、 、 五 人、 五人、 七人の人数も、 二十人からの警固があったとすれ 七人はついている、と考えねばならぬ 粒選りの腕利きであ ろう

わ い者に負けんつもりでも、 れる。ただ武士の一念として、二人、三人を対手に ところで、 わしは、久しく竹刀さえ持たぬし、気は、 足、手が申すことを聞くまいと思 خ

れでも負けを取ろうとは思わぬが、又、勝てるという自信も は本望じゃ」 る所存は 勝てる、 とは、 牧さえ刺 卑怯ないい草じゃ。 殺せば、 全身膾になろうとも、 わしは、 生きて戻

かにつづけた。 郎太は、 床柱に 凭れて、 首<del>垂</del>れて、 腕を組んだまま、 静

> 「然し――きっと、 、その時に、 牧を刺せぬともいえぬ。 刺せんかも知れ

小太」

八郎太が、 小太と、大きくいったので

「 は い

八郎太は、 小太郎 の 顔 を、 睨 むように見て

「お前は、 逃げんといかんぞ。 わしを捨てて、 再挙を計るの

だ

「然し

牧を討てばよい。二人が犬死をしては、それこそ、世の中の物嗤 いだぞよ」 「心得ちがいをしてはならぬ。父を捨てて逃げても、 所詮 は

なぜだか、 厳格な眼、言葉、 父の死が迫っているように感じた。 態度であった。 小太郎は、 それを聞くと、

女中が、 廊下を走って来て

赤紙どすえ」

取った。 Ł 障子を開 八郎太が、 がけた。 赤紙へ 小太郎 印判 が躍り出るように立上って、 を押して、 女中に戻

郎太は、 手紙の裏を返して見て

袋持から

そして、 火急一筆のこと、牧仲儀、 いつものように、小柄で、丁寧に封を切った。 七瀬殿並綱手、 伏見に上陸と被「存候間、以「飛」脚此旨申進五、警固の体に被見受候に就者、油断被為間のこと、牧仲儀、今暁錦地へ罷」越候が、不逞のこと、牧仲、 当座当屋敷に滞留のことと被存候 へ罷越候が、

「母上は、首尾よく——」

と、云った時、廊下に足音がして

「又、御手紙どすえ」

「御苦労」

「御使の奴さん――

「わしが参る」

丞からの手紙を、黙読してしまうと、大きく、肩で呼吸をしと、云って、小太郎が降りて行った。八郎太は、友喜礼之

た。小太郎が入って来て

「友喜の小者で、怪しい者でござりませぬ」

ておるらしい」
「友喜の手紙によると、七八人から、十人近い人数が取巻い

「して、修法する土地は?」

「比叡山」

「矢張り――叡山」

受けたり、後日に延したりすることはできぬ。わしが、牧の「十人と聞いても――二十人おっても、今更、他人の助力を

々に死んでは、仙波の家が断絶する。大義、親を滅す、とは、つであろう。わしは、それを信じて、死ぬ。然し、お前も共修法を妨げて斬死したと聞いたなら、正義の人々は一斉に立

七瀬が入り込んだとあれば、また、いかなる手段にて、敵を挫この事じゃ。小太――無駄死、犬死をしてはならんぞ。幸、々に死んでは、仙波の家が断絶する。大義、親を滅す、とは、

生れて参るかも知れぬ。わしの死はお前が生きてお

く策略が

殺されても、牧を刺す見込みが無いなら、斬破って逃げい。一旦の怨み、怒りで、必ず犬死してはならんぞ。眼前、父がってこそ光がある。お前が生きておれば、犬死にはならぬ。

て、わしの志を継ぐのだ。よいか。この教訓を忘れては、父お前は若い。お前の脚ならば逃げられよう。そして、再挙し

の子でないぞ」

「はい」

「すぐに立とう、勘定を申しつけい」

「母上に、一度お逢いなされましては」

「たわけたことを申すな」

八郎太は、床の間に立ててあった太刀を取って、目釘を調

べ、中身を見て

と見ていると、この刃の表に、地獄の図が現れて来るように「生れて初めて人を斬るか、斬られるか――こうして、じっ

刀を膝の上に立てて、刃の平をいつまでも眺めていた。

「お召しどすか」

思える」

「勘定をして、麻草鞋二足、弁当を二食分、水を竹筒に、少

「今時分から、何ちらへお出でどす」し沢山詰めておいてくれぬか」

小太郎は、室の隅で、鎖鉢巻、鎖帷子、真綿入の下着を、「叡山へ参詣する。勘定を早く」

一人分積み重ねて、風呂敷に包んでいた。

「思い残すこともない」

八郎太は、刀を鞘に納めて

見事じゃぞ。そうは思わぬか」「小太、生れてはじめて、人を斬るが、老いてもわしの腕は

と、笑った。

根本中堂の、巨大な、荘厳な堂前に二人は額いた。内陣に ただ一つの宝燈が、またたいているだけで、漆黒な闇が、

堂内に崇高に籠めていた。

恐ろしくなく、 の、包囲されて斬られるところを想像したが、人の斬られた 勝負だとは信じていたが、自分の死ぬということが、 合掌して、歓喜に祈る自分の姿を想像したり―― も思ったり 八郎太が、 やがて、この宝燈の中へ消え去るべき自分だと 、胸を打つ程の想像も湧いて来なかった。 或いは、もう一度この土の上で、 十死一生の 同じように 少しも 自分

のを見る程の感じもなかった。

下級武士が、手柄を立てて出世するというようなことは、考 労ばかりをして来た母に、皆の団欒を見せて喜ばしたかった。 よりも、牧を斬って、その手柄の代りに、母と父とを救い、 ないのに、牧を斬ったとて、何う出世が出来るか?― 家中の人々から恐れられ、 なったとて、何うなるのか?――益満程の才人が、 ため、自分のために、牧を斬って、それで仙波の名が名高く していなくてはならぬ運命だと、感じていた。父が、 えられなかった。二十年でも、三十年でも、 小太郎は、父の勤めを、暮しを、幼い時から見ていたので、 自分とを、もう一度、二人の膝下へ集めたかった。苦 称められても、少しの出世も出来 毎日同じことを 腕前で、 ―それ 意地の

不平をもっていたが、 を譲らなくてはならなかった。伊集院平の倅が、 二千石を継ぐのに十分であった。益満は、それに 太の子は九歳であっても、 小太郎は諦めていた。だが、斉彬公の 小太郎は、 少し馬鹿 益満は、道 で

牧を討つのも、

そのためになら――と、思った。

なくてもいいから、自分の器量を一 才も、腕も、きっと、人に認められるであろう。 っている牧が、憎くなってきた。 と、思うと、 知行は昇ら 斉彬を呪

愛には望みをもっていた。斉彬公の代になったら――自分の

敵さないことは判り切っているのに――。 牧を襲っても遅くはないのに――十人も警固の人数がいては、 か。益満は、きっと遅れても来着するだろう。それを待って、 だが、父が、牧を討たずに死ぬ?——

それも犬死では

この堂と同じように、沈黙と、 奮しているが、あの手紙も、何も皆譃で、この深い山の中は、 なんか居るものか――というように思えた。 小太郎の闘志は、少しも起って来なかった。父は独りで興 荘厳とだけしかないのだ。

して 上げて登った。羽織の下に襷をかけて、 「油断するなよ」 鎖鉢巻を袖の中へ隠

八郎太が立上った。杉木立の下を、熊笹の中を、

ようとした時、 行くと、人影が木立の間に見えた。八郎太が佇んで、 止まった。 二人が耳を澄まし、呼吸を調えて、静かな足取で、

木立の間から、

細径へ二人の侍が出て来て立

見届け 小半町

「見張」

に、冷たい汗が流れて来た。 ふるえ出した。押えても、ふるえが止まらなかった。 と、小太郎が囁いた。囁くと共に、拳も、 胴も、 膝頭も、 腋の下

(逆上してはいけない。怯けてはいけない) 押えたが、何うしても止まらぬうちに、 二人の前近く

152 -

裾を捲り

# へ来た。一人が、径の真中で

山の許可を受けて、都合によりここより一切登山を止めてお りまする。 「御貴殿達へ申し入れる。吾々の姓名は御容赦願いたい。当 お戻り願いたい。甚だ勝手ながら、何卒」

一人は、横を向いて、草鞋で土をこすっていた。

「ははあ――」

八郎太は、さも感心したようにいったが

のために、許可状を拝見致しとうござる」 「当山の許しを得たと仰しゃれば、是非もござらぬが-念

後方にいた侍が、険しい眼をして、八郎太の方へ向き直 つ

「頂上には、 尊貴の方が修行してござるで――お戻り願いた

「尊貴の方とは?」

二人は、答えなかった。

尊貴の方の、御名前を承りたい」

にか、 小太郎は、 顫えが無くなっていた。 静かに足を引いて身構えにかかった。いつの間

**しつこい。** 断って通られるなら-

八郎太が、大声で

「尊貴の方とは、 牧仲太郎か」

二人が、一足退って、柄へ手をかけた。八郎太は畳みかけ

如何にも― と、叫んだ瞬間、杉木立に、谷間に、山肌に木魂して それを知って通るとあらば、血を見るぞ」

「ええいっ」

後方へ揺れていたが、 つつ噴き出していた。対手は眼を閉じて、暫くの間、前へ、 頭上で、八相に構えられていた。対手の肩口の着物が、 下まで、切り裂けて、 っと、閃いた白刃は、対手を打つか、打たぬかに、 小太郎の腰が、少し低くなって、左脚が、 赤黒い血が、どくんどくんと、浪打ち 声も立てずに、脚も動かさずに、 後方へー 小太郎の きら 転が 胸の

よし

ってしまった。それは、

ほんの、瞬間だった。

腕の冴えに、すっかり圧倒されてしまって て、正眼につけたまま、動きもしなかった。 と、八郎太が、声をかけた。残った一人は、蒼白な顔をし 小太郎の早業に、 - 153

(逃げたら後方から斬られる――だが、逃げないでも――)

分の斬られるのを知りながら、もう、 と――それは、 、丁度、猛獣に睨まれている兎であった。 脚も、 頭も、 しびれて

小太郎が、八郎太に

しまって、自由にならないのだった。

(斬りましょうか)

と、目配せをした。

八郎太は、

顔を横に振った。そして、

静かに、 刀を抜いて

覚悟

対手は、 八郎太へ眼を向けた。そして、じりっと、脚を引

「牧の修法か」

て

「やっ――」

真向からの打ち込を、ぱちんと受けて、摺り上げようとし

た瞬間

「やっ、やぁーっ

いたと思った刹那に、すぐ、切返して来る早業――たたっと、老人とも思えぬ、鋭い気合が、つづけざまにかかって、引

退ると

「ええいっ」

から、血が飛んで、熊笹へ、かかると刀を立てて、頭を引いたが、一髪の差だった。相手の横鬢

「突なりいっ」

きくれると、血の飛ぶのを避けて、右手へ飛び退った。(八郎太は、若者の稽古のように絶叫して、相手の胸へ一突

「死骸は、その辺へ隠しておけ――」

した。そして、小太郎が、死体へ手をかけて持上げたのを見、印郎太が、杉木立の中の鬱々と茂った草と、笹の中を指さ

7

「一人でよいか」

小太郎は、生暖かい足を掴んで

「これしきの――」

てた。血が、土にしむ間も無く、細い流れになって、ゆるやと、見上げて、微笑した。そして、両脚を持って、逆に立

振り――ざっと、笹が音立てて、どんと、地へ響いた。八郎かに下り出した。小太郎は、はずみをつけて、一振り――二

太は一人の襟を掴んで、少し引きずったが、手に余ったらし

りと

「力業は――いかん」

と、腰を延した。そして、鞘へ納めた刀を、もう一度抜い「ジュー

て、刃こぼれを調べた。

(十人とすれば、残り八人---)

小太郎は、血に塗れた手を紙で拭いて

「ここまで見張が出ておりましては、用意なかなか粗末でご

ざりませぬな」

「うむ――」

と、頷いてから

「腕が上ったのう」

「わしは、せっかちでいかん。じわじわ来られると、苦手じ「父上も、見事でござりました」

\_\_\_

の中で斬ったとは思えなかった。悪く、二人に感じさせた。今、人を二人まで、この静かな山悪くを終ると、冷たい風と、淋しすぎる静けさとが、薄気味

「頂上は、余程あると見えるの」

微かに、人声が聞えた。それは、二人でなかった。の絶頂は、少しも、現れて来なかった。だが、少し登ると、

左手は、熊笹ばかりの山で、径は、左へ左へ行くが、四明

「父上、話声が――」

った。右に、左に折れ曲る急坂を、二人は、静かに、ゆっくそして、その上から、手拭をかぶった。小太郎も、それに見倣二人は、立止まった。八郎太は、黙って、鎖鉢巻を当てた。

454

「急ぐでないぞ、呼吸が乱れては闘えぬぞよ」

視めると、向うも、こっちを眺めていたが、何か合図をした半身を見せて、一人の侍が立っていた。小太郎が、じっと凝て行った。小太郎が、目を上げると、遥かの、熊笹の中に、と、いいつつ――それでも、時々、肩で息をしながら登っ

「居るのう」

うと、右手の山蔭へ消えてしまった。

と見えて、すぐ二人になった。そして、二人になったかと思

「半 町 |---

と、いった途端

「待てっ――待てっ」

足音が、寂寞を破って、乱れ近づいた。小太郎も、八郎太も、遠くで、人影も見せずに、こう叫びながら――然し、すぐ

「JZ、g)」、g」の「から、四人の姿が、現れて、一人が、こっちを見るとから、四人の姿が、現れて、一人が、こっちを見ると討てるように、左右に分れて、径に向い合った。すぐ曲り角羽織を笹の上へ棄てた。足場を計った。二人で対手をはさみ

「何故、登った、降りろ」

郎は刳形へ、手をかけて、親指で、鯉口を切った。と、叫んだ。四人とも、襷がけで、支度をしていた。小太

と、八郎太が、注意した。左右、後方へも、気を配らんといかんぞ」

「これは、

なかなか、手配りがついておる。

前だけでなく、

「斬れっ」

一人が、すぐ刀を抜いた。

「待て待て」

て、前へ出た。そして、二人を左右に見て四十余りの、紬の袷に、茶の袴をはいたのが、人々を止め

「この下に、見張の者が、二人、居ったであろうがな。それ

を、何んとした?」

八郎太が

「さあ――何んとしたかのう」

三人が

「斬れっ」

「面倒じゃっ」

と、叫んで、八郎太と、小太郎とに迫って来た。

であろう。御山を汚した以上、御山の罰を受けるということ相違ない。人を殺した以上、己も殺されるということは承知「そうか――目といい、支度といい、二人を斬捨てて来たに

も承知であろう――」

「天童、貴公の説法は、了えんでいかん――さあ、参れ」

右側から、下段で迫って来た。一人が、八郎太へ、正眼につけた。一人が、それを援けて、

「小冠者っ」

を待っていて勝つという方法であった。った。こっちは飽くまで抜かずに居て、対手の抜いて来るのの手で、所謂鞘の中に勝つ、抜かせて勝つ、という技巧であ度、柄頭が、自分の眼の高さに行くまでに延した。古流居合天童は、刳形へ手をかけて、ずっと、鞘ぐるみ刀を――丁

を落したまま、動きも無く、音も無く、声も無く、影の如く郎を侮って、一挙に討とうとする型であった。小太郎は、腰(天童を助けて、一人が、上段に攻めて来た。二人とも小太

静さは、天童の傲った心を脅かすに十分であった。構えていた。それは真剣の場数を踏んできた賜物で、その冷

(侮れない)

し、疑いの心が少し――最も、剣客の忌む、そうした心が起と、天童が感じた瞬間、天童は、固くなった。怯け心が少

「やあ」

って来た。

「おおっ」

八郎太の方に、誘いの懸声が起った。それに引込まれたよ

うに

やあ」

次の瞬間たように一足引いた。上段の刀尖が、手が、ぴくぴく動くと、たように一足引いた。上段の刀尖が、手が、ぴくぴく動くと、と、上段に構えて、じりっと、進んだ時、小太郎は圧され

「ええいっ」

らっと、白く円弧を描いて、打ち込む――その光った弧線が、見事、小太郎の誘いに乗って、大きく一足踏み出すと、き

「とうっ」

半分閃くか、閃かぬかに

の飛沫と共に、宙に躍った。く、一条の白光、下から宙へ閃くと――刀と、片手が、血潮上上の中まで、突き刺すような、鋭い気合、閃く水の影の如

「ええっ」

脇へ、入るか、入らぬか、八郎太がその刹那、天童の手から、「迸」り出た刃光一閃、小太郎の

「危いっ」

にして踏み止まったし、小太郎は、熊笹の中へ転がって、天にして踏み止まったし、小太郎は、熊笹の中へ転がって、天と、絶叫した時、天童は、たたっ、とよろめくと、刀を杖

童の胸へ刀をつけていた。

を構えて

小

太郎

は、

鹿が跳躍するように、

跳ね起きた。

そして、

刀

「如何っ」

刀ぐるみぶるぶる震わせていたがと、叫んだ。天童は、右手に突いた刀へかけている手を、

「無念」

いてしまった。そして、左手を、土の上へついて、大きい息呟くように言葉を抛げつけて、小太郎を睨むと――膝をつ

を、肩でしながら

「今――今、一合せ」

を、懐から取出した。そして、静かに、顫える手で、膝を探そういって、刀を地へ置いて、用意していた血止め、繃帯

て、指を――全身へ響く痛みを耐えて、創口へ入れて行くと、って行くと、べとべととした血潮、開いた創口――眼を閉じ

(骨を断たれた)骨へ触れた。尖った骨であった。

るところを見ると、小太郎は、もう其処にはいなかった。天童は、手早く、太腿を縛った。そして、小太郎の立っていて来た。小太郎への無念さが、身体中いっぱいになって来た。い血が、指の周囲から、外へ流れ出るのを感じた。眼暈がし天童は、その瞬間、蒼白になって俯向いてしまった。暖か

ああ

いつめられて、右手で刀を突き出したまま、左手で、顔を覆半町も逃げのびた浪人の一人が、崖のところへ、小太郎に追断末魔の叫びが聞えた。天童が、その方へ眼をやると、小

「卑怯者」

って、斬られるがままに斬られていた。

と、いう小太郎の微かな叫び声が、聞えてきた。

「ああっ――あーっ」

なっている前で、小太郎は大上段に、振りかぶっていた。 首をちぢめて、手を顔へ当てて、崖に凭れたまま無抵抗に

「小太っ」

っちへ戻りかけた。背を擦りながら潰えてしまった。小太郎は、血刀を下げてこいた刀が、地上へ落ちた。浪人は、岩角から崩れるように、と、八郎太が叫んだ。その瞬間、血煙が立って、突き出て

「ううっ――うむーん」

置いてあった刀を取上げて、少し、身体を斜めにした。そし八郎太の脚が、すぐ眼の前のところにあった。天童は、右にで――すぐ、後方で聞えていた。天童が、その方へ振向くと、――坊の一人の唸き声が天童の後方に聞えていた。熊笹の中

一父上つ」

構えると、

「おのれっ」の叫び声と、その指さすところを、ちらっと、見た途端の叫び声と、その指さすところを、ちらっと、見た途端の小太郎が、絶叫して、走り出して来た。八郎太が、小太郎

た。天童の刀が、八郎太の足へ届いていた。八郎太は、よろ(飛び退きざまに、天童へ斬り下ろしたが、一髪の差があっ

めくと、すぐ、笹の中へ、仰向きに転がった。

「おいぼれっ。覚えたか」

るも、構えぬもなかった。時、小太郎の足音がした。天童が、振向いて、周章てて構え、天童が、灰色の顔で、八郎太の転がっている身体を睨んだ

プラ 村 プロコ

「うぬっ」

たままで、頭をがっくり下げた。小太郎は赤黒い味噌のようなものが、溢れ出した。天童は、刀を構え小太郎の絶叫と共に、天童の頭に、ぽんと鈍い音がして、

「馬鹿め、馬鹿め」

どく湧いて、土の上へ流れた。
い口になった。小太郎は、それを足で蹴倒した。血が、どくだらりと下って、切口が、木の幹の裂けたように、真赤な裂と、つづけざまに叫んで、天童の肩を、斬った。右腕が、と、つづけざまに叫んで、天童の肩を、斬った。右腕が、

八郎太は、起き上って、笹の上へ脚を投げ出して

「心配するな、傷は浅い」

へ置いて、両手を草の中へついて、肩で溜息をしていた。と、云った。だが、すっかり疲労しているらしく、刀を側

| 街手当を ——

「逃れた奴はござりませぬ」

「うむ。大丈夫か、上の方は」

てて、父の取出した布をもって(八郎太は、懐へ手を入れた。小太郎は、父の横へ片膝を立

「此听は?」

「膝の上下――その辺一面に、ずきずきしているが」

が粘って、 いつの間にか、腓から、向う脛も、探ると、べっとりと、指 小太郎は、袴の脇から手を入れて疵所を探った。そして、小柄 袴を切り裂いて、手早く、手拭で太腿をきつく縛った。 脚絆の上へも、 微かに血が滲み出していた。 印 籠

の口を開けて、

丸薬を出して

太郎が、手当を終って脚から手を放すと 当てて繃帯した。八郎太は、 と、父の掌へあけて置いて、足の疵所へ、 腰の竹筒から、 脂薬を布と共に 水を飲んで、

小

#### 「水盃」

小太郎は、 と、云って、蒼白めた顔に、 父の顔を見た。 微笑して、 竹筒を差出した。

じゃ。斉彬公が、いつも仰せられた、身の代になったなら取 さしい言葉もかけなんだが、心の内では――心の内では――」 立ててやるぞ、と――今まで、わしは、何一つ、お前に、や 「いろいろと、苦労させた――わしの子にしては出来すぎ者

不意に、胸の奥から押上げてくる熱い涙を感じた。 八郎太の声が湿ってきた。小太郎は父を見つめている内に、

- 喜んでいたぞ。この疵を受けた上は、牧を斬ること思

た。

## いもよらぬ」

お前が、二人前働いてくれ。 「さ、それは判っておるが、脚の自由が利かんでは覚束ない。 わしは、 それを見届けて、 腹を

「父上、六人斬りました。残りは二人か、三人」

れますよう」 「父上、手前 一人で参りましょう。ここに、 暫くお待ち下さ

「はい」

しよう

日 も、 「小太、わしを武士らしく死なさぬと申すのか。 、犬死するな、と、 あれまでに申したのが、 判らぬか、 昨日も、今

わしを犬死させるのか」

「胆に銘じておりますが、父上が、此処で、切腹なされても、

矢張り犬死では

仙波の家も継いで行かねばならぬ」 その下手人になる? お前と、わしと二人が、下手人になっ て、斬罪に処せられて何んになる。わしが、ここで、 い。又、お前は、 って、下手人となれば、お前は助かる――母もある。妹も多 「思慮の無いことを申すな。これだけの人数を斬って、誰が、 わしの志を継いで、 御家を安泰にし、 腹を切

八郎太は、こう云って、刀を杖に、立上りかけてよろめい

「それ程の理を弁えぬ齢でもあるまい」 小太郎が、支えて、同じように立った。

顫えていた。 小太郎は、父の慈愛と、父の武士気質と、 父の意気とに、

「水盃が厭なら、 血を啜るか」

八郎太は、左腕を捲った。其処にも、疵が、口を開けてい

れよう。 「救からぬ命じゃ。 二人を対手にしておくれはとらぬ. 小太、肩を貸せ。これでも未だ、 牧の前 にて、正義の徒の死様を見せてく へろへろ浪人の一

りかかった。 「歩け。 八郎太は、 何を泣く」 に曇った刀を右手に提げて、 小太郎の肩へよ

- 158

を見てからじゃ。叶わぬ節には食いついてくれる」 「山の上へ気をつけい。ここいらでは死にとうない。 牧の顔

八郎太は、元気のいい声であった。

伝教大師の廟の石に凭れていた一人が、 身体を立てて

あれは?」

ロに、 ۷ いって、 下の方を指さした。その指さす遥か下の登り 一人の手負に肩を貸して、 静かに登って来て

| 周西では? | ーないか?」 いた。

「ちがう—— **一**人は手負だ」

呟いて、すぐ人々へ

見張が、 斬られたらしい」

Ł 叫んで、下の方を指さした。

誰が――

二三人が、 同音に叫んで駈け出そうとした。 山内が

周章てるなっ」

と、止めて

誰が斬られたか?」

二人の見張は、

それに答えない

で、

じっと、

登って来る二

人を見ていたが

「見張ではない、 あやしい奴じゃ-山内殿、 此処へ参って

方へ歩いて行った。 手招きした。山内が、 大股に、ゆっくりと、草原を二人の

牧は、貴島と、斎木と三人で、夜の祈祷の準備のために、

四辺を火で清浄にしてから、 その跡へ、犬の血、 月経の血

馬糞の類を撒いていた。

「味方でないとすれば、不敵な代物じゃ」

「此処へ来る迄には、見張を斬らなくてはならんが と、残りの人々が話し合った時、 山内が右手を挙げた。

「それっ」

見たままで、 人々は、 刀を押えて走り出した。牧は、じろっと、それを 指を繰って、 何か考えていた。

「先生」

斎木が、 人々の走って行くのを見て

「先生」

「判っている」

々が、一列に立並んで、 冷やかに答えて、牧は、 刀へ手をかけているのを見ながら、 眼を閉じた。斎木と、貴島は、人

不安そうな眼をしていた。

「よい生様が、 山内が、 微笑しながら、ただ一人、牧へ近づいて来て 来よりました。 若いの、 御好み次第、

生のよい生胆がとれる一 -牧殿\_

眼を閉じて、 突立ったまま、 裾を、 袖を、 髪を、 風

に吹かれていた。

「牧殿」

「判っております。 御貴殿、よろしく」

その時、真一列に並んでいた浪人達が、じりじり左右へ分れ 山 [内は、じいっと、牧を睨んで、黙って踵を返した。丁度、

現れていた。誰も、まだ刀を抜かなかったが、身体のちぢま かけた。そして、その中央に、草原の上に、二人の頭だけが

るような、心臓のとまるような、凄い、気味悪い、殺気が、

山の上いっぱいに拡がった。 左右へ分れかけた浪人は、又一つの環になって、じりじり

を引いていた。一人は、その右手に、その老人を庇うように、 少しの隙もなく、何か、時々、浪人共にいいながら、少しず の侍が、顔を、 二人を包囲しかけた。そして、口々に何か叫んでいた。二人 胸を現してきた。一人は、刀を杖にして、跛

「問答無益っ、斬れっ」

つ登って来た。

えた。二人は、 と、叫んだ。浪人の大半が、 歩みを止めて、 ぴたりと背中合せになった。 刀を抜いた。一人が、槍を構

みと、呪いとの微笑を脣に浮べて ような眼だけが、光っていた。 仙波八郎太の顔は、死の幽鬼だった。灰色の中に、狂人の 顫える手で、 刀を構えて、怨

「奴等、邪魔立てするか」

その声にも、 顫えが含まれていた。

「牧っ」

しゃがれた声で、 絶叫した。そして、咳をして、唾を吐い

働きを見せてくれる。 「卑怯者めっ。一騎討じゃ 参れ、牧。参れ。参らぬかっ」 ――牧っ、仙波八郎太が、一期の

ままであった。 遥かのところに立っている牧へ叫んだ。牧は、眼を閉じた

吼えるな、 山内が、叫んで

> 討になる。 「一人に三人ずつ、六人してかかれ。 働きに、 自由が利かぬ」 大勢かかっては、

同志

浪人が、 お互に、 左右を振向いた。

「退け」

「尊公が――」

浪人がよろめいて、倒れた。 た血煙――ばさっと、鈍く、 の閃く如く、一間余り、身体を、 と、一人が云って、油断を見せた一刹那 、だが、 閃かすと、ぱっと、音立て 無気味な音がした。その -小太郎は、影

「やられた、やられた、やられた」

と、いう人々の叫びと

一うっ」

うに倒れて、丸く、膝の上へ頭を乗せてしまった。 刀を持ったまま、両腕で頭を抱えて――然し、すぐ坐ったよ に取残された。一人は、脚を引摺って、這いながら、一人は、 たように崩れた。退いた。そして、二人の浪人が、草原の中 の列が、二三間も、だ、だっと、躓くように、突きのけられ と、咽喉のつまったような呻きとが、同時に起って、浪人

「不覚者

己の背をつけて、正眼に構えていた。 山内の顔が、さっと、真赤になった。 小太郎は、 父の背に

「あ、味な真似を――」

斉に起って、又二人に近づいて来た。八郎太が から、迫った。それと、同時に、七八人の口から、 一人が、三尺余りの強刀を、八相に構えて、八郎 懸声が一 太の正面

「小太郎、犬死せまいぞ。この人数では敵わぬ。

わしは死ぬ。

- 160

お前は、早く逃げい」

と、耳のところで囁いた

「老いぼれっ。参るぞ」

じりっと、一人が一足つめて来た。瞬間

「や、やあっ」

と、よろめくとの槍とは知ってはいたが、反射的に避けたはずみ――たたって手から、繰出した槍――八郎太は、自分を牽制するため

「ええいっ」

中で、 細く、 よろめいた。 ばかりの一刀――八郎太は、その瞬間、眼を閉じてしまった。 ろめきつつ、 暗黒だった。夢中で、刀を、 たえた痛みとがあった。 刀の下った隙 八相の烈剣、きえーっと、風切る音を立てて打込んだ。 があーんと、頭いっぱいに鳴り響くものと、全身にこ 力無くなって、身体が宙返りするように感じた。頭の がんと受けたが、 地が引っ繰り返って、天になりそうに、 ―頭から、額へかけて、頭蓋骨を切り裂かん 眼を開いているつもりであったが、 頭上に構えた。そして その獰猛な力に圧倒され 脚 が、

「小太郎、犬死すな」

もう判らなかった。ただ、小太郎に感じた。何か、耳元で叫んだようであったが、どんな意味か、くようにも感じるし、宙ぶらりんに、止まっているようにも微かに感じた。そして、暗黒な、地の底を、急に墜落して行にも聞えなかった。腕が、肩が、何かで撲られているように、と、自分では、力いっぱいに叫んだつもりだが、自分の耳と、自分では、力いっぱいに叫んだつもりだが、自分の耳

と、思った。

か、わからなかった。 自分で叫んでいるのか、何う、手を――脚を動かしているの小太郎は、闘志と、怨恨とに狂った猛獣であった。何を、

(皆殺しだ)

ちらした。 白色の骨、 赤な眼球、肉が縮んで巻上った傷口、そこから覗いている灰 食いしばった紫色の脣と、 ていた。父の ぬくらいに流れている血 と、いう憤りが、 血糊に固まった着物、 倒れるのを、 頭いっぱいに、熱風のように吹きまくっ 血を噴く歯、 ちらっと見ただけであ ―そんなものが、頭の中で、 頭も、 怨みに剥き出した真 顔も、 見分けのつか つったが ちら

ちらちらした。 ちらちらした。 ちらちらした。 る浪人 ――そんなものが、眼の前を、陰の如く、光の如く、る袖、跳ねる脚、右から、左から閃く刀、絶叫 ――倒れていが手の浪人の恐怖した眼、当もなく突き出してくる刀、翻

頁ら、宛ら、白けらにうこれかった。舌は干き上って、砥石のように、ざらざらしてきた。脚も、れて来た。呼吸が、肩で喘がなくてはならなくなってきた。血で、指が、柄から辷りかけた。膝頭が曲らないように疲血で、指が、柄からザ゙

(いつの間にか、かなり斬られたらしい)頭も、腕も、灼けるように熱かった。

入るらしく、眼が、痛んだが、もう、眼で対手を見る力もなれたという微かな覚えだけがあった。汗が、血が、眼の中へと、ふと思ったが、斬られたという記憶はなかった。撲ら

- 161 -

「小童――小童がっ」

まなかった。小太郎が、刀を振ると避けた。ただ遠巻きにしれ、金で雇われているだけの浪人は、小太郎の隙へさえ斬込四人が深手を負った。山内が、激昂しても、小太郎の腕を恐って、山内は、歯噛みをしていた。浪人の二人まで即死して、と、叫びながら、人々を相手に跳躍している小太郎を、追

牧は、縄張りのところへ出て、小太郎をじっと眺めていた。

小太郎の疲労を待っていた。

そして、斎木に

「何んと申す若者かの、あれは?」

と、聞いた。

「仙波某とか――」

の倅か――見事な」

牧は、静かに、小太郎の方へ、歩きかけた。貴島が

「何ちらへ」

これ、はありにない、このでによりがいい。と、いったが、黙って、草を踏んで行った。斎木と、眼を

へに分にくにてに言うに言い、 うこうこう 1をしに合して、貴島らの二人は、その後方へつづいた。

動かなくなって、すぐにも気を失いそうだった。だが、一人切り裂かれて、芭蕉の葉のようであった。瞳は、もう力なく、いた。半顔は、人の血と、己の血で染まっていたし、着物は、小太郎は、伝教大師の石室を、背にして、血塗れになって

えておれぬらしかった。山内が突き出している刀尖が、時々下った。腕が、もう、刀を支

引導、

渡してくれる――

南無阿弥陀仏、

御大師様の廟

でも、近づくと、凄い光を放って睨みつけた。

じゃ」の一同の者、よく見い、人を斬るのは、こう斬るの阿弥陀仏。一同の者、よく見い、人を斬るのは、こう斬るので殺されるからは、極楽往生疑いなし、南無阿弥陀仏、南無

上段に振りかぶった。小太郎は、石に、背をつけたまま、

だるそうに、正眼に構えた。牧が

「不憫な奴じゃ」

「よく見い。真向から二つになるぞ」もう一足、小太郎に近づいた。そして、左右の浪人へと、近づいて呟いた。山内は、ちらっと、その方を見ると、

動きもできなくなっていた。と、いった。小太郎は、半眼で、じっと、構えたまま、身

「逃げえ、小太郎――犬死してくれるな」

た。斬倒された仙波八郎太が、左手に刀をついて、立上ってそれは、墓穴の中から、死人が呼びかけたような声であっ

い た。

りと下ったままであった。て無くなり、手も利かぬらしく、刀は持ってはいるが、だら鼻の脇へ流れて、こびりついていた。右手の袖が、斬落され「射られた頭から、どす黒く、血と混った脳 漿が、眼から、「小太郎」

えて現れていた。ぼろぼろに切られた袴の中で、脚が、少しるだけであった。脣からは、血に染んだ歯が、がくがくふるませた眼、瞳孔は空虚になって、ただ、小太郎を凝視してい振向いた人々は、背筋から冷たくなった。八郎太の血を滲

幽霊であった。子を思う最後の一心が、死んだ身体へ乗りう りついた袴は、 ずつ、動いて、 で育ててきた小太郎に対する、死よりも強い愛の力であった。 つったとしか思えなかった。やさしい言葉一つさえ懸けない 風ぐらいに動かなかった。それは、明らかに、 少しずつ近づいて来ていた。 血で、肌へこび

っと光が動いた。 小太郎は、 石に凭せていた身体を立てた。頬に、眼に、さ

その愛の力が、死んだ肉体を、「蘇」らせたのだった。

「父上っ」

で来た脚、上った拳、山内の引いていた呼吸が 心の中で、絶叫するか、せぬかに、山内の刀 踏み込ん

「それっ」

石に当った音がした。 左手へ避けた。閃いた刀は、 噴き出した途端、 と、いう懸声にかわって、 小太郎は、 刀を右手に提げたまま、さっと、 毒気を吐き出す如く、力と共に 空を斬った。かちっと、刀尖が

「小太、逃げい」

うに、 眺めてい 八郎太が、よろよろ近づくのに、浪人達は、気圧されたよ 恐怖の眼をして、眺めていた。 牧が、じっと八郎太を

当って、刀尖が折れると共に、赤くなって激怒しながら、二 の囲みを脱出していた。 感じて、呆然としていた一人の浪人に、 度目の猛撃をと、さっと振上げた瞬間 山内は、一討ちと思って打ち込んだのを、外されて、石に 浪人の中へ飛び込んでいた。八郎太の凄惨さに、恐怖を ――小太郎は、鹿の如 一撃をくれて、 人々

> て、小太郎の後方から走り出した。多勢の浪人共が、その後 「たわけっ」 と、山内が、浪人に怒った。

そして、振上げた刀を下ろし

を追った。 二人の浪人は、刀を構えて、八郎太の方へ静かに近づいた。

すように、人々の走って行く方へ、うつろな眼を動かしてい て、口を開きながら、眼をしばたたいて、小太郎の行方を捜 た。足は、 八郎太は、もう、眼が見えなくなって来たらしく、眉を顰め もう動かなかった。

「父上っ――御免」

らしく、微笑もしなかった。二人の浪人が、 小太郎は、走りながら絶叫した。だが、八郎太には聞えぬ 八郎太の前 立

った時、牧が

「その老人を斬るなっ」

太の右脇下へ、自分の肩を入れて と、叫んだ。そして、足早に、ずかずかと近寄ると、八郎

「仙波っ、気を確かに」

けてくれているのは誰だか、 と、叫んだ。八郎太は、眼をしばたたいたきりで、自分を扶 判らなかった。 だが、 微かに

「小太郎は?」

と、聞いた。

「無事じゃ。無事に逃げたぞ。眼が見えるか」

た。牧は、自分の後方の斎木に 八郎太が、頷いた。そして、 右手で、 前方を探るようにし

「肩を貸せ、

左の方を、

持ち上げて、その小高いところまで

て、急ぎ足に、小太郎の逃げて行く方へ歩んで行った。と、牧は、斎木と共に八郎太の左右から、身体を持ち上げ

「先生っ」

「如何、なされます」

貴島が、牧の態度に不審を抱いて聞いた。

「武士の情じゃ」

ころを、少し登った。そこには、将門岩が、その外の岩が、つなぎ止めている八郎太を肩にかけて、草原のなだらかなと、牧は、ただ、僅かに残った、精神力だけで、微かな命を、

――もう、刀の法も、業も、何もなかった。お互に、ただ刀(見下ろすと、小太郎が、防ぎつつ、逆襲しつつ、走りつつ

うずくまっていた。

な傾斜は、人々の足を、時々奪ったので、小太郎も膝をついを振り廻して、何事かを叫んでいるだけであった。草原の急

大きいのを、肩でして、両手で、何かを探すように、前の方(牧が、下の方を指さした。八郎太は、最後の息のような、「仙波っ――あれが、見えるか。小太郎が見えるか」

「小太郎」

へ延して、

空を掴んだ。

そして

と、微かに呟いた。

「見えるか」

暫く見ていたが――いきなり、右手を右の方へ振って八郎太は、瞳の力を集めて、牧の指さす下の方を、じっと、

手は、草原が、杉木立の中へつづいていた。左へ避けていたが、そこの行手は谷で行詰まりであった。右八郎太の顔を見てから、小太郎の方を見た。小太郎は、左へ、して、それでもう残りの力も尽きたらしく眼を閉じた。牧が、と、叫んだ。そして一脚踏み出そうとしてよろめいた。そ

「右手へ、逃げい。小太郎っ、右手へ逃げい。左手は、谷じ

ゃっ。谷があるぞっ」

太は、耳許で、その叫びを聞くと、頷いた。そしてと、牧が叫んだ。山内が、下の方で、上を振向いた。八郎

「御身は?」

と、微かに、いった。もう、ぐったりと、牧へ凭れかかっ

て、最後の生命がつきようとしていた。

牧

八郎太が、よろめいた。そし

|御身が、牧|

-仲太郎か]

開いて、力が無くなってきていた。だがうであった。眼を開いて牧を見ようとしたが、瞳がだんだんと、呟いた。もう、牧が何者であるか、判断がつかないよ

「 牧

と、呟くと、眼が、光を帯びて

「おのれ」

顫える手で、刀を探すらしく手を延した。牧が、仙波の耳

へ口をつけて

事に逃げたぞ」 た。仙波っ――小太郎は、無事だぞ。逃れたぞ。小太郎は無「仙波、小太郎は、無事に逃れたぞ。見てみい。見事に働い

八郎太は、もう、耳が聞えぬらしかった。微かに

「小太郎・ | な、 ―娘、娘は?」

の上へ静かに置いて ٤ いった。牧は、ぐったりとしてしまった八郎太を、 草

「小太郎は、逃げのびたぞっ」

らりとなって、眼を閉じると共に、牧は、端坐して合掌した。 が上った。牧は、涙を浮べていた。八郎太の脚が、手が、だ と、耳許で、絶叫した。八郎太の、血まみれの脣に、

秋の日が、傾きかけた。風が、いくらか、弱くなって来た。

山の下の方には、 時々、浪人達の叫び声がしていたが、そ

れも稀になった。

「埓も無い ――一体、何事じゃ」

死体へ黙祷している後姿を見て、呟いた。斎木が、じろっと、 いつの間にか、 登って来た山内が、牧の、坐って、仙波の

### 玉

って、それを登ると、広書院の縁側になるところまで来た。 案内の老女が、狭い廊下のつきるところ――三段の階段があ こんなに、御屋敷が広いとは思わなかった。先に立っている に、明るい、広々とした廊下と、庭とが見えてきた。深雪は、 内玄関から、 狭い、薄暗い廊下を、いくつか曲ると、 遥 か

そして 暫く」

深雪は、老女へ、お辞儀をして、すぐ、つつましく坐った。 坐って、待っておれ、というように、自分から廊下へ坐った。 の侍女へ、何か話をすると、侍女が一人、奥へ立って行 「只今、御案内致します。暫く、これにてお控え下されませ」 と、小藤次に挨拶して、そのお鈴口につめているお由羅付 老女は、こう云って、小藤次に、深雪に、南玉に、そこへ った。

「絶景かな、 絶景かな」

南玉は、口の中で呟いてから、小藤次に

「ね、芋を植えると――」

・叱っ」

「小父さま、お坐りなされませぬか」

「板の上は、 南玉が、庭へ見惚れている時 腰が冷えるで――」

岡田様、 御案内仕ります」

侍女が、広書院の廊下の方へ行くので、深雪は と、若い侍女が出て来て、 声をかけた。 小藤次が、 頷いた。

- 165 -

(晴れがましい)

と、気怯れしたが、侍女は、 その手前の、 右手の小さい部

屋へ入って、襖を開けて

「こちらにて、お控え下さいませ」

と、お叩頭した。襖を閉めると、 真暗になりそうな、 六 畳

程の部屋であった。

も用いるかな。恐ろしく、陰気な部屋で、 「お控え下さいやし、 ってのは、遊人の仁義だが、御屋敷で お由羅屋敷開 かず

の部屋って、昔、ここで、首吊が――」

南玉っ」

「てな、話がありそうな」

「喋ってはいけねえ。困った爺だな。すぐ、次が、お部屋だ

ょ

が見えた。 た方の襖が開いた。 小藤次が顔をしかめた時、 一部屋隔てて、女の七八人坐っているの 衣擦れの音が近づいて、ちがっ

「にょご、にょご、にょごの、女護ヶ島\_

云ったので、俯向いて、 襖を開けた侍女は、開けると一緒に、南玉が、妙なことを 肩で笑った。そして、赤い顔をして、

小さく

「こちらまで――」

南玉も、その横へ、同じように平伏した。侍女が、 へ坐った。深雪は、 小藤次が、立って、 小腰をかがめて、 お由羅の居間の次の間へ入って、 敷居際へ、平伏した。 小藤次に

「お近くへ」

と、云うと、小藤次が

「では、御免を蒙って――」

兄妹であったが、 主と、家来とでもあった。 小藤次は、 お

由羅の下座一間程のところへ坐って

「この間の

、よい娘じゃのう、 あれは?」

Ł お由羅は、 南玉を見た。

身許引受の、 医者でね」

「お医師?」

お由羅と、侍女とが、南玉の方を見ると同時に、 南玉は、

頭を上げた。そして

「ええ、お有難い仕合せで――」 と、平伏した。二三人の侍女が、くっくっと笑った。

南玉

「結構な御住居で、又、今日は、大層もない、よいお日和で と、小藤次が、睨 んだ。

ござりまする」

当てた。お由羅も、笑っていた。 南玉は、こう云って、又、頭を下げた。 女達は、 袖を

れぬか」

「 南 玉

退ってよい。

誰方か、

玄関まで案内

してやってく

小藤次が、こういった時、南玉は、 頭を上げて一膝すすめ

た。そして、扇を斜に膝の上へ立てて

「さて――つらつらと、思い考えて見まするに

侍女達が、 袖を、口へ当てて、苦しそうに、 俯向いてしま

春枝、案内を」

お由羅は、 小藤次が、 煙管を延して、 怒った眼をして、近くの侍女へ、こういうと、 小藤次の言葉を止めた。南玉は、

平然として

縁により、計らずも、 「これに控えおります拙の姪儀、いやはや奇妙不可思議 今般、 岡田小藤次利武殿の御見出しに の 御

あずかり奉り-

「 南 玉 いや、 良庵さん、 もう、 よく娘のことは話してあ

るから

「ところでげす」

|判ってるったら|

気にかけずに 深雪が、南玉の袖を引いた。 南玉は、小藤次も、深雪も、

話に申します、首ったけ」 れ奉って、えへへ――まずこういう工合でござります、 「この岡田様が、この姪 の、 お綺麗なところに、 ぞっこん惚

扇を、 顎の下へ当てて、 頸を延した。 小藤次が

南玉っ」

٤ 叫んだ。 侍女の二三人が、笑声を立てた。

それで

と、お由羅が笑いながらいった。

「ええ、御有難い仕合せで」

南玉は、 一つ御叩頭をして、扇で膝を、 ぽんと叩い

は、嫁舅の仲、 | 愚按ずるに諺に曰く、遠くて近きは男女の仲、近くて遠い 遠くて遠いが唐、天竺、近うて近いが、目、

> ので、部屋の中は、 南玉が真面目な顔をして、大声に、妙なことをいい出した 忍び笑いでいっぱいになった。 二三人の

侍女は、脇腹を押えて苦しがった。

「南玉っ、ここを何処だと思ってやがるんだ。 い い気になっ

と、小藤次が、 赤くなると、 お由羅が

藤次っ」

と、叱った。

「だって――」

「いよう、出来ました。東西東西、ここもと大出来 「いいではないか。 綺麗なら、惚れるのが当前でないか」

南玉が、扇を拡げて、右手で差上げた。

下世 間、 ずいとおたのみ申し上げ奉ります」 りながら、ぽんぽんながら、この良庵が捨ておきませぬ。 とやら、万一そういうことがしったい致しました時には、 いやすから、そういう過ちの無いように、 んのんずいずい乗込んで、 「然しでげす。そこに、道有り、作法有り、不義は御家の法度」 暇取らぬ。 和漢蘭法、三徳具備、 日頃鍛えし匙加減、 高徳無双の拙がついて 隅から、 服盛るに手 隅まで、 の 憚

南玉は、 真面目な顔をして平伏した。

「ようわかった。御苦労であったのう」 お由羅 が、こういうと、 侍女の一人が、

立上って、

南玉の

側 へ来て

「いや、大きに--それでは、深雪\_

御案内仕ります」

二人は、二人だけがわかる眼配せをした。 南玉は、 立上っ

- 167 -

「へっ、へっへ。苗、鳶に、可童のた。そして

いろいろと、いや、何うも、御世話に。御礼は、何れ後程。「へっ、へっへ。猫、鳶に、河童の屁でげすかな。岡田さん、

では、皆様、さようなら――」

切っていた。 南玉は、左右へ、御叩頭をして出て行った。小藤次は苦り

時の露路を入ると、自分の家の門口に、一人の男が、蹲んで南玉が、お由羅邸からの引出物の風呂敷包を持って、黄昏

「誰方様でげす?」

「師匠」

男が、立上った。

「庄吉か。何うしたい」

「まあ、入ってから話そう」

挨拶した。そして、戸を開けて、庄吉を入れて、庭の雨戸を「南玉は、狭い、長屋の横から、勝手口へ廻って、両隣りへ

繰り開けていると

「のう、師匠。深雪さん、御奉公に上ったって云うじゃあねん!!!

「うん」 えか」

「お前、あの娘を、小藤次の餌にするつもりかい?」

南玉は、答えないで、戸を開けてしまった。

「未だ、灯を入れるにゃ早いし、こうして開けておくと、油

が二文がたちがうて」

懐中から油紙の煙草入を出して、庄吉の前へ坐った。

なりきるめえし――困りゃしないか?」前の手も、癒ったというものの、未だ、すっかり元にゃあ、つけねえと、弟子がへっちゃあ――こういうと何んだが、お「近頃、富士春との噂が、ちらちら、ちらついてるぜ。気を

「心得ちゃいるよ」

「師匠の気持は、よく判るよ。だが、師匠に俺の気持ゃ判ら「気に障ったら、御免よ。俺、悪気でいうんじゃあねえから」

ねえらしいの」

でねえと、他人にゃあ出来ねえことだ」ろと、骨を折ってくれたそうだが――そりゃあ、お前の気性「いや、深雪さんから、それも、薄々聞いてはいる。いろい

「と、其処までは、判っているが――それから先きだ」

「ふむ――一番、考えてみよう。それから先き、先き、先き、

先きと」

南玉は、尤もらしく、腕組をした。

「いろはにほへとの五つ目か」

「ええ? いろはの五つ目?」

庄吉は、指を繰って

ほ

男を憐むって裏にゃあ、師匠、軽蔑がいゃあがるからのう。思うんだ。それも、俺あ、憐んでもらいたかあねえ。惚れた俺あ、諦めているよ。立派に、ちゃんと、駈引無しに、諦め女房にもとうの、妾にしようの――いや、手を握ることさえ、女房はねえ色事だよ。師匠、そいつあ十分承知だ。だから、

俺、男としてさ、軽蔑されたかあねえや。ただ、判って欲し

礼をもらった上に、俺の気持をめちゃめちゃにしようとしてで度々の喧嘩だ。あいつあ、深雪さんを、小藤次に取持って、俺あ、命を捨ててもいいよ――この間から、富士春と、これいのは、男が惚れた時、その女に、何んなに男らしいか?

「尤もな、惚けだ」

う

いるが、あいつとしては、無理はねえ。貧乏ぐらしだからの

「本気で聞いてくれ、師匠

「本気だとも」

「それで、今日、実は深雪さんに逢って、何か一役、命がけ

(にだっこ)「ヨウゔぎょぎ、ぺっっこざい」して、小藤次の野郎が来てさ、てっきり、この間からの奉公のことをいいつけて貰おうと、こう思って来ると、近所の噂

「命懸け?」戯『談いうねえ。食えんからの屋敷奉公をする女話だろう。折角の命がけが、ぺしゃんこだあ」

と、南玉が笑った顔を、庄吉は睨みつけるように眺めた。に命がけの、何んのって」

「師匠」

「おいおい、睨むなよ。俺あ、臆病だからのう」

「師匠は、俺の商売を知っていなさるのう」

「うむ、着切だ」

「三下か、ちょっとした顔かも、知っていなさるのう」

「じゃあ、師匠、もう一問答だ」「うむ、橋場の留より上だって、聞いているよ」

「さあ来い。いざ来い。問答なら、桃牛舎南玉、十八番の芸

生死不明だ」

南玉は、両手の指をひろげて、膝の上へ、掌を立てた。

知ってるかい」
「上方での出来事が、俺の仲間で、幾日かかると耳に入るか、

切の早耳話ってのは、書いてないよ。これが本当に、わかん「そこまでは調べておらんな。和、漢、蘭の書物にも、巾着

「びっくりしなさんな、五日で来るんだよ」

らん」

「はあ――五日でね」

まで一日。桑名へ来ると、仲間がまたいる」ちゃんと、仲間がいる。急用だっ、それっと、こいつが桑名して、その夜の内に、鈴鹿を越えら。すると、亀山にゃあ、「早い脚の奴は、日に三十五里、何んでもねえ。京を早立ち

「成る程」

「ふふん、俺の講釈みたいに、少し与太が入ってるんじゃねあっという間に、品物は、十里先で取引してらあ」「こうしなけりゃ、金目のものの処分がつかねえ。すられて、

えか」

「仙波の大旦那は斬死なすったよ」

「ええ?」

比叡山って山の上へ、牧って悪い奴を追っつめて、伏兵にか「上方の伸間へたのんでおいたら、さっき知らせて来たんだ。

かったんだー

「小太郎って、俺の手を折った若いのは、谷間へころがって、「ふむ、伏兵にゃあ、東照宮だって敵わねえからのう」

- 169 -

南玉は、返事をしなかった。

さんの姉さん、何んとかいった――そら、何手、そら、何ん「まだあるんだ。大阪の蔵屋敷へ行った奥方と、そら、深雪

「手は赤丹のつかみと来たが――\_

とかの手」

と、南玉は、顔をあげて

「本当だの、その話は」

「俺の譃をつかんことは―

「わかった」

「それから、益満さんが、調所って野郎の後を追って、江戸

へ下って来なさるそうだ――」

「今の、七瀬と、綱手は、そして、何うしたんだい」

「それは、蔵屋敷にいるんだ」

「調所は、江戸下りか」

「うむ。それで、益満さんは、この調所を途中で討つつもり

らしいんだ」

「そうだろう」

庄吉は、強く、低く

でお前が一番よく知っていてくれる筈だ。ええ――仙波さん「隠さずに、師匠、打明けてくれねえか。俺の気性は、町内

——師匠\_

も、益満さんも、

お由羅の一味を討ちてえんだろう。どうだ

南玉は、じっと、庄吉の顔を見て、黙っていた。

ん、深雪さんを、一物あって、奉公させたんだろう。仙波の「俺、いわねえったら、首がちぎれても喋らねえよ。お前さ

娘を、お由羅邸へ。あの、小藤次の手に任して――え、

に、一手柄立てさせて上げてえんだ――わかるかい、師匠」だから、俺あ、その深雪さんに、そんなあぶないことをしず

「俺あ、ちいっとばかし、水臭いと思うよ。巾着切の仲間に

あばよ」 ――人間の一心って通じるもんだよ――又、来らあ、めしあり――人間の一心って通じるもんだよ――又、来らあ、お前が、よく、寄席でいうのう、虎と見て、石に矢の立つたいいんだ。俺あ、こうと思ったことを、やってみるまでだ。ゃあ、こんな、匿し立てはねえ。返事がなけりゃ、無いでも、

庄吉が、立上った。

「そうかい」

打明けて、いいか、悪いか。益満から固く口止めされている(斬死した? 庄吉のいうのは、本当らしい。だが、庄吉に(南玉は、そう口先きで、いっただけであった。

と、南玉が、乱れかかる心を、じっと、両腕で押えた時

「こんちは」

のにー)

「いらっしゃる?」

富士春の声であった。

庄吉は、真暗な上り口で

「お春か」

と、いった。

怒りと、恨みとを含んだ、静かな――だが、気味悪い声で「そうだろうと思ったよ」

あった。

「お師匠さんかい。今、灯をつけるよ。庄さんと、

話に夢中

る に - 170 -

になって――」

た――富士春は、狭い土間から、庄吉を睨みつけていた。そ家中が、仄かに明るくなった。庄吉は、上り口で突立っていと、いいながら、南玉は燧石を叩いて、附木を燃した。一

見廻した。深雪はいなかった。して、行燈の光が家の中へ充ちると共に、素早く、家の中を

庄さん、もう一度、お坐り。

師匠、ささ、ずっと、

これへ」

一さあ

「 は い

富士春は、上ろうともしないで

「一体、何うするんだい」

低い声で、鋭く庄吉に云った。

南玉は、戸棚から、大きい皿を出して、畳の上へ置いた。「うめえ魚が、手つかずであるんだ。御馳走しよう」

「返事をしないのかい」

富士春が、下から、又、庄吉を咎めた。庄吉は

「帰って話そう」

と、土間へ降りかけた。

「ここでいいよ。帰ると、うるさいよ。お上り。南玉さんに

も、妾ゃ、聞いてもらうよ」

「聞くぞ、聞くぞ。わさびが利くぞ」

南玉は、刺身のわさびを、なめてみた。

痴話喧嘩と申すものは、仲がよいと、始まりやす。仲人を、へへん、出来立ては、喧嘩のあとで環が鳴りって、とかく、「大丈夫に利く。さあ、こっちい来て、食べながら、一喧嘩。

あの茶瓶がと、寝て話し、

桃牛舎南玉が一つ、この茶瓶にな

「とんだ迷惑で」

りやしょう。どうぞ、こちらへ」

「御邪魔させて頂きます」

富士春は、上りながら、突立っている庄吉の袖を捉まえて、

引張った。

「何しやがるんでえ」

庄吉が振り切るはずみ、袖口が裂けた。

ゃあ、威勢のいいところを見せたくなるもんだからね」「おやっ、大層、手荒いのね。そうだろうよ、新情人の前じ

富士春は、これだけ、静かに云うと

「口惜しいっ」

と、叫んで、庄吉の左手へ、齧りついた。

「手荒いことをしちゃいけねえ」

と、南玉が、立上った。

「痛えっ、畜生っ」

庄吉は、手を振り切って、女の肩を蹴った。

「蹴ったな、おのれ――ようも、人を、足にかけたな」

南玉は、行燈の灯を吹き消した。そして、大声に

「ぽんと蹴りゃ、にゃんと泣く」

と、部屋いっぱいの声で叫んで、二人に、近づいて

「人気に障る、師匠、長屋の餓鬼共に見つかったら、うるさ

と、小声でいった。そして、庄吉の袖を引張って、耳許で

「あっちへ」

庄吉も、富士春も、真暗な中での喧嘩は張合が無かった。

- 171 -

庄吉は、こう南玉に云って、奥の方へ足さぐりに行った。

南玉は戸口へ出て

士春は、上り口の間へ立ったまま、剥げた壁へ顔を当てて、近所へそんな声をかけておいて、戸を閉めてしまった。富「ええ、おやかましゅう、只今のは、南玉、講釈の稽古」

泣いていた。

見当ちがいの焼餅だわな。庄公は、少し人並とちがってるん「深雪は、師匠、とっくに、御奉公に上っちまったんだよ。

だから――堪忍しておやりよ。さ、泣かずに、こっちいお出見当ちがいの焼餅だわな。庄公は、少し人並とちがってるん

でよ――よう、師匠」

南玉は、立って来て、白粉と、髪油の匂を嗅ぎながら、富

士春の肩へ手をかけた。そして

「庄公、その辺に、石があるが―

「俺、燧石はまだ打てねえよ」

「これは御無礼、これはしくじり――」

富士春が、帯の間から、燧石を出して

「ここに――

た。南玉は、石を打って、火を出しながら座敷の真中に突っ立っていた。富士春の顔の白粉は汚れていと、手探りに南玉へ渡した。南玉が、石を打つと、庄吉は、

「一つとや、か、人の知らない苦労して」

らくfook と、節をつけて、一足一足、石を打ちながら、行燈のとこ

ろへ行って

も、今日は、お由羅邸で、一苦労して来たところだ。自分だ「なあ、それぞれ、人にゃあ苦労ってものがあるものだ。俺

け苦労していると思っちゃあいけねえ」

と、云いつつ、行燈に灯を入れて、小声で庄吉に

「こっちい呼んでおやりよ」

「うむ」

「やさしく一言かけてやりゃ、女なんて化物は――

「何うせ、化物でござんすよ」

大仕事の手伝いが出来るかい」「ほい、聞えたか?――庄公、そんな堪忍ぐらい出来んで、

「そうか。判った」

庄吉は、元気よく

「お春、こっちへ入らしてもらえ」

南玉が、又立って行って

「ここで、もう一拗ね、拗ねるって手もあるが、そいつあ、

食べて、戻って、寝て、それから、ちくりちくりと、妬くの差しの場合での。他人がいちゃ、素直にここへ来て、仲よく

- 172 -

が奥の手だて。さあ、こっちい来たり」

「やれ――化物を二疋退治した。さあ、生のいい刺身だ。庄富士春は、南玉に、手を取られて、奥の間へ入って来た。

庄公、あーんと、口を開きな。何も、恥かしがることはねえ。公は不自由だろうから、春さん、食べさしてやんな。さあ、

。 南玉は、大きな口を開けて、刺身を、自分の口へ投げ込ん

こういう風に――」

「おお、うめえうめえ、頬ぺたが、落ちらあ」

ところを、案内してくれた。上の厠だけでも三ヶ所、下の厠納戸、茶の間、寝室、御居間、書院、湯殿、 厠というような 取締りの老女中が、奥向きの部屋部屋――内玄関、勝手、

だけでも五ヶ所あった。

とか――細かいことが、無数にあった。 化粧部屋は一番御仕舞いに入って、皆の掃除をして出て来る入って、古参の肩を流して、自分は御仕舞いに出るのだとか、ぬとか、夜中の厠行は、幾時までとか、湯は新参者が一番に参の者には言葉を返してはならぬし、命令に反くこともならるれから、屋敷の中の心得を、口早に喋って聞かせた。古

そういうことを問題にしていなかった。――少しも、間違っていないと、思っていたが、老女達は、自分さえ正しければ、自分の学んだ礼法は、武家作法だしとか、摺り足で歩いても、そんなに畳の音をさせてはいけな茶を運ばせた。そして、茶碗の捧げようが、高いとか、低いはいける、作法を見ると云って、四、五人の老女が坐って、

みとしていた。りを、美しく、若い女に向けて、それをいじめることを楽しせびらかし、それから、自分達の独り身で老い朽ちて行く憤せびらかは、古参ということを誇り、自分の下らぬ知識を見て女達は、古参ということを誇り、自分の下らぬ知識を見

った。眼七分目に捧げたら、低すぎると叱られ、八分目にす素直な、世間知らずの深雪に、そんな気持は判る筈が無か

る蒲団をきて、じめじめした部屋で、泣きあかした。って戻ろうかとさえ思った。そして、冷たい、固い、臭のあ悪いと、湯を、肩からぶっかけられた時、明日にも、暇をとると、高すぎると罵られ、その夜の湯殿で、肩を流しようが

雪に命じ、それが済むと、厠の掃除までさせた。き出た。老女は、雑用婦のする務である廊下の雑巾がけを深廻るのを聞いていた。そして、侍女を起す木が響くと共に起鶏が鳴いて、夜が明け切らぬ頃から、耳を立て、拍子木の

くなっていると、側へ来て、小声で深雪へ同情する者が出来てきた。深雪が、部屋の隅で、小さ女の仕事までさせる老女中の横暴を見ると、若い女の中には、だが、そうして、いじめられている深雪の痛々しさ、雑用

「暫く、辛抱なさいませ」

た。ない言葉であったが、深雪にとっては、この上ない力になっない言葉であったが、深雪にとっては、この上ない力になっと、慰めてくれた。それは、当の無い、漠然とした、頼りず

しなければならなかった。深雪はしていても、その人々の着物をつくろったり、鏡を拭いたりればならなかったし、午後の暇な時には、古参が、笑い話を食事時には、一番あとから食べかけて、一番早く終らなけ

寄ったり出来るかしら)(いつになったら、お由羅へ近づいたり、秘密のところへ近

- と、思った。だが、そう思いながら、鏡台を掃除していると、思った。だが、そう思いながら、鏡台を掃除している

と、いっている声が聞えた。「今夜から又、奥の御祈祷が始まります」

(祈祷

深雪の身体中が熱く燃えた。

(今夜から)

深雪は、案内された時に見たお由羅の居間を考えた。

(あの中で――)

した。 拭く手を止めて、祈祷の場へ、忍び込んで行く自分を想像

「何を、ぼんやりと、 この新参っ子は

背後で、老女中の声がした。

はいっ、御用は

膝を向けて、 手をついた。

夕餐を終って、 お膳を勝手元へ出していると、 一人の雑用

婦が

「一寸、こちらへ」

٤ 納戸の方へ導いた。深雪が、 おずおずとついて行くと

お越しなされました」

入ると、すぐ小藤次の顔が、近々と笑っていて、手を握られ 深雪は、左手で、 襖を開けて、深雪を押込むようにした。深雪が、一足

襖をもって、

力任せに後方へ引こうと

したが、小藤次の力に負けた。

|閉めて---早く|

立ったままで笑っている雑用婦を、 叱りつけた。

| 約束でないか、深雪|

いいえ――」

右手を握られて、左肩を抱きすくめられて、 小藤

は

次の胸のところで、髪を乱すまい、 顔を、 肌を触れまいと、

身体を反らしていた。

いて匂う襟頸、 小藤次は、今朝結立ての御守殿髷の舞台香の匂、京白粉の媚 薄紅に染まった耳朶に、 血を熱くしながら、

深雪を抱きしめようとした。

「なりません」

脣を曲げて、眉をひそめて、 小藤次の胸を左手で

押した。

なあ」 家の法度ってやつだ。俺は、救かるが、お前は、軽くて遠島、 重いと、 「声を立てると、見つかるぜ。見つかったら最後、 切腹って---こいつは、痛いぜ、腹を切るんだから 不義は御

深雪は、 耳許で、笑いながら、こう云いつつ、 脚を押しつけて来た。

「御無体なっ」

腰を引いて

に上へ引いて、小藤次の手を振り切った。 小太郎から教えられた護身術、柔道の一手で、 - 軽く、拳でどんと脇腹を突くと同 時に、 右手を力任せ 草隠れの当

「て、てっー ― おっ痛、 た

て、深雪は壁を背に、簪を抜いて身構えた。 顔中をゆがめて、両手で腹を押えた小 藤次の前を飛

「ひ、ひでえ事を、 しやがったな。 ああ、痛え」

んだん俯向いて、苦しそうに丸くしゃがんでしまった。深雪 して、痛そうに、脇腹を押えて、 小藤次は、真赤な顔をして、 怒り眼で、 身体をかがめていたが、だ 深雪を睨

夜の祈祷場を覗くことも、 (少し、手強すぎたかしら――本気に、腹を立てたなら、今 水の泡になるかもしれぬ。何うし

と、思った。それで、やさしく

たなら?)

さらずとも、もっと機がござりましょう。 「こんなところで、欺し討のように― ―そんな卑怯なことな 約束約束と-妾

よりも、小藤次様が、約束をお守りなされずに Ł 眼で睨みながら、言葉は柔かにいった。

「俺は、 俺は、 たたたた、物を云っても痛いや、何も、 たた

たたし

「今夜、遅くに、 お居間の廊下へ忍んでござりませ」

小藤次は、くちゃくちゃの顔に、微笑んで

「本当かい」

「ええ」

自分の言葉で、自分を泥の中へ、蹂躙ったように感じた。涙深雪は、こう云うと共に、眩暈したような気持になった。

が出てきた。自分の身体も、 心も無くなって、ただ、悲しさ

だけのような気がした。

(操を捨てなくてはならぬかもしれぬ。 その代り、 調伏の証

拠を握って-

「こ、今夜、子の刻前に

小藤次は、 よろめいて立上りながら

広縁で」

深雪は、頷いた。

痛え」

「たたた、 痛えよ、 深雪、えらいことを知ってるのう。 ああ

> 小藤次は、 少し笑った顔を見せたが、 未だ脇腹を押えてい

「忍ぶ、恋路の、か――さて、果敢なさよ、とくらあ」

の方へ、足音を忍ばせて、 小藤次は、口の中で、 唄いながら、植込みの中から、 入り込んで来た。

真暗、くらくら

忍び込んだる恋の闇 くろ装束で

と、手を延して、 広縁の板へ触れたとき、 背後から

「何用でござる」

じた。柄へ、手をかけたが、 小藤次は、冷たいもので、 膝も、 身体中を逆撫でされたように感 拳もふるえていた。

「誰だ」

振向いて、 身構えると

「御祈祷場、

警固の者でござる」

誰ともわからぬ、 黒い影は、そう、 役目にいったまま、 小

藤次の前に突立っていた。小藤次は、安心すると同時に

(初めっから、俺を見張ってやがったな)

どおどとした姿で、忍び込んだ自分の滑稽さを想い浮べて、 と、思うと、柴折戸のところから、四辺をうかがって、お

腹が立ってきた。

「そうかい。えらい、 厳 しいんだね

\_ 何 ?

冷笑したように、こういうと

「えらい、厳しいってんだよ」

とは、 と思えばこそ、咎め立ても致ざずにおれば、えらい、 「出ろっ。ここを、何んと心得ておる。お部屋様、近親の者 何事でござる。それが、 御部屋様の兄上の言葉か?」 厳しい

(誰奴だろう?(えらそうに-低いが、鋭く、叱りつけた。

えらそうに――)

と思ったが

(上女中の、うるさいのにでも云いつけられたら――)

と――だが、 そう叱られて、黙って引込むのも、 器量の悪

い話であった―

(もう、すぐに、深雪が、出て来るのに)

と、思うと、それも心配になって来た。

「そりゃ、存じてはいるが

「存じて居て、 何故、 禁を犯された」

「禁?」

「禁を御存じないか」

「禁って、何事でござる」

「奥へ、男子入るべからずの禁じゃ」

ああ、その禁か」

出られい」

Ł いうと同時に、 肩を掴んで、 柴折戸の方へ捻じ向けら

れた。

(何んて力だろう)

小藤次は、その力に、 気圧されて、一足歩いた。

「二度と、踏み入ると、 許しませぬぞ」

小藤次は、 ゆっくり、 歩きながら

(深雪は、何うしたかしら――何うするだろう。うっかり、

でもしやがったなら、お由羅め、 れるのはいいが、 こんな時に、出て来て見咎められたら――深雪の、見咎めら ぬし――身の破滅って、奴だな) もし、 一俺と、逢引するために、などと白状 何んといって怒るかもしれ

小藤次は

「忍ぶ恋路の、さて果敢なさよ、か。果敢なさすぎらあ、 畜

生っ」

寂寞な闇の中に、微かに祈祷場からの鈴の音が、 風が梢を渡って、葉ずれの音がした。 洩れて来

「は、はっくしょっ」

小藤次が、くしゃみをすると同時に

「静かにせんか」

と、さっきの侍の声が、後方でした。

「へいへい、出物、

はれ物ってことがあらあ。

ってんだ。あっ、はっくしょいっ」

と、いった時、遥かに、広縁で、とんとん板を叩く、 微か

、拙いところへ、出て来ゃあがって と、一寸腹が立ったが、すぐ 小藤次は、佇んで振向いた。深雪の合図であった。

(見つかったら、大変だ)

と、思った。そして、自分の後方を跟けて来ている侍が、

何うするか?

(もし、誰かが深雪を見つけて、 度、忍んで行って、何んとか、 馳せつけるようなら、もう 助けてやらずばなるまいが

済みません、

小藤次は、 闇で見えぬ広縁の方へ、深雪の姿を、何うかし

て、探し出そうとするように、 眉をひそめて、首を延して見

忍ぶ恋路 の

た。そして

٤ 小声で唄うと

何故、行かぬ」

すぐ、 側に、黒い影が立ってい

(執拗い野郎だな、こん畜生あ)

小藤次は、 腹が立った。

御苦労様」

云い終らぬうちに、肩を、どんと突かれてよろめいた。

「何、何するんでえ」

とんとんと、深雪が、 廊下の 板を叩いた音が、 又聞えた。

奥の風儀を乱して— 一貴公は、 誰の兄に当る? 取締るべ

き上の者が、何んの体じゃ」

構曳じゃあねえや」

では、何用じゃ」

聞いてみな」

何 ? 誰に?」

聞いてみたかや、あの声を

のぞいてみたかや、編笠を

後方から帯を掴まれた。そして、一押し、押されると、前へ 云った刹那、 くるりと、小藤次の身体が廻転すると、

のめるように、足が、 もつれて、 動き出した。

「ちょっ、一人で歩くよ。放してくれ、危いったら――」

と、云った時

と、いう声がした。老女、梅野の声であった。

(いけねえ、とんでもねえ奴に、見つかっちまった)

えずに、別れなくてはならなくなった自分の恋に、悲しい失 小藤次は、深雪の処置を心配するよりも、一度の睦言も交

望と、怒りとが起って来た。

「一寸、放してくれ」

侍は、黙って、ぐんぐん小藤次を押し立てた。小藤次は、

つるし亀のように、手を振って、小走りに走らされながら

「一寸——頼む——後生だから——」

小藤次は、突き当りそうに近づく立木に、首をすくめたり、

力に押されて、 を踏んづけたり、石と石との間へ、躓いたりしながら、強い 顔へ当りそうになる木の枝を、手で押しのけたり、庭の下草 人形のように、もがきながら、半分、走らさ

れていた。

「危いったら」

は、 小藤次は、木の枝へ髷を引っかけて、怒り声を出した。侍 一片手で、枝を折った。小枝が、小藤次の髷へぶら下った。

小藤次は、それを取ろうと、両手を頭へやりながら

「ねえ、後生だから――」

が射してきた。 と、いった時、 柴折戸の辺へ来たらしく、

ほのかに、

明り

(誰奴だろう)

ついて来た侍の中の一人、 と、振向くと、それは、 山内という剣道の名手であった。 牧仲太郎警固のために、国許から

- 177

(強い筈だ)

思った。そして

(木の枝を、頭へぶら下げちゃあ歩けねえや。こん畜生め)

力を入れて引くと、 髪の根が痛かった。 山内は、木戸から

小藤次を突き出して

「二度と入ると、棄ておかんぞ」

睨みつけた。

「深雪かえ」

深雪は、闇の中で、絶壁から、墜落して行くように感じた。

「何をしておじゃるえ」

蛇が、身体中を、締めつけて来るような声に感じた。

「はい」

深雪は、 廊下へ、 手をついてしまった。

「ついて来や」

「はい」

梅野は、 板戸の中へ入ってしまった。 深雪は

か?――もし、云い抜けられなかったら、何うなるのか? (何う云って、云い抜けたらいいのか?-- 云いぬけられる

お由羅の調伏を見届けもせずに、 小藤次風情と、 不義の

汚名をきて、罪にされたら――

Ł 思うと

(小藤次のような人間でも、 人を欺した罰かしら)

と、思えた。

(今時分まで、何うして、 六畳の部屋は、行燈に、ほのかに照し出されていた。 この老女だけが起きているのか?

祈祷の係ともちがうのに)

梅野は、 上座へ坐って、静かに

「何しに、今時、庭へおじゃった?」

んでいた。そして、その前で、 い、横文字を書いた色紙、金紋の手箪笥、琴などが、 深雪が、 顔を上げると、拝領物を飾る棚、 梅野は、 、紙張りの手焙へ、手できょう。 重豪公の手らし

をかざしていた。

「はい、不調法仕りました。 以後心得まするから、 お見のが

し下さりませ」

深雪は、手をついた。

「さあ、 訳を話せば、 その訳によって、 見逃さんでもない

-訳は?」

深雪は、何ういっていいか、 わからなかった。

「返事は?」

「 は い

もないし、 「涼みに出る時節でもないし、 まさか、 男と忍び合うような大外れた小娘でもあ 厠 を取りちがえるそなたで

るまいし、のう— |深雪」

深雪は、真赤になって、 俯向いた。

(赤くなっては、悟られる)

とであるのに、顔が赤くなってしまった。 と、思ったが、少しも、心に咎めない、

小藤次との間のこ

「とんとんと、叩いていたのは?」 深雪は、身動きも出来なかった。

一合図かえ」

深雪は首を振った。

178 -

「合図でなければ、 何んじゃー

はい

「慣れぬことゆえ、初めのうちは、誰しもいろいろと失策は

なところを申してみや。偽りを申して、後に露見するよりも ある。万事、それは、 妾の胸一存に納めておくから 正直

申せぬか?——飽くまで、 白状せぬとあれば、責、

しても、 口を割らすぞえ」

「はい」

深雪は、いつの間にか蒼白になって、涙ぐんでいた。

たか、 「申し難かろうの――それでは、妾から、何うして縁側へ出 申して見ようか――これ、面を挙げて―

で眺めて 梅野は、 恐怖におののいている深雪の眼を、 気味悪い微笑

「小藤次と、忍び合ったのであろう」

深雪は、首垂れた。

「何うじゃ。 ちがいあるまいがな」

いいえ」

細い声であった。

゙゚そうあろうな―― そうあろうとも」

梅野は、こう云って煙管をとった。

「ここへおじゃ」

「ここへ、おじゃと、申しますに」

悄然と立上って、 梅野の近くへ坐った。

「一寸、手を貸してみや」

「 は い

深雪が、 右手を延した。

「ふっくらと、可愛らしい指じゃのう」 梅野は、左手で、手首を握って、右手で、 指を拡げて、

人

差指と、中指との間へ、煙管を挟んだ。

「この手で、男の首を抱いたのかえ」

梅野は、右手で、深雪の指の先を、じりっと、 握りしめた。

「あいつつ」

深雪が、その痛さに思わず引こうとする手を、左で引きと

めて

「この指で、男の

た。深雪は、左手を、梅野の手へかけながら 梅野は、みだらなことをいって、力任せに、 指をしめつけ

「御免下さりませ」

「よいことをした後は-

と、痛さに、身体をまげた。

深雪は、脣をかんで、身体をねじ曲げて、 苦痛をこらえて

「いつから、一緒になったえ」

こういうと、 梅野は、 力をゆるめた。

いいえ、そんな――」

深雪が、微かにいうと

「強い娘じゃのう」

の音がしてきた。 梅野が、もう一度、掌へ力を入れたとき、 梅野は 煙管をとって 廊下に、衣ずれ

「動いてはならぬぞえ」

と、いって、立上った時

「未だ、臥せらぬのかえ」

足音と、衣ずれとが、部屋の前で、止まった。

「はい、お勤めの終りますまで」

て、障子が、さっと、開くと、お由羅が、白綸子の着物を着 と同時に、外からも、一人の侍女が、開けようとした。そし と、梅野は、口早に答えて、周章てて、障子へ手をかけた。

て、立っていた。梅野は、廊下へ出て、手早く障子を閉めよ

うとすると

誰じゃ」

お由羅は、 深雪へ眼をやって、 梅野に聞いた。

「新参者の深雪でござります」

「深雪」

「はい」

深雪は、お由羅に、泣顔を見せまいと、 俯向いたままで、

お由羅の方へ、向き直って手をついた。

「早う、部屋へ引取って、休みや」

厚いものが砕けて、その下から涙が湧き上ってきた。黙って、 深雪は、やさしい、お由羅の言葉を聞くと共に、胸の中の

「許してやんなされ」

首垂れてしまった。

それがー お由羅は、 、梅野にこういった。

新参者に、不調法は、ままあることじゃ」

お由羅は、こう云いすてて歩み出しながら

「深雪、よく、上の人の申しつけを聞いて、 叱られぬように

気持などを、少しも感ぜずに、そのやさしさに、泣いていた。 深雪は、袖へ顔を当てて、お由羅を刺そうとして入込んだ

梅野が

「今夜は赦しますが、 余のことではないから、 よく憶えてい

と、云った。

姓の噂をしたり、 眠らない、 深雪が、部屋へ戻って来ると、灯は消していたが、未だ、 大勢の朋輩達は、低い声で、 役者買いの話をしたりして、忍び笑いをし いつものように、 小

ていた。

「本当に、よく似ていますぞえ」

「成駒屋に――」

誰に?」

「おお、嬉しい――あっ、痛い――同じ、 抓るなら、 裏梅の

形に、抓って下さんせいな、あれっ――」

深雪は、手さぐりに、自分の床へ入ろうとした。

「誰?— ―今夜は、このまま、 眠れぬぞえ。どうでも、 梅園

一人の肥った侍女は、すぐ隣りのおとなしい梅園の手を引

さん」

っ張った。一人が

「それよりも、あの新参者は?」

の老女梅野の言葉、お由羅のやさしさ、それを刺せという命 深雪は、そういう会話に、耳を背向けて、明日の自分、あ

「そうそう、あの器量好しを、いじめましょうわいな」

ちに自分の名が出たので、それに、注意するといるように、途切れ途切れに、ちらちら考えていた。そのう令、父、兄、母――そうしたことを、毀れた鏡に写してみて

「深雪さん」

分に関した猥らな話をして、きゃっきゃっ笑っていた。の人々は、深雪が、真赤になって、憤りたくなるような、自と、間近くで、暗い中で、誰かが呼んでいた。そして、他

蒲団を押えて、もし、手でも出したなら、容赦すまいと、呼けが、露骨すぎて現れてきた。深雪は、寝間着の裾を結んで、くなると、その女達を包んでいた、押えていた醜悪なものだ昼間の、つつましく、美しい女姿が、こうした闇に見えな

深雪の想像以上に乱れていた――と、いうよりも、深雪には――苛酷なくらいに、厳粛であったが、侍女部屋の夜は、又、―想像していた、礼儀の正しい、奥生活の昼は、想像以上に

吸をこらしていた。

「深雪さん」

考えられない愛欲の世界であった。

と、近々と、声がした時、廊下の外で

「未だやすまぬか」

い。 老女の声であった。女達は、一斉に、ちぢんで、押し黙っ

うち、一人の女が、深雪の近くで「夜中に大声を立てて。お上は、お眠りじゃぞえ。騒々しい」

「悪魔退散、婆退散

こと、草履の音が去って、夜番が、庭を廻って来た。と、囁いて、近くの二三人を笑わせた。暫くすると、こと

「明日の勤めが辛い。皆さん、お先きに」

女の寝返りや、夜鳴き鶏の声が、はっきりと聞えているかと少し痛むようで、額を押えると熱があった。そして、隣りの深雪は、眠れなかった。何んだか、胸苦しく、頭の心が、すると、歯ぎしりが聞えたり、小さい鼾が聞えたりしかけた。と、誰かがいった。そして、そのまま静かになった。暫く

思うと、何かに、はっとして眼を開けた。

(今、少し眠ったのかしら)

又、うとうととした。指の痛みだけが、いつまでも、眠りのと、思った。そして、又、歯ぎしりを暫く聞いていたが、

中に残っていた。

ていた。
、気がつくと、その前の方に、一人の老武士が歩い、深雪は、灰色の中に、ただ一人で立っていた。

(お父さまだ)

(飛びかかったら) (飛びかかったら) が、灰色の中へ消えてしまいそうな気がするので ななって、駈け出そうとした。だが、どうしている内にも、父 はなかった。八郎太は、幻のように、影のように、それから、 と、思った。そして、呼ぼうとしたが、どうしても、声が

苦い顔をしていた。と、決心すると――出し抜けに、父の顔が、前に大きく、

「まあ、お父さま」

Ł いうと、それは、江戸の邸の中であった。 深雪は

(お母様も、 きっといらっしゃる。 嬉しい)

父の顔へ救いを求めるように振向くと、 血が滴っていて、 思って襖の方を見ると――急に、胸が苦しくなったの 深雪の心臓も、 身体も、 八郎太の眉の上 頭も、 凍えさ

した。 「誰か、来て下さい。 叫んだが、誰も出て来なかった。 お父様が、御疵なさいました」 深雪は、腹を立てて、

の間にか、 だが、自分の袖をちぎって、疵へ手当しようとしたが、いつ (そうだ。ここは御殿の侍女部屋だ― 袖がなくなってしまって、 寝間着一枚であった。 だって、そんなとこ

ろに、お父様がいなさることはない)

ら一緒に、殺されるなら一緒に、と、手を突き出して、父へ れになっていた。深雪は、父に縋りついて、斬られるものな と、思うと、一面の草原になって、父は、頭から、肩から、血塗と、思うと、一面の草原になって、父は、頭から、肩から、血腫の

縋ろうとしたが、足が、何うしても動かなかった。

たが、 出ないし、小太郎も現れなかった。 悲しみに、心が裂けそうになったので、兄を呼ぼうとし すぐ、近くに小太郎が、 縛られているように、締めつけられているように いそうな気がするのに、 声も

(お父様が、斬られていなさる)

と同時に れのまま、 着物にでも、 狂う頭の中で絶叫した。 灰色の中に、 縋りたいような気が、 漂っていた。 八郎太は、ふらふらと、 深雪は、その父の手に 全身に充ちて来る

> Ł 叫んだ。

ために結んだ裾、 はっとして、 気がつくと、 隣りの朋輩の寝息 かたい蒲団の手ざわり、 用心の

(夢だった)

時刻も、何も判らなかった。ただ、夢にみた、 ようで、すっかり、眼が冴えてしまった。真暗な部屋の中で、 しい表情だけが、 思ったが、何かしら、不慮のことが、父に起 眼の底に灼きついていて 父の眼の怨め っている

(もしかしたら――)

と、深雪の胸を、 冷たいもので、 締めつけた。

(夢は、逆夢というから――)

と、思ったが、本当に、父が、斬られて死んでいるように

も、感じられた。

(そんな事のありませんように)

深雪は、蒲団の中で、一心に念じた。合掌している右手の

指が痛かった。

訳が無いし、 (お由羅 妾には、 様は、 出来ない ―一体、何うしたなら やさしい人だのに ---でも、 しなければ、 あのやさしい お父さん た刺す に申

もう一度合掌した。

美濃版型の帳へ、何か書いていたが、暫く、それを書き続け 斉彬の坐っている膝の前にも、その横にも、いろいろの型 洋式銃が、 転がっていた。斉彬は、 分厚な反古紙綴りの、

「お揃いだの」

てから

頭を上げた。 成瀬と共に、 と、いって、三人へ、振向いて、微笑した。名越は、村野、 声が懸らぬので、平伏していたが、その声に、

謁仰せつけられ、忝なく存じ奉ります」 同に代って見えましたにより、 まして、言上致したく、幸い、国許より、この両名、 「お手を止めまして、申訳ござりませぬ。止むなき儀につき 参上致しましたるところ、拝 有志一

をしている間、 と、名越が、 型の挨拶をした。斉彬は、そう、名越が挨拶 朱筆で、何かを、 帳へ書き入れていたが、

越が、 いい終ると

「上方の模様は、何うだの」

と、三人の方へ、 膝を向けて、 筆を置いて笑った。

「はっ、調所殿を、初めまして―

「いいや、そのことではない。 京師では、 勤王、 倒幕の説が、

盛んだと、 申すではな い か

「よりより聞いておりますが

何んと思うな?」

「浪人共の、不逞の業と、心得まする」

<sup>「</sup>そうかのう」

寛之助様、 御逝去 イの砌り —

゙これが、 いい出すと同時に、 村野、 エンピールじゃ」 斉彬は膝の前の銃を取上げて

「はっ、 エンピール銃

のは、 「うん――今までのエンピールは、 改良して、元籠めになった。 弾も、 先籠めであったが、 前には、 円弾だっ 今度

たが、尖り弾になった。こうして、 銃口を眼に当てた。 覗いてみい」

斉彬は、自分に近い銃をとって、

をつけたものじゃ。よく考えてあるな。これが、スナイドル 滑り出よいように、且又、狙いの狂わんようと、そういう条 されてからついたが、わしは腔線と訳した。つまり、弾丸が、 「筒の中に、きりきり巻いた溝があろうがな。それも、

斉彬は、成瀬の方へ、スナイドル銃を、 抛げるように、 押

し転がした。 「これが、スペンセス――この紙に、書いてある」

ルとか、シャスポー 筒先に、 書いてあった。 紙切が結びつけてあって、 とか、ゲーベルとか、いろいろな銃の名 ローマ字で、 ツンナー

ŧ 「のう、左源太、 何んとなく、 重苦しい気がして、 寛之助まで、四人もつづいて死ぬと、 余り嬉しくないものだ どう

のう

斉彬は、 独り言のようにいった。 一梃の銃の台尻を肩へ当てて、 窓外の樹を覘 いな

「その儀につきまして――」

名越が、 銃を置いて、斉彬を見ると、

異国方軍 にも銃砲が足りなかった。この間、それを調べたが、 「関ヶ原 島津の後、殿は、見事であったと申すが、あの 武田流の軍法 によると、文禄までは、 当家の 千 時

足軽三百人、 人として士分の騎馬五十人、 鉄砲足軽七十人、残りが小者、輸卒だが、 徒歩五十人、弓足軽三十人、 主力

は槍であった」

困った。又博学な講釈が始まった、と、 思った。

「左様でござりましょう

膝の上へのせて、 と、答える外になかった。 斉彬をじっと凝視めていた。 成瀬と、村野の二人は、

斉彬は、 机の上の帳を、時々見ながら

れとも乗打ちしますか、 騎銃隊を作るのだと申したら、 はならぬ。 れからの戦には、 れが、イギリスのホブソンの、騎兵要妙という本じゃが、こ せて前奇隊五百四人に組更えておる。関ヶ原の時、 う。旗十八本、五十四人。槍、弓、鉄砲、 三千人の同勢中、千二百人まで鉄砲を持たしていたし、それ 「それが、 大阪の もし出逢った時には、 壱岐が来よったから、 陣になると、仙台名代の騎銃隊が現れてきた。 朝鮮で、戦って戻ると、 銃の精鋭なものと、馬のいいのとが無くて たださえ、 軽輩が大勢馬上で、拙者らが 一々下馬して通りますか、 軽輩に、 銃の効能が判ったのだの 上を軽んじる風が現れた 馬の稽古させて、 各々百五十人。 伊達家は ح

飲みながら

馬が驚きましょう。敵を崩す前に、 折、考えものだ、と、申しおったが、何うじゃ。 「然し、その大勢が、一 時に、 馬上で銃を放ちましたなら、 却って味方が――」 あはははは」

「よしよし、判った」

斉彬は、笑って、手で押えた。

ぞ。死ぬと、 「何か、子供につける、よい名はないか。又、妊んだらしい すぐ代りが出来るで、 案じることは ない あは

ははは

「今度は、双生児に致そうかの」「然しながら――」

事を語って、ようよう伺候者が、 出の外になかった。 件をいうと、斉彬は一言で、その諾否を決した。そして、 でなく、 れで、用が終ると、きっと斉彬は、机に向った。人々は、 の用を自分が先廻りに云って、それからいろいろの知識、 かなか、何用か、と自分からいい出さないで、 ても、斉彬の方が、遥かに上であった。それは、主 三人とも、 人間として段がちがっていた。そして、 斉彬の前 それを心得ていたから、 では、手も足も出 彼等の語ろうとして来た用 なかった。 名越は、 ちゃんと、そ 斉彬は、 君として 何 固<sup>か</sup>たずを をい 故

家中の所置方にも、偏頗の傾あり、 っと眺めて、 「寛之助様、御死去につきまして、いろいろ、 名越は、 斉彬の方へ、押し出した。斉彬は、 大奉書に書き並べてある人々の署名を、 頷いた。 国許より、 手にとらないで、じ 取沙汰もあり、 この人々――」

「江戸におきまして、

吾々同

184

名越は、斉彬の眼に従って、連名を見ながら

「志はよう判る――村野、成瀬――もっと、前へ出るがよい。もしきもの幾十人もおりまする」「合せて、五十余人――この外、御目見得以下の軽輩に、頼

「しゃしこぎっ

「恐れながら、私事では――」

愚か、 数、医薬、財政、哲理、一として学ばざるを得ない外国が、 当時、天下はこの新武器に驚愕したものじゃ。ところが、舶 銅製口装五十斤の滑腔砲を発射させたのは、未だ二三年前 しようとしている。 ひしひしと、日本を取巻いて、戦ってか、外交でか、交易を ておる。よいか、こと軍事のみでさえ、この隔りがある。 来船の砲を見ると、 るのが、只今の時世だ。久光に命じて、吉野ヶ原に於て、 「斉彬も、寛之助も、 徳川も、或いは日本の国も、 鋼鉄製百二十斤、元装の連発砲さえ出来 香港の阿片戦争の結末を聞いて居ろう。 当家にとっては私事にすぎぬ。島津は 危急存亡の秋に立ってい 暦

ある。私情を顧みる暇がない」早速退るがよい。わしは今、日本を、双肩に負うたつもりで争うものは、何もない筈じゃ。もし、お前達も攘夷党なら、津家のために、わしは、この声だけと戦っておる。その外に

戦えば、あれじゃ。戦わねば――二三要路者と、わしとの外、

悉く攘夷

――父も、

攘夷、家老等も攘夷。日本のために、

があった。
斉彬の、和かな眼に引きかえ、舌端には灼けつくような熱

「ハスにはぶです」である。 「八大の外にない――」の亡くなった後、誰が継ぐかと申せば、久光の外にない――」ん。あれには、立派に、一国の主たるべき器量がある。わし「久光にも、お前達、何か不満があるらしいが、それもいか

「いえ、若君が――」

「それはよいとして、その若の後見は誰がする?」

「はっ」

それを知っている」
が、余人にできぬことじゃ。そして、わしと、久光とだけが、久光と二代がかりの仕事じゃ。そして、わしと、久光とよりとを実行さして、天下を安きにおくのには、名越、わしと、い。したなら、久光の外にあるまい。今、私の考えているこ「まさか、ただ今申した家老の愚かしいのにも任せておけま

けては、金を引出してくれる。 継いでくれて、わしがこうしたいというと、よろしいと引受 金が出ん。これは困る。 よろしゅうない。 ってくれたので、出来たのだしのう――」 は無いと思うている。 様の上に、父上の受けも、調所の受けも、 「ところがの――打明け話をすると、わしは、 斉彬は、ここまでいって、急に、言葉の調子を変えた。 受けの悪いくらいは、まあよいとしても、 磯ヶ浜の鋳製所も、 ところが、 わしは、このくらいいい兄弟 久光が、 家老共の受けも、 久光が調所にねだ 一々わしの意を 未だ部屋住同

大名の子供は、何処でも仲のよくないものじゃが、わしらこと申したら、久光が、由羅の臍繰から、捲上げて来てくれた。「船を作ろうとして、シリンドルと、シャフトを鋳造したい斉彬は、笑いながら

軽輩の家でも見られぬ睦まじさじゃと、

いつも、二人

前達、 何うなろうかもしれぬ。この連判の者は、硬直、精忠の人ば がよいから、まだわしの命も、仕事も、大丈夫なのだぞ。 で話しとるが――名越、よう考えてみい、わしと、久光が仲 妙なことをして、二人の間を疎外したなら、それこそ、 一徹者揃いだから、 十分、気をつけてのう!

「はっ」

えてくれ」

野、戻って、

同に、

わしの、今まで申したことを、よく伝

かりだが、

皆の用事は、 それまでであろう」

一つ、お願いがござります」

うむ」

加治木玄白斎殿より、 殿の御肌着を頂戴して参れと――」

一さあ

祈祷でも致すか」

「それもよろしかろう。次にて待て、 持たせてやろう」

斉彬は、机の方へ向き直った。

「御暇頂戴仕ります」

そして、一礼して、次の間へ出て、待っていた。 三人は、頭を下げて、膝で歩きながら、襖際まで退った。 斉彬は、 何

「奥へ参って、わしの肌襦袢をもらって参れ」

か書きながら、鈴の紐を引いた。出て来た近習に

て、今まで肌についていたのを携えながら、襖を開けて と、命じた。そして、小姓が持って来ると、自分で着更え

「村野――少々汗臭いぞ」

戻って、すぐ机の前で、何か書き始めた。三人は、 と、三人の前へ抛げ出した。村野は、押頂いた。 斉彬は、 同志の前

薄暗い廊下を退って来た。

で、斉彬のえらさを、何う説明したらいいかを考えながら、

「わしらとは、眼のつけどころが、ちがうのう」

「ただ、頭が下るだけでござりまするな。天下の主たるべき

方は、この君を置いて外にあるまい」

村

聞いた。この君を擁立して、幕府を倒そうという考えも 「そう。志ある者は、悉くそう考えている。京師でちらちら

成る程 世間からも、そう見えるかのう」

気持で、 三人は、 退って来た。 家中の陰謀の企てなど、すっかり忘れて、明るい

っていた。 し、脚は、 斉興は、 友禅羽二重の蒲団を被せた炬燵へ入れて、寝そべ土へ紙を貼って蒔絵した、小さい手焙に手をかざ

とが、帳面と、算盤とを置いて坐っていた。 れて、斉興の腓を揉んでいた。斉興の前には、 お由羅は、紫綸子の被布を着たまま、その向い側へ膝を入 用人と、

「その五十両は、こいつが、芝居へ行った勘定じゃ」

斉興は、 首を延して

と、由羅を見た。

のう

「芝翫の時に、妾が頂いて参りました」 用人が、二人の顔を、交る交る見てから、

「いかん、いかん。そんなことを書いたら、調所め、 「その通り、書きましても、よろしゅうございましょうか」 小さい声 何う申

すか、判らん」

将曹が、首を振った。そして

「五十両は、 ちと、多すぎまするな」

Ł 由羅へ、微笑した。斉興が

しの眼元が、芝翫に似とおるからと申して、それで、やっと、 「こいつは、芝翫に惚れとおる。娘時分からの肩入れで、わ

屋敷奉公を承知したくらいじゃ」

でござりまするな」 「初めて、承わります。なかなか、芝翫は、よい役者だそう

用人が、 真面目な顔で、世辞を云った。

か | くちゃくちゃだと、申すのじゃ。やれ、痛い、おお、痛い」 「然し、もう、皺くちゃで――あ痛っ、毛をむしる奴がある 斉興は、 —何も、芝翫を、皺くちゃと申したのではない。わしが、 片脚を、 蒲団の下から投げ出して、唾を塗った。

将曹が 「お睦まじき体を拝し、臣等、恐悦至極に存じ奉ります」

「上を見倣わざる臣はござりませぬ」 「将曹も、ちょくちょく、毛をむしられるてのう」

何を申す、この馬鹿。家中一同毛が無くなっては、蛸の足

みたいでないか」

「戯談は、さて置き― お由羅が、ぷっと吹出して、 ―帳尻を合せましたなら、ちと、 炬燵の上へ打つ伏した。

斉興が、 て、 用人に を|

「その五十両 小藤次へ貸付としておけ。よいであろうが、

「はい」

゙では、退れ」

「齢をとると、寝ても痛む、起きても痛む」 用人は、 算盤と、帳面とを持って、退って行った。

と、呟きつつ、大儀そうに斉興は坐り直した。

「うるさい奴等が、 騒ぎよるか」

力を添えて居ります者に、島津壱岐、赤山靱負、山田一郎右 一に、加治木玄白斎が、牧の修法を妨げております。それに、 「はい、江戸よりも、 国許の手合が、立騒いでおります。第

衛門、高崎五郎右衛門――以下は、軽輩でござりますが

「よし、近々、 わしは、 国へ参るが――考えておこう。それ

だけか」

「未だ、大変なことが――」 将曹は、 眼を光らせた。お由羅が、 ちらっと、 将曹を見た。

そして

「赤山様まで?」

「よって、油断がなりませぬ」

赤山靱負は、一門の中でも、 名代の人であった。

「いつか、調伏の人形を、 床下より掘り出して持参致しまし

た、仙波なる者 一うむ」

密談

「父子にて、牧の調伏所へ斬込みました由、 いよいよ不敵な

る振舞

「成る程のう、そんな事まで、致すようになったか?」 「尋常の手段では つ何時、 御部屋様などへも、 危害を

加えるか計られませぬ」

Ċ

斉興は頷いた。

「それに、国許より度々の密使が、斉彬公の許へ参っており

ます」

「そうあろう」

「国許では、久光公がござるゆえ、かようのことも起る。根

なす徒輩も、ござります」元は、久光公ゆえ、この君を討取れなどと、悪逆無双の説を

「久光を?」

と、お由羅が、いった。

「罪も、咎も無い久光を――」

お由羅は、憎悪のこもった声と、眼とであった。

「申しようの無い不敵の奴等で、余程、厳しく致しませぬと、

懲りぬと、心得まする」

「そうじゃ。わしの、帰国も、迫っておるし、調べて、厳重

に罰してみよう」

斉興は、蒲団の上へ顎を乗せて、背を丸くしながら

「久光は、そうした話を存じておるのか」

「手前は、話し申しませぬが――」

「いわん方がええ。あれに知れると、いろいろと、うるさい

のでー

「本当に、何うして、あの子は、あんなに、斉彬びいきなの

と、お由羅がいった時

「久光様、御渡りでござりまする」

襖の外で、声がした。

「金子をもって行っては、斉彬に渡すらしいが――」

「斉彬様が、上手に、久光様を――」

と、将曹がいった時

一役夕」

と、久光の声がした。そして、襖が、開くと、いつものよ

うに、ずかずかと入って来た。

たが、ちらっと見たまま、挨拶もしないで、斉興の側へ坐っな鉄鍔の脇差だけであった。将曹が、座を滑って、頭を下げ一斉彬の好みと同じ姿で、紬の着流しに、木綿の足袋、粗末

た。そして、すぐ

「又、密談か、将曹。貴公、密談が、すきだのう」

と、浴せた。将曹は

「いえ、今日は――」

「隠すな。近侍も、侍女もおらんでないか。正直に申せ」

と、口早にいって、すぐ、斉興に

「調所が、近々参りましょうが、二千両下されますよう」

斉興は、蒲団の上へ丸くなったまま、黙っていた。

「紡績機械を作ります」

「紡績と――申しますと」

がござります。おやめになった方が、よろしゅうござりまし「将曹には、判らん――母上、御祈祷について、いろいろ噂

三人は、黙っていた。

ょう、愚にもつかん迷い事を――」

の人物じゃで、少し見倣うがよい。わしは一々、兄の真似をして講義を聞くがよい。為になるぞ。兄は、方今、天下第一将曹も、聞かさぬようにして貰いたい。時々は、兄上へ伺候「いろいろ噂はあるが、私は、何も聞かぬ事にしております。

しておる」

三人は、 未だ、 黙っていた。

「世間も、 乱れて参りましたが、当家も乱れて参りましたな、

母上

「そうかえ」

「父上が、近頃、 愚に返っておられる。のう、父上」

何を申す」

斉興は、苦笑して

「何か、急用でもあるのか」

「ござります」

「又、お金かえ」

「母上、支那の楊貴妃を御存じでしょうが-- 譬えますと、

父上は、玄宗皇帝

将曹が、おどけ調子で

- 天にあって比翼の鳥、 地にあっては連理の枝」

「暫く、黙っておれ」

久光は、 将曹を睨みつけた。

「初めの政治は、よろしゅうござったが、 楊貴妃を得て、だ

んだん悪政になりましたな。な、父上」

「わしが、それで玄宗か」

「左様、 十年前の父上は、寝るにも、木綿蒲団でござりまし

たな」

「それは、久光、手許不如意であったからじゃ。今の身分で、

これなんぞ、決して奢りではないぞ」

歳になれば、家督を譲る筈でござりますが、兄上は、四十を 「いや、物よりも、お心持が――島津家は、代々世子が二十

> 未だ、頑張って――近頃、 入を拝領して、隠居せよと、謎をかけられていなさるのに、 越しましてござりましょう。而も、将軍家から、父上は御茶 いろいろの噂の大半は、ここにも

原因がござります」

張って| る。わしも、調所も、これを憂えている。何も、わしが、頑 ら、今、わしが隠居すると、わしの育てた理財家と、斉彬の も、させるであろうが その熱と、 斉彬の近側の徒輩には、血気の、軽輩が多い。奴等は、よく、 じゃ。隠居をしても、祖父様のように、する事はせい、と、 ゃ。そして、天下は、今、蓄財の使い時じゃで、わしと、 愛しておる急進派とが、きっと又、いがみ合うにきまってお お前なら、申すであろうが、それは、よく判っとる。然し、 所が、せっせと蓄めて、 「それはのう、久光、 斉彬が、理財を、 ―斉彬が憎うて、 誠とで、天下の仕事をするではあろうが一 斉彬は、蓄財よりも、 わしに見倣ってくれたらと、 ――地味な、蓄財の才能は無い。だか お前等兄弟に、使わせてやりたいの 家督を譲らんのではない。もう少 蓄財を使う奴じ 申すのじ 調

や

久光は

父は、 まだ、 老い ない)

と、思った。だが

「御言葉は、よう判りますが

文

例えば、

仙波を、

即日、

邸払いにしたり-

「仙波を――いつかの、 人形の奴か」

「 は い と、将曹に聞いた。

- 189

# 「存じておるか、即日の邸払いなど」

「さあ、 一向に

と、いう将曹へ、久光は、鋭い眼を与えて

「存じておる、存じておらぬに拘らず、貴殿の落度ではない - 父上よりも、側役共が老いぼれているのかな。少し、

兄上近側の、若手と取更えられては? 父上」 自分達の、後ろめたさとで、黙っていた。お由羅は、久光に、 久光は、いつになく、鋭かった。三人とも、その気魄と、

こういわれながら

(だんだん利口になってくる)

と、じっと、微笑して、久光の顔を、 眺めていた。

こ、ひゃりこで、チャン、スチャチャン」 「チャン、スチャチャン、チャン、スチャチャン。 おひゃり

客は、宵の内であったし、庄吉の、枯れた芸に、微笑をもっ て、同じように、廊下へ出て、庄吉の踊を迎えた。 庄吉は、大声で、怒鳴って、部屋から、廊下へ出た。泊り

庄吉は、眼の周囲を、墨で黒く塗って、脣を、紅で大きく

し、頬と、額へも、白粉で、筆太に彩っていた。

囃し立てて、庄吉について出た。 まに、三味線と、太鼓と、鼓とで、けたたましく声立てて、 酌婦と、宿の女中とが、半分、酔いながら、興の乗ったま

「お盛んで――」

番頭が、金離れのいい庄吉へ、揉手をして御叩頭した。

「番頭も入った。テレツクテン。御鼻が、御獅子で、テレツ

クテン」

「どうも、恐れ入ります」

番頭は、自分の鼻を押えた。客が、くつくつ笑った。庄吉

は、懐から、紙入を出して

「帳場へ、あずかっといとくれ」

「確かに――只今、お印をもって参ります」

「奥に、 番頭は、こう云って、一人の女中へ 薩摩っ坊がいるで、余り、近寄らんように-

から」 と、囁いた。庄吉は、手を振り、足を上げて

- 190

チャカ、スチャラカ、ステテンテン

お馬は、 栗毛で、 金の鞍

さっても、 見事な

若衆振り

紫手綱に、 伊達 奴

鳥毛のお槍で

ほー いの、 ほい

チャカ、 スチャラカ、 スッチャ ンチャン

栗毛の、 お馬に、米つんで

さっても、 見事な

縄の手綱に、半襦袢

はーいの、 小万の手を引き はい

庄吉は、女達を従えて、二階から、下へ降りて来た。勝手 店の間の女も、 向う側の人々も、 その騒がしさ

踊と、唄とに集まって来た。

元の女中も、

「余り、奥へいらっしゃらんようにの」

「判ってらあ――へん。奥にゃ、天神、寝てござる。中にも、

天神寝てござる。奥の天神のいうことにゃあ――」

庄吉は、畳廊下を、よろよろしながら、女達と少し離れて、

番頭に止められて、

階段の下で一塊になって 一人奥の方へ、進んで行った。 女共は、

もう、お帰りな」

Ł 叫んだ。

「煩いっ、どこまで参る」

番頭が、 襖が開くと、一人の士が、庄吉を、 すぐ、 走って来た。 庄吉は、 睨みつけて、怒鳴った。 廊下へ手をついて

「命ばかりは ―おたおた」

御叩頭してしまった。 部屋の中には、まだ数人の侍が

いた。番頭が

「さ、あちらで、旦那、もう、一踊、ここは、貸切りでござ

りますゆえ」

「おた、 おた、おた、 逢うたその夜は、 しっぽりと、のう、

番公」

庄吉は、 いきなり、番頭の首をかかえて、 頬をなめた。

知れぬ、 或いは、今度の、江戸行が、この街道筋の見納めになるかも を連れて、 した街道で、すっかり、 連れて、駿府まで来た。二十何年のあいだ、幾十度か往来調所笑左衛門は、年一度の江戸下りのために、五人の供人 と思うていた。 慣れてはいたが、もう齢が齢とて、

(もし、 自分が、 急死でもしたなら?」

処分はしていた。が、それでも、 一個で負うため、その総ての関係書類を、何時も、手早く、 調所は、島津家の財源を豊かにした密貿易の責任を、自分 処分できぬ、 最近の分だけ

は、自分の懐に秘めていた。

(江戸へ着いて、 と、床の間の、 湯上りの身体を、 早く、この書類を始末して――) 手函の中に仕舞った書類入の方へ眼をやっ 横にしていると、 酔漢を、 たしなめて

いる供人の声がした。

(面白そうに騒いでおるが-わしには、 一日も、 ああいう

まなかった例がある) か、 日は無かった。斉興公も、近頃は、政務を疎んぜられてきた 然し、その仕事にかかる金子の作り方を御存じない。いつだ 公のなさることは、半分はわかる。いい仕事にはちがいない。 のか? ここ十年の内に、ひどく仕事がし難うなった。 ならぬ 斉興公が御怠慢なら、 御無理もない。 いい仕事は、金子を産む、 ――すでに、重豪公がいい仕事をなすって、 ――ただ、時世が、違って来たのか? 人間が変った わしも、心から、 わしは、その分も、自分でしなければ と仰しゃったが――それは一 疲れたと思う。然し、 金子を産

久光擁立に賛成した。 は、久光の大過なき点の方がいいと、信じていた。そして、 調所は、 斉彬の、 明敏に敬服していたが、一藩の主として

ませぬ」 「只今は、 何うも、 お騒がせ致しまして申訳もござり

宿の番頭が、 襖から、謝りに来た。

「有難う存じまする」

「よいよい、

気に致すな」

い出した。 調所は、 同じ宿で、呼んでも、 番頭が立去ると、いつも思い出すように、二十年 女中さえ来なかった貧しい旅を思

わしが儲けて、積んだものだ。よいところに使われても、悪 百万両の軍用金を積んであるのは、当家だけだ。その金子は、 異国とか、 日本中と戦っても、二三年は支えられる。斉彬公は、近い内、 (江戸と、京と、大阪の御金蔵には、百万両ずつの金がある。 或いは、国内でか、一戦あろうと云われたが、三

> ようともした。然し――) るであろう。それを積立てる間に、悪口も云われた、斬られ いところに使われても、わしの功績は、永久に、島津家に残

調所は、行燈を消して、仰向きになった。

(こういうことを考えるのは、 気の弱ったせいじゃ。早く眠

って、早く起きて)

調所は、

の供人も、寝入ったらしく、静かであったし、二階も、下も、

肩の辺の夜具を叩いて静かに呼吸を調えた。

隣室

勝手元も、しんとしてしまった。

忍ばせてあった。 それでも、蒲団の中には、たしなみとして、波の平の脇差が、 (することをした。安心して死ねる。南無阿弥陀仏) 調所は、心の底から、安心し、 喜悦して、眠りについた。

しまった。 寝ずの番が、ぽとぽと、廊下へ草履の音を立てて、廻って

脚絆を当てた。それから、草鞋を履いた。 真暗な中で、手を延して、床の間の小さい旅行李を取って、 庄吉は、静かに、頭を上げた。床から起き出した。そして、 寝間着を脱いで、

黒い袷に更えて、十分に帯を締めた。

ずつ――それは、大事をとる庄吉の用心からであった。一度 込んだ。人が一人寝ているくらいのかさになった。 襖の、敷居へ、枕許の水差の水を流して、一分ずつ、二分 それから、行李と、枕とに浴衣を着せて、蒲団の中へ押し

自分の身の破滅でもあり、又深雪への恋心、深雪へ一手柄を に、一寸も、二寸も開けて、もし、音がしたなら、それは、

んな破綻を来すかも知れない、と思う用意からであった。だ立てさせ、自分の男の意地を貫こうとすることに対して、何

が、心の中では

てえが、ここが辛抱のしどころだ――ならぬ辛抱、するが辛(泥棒様は、初開業だ。うまく行きゃあ、お慰み――じれっ

指で計ると、五寸余り開いていた。

(南玉が、いつか、高座で云ったっけ――何んとかの、頭陀

袋、破れたら縫え、破れたら縫え――ってんだ)

開けるのと同じような忍耐で、襖を閉めた。そして、階、段の一尺余り開いた隙から、身体を横にして、廊下へ出ると、

上へ出ると

庄吉は、階段の板を踏んで、音の立つのを恐れた。ましょうものなら、お手拍子、御喝采、テテンテンってんだ)(ここが、千番に一番の兼ね合い、首尾よく、音も無く降り

(太夫、高座まで、控えさせまあーす)

暫く、

蹲んでいた。

降りて行った。都度、四辺の人の気配を窺いつつ、静かに、音も無く、滑り都度、四辺の人の気配を窺いつつ、静かに、音も無く、滑りもりの如く吸いついた。そして、一寸ずつ、二寸ずつ、そのと、口の中で、云いながら、頑丈な、ζササザへ跨がって、や

あった。真暗な、闇だけであった。しているだけで、ここから、調所の部屋までは、廊下だけでして、尻端折になった。柱行燈の灯が、遠くに、ほのぼのと庄吉は、暫く、階段の下へ蹲っんでいたが、黒い布で頬冠り

小さい、鼾の外に、何んの音もなかった。庄吉は、耳を澄ま壁へ、身体をつけて、横に伝って、供部屋の様子を窺った。

ずつ吐き出した。 ておいた、調所の部屋の前まで来て、詰めていた呼吸を少しの臭、壁の臭を嗅いで、さっき、酔った振りをして、見定めしつつ、静かに、供部屋の前を、這って通った。そして、板

南無天王様、観音様)(やり損えば、首は提灯屋へ売って、胴は蒟蒻屋へ御奉公だ。

ほてって、心臓が、どきどきしてきた。を窺っていた。咳も無く、音も無く、鼾も無かった。顔が、濡れ手拭の水を、敷居へ流し込んで、じっと、内部の気配

(庄吉、周章てちゃいけねえぞ)ほてって、心臓が、どきどきしてきた。

が、障子は開いた。庄吉は、障子を開けたまま、廊下の外に、猶、あったが、 庄吉には、 耐えきれぬくらいに、 長く感じた。 だ 顫わすまいと制しつつ――五寸、六寸、それは、短い時間で って、大きく吐きたいのを我慢しながら、顫える手を、膝を、 と、首を振って、一分ずつ、二分ずつ――呼吸が苦しくな - 193

な調所の神経は、夜中にも働いていた。た。そして、武芸者が、微かな音にも眼を醒すように、敏感たその日から、朝は五時に起き、夜は十二時に寝る人であっ二十年前、重豪公から、斉興公から、藩財整理を命ぜられ

えてはいなかった。調所は、眠っていると信じていた。夜中だが、庄吉は、そういう、自分達と、類のちがった人を考

には、 所も、 熟睡はしていた。然し、障子が、一尺余り開いて、肌 誰も、熟睡しているものと、考えていた。そして、調

そのまま、 寒い、冬の夜風が、襟元へ当ると共に、眼を醒した。そして、 気配を窺っていた。

### (手函を-

った。茶坊主上りの調所ではあったが、人並の腕をもってい と、思ったが、迂濶に音立てたり、騒いだりしたくはなか 供部屋を起すには、まだ早い、と思った。

枕としている調所の臥床は、想像できた。 宿の部屋であったから、闇の中でも、床の間の在所、そこを を畳へつけ、それから掌を下ろし、掌の上へ腕の重さを、そ の上へ、身体をと―― 庄吉は、部屋の中に音がしないのを知ると、静かに手の先 音もなく、這い出した。 きまりきった

の方から、床の間の方へ這って行った。 庄吉は、 手さぐりに、 押入の襖をさわり、 襖伝いに、 上手

「誰じゃ」

もなく、鯉口を切った。そして、庄吉が、 つ、夜具を持ち上げた。 つ、這って行くのと同じように、調所も、 調所は、 蒲団の中へ持ち込んでいる、波の平の脇差を、音 一寸ずつ、二寸ず 一寸ずつ、二寸ず

くりと、手を動かしかけた。 めて、床の間を、盲目さぐりに――左から右へ、右から左へ と、蹲んだ。そして、調所が、 庄吉は、床柱へ手を触れた。 指が当っても、 掌に触れても、 何んの音も立てないのを見定 そして、触れると共に、じっ 音立てないように、ゆっ

抜いて、鞘を夜具の上へ置いた。そして、耳を澄ましていた 夜具を除けて、音もなく、坐った。そして、刀を

> 々、 が――すぐ片膝を立てて、右手に、脇差を構えた。 薄ら寒く入って来た。 風が、時

探ると、 の――それは、 庄吉の手に、冷たい、すべすべしたものが、触れた。指で 蒔絵をしてあるらしく、 確かに、手函にちがいなかった。 撫でて行くと、 一尺四方程

(しめたっ)

蓋は、すぐには、 庄吉は、両手を蓋へかけて、引上げたが、 持ち上らなかった。 細工のい い 函 の

(函ぐるみ)

郎に折られて、 下の方を押えて、右手で、蓋を開けようとした。だが、小太 ったら、又、別のところを探さなくてはならぬから、 一旦浮いたが、手がすべった。ことり、と音がした。 と、思ったが、目的は、書類であった。この函の中に無か 十分に癒りきっていない手であった。 蓋は、

いて、 れても、空を斬らす、心得からであった。そして、脇差を抜 蒲団の上で、居所を、少し変えた。声を手頼りに斬りかから 調所は、 じっと、闇の中で、 静かに、咎めた。そして、波の平の脇差をとって、 床の間の方の気配をうかがってい

にされたように感じた。じっと、 低い、静かな声であったが、庄吉は、見えぬ手で、 呼吸を殺しているより外に、

仕方が無かった。

(侍を呼びやがるかしら――)

感じると、見えぬ闇に、 槍が、 手が、 刀 が、 、 迫って来

手函を捨てておくことは、 の如く逃げ出すか? るように思えた。このまま、鼠の如く縮み上っているか、鹿 (まさか、 調所の爺め、 ·だが、 闇の中で眼が見える訳じゃあるめえ 男の意地として、出来なかった。 庄吉には、折角、手をかけた

う、じっとしておれなかった。 調所が声を立てて、侍を呼ばんにも限らないと考えると、 手函を持ったまま、じりじり後へ下りかけた。だが、いつ、 ŧ

し!

(この中のものさえ掴んで逃げりゃあいいんだ。 中のものを

して、じりじり床の間の方へ寄って来た。 調所は、そのまま、 音のしないのを知ると、 脇差を突き出

密貿易の書類を盗みに来た奴か (刺客ではないらしい、金をほしさの枕探しか ----それとも、

まだ床の間にいるらしい、とだけしか判らなかった。 調所には、この判断がつかなかった。ただ、曲者は一人で、

として恥だ。書類を目掛けている奴なら?――然し、そんな (こそ泥なら?—— もし、大それた曲者なら、その時、声を立てても遅くは いない筈だー 侍を呼び立てて、宿中を起すのは、 ―こそ泥であろう。懲らしめてやればよ 武 士

されるか、判らないからであった。 者に、自分の居所を知らすのは、 そう考えたが、調所は、もう一度自分から声を立てて、曲 危いと思った。 何う、反撃

ない、この宿の中を、そう早くは逃げられるものではない)

けた。そして、音のせぬよう蓋を懐に入れた。函の中へ手を 呼吸をこらしながら、手函の蓋を、 静かに引きあ

> 入れると、その中には、予期していたように、 ふくさ包の、

書類らしいものが、入っていた。

て来なかったが、四方から取り巻かれているように、身体が、 が首筋へ、今にも、斬り下ろされるように感じた。誰も入っ 庄吉は、それを右手で掴み出すと共に――闇の中から、刀

恐怖で、縮んできた。

(糞っ、食え)

音を立てぬように、出来ぬ辛抱を、 と、肚の中で叫ぶと―― 今まで、 自分の部屋を出た時から、 気長にしてきたのが、も

う、耐えられなくなってきた。 (勝手にしゃあがれ、べらぼうめ、 書類さえ握りゃ あ、

ちのものだ) た手函を、床の間へ置いた。 と、思うと、同時に、音の立たぬよう左手で持ち上げてい ことり、 と音を立てた。

首をすくめた刹那 その声は、低い だが、 力のあるものだった。 庄吉が、

「えいっ」

(しまった)

めいた。そして 感じると、腕を貫いて身体中に激痛が走った。 した。血の噴出する音だった。庄吉は、ぐらっと右手へよろ と、肚の中で、絶叫した。右腕に、灼熱した線が当ったと ぼっと、音が

(腕を斬り落された)

てると、腎から切り落されてしまっていて、生温かい血が、 るように思えたが、 と、感じた。自分では、指も、手首も、未だくっついてい 激痛に縮み上るような右手へ、左手を当

すぐ指の股から、 流れ落ちた。

(しまった)

と、思うと同時に

(畜生っ)

左手で、素早く、 庄吉は、 眩暈のしそうな、 書類を握りしめたまま斬り落されている腕 頭を、身体を、じっと耐えて、

を掴んだ。

判っていた。安心して、然し、十分に注意しながら脇差を構 音が遠のいて行った。 えたままで、暫く、じっとしていたが――ふっと、 調所は、十分の手答えを感じた。腕を斬り落したのが、 人の気配がしたので、耳を立て、目をやると、微かな足 調所は 障子の方 明<sup>はっき</sup>り

(しまった)

と、心の中で叫んだ。そして、その瞬間、 大声で

南郷っ」

と、呼んだ。 答えが、 無かった。

南郷」

「はっ」

一曲者が入った」

が開いた。 その大声の口早の、 平常の調所の声でない声と同時に、 襖

゙曲者だっ。逃げたらしいが、早く捕えい」

た。閃滅する、微かな光の中に、人々が、刀を持って立って 供部屋の人々が、一時に、起き上った。一人が燧石を打っ

> いるのが判った。だが、 調所の部屋までは、 光が届かなかっ

囲しようとした。付木がついたので、行燈へ灯が入ると共に、 襖の右の方へ立った。一人が、左の方へ立って、両方から包 二人が、廊下へ走って出た。調所の部屋へ入ると、一人が、

「床の間を見てみい。片腕が、落ちてる筈じゃ」

と、いつもの調子で云った。

南郷が、行燈を持って床の間

調所が、

へ近づいた。灯のとどくようになってきた床の間を、 すかし

て見ていた調所が、首を延して

無いか」

によって、 と、叫んで、寝床の上へ立上った。そして、 手函の中を覗いた。 眼が光った。 床の間へ足早

「しまった」

そして、 と、呟いた。床の間の上には、血が、繋がた 確かに、落ちている筈の腕が無かった。 しく淀んでいた。 南郷は、行

起して、街道、 「追えっ。遠くへは、行くまい。血の跡があろう。宿の者を 抜道へ、すぐ手配りするよう」

燈を置いて、四方を見廻していた。

だけではない、島津の破滅の因になるかもしれぬ。鼠賊だと、 侮ったのが不覚であった。相当心得のある忍び者であろうか? し、人の手に渡ったとして、その人に依っては、自分の破滅 ったまま、血の真黒に淀んでいる床の間を、睨みつけていた。 (あの中の書類には、密貿易の証拠となるべき物がある。 供の人々は、一時に、廊下へ出た。調所は、 それにしても、確かに、斬り落した片腕の無いのは?) 寝床の上に立

宿の中が、 急に騒がしくなって、 番頭が、 足音忙がしく入

って来た。 「まことに、 相済みませぬことで――入ったような形跡はご

「宵に、酔って踊って来た奴があったのう、 あの部屋を調べ

ざりませぬがー

てみい」

ましたし、御役所へも走らせましたから――」 「かしこまりました。裏道、抜道へは、よく知った者を出し

血の上にあった。覗き込むと、その中にも、 調所は、黙って、床の間へ歩いて行った。手函の空なのが、 血がたまってい

(破滅か)

調所は、 静かに蹲んで、眼を閉じた。

金と、書類とを間違えたのであろう――それにしても、腕の のなら、捕まえたい た。名も残るであろう。総てを、 (俺は、もう、いい齢だ。 一主家には、 難題のかからぬ法もある――だが、捕まるも ―もし、宵の男なら?― いつ死んでもいい。功も成し遂げ 己一身に負いさえすれば あいつなら、

た。

無いのは 調所は、 寝床の上へ坐って、 腕組しながら、 自分のしてき

昔から、細かく想い出してみた。

手で掴んでいた。そして、掴まれている小腕は、 自分の斬り落された右の 小腕を、 しっかと、左の 又手函の書

類を、 しっかり、握りしめていた。 右手の切口を、 箱の蓋の中に入れて、 血の落ちる

> もぐり込んだ。 自分の傷を知って、長く逃げられぬと思ったから、すぐ右手 その途端、 のを防ぎながら、作っておいた裏手の逃路から出ようとした。 の納屋の中へ入って、 調所の部屋の方で、大勢の足音がした。庄吉は、 隅の方の薪、 炭俵の積み上げた中へ、

すと、自分を怨んで泣くように感じた。 愛児のような、自分の命のような――何にも更え難い、可愛 が厭なような気がした。斬り落された小腕は、愛人のような、 れた腕を、下へ置こうとしたが、何故か自分の手から放すの い、そして、不憫なもののように、思えた。 傷口を縛ろうとして、左手で握っている自分の、斬り落さ 自分の手から放

を止めねえと、命にかかわっちまうからの) てかけた。そして、手拭、頬冠りの黒い布、 の布と、 (しっかり、そいつを握って、暫く、待っていろ。 頭の中で、腕にいい聞かせて、自分の股のところへ立 ありったけの布で、二の腕の上を縛り、 襦袢の袖、 ・ 様いら あ、 傷口を巻い 腹巻 血

疼痛が突き刺した。 早くなっていた。 (いけねえ、このまゝ死ぬんじゃあねえかしら?) 頭が少しふらつくようで、額が冷たく、呼吸が、いくらか 腕から、肩へかけて、灼け、燃えるようで、身体の底まで、 人々の叫び声と、走る音と、 提灯とが、

すぐ前で、飛びちがった。 (何うにでもなれ)

入れた。腕はもう冷たくなって、切口からは骨が尖り出てい 身体を凭せかけて、足許へ置いておいた腕を懐へ

- 197

た。

た。この腕に、書類を握らせておいたら、自分が持っている庄吉は、自分の命が、この腕の中に籠っているように感じ

: )の計算、語かに、しか、の、しいで、(ひょっとしたら、この腕に、足が生えて、深雪のところへ、

よりも安心だし

この書類を届けてくれるかもしれんぞ)

腕だとは、十分に分っていたが、庄吉には、何うしても、生と、いう気さえした。斬り落されて、もう、生命の無い小

(こういう廻り合せだったのかなあ――最初あ小太郎に折らきていて、奇蹟を現すもののように思えた。

だろう――いや、もう巾着切をよせって、神様のお告かも知ために、随分働いてくれたが――こうなるのも、前世の報いれるし――とうとう斬られちまやあがるし――お前は、己の

ように感じた。 と、思った時、頭が、急に堅くなって、後方へ引倒されるれねえ。妙な侠気が出たり、深雪が好きになったり――)

庄吉は、頭を下げて、じっと耐えた。(いけねえ。ここで、気を失っちゃあ、何んにもならねえ)

いで――ざまあみろ、ざまを)(腕の一本や、二本――こん畜生め、何んでえ。こんなくら

(女なんかに惚れゃあがって、大事な腕を斬られて、ざまあ何んだか、それは、自分へも罵っているように思えた。 庄吉は腕を斬った調所へ、ざまあみろ、と罵ってみたが、

と、頭の隅で、呟くものがあった。

みろ。ここで死んじめえ)

〈馬鹿吐かせっ。ちゃんと、小腕大明神が、書類を握ってら

や)のなけりゃ、この腕だって冥途へ行って、俺に合す顔がねえあ。せめてもの申訳に、この腕にこの書類で一仕事させてや

庄吉は、斬られた腕に、脚が生えて、よちよち歩いて行く

のを空想してみた。

(こゝで死んじゃあならねえ)

けが、万力で、締めつけられているように痛んだ。(何んだか、身体が冷たくなって行くようであった。疵口だ

(お天道様の出ないうちに、ここから、逃げ出さなくちゃあ

た。が、寝間着のままで、時々、うろついて出て来るだけになっが、寝間着のままで、時々、うろついて出て来るだけになっま達の怒鳴る声、荒い足音は、すっかり無くなって、女中

(今の間だ)

でっていた。斬り落された腕が、懐の中で、突っ張っているのっていた。斬り落された腕が、懐の中で、突っ張っているのようで、一寸よろめいた。そして、暫く炭俵を掴んで突っ立へ、なすりつけた。そして、立上ると、少し、頭がふらつく 庄吉は、炭俵へ指を突っ込んで、炭の粉を、鼻の下へ、"頭"

ま、左手の指だけの力では、開かなかった。――小腕の指を披げようとしたが、書類を固く握りしめたまと、書類を、死んだ腕から取上げて、腕を捨てて行こうと(寺子屋じゃあねえが、松王丸の倅は、お役に立ったぞよだ)

(一心凝めて握ってやがらあ)

と、思うと、死んだ、自分の子が、大事な宝を握りしめて

いるようで、我子のようなその腕から、書類だけを取って、

その腕を捨てて行く気にはなれなかった。

常の庄吉で無くなっている庄吉は、それまでであった。 何処から、誰が、出て来るか判らなかった。見つかったら、 庄吉は、少しずつ出てみた。誰も居なかった。だが、いつ、

(手の無いのを胡麻化さなくちゃあいけねえが――)

庄吉が、土間へ、じいっと、出た時、一人の女が、店の間 小走りに、奥の方へ

「未だ見つからないんだってさあ。何処へ逃げやあがったの

だろうねえ」

と、云いながら、走って来た。

(ここへ逃げやがってらあ)

る頭の中で、呟いた。そして、女が、奥へ行ってしまうと、 庄吉は、そっと炭俵へ凭れて、だんだんとぼんやりしてく

「庄吉」

目を閉じた。

遠いところで、 自分の名を呼ばれたので、 眼を開くと

判るか?」

(益満さんらしいが――)

と、その声から感じた。そして、そう感じた瞬間

(助かった)

悲しいのか判らない気持が、起ってきた。そして と、思うと、声いっぱいに、泣きたいような、嬉しいのか、

ーええ」

「あっしゃあ、駄目だ」 と、頷きながら、自分の横に立っている黒い影に

と、呟いた。

「今、手当をしてやる」

益満が囁いた。

「ええ」

益満へ、凭れ かかりたかった。 子供が、 母親へ甘えるよう

にしたかった。

(こんなに、深雪を思っているんですよ。益満さん) と、いって、益満から背を撫でてほしかった。益満は、

庄

吉の二の腕の上を縛り直してから、疵口を解いて

「何を盗った?」

「何んだか―― 親爺の大切にしているもんでさあ」

膏薬を貼ったらしく、斬口がひやりとした。強い臭が鼻を

突いた。益満が貼ってくれたので、何んだか、

うに感じた。

「書類か? 何うした、 何処にある?」

「握ってまさあ」

「握って?」

「斬られた腕が-

庄吉の左手に握っている腕を、 益満が、 さぐり当てると共

に

「えらいぞ、 だが、 庄吉 力強い声で囁いた。

と、いって、庄吉は、涙を流した。

「出来したー 庄吉は、微かに、すすり上げていた。 ― 見上げたぞ」

効く膏薬のよ

を模した黄白の泥で塗った火炉があり、正面を北方として、息災、延命の護摩壇は、円形であった。中央に八葉の蓮華

行者は、

南方の礼盤上に坐るのである。

灑水を置いてあった。五鈷、その右に、二本 置いてある。行者の前の壇上には、蘇油、 を置き、 右手には、 その右に、二本の杓、 左手には、芥子、丸香、 塗香と、加持物、 飯食、五穀を供え、 房花、 散香、 扇、 薬種、 鈴、 箸、 左手には嗽口、 独鈷、三鈷、 三種の護摩木 切花を

呪術である。中に、一宇頂輪の真言を書いた。玄白、自らの生命を賭した中に、一宇頂輪の真言を書いた。玄白、自らの生命を賭した加治木玄白斎が、自分の血で、三股金剛杵を描き、その杵の曼荼羅を描いたものとを掛けて、飯食を供し、癖の上方には、部屋の壁には、青地に四印曼荼羅を描いた旗と、蓮華広大

の上にもって、黙読していた。「瑜伽大教王経」、「妙吉祥平等観門大教主経」等の書巻を膝「瑜伽大教王経」、「妙吉祥平等観門大教主経」等の書巻を膝周囲に坐して「大威怒鳥芻渋麽儀軌経」、「仏頂尊勝陀羅尼」、和田仁十郎以下の門人達は白衣を着て、その旛の下、壇の和田仁十郎以下の門人達は近次を着て、その旛の下、壇の

そして、和田が、大威徳天の前にゆらめいている浄火からう小さい杓で、薫陸香、沈香、竜脳、安息香の液をそそいだ。木、楓香木、菩提樹を取って、炉の中へ積上げ、その上に、から、右手の護摩木長さ一尺二寸、幅三指の ――紫剛木、旃壇の塗香を、三度ずつ頂いて、額と胸とへ塗りつけた。それら、塗香を、三度ずつ頂いて、額と胸とへ塗りつけた。それが治木玄白斎は、白衣をつけて、暫く、座所で瞑目してか

そして、口でつして来た火を差出したのをとって、護摩木の下へ入れた。

の光を放ち、諸悪鬼神を摧滅して、一切の三悪趣苦悩を除き、十方世界諸仏、世界一切の菩薩、智火に不祥を焼き、浄瑠璃「毗廬遮那如来、北方不空成就如来、西方無量寿仏、金剛薩埵、

- と、誦した。そして、少しずつ燃え上ってくる火を見て

六道四生、皆富貴延命を獲させ給え、得させ給え」

と、叫んで、合掌した。火相、右旋――火焔直上」

しめ給え」
を合せて御幼君のために、息災、延命の象を顕現なさ力をもって、金翅難羅竜を召し、火天焔魔王、七母、八執曜、井香に、火の音を、天鼓になさしめ給え。南無大日如来、お華香に、火の音を、天鼓になさしめ給え。南無大日如来、お「火焔の相を象耳に、火焔の色を大青宝色に、火の香気を優鉢羅

は、 入りかけた。 無我無心 十方の諸仏、 門人達は、 右手に、 杓を、 低く、 自ら、 悉く白色となって、 経文を誦して、師の呪法を援け、 左手に、 日輪中に、 金剛杵を執って、 結跏 身中に入る、 趺坐して、 瞑目 という境地で 円光を放ち、 しつつ、 玄白斎

聞える音を立てた。がら、時として、真直ぐに立ち、香を放ちつつ、いろいろにがは、青色を放って燃え上りつつ、少し左に、右に揺れな

暫く、瞑目していた玄白斎は、眼を開くと共に、大音に

焔の相は?」

燃え上り、 ٤ 叫 んだ。 消えては、 火焰: は、 同じ形に燃え上った。門人達は、 大きく象の耳のように、 ひらひらと

の声を少し大きくした。そして、

一斉に、焔を見た。

の人々が、 玄白斎が、 言葉静かに、 秘呪を行っている次の間には、家老島津壱岐等 お由羅への対策を話していた。 それ

護派の人々は

二階堂主計

町奉行、 物頭 近藤隆左衛門

赤山靱負

町奉行 兼物頭 山田一郎右衛門

船奉行 高崎五郎右衛門 (高崎正風の父)

屋久島奉行 吉井七郎右衛門

裁許掛見習 山口及右衛門

同 島津清太夫

兵具方目付 土持岱助

広敷横目付 野村喜八郎

郡見廻 山内作二

郎

地 方検見 松元一左衛

琉球館掛 大久保次右衛門(大久保利通の父)

大山角右衛門

八田喜左衛門

**(後** 

の八田知紀

諏訪神社宮司 井上出雲守

達で、 軽輩の 人々は、 別に玄関脇の部屋に集まってい

た。

次の間からは、 玄白斎の振っている金鈴の音が、 時々微か

に洩れて来た。

に 「わしは 吉利、平、 追つけ、 将曹、 豊後などを、 斉興公が御帰国になろうから、その 邸ぐるみ、 大砲にてぶっ 砌

壊すのがよいとおもう――」

近藤隆左衛門は、 こう云って、懐から一通の書面を取出し

た。

「これは、 斉彬公からのお便りじゃ。 読み上げる

将は随分と心得も有之ものにて御座候而、 候、 言に言れぬ事も有之、 ものにて之無様に被存候、 (将曹) 之調 近(近藤隆左衛門)等の如く悪み候而は、不一宜、 (調所)より勘弁のよし、 将之評判無が拠請け候儀も有之存候、御前(斉興公)之御都合之 悪み候程の 尤もに候、

此処はよく心得可申候

るみ、 が、 て、 る以上、 仰せられるのは、 彼奴等も残らず殺さねばならぬ。 が無い以上、君側の奸は、 んと計るこれら奸悪のものに対して、こう御存念なさってお せられるのは、われら家来として、ただ、感佩の外に無い御大腹の君として、たとい、将曹如き奸物にもせよ、こう われらの手で討取る以上、われらも腹を掻っ切る代りに、 事による。 大砲にて砕き倒すがよい一 斉彬公のお力を借りることに望みは無い。その望み 斉彬公が、 われらの手で討つ外にない。 公御自身の命を縮め、 それには夜陰に乗じて邸ぐ 子孫を絶さ

いて 「火相は、 これ、 煽がずして自然に燃え、 無烟にして、 熾盛、

いった時、

鈴の音が、人々の耳に、

明瞭に聞え、つづ

諸障蔽うことなし」

۷ 叫 んだ玄白斎の声が響いた。 人々は、 沈黙して、 次を

待った。

「右旋して、 紅zi 霓ti 雷閃の如し。 日輪の魏々として照映する如く、色相金色にし 南無、 延 命、 息災の呪法を成就せし

め給えー -香気如何

それは、 壮烈な玄白斎の声であった。

「祈祷も成就しそうだのう」

壱岐が、こういった時、赤山靱負が

「大砲打ち込もよいが、来春の、吉野牧場の馬追を好機とし 久光公を鉄砲にて射取ったなら? 禍根は、 この君が

誰も 黙って、答えなかった。 在す故だからのう」

所持、 赤山靱負久普は、一所持と称される家格の人であった。一 一所持格といえば、御一門四家につづく家柄であった。

御 門とは、重富、 加持木、垂水、今和泉の領主で、悉く、

ち、城代家老、 持で、三男以下の人々の家柄を指すのであった。靱負は、 宗家の二男の人々の家であった。それに次ぐのが、この一所 島津和泉久風の二男で、日置郡日置郷六千五

頭で、 座の中では、 百六十四石の領主である。そして、この靱負の日置家が、筆 花岡、 抜群の家柄の人であった。 宮の城、 都の城よりは、上席の身分― その靱負が この 一

「久光を、討取ろう」

明らかに、 と、云い出したのであるから、暫くは、誰も答えなかった。 禍根は、 久光がいるからではあったが、この陰謀

> ことでないと考えられた。 してちがいのない地位の人であった。 ことは、出来難いことであった。然し、靱負から見た久光は、 人々の主君であった。何うあろうとも、主君へ鉄砲を向ける 人々の見た久光よりもっと軽かった。 は、久光の手から起っているものではなかったし、久光は、 のために、久光を討つことぐらいは、 だから、英明なる斉彬 靱負自身としては、 靱負としては、大した 大

人々のいる部屋の中まで、 らしく、読経の声が、次第に高くなり、鈴の音が烈しく響き、 で来た。 人々の沈黙しているうちに、行事はだんだん進んで行った 薄い煙が、 のろのろと、 忍び込ん

「鉄砲役には と、いった時、 −わしは、高木市助がよいと思うが──」 山田が

あると、心得ますが 「然しー ―主君に当る方を、 鉄砲にて は、 ちと、 恐れが

近藤も

「某も、左様に存じますが

靱負は、二人を見て頷いた。そして

゙わしもそれを考えんではないが――」 と、いって、一座を見廻して、

「何うじゃ、久光を討つのは、少し、過激すぎるかの?」 と、聞いた。 人々は、 黙って頷いたり

「左様に存じます」

と、答えたりした。

'では、将曹、平、 仲の徒を鏖殺するか」

吉井、 村野等の帰国を待ちまして、すぐ様、 その手段に取

りかかりましょう」

の諸仏、各々本尊を貌して、光焔を発し、一切罪を焚焼して、遮那如来、北方不空成就如来、西方無量寿仏、十万世界一切以て、能く、当に、種子をして漸次に滋長せしむべし。毗廬の身に灑がん。乞い願くば、この老体を生犠とし、その因を「是の如く、観ずる時、当に、縛字を一切の身分に遍して、人々が、頷いて、賛意を表した時、玄白斎は、大声に

で手を合したり、心の中で合したりして、黙祷した。白斎と同じように、合掌する気持になった。そして、膝の上と、共に、祈りたくなる声であった。人々は、俯向いて、玄あった。敵にとっては物凄き極の声と聞えるし、味方が聞くそれは、人間の声でなく、人間のもっている精神力の音で

幼君の息災を垂れ給え」

ていた。金剛忿怒尊の画像へ、煙がかかるようになっても、じっとし金剛忿怒尊の画像へ、煙がかかるようになっても、じっとし、正面に、懸けてある、お由羅が、大円寺から借りてきた、っと、眺めていた牧仲太郎は、手を膝へ置いたままであった。火炉の中から、だんだん燃え立って行く、赤黒い焔を、じ

い。ているお由羅は、眼を閉じて、低く、何か口の中で誦していているお由羅は、眼を閉じて、珠数と、金剛杵とをもって坐っ団の、華やかなのを敷いて、珠数と、金剛杵とをもって坐っ仲太郎の、背後に、一段低く――だが、緞子の大きい座蒲

じた。ばちばちと音立てて、赤褐色の火焔が昇ったが、低く仲太郎は、静かに手を延して、蛇皮を取って、火の中へ投

仲太郎は、眼を閉じて、俯向いた。そして、指を組んだまま、さい火が、ぼっと、立っただけで、何んの匂もしなかった。焔の上から振りかけた。そして、じっと凝視めていたが、小這ってすぐ無くなってしまった。仲太郎は、沈香を取って、

く、薄くなってきたが、仲太郎は、まだ、瞑目したままであ護摩木が、だんだん燃えつくしてきて、焔も、煙も、小さ

暫く、身動きもしなかった。

った。

羅を見て、 と、仲太郎の姿とを眺めて、 眼を見合せてから、ちらっと、 て、首を一寸、曲げて、火炉の中の火の消えかかっているの お由羅も、 部屋の隅に坐っていた、黒衣をつけた二人の家来が、 眼が合った。 珠数を、左右へ劇しく振って、眼を開いた。 暫く、 家来の方を見た。家来も、 仲太郎を見た。それと同時に、 三人は、 仲太郎を、 じっと凝 お由 互に

「先生」

まであった。お由羅も、黙っていた。と、お由羅が、声をかけた。だが、仲太郎は、俯向いたま

にしか見えなくなった。天井を、襖の上をうろついているだけで、画像の姿も、朧げいだけであった。部屋の中の、薄い煙は、戸惑いしたように、炉の中の火は、すっかり消えて、残り火が、ほのかに明る

「先生――如何なされました」

「暫く、行を廃すと致しましょう」して、黙って、壇を滑り降りて、沈鬱な顔をしながら、お由羅が、こういうと、仲太郎は、静かに首を上げた。

そ

203 -

まー 何んと、 なされました」

牧は、 青衣を、 静かに脱いで、 家来に渡しながら

恩師 の、逆修がござります」

|加治木玄白の?|

「左様\_

牧は、そう答えて

「行け」

けて、 と、二人の 次の間へ去った。煙が、二人を追うように、出て行っ 家来に、顎で指図した。二人の家来は、 襖を開

牧は、 壇のところへ立ったまま

「祈って、祈れぬことはござりませぬ。 さりながら-

首を傾けて、暫く、 無言であった。

さりながら?」

お由羅は、 催促した。

「さりながら、 ここで、某、 精魂を傾けますと、 恩師の命を

縮めまする」

「玄白の?」

左様」

「それで?」

牧は、お由羅を、 正面から、睨みつけるように、 鋭く見下

ろした。お由羅も、同じように、見上げた。

えて、女性のもっている悪魔の性質が、獣の精神と、一 なって、光っているような感じのする凄さが、現れていた。 そのお由羅の眼の中には、いつものお由羅のやさしさが消 緒に

憚りなく、 申せば ・某 修法を行う前に、申し上げたる

るをまって、と――」

よって某、今宵より、

御家の大事、その騒乱は、恐らく御家始まって以来の騒動と損じることもあり――もし、それが、発覚する上に於ては、 げに相成りましょう以上、 え難き、 如く、仮令、 お断り申せば、毒薬、 ますからは、 御主君にござりまする。 元より一命は無き所存 御幼少の方とは申せ、某にとっては、天地に代 刺客、何れの手でかによって、お仕遂 呪殺申すよりは、 その御主君の命を縮め奉り ---さりながら、某が、 証拠も残り、

を、 「依って、某、命に代えてお引受仕りましてござります。然 未だ、お由羅の正面へ向けて

なり、それこそ、島津の荒廃となり申しましょう」

牧は、静かにこう云って、いくらか、険しくなくなった眼

来、 勝図は、 無用の悪評の消ゆるは愚か、島津重宝の秘法として、この軍 に譲らぬのみかー し――某は、兵道を以て立つ者、兵道を惜む念において、人 何れは、 再び世に現れましょう― お命の縮む御幼君――この大任を果せば、兵道 — 好機— ―好機来、兵道の真価を示す時節 某の面目は、 とにかくと - 204

して、兵道家として、千載一遇の機

――よって、

又、兵道の絶滅、逸れば、 申して、 を倒し、 霊気は、 て、殺害されますならば、前申しましたる如く、 一方は、 余の――これから御出生の御幼君達が、余人の手に 某とても、三年の間は持ちますまい。もし、某死し 凝って、天地を圧するの概 倒れまする。老いたりと雖も、玄白斎先生の気魄、 即ち、二害あって、一利も無し ――これを破れば、 御家の大事、

しましたが――もし、ここで、恩師と、呪法を争えば、必ず、 修法を廃し、老師の霊気の散消す 命をかけ申

「よく判りました。して、その期限は?」

ただこの一点、霊魄の強弱も、ここにかかっておりますが 老師の、肉体の力が、某の力に打ち克つか――如何。 気により、 霊気は、 場所により、齢により、微妙、精妙。ただ、 有に して無、 無にして有、その消滅 は、 対手の 、ただ、 勝負は

## 散消の期は

った。 牧は、瞑目した。部屋の中は、小さい燈明の明りだけにな 牧の影が、 大きく、 、 襖 に、 ぼやけて揺いでいた。

「半ヶ年

|半ヶ年?|

御幼君、 肌つきの布に、 悪血をそそいで祈りますれば、 Ξ

.肌つきの?」

ヶ月——」

「左様」

羅は、 「では、肌着を取りましょう」 牧は、 壇上の道具を、じっと見ながら、 眼を開いて、じろっと、鋭く、 微笑して お由羅を見た。

お由

丁度、 牧は、 無言で、 その役によい者がおりまする、 頷いて、 歩み出した。 襖へ手をかけて、 両三日の内に 振

向くと

「御部屋、 御自身の濫りの修法は、 なりませぬぞ」

「心得ております」 Ł いった。

由羅は、 牧は、 そのまま礼もしないで、真暗な次の間へ消えた。お 気味悪い、 少し悪臭のある部屋の中で、 じっと坐っ

たまま

微笑していた。

崩るる淵

っぱいになり、身体の四方を包んでいた。 蛇に しめつけられているような悪夢が、 小太郎 の頭の中い

脚をひきずって行くように 引きずり、顔にも、着物にも、 手で、脇腹を押え、片手で頭を押えて――切り裂かれた袴を ろう? 狂人のような眼を剥き出して、 脇差を、尻の方に差して、口を開いて、血染めの片 ---よろめきつつ、立止まりつつ 血をこびりつかせて、身体で、 刀は、何処へ捨てたのであ

(水だ 水だ)

じっと、

た。身体は、痛みに、燃えていたが、もう、自分の痛みなの を押えているのか? 脚だけが、 か、人の・ 痛みを、自分で感じているのかさえ、判らなかった。 残りの力を集めて動いているだけで、手は、 一所を見ていた眼が、 眼は、何を見ているのか、判らなかっ 顔が、水音の方へ向いた。 何処

人の手のように感じながら、静かに頭から放して、 て、眉をゆがめ、肩で呼吸をしながら、小さい流れの方へ、 水が流れているように、震わしつつ、 突き出した。そし 自分の前

頭の毛が、手の血にくっついて離れなかった。その手を、

身体を引きずった。

のを支えて、暫く、そのまま眼を閉じていた。 両手を当てて、少しずつ、蹲みながら、前へ転びそうになる 蹲もうとすると、膝頭が、痛んで、 曲らなかった。 太腿

(もう、追手に見つかって殺されてもいい。殺された方がい

- 205

い。何れは、死ぬ――水を飲むと死ぬというが、死んだ方が

いい

疵所の痛みと、深さとに、すっかり疲労してしまって、それというようなことが、頭の中で、ちらちらした小太郎は、

(水だ、水だ)

以外のことは、

考えられなくなっていた。

眼を開いて、手と、身体とを、前へ延すと、よろめいた。

そして、片膝つくと、倒れてしまった。

(もう、動けない)

身体を、水の方へずらした。そして、右手で、水を掬って、左手で、草をさぐり、水辺の近いのが判ると、草を掴んで、も聞えないし、水の白く光っているほか、何も見えなかった。暫く、そのままでいた。水の音と、風が葉末を渡るほか何くま。

父の声のようなものが、耳の中でなく、外からでもなく、頭と、そのまま、草の中へ、顔を伏せて、身動きもしなかった。をもったもののように感じられた。小太郎は、水を飲み終る、水は、水の味でなく、慰めと、薬と、この上ない甘い味と

掌の凹みから飲んだ。

一口飲むと、つづけさまに、飲んだ。

(小太郎、右へ――)

の中にでもなく、聞えているような、聞えないような一

そう思うと、その辺に、父がいそうな気がして、顔を上げた。たあの血染の姿――死んでいないのではないだろうか?――殺されたような――殺されたにちがいないが、起き上って来ての耳で聞いたのだろうか?――父が、生きているような、

空には、冬の星が、冷たく、高くまたたいていた。

そして、見廻した。

(動けない)

(別―) 別にないで、こう、のに、というであった。 自分の手は、こわれ易い土製のように思えた。 小太郎は、自分の脚が、二本の重い、鉄棒のように感じた。

れでもいい)(明日の朝になれば、見つかって、殺されるであろう――そ

冷たかった。手が、血で固くなっているのも判った。 小太郎は、又、水を飲んだ。水が、水の味をしていたし、

を掌でたたいて、指でいじってみた。疵口は、血でかたまっ小太郎は、人の頭を、子供がいじるように、自分の頭の疵

ていた。

(そう深くはない)

れ出た血で、着物の肌へこびりついている方が大きかった。指が切口へくっついた。脇腹の疵は、疵よりも、そこから流じる身体の疵所へ、指を当てた。腕の疵は、口を開いていて、 206と、感じた。それから、手を這わせて、灼けつくように感 -

(深手はないらしい)

と、思った。と同時に

(死んではならない)

然し、そう感じて、動こうとすると、身体は、鉛のように

重かった。

(牧に捕えられては?)

ていた。手を廻すと、脇差があった。えた。小太郎は、左手で、腰をさぐった。刀の鞘も無くなっそう思うと、ここで、死んだ方が、立派な最期のように思

(腹は刃れる)

しい友達のように思えた。そして、脇差を力に、起き上ろう 小太郎は、一尺二寸しかない脇差が、世の中で、一番頼も

とした。一時に、身体も、手も、脚も痛んだ。

(これしきに――)

半分、身体を起して、片手に脇差を、 片手を地に、 支えな

がら、起き上って、足を投げ出した。

たいが―― (ここは、京だ。 十三里西へ行くと、 母も、 妹もいる。 逢い

涙も出ないし、 悲しくもなかった。

(然し、逢えぬ。 言伝を――

と、思った時、 小さい灯が、ちらちらした。

(家がある)

小太郎が、そう思った時、 灯が、左右に揺れた。

(提灯だ)

小太郎は、呆然としていた眼を光らせた。

(追手の奴等?)

そう感じた時、 人声がした。 '小太郎は、立とうとした。腰

も、脚も動かないし、立っても、逃げも、働けもしなかった。 (何うせ、死ぬのだ。捕えられては、隼人の名折れになる)

それは、足早く来るらしく、ぐんぐん近づいて来た。 凝っていた。提灯と、人声とが、だんだん近くなって来た。 小太郎は、 顫える手で、脇差を握った。指も、掌も、 固く

(見事に斬らぬと――)

と、思うと、何も考えることが無くなって、 ただ腹を、見

事に切ることだけが、望みのように感じた。

小太郎は、脇差を抜いて、袴を切り取った。そして、刃へ

袴を締めて来たので、 巻きつけて、左手で、着物を押しあけた。しっかりと、帯を、 弱っている力では、 十分に披かなかっ

(早くしないと――)

小太郎は、両手で、 着物を拡げてから、 坐り直そうとした

が、うまく坐れなかった。

(何うにでも切ればよい)

そして、 げ出して、左手を草の中へつきながら、脇差を腹へ当てた。 間近に高い声が聞えると同時に、突き込んだ。

小太郎は、片足を曲げて坐ったように

――片足を、横

「何か――」

とした。刀が滑った。 の柄頭を地へ押しつけて、 と、いう声が聞えた。力が足りなかった。小太郎は、 自分の身体を、 の しかからせよう 脇差

と、思った時、 襟を掴まれた。

聞かれたか」

と、綱手とを見た。 と、襖を開けて、 脇差を腰から取りながら、 袋持が、 七瀬

ーええ?」

綱手が、 母の旅立の脚絆を縫いながら

「何を?」

「牧氏の修法場へ、斬り込んだ者がおる」 袋持は、床の間の刀掛へ、脇差を置いてあぐらになって

身体を固くして、 胸を打たせた。

207

「二三人の小人数で―

誰方?\_

Ł 七瀬は云ったが、 自分の声のようでなかった。

<sup>-</sup>さ、それが、 殺されての」

殺されて

綱手の顔色が、変った。手が、微かに顫えてきた。

らぬし 「牧氏の一行は、そのまま、江戸へ立ったし、顔見知りはお ――牧氏の方々も、七八人はやられたらしい。 京の邸

たそうじゃ。もう、御帰国かな

から知らせて来たが、余程の手利らしく、

袋持が、七瀬を見た。

「そろそろと――」

固い微笑をして

そして、牧様は?」

牧は、無事に、今申した如く、江戸へ参ったが――」

|御無事で---]

「ここの、御家老も、 近日、江戸下りをなされるが

調所様も?」

「大殿の御帰国までに、行かねばならぬ用があるのでのう」 調所のことを探りに来て、 調所 の人物に感心した

上、今、江戸へ行かれては、誰にも、

顔向けが出来ないよう

っぱいの毒瓦斯となって、いぶり立った。ないか――そうした苦しいことが、小さい女の胸の中へ、い に思えた。 叡山で、斬られたというのは、 八郎太であるか、

「入れ」

隣りの百城が、 襖を開けて

聞いたが

と、云って、二人に挨拶をした。

「今、御二人に話したところじゃが、 誰であろうな、

牧氏を

覘ったのは?」

「ふむ」

百城は、坐って、 腕組して

「詳しく聞いたか」

と、袋持の顔を見た。

見事に斬ってあっ

「いや、牧氏の無事と、七八人も斬られたのと、 斬口の見事

さと、残らず殺されたのと、 これだけじゃ」

参ろう。一人、逃げたと申すでないか。若いのが 「同じじゃ。明日、わしは、京へ行くから、詳しゅう聞

「それは知らぬ」

「その狼藉者の名は?」七瀬が

- それが判らぬ。乱暴者の手利なら、 益満休之助と聞い てお

るが、或いは、そうかも知れぬし、 手利は多いからのう」

「御家老は、何んと仰せられているか、知らぬか」

らか」 類いてばかりおられたそうじゃ 京への用は、 御家老か

氏が、御無事なら、 「ふむ、ついでに、詳しく調べて参れと、仰せられたが、 余のことは、 調べる程でもない」

牧

月丸は、 微笑していた。

綱手とは、 隼人達の着て寝る、 木綿の固い 蒲団を

7

着て、ぴったり、くっついて寝ていた。十九になる娘であっ たが、こうして、母親と、 一つの床に添伏していると、 子供

の心になっていた。

「何んだか、妾には、お父様のように思えて―― お父さんの

斬られなすった姿が

綱手は、小さい声で囁いた。

「不吉なことを云うものではありません」

「さ、妾も、そう思うが、なまじのことをして、ここの人達 「妾──明日、百城様と、京へ、様子を見に参りましょうか」

に悟られてはならぬゆえ、百城様のお帰りを待って、万事は

それからのことにしようではないか」

か 「ええ―― 百城様は、お母様、敵でしょうか、味方でしょう

こともないが、袋持様の御朋輩なら、味方であろうかの」 一さあ · 口 数 の少い人ゆえ、 聞いたこともないし、 話した

七瀬は、こういって

丸で打ってちごうた性質なり、振舞なり――) (百城様のような、無口な人は却って頼もしい。 益満様とは、

をとって、孫を見たい、と思っていたことが、まるで、 った方角のことへ来たのに、淋しさと、頼りなさとを感じた。 と、思った。そして、そう思うと、早く、 綱手に、よい聟 ちが

のだ) (自分は、 この子の齢より、一つ若い時に、八郎太へ嫁いだ

それから、

傍に寝ている綱手を見ると、不憫さが、胸を圧し

Ł 思い出すと、じっと、 抱きしめて、愛撫してやりたか

> 益満の粗暴とはちがって、男の値打に経験の無い綱手には、 乙女心の恋を感じていたが、旅をし、男の数を知り一 に、男は、八郎太と、小太郎と、それから、 に逢うと、その顔立、 か、口を利く機が無かった。だから、手近い益満に、軽い、 った。綱手は、江戸の邸にいて、月に一度、外へ出るか出ず 物腰、寡黙の中のやさしさ――それは、 益満とだけにし 百城

が慣わし故、 えると、世間では、不具者じゃとか、疵物じゃとかと申すの 今度のことで――来年は、二十歳になりますの。二十歳を越 「世が世なら――もう、聟取りの頃じゃに、お父様の頑固と、 なかなか嫁入口が、あるまいが――」

ずっと、益満より、立ち優って見えた。

ゃりましたが」 「そうそう、あの話は、そのままになっているが 「御家老様が、何んとか――町人のところへと、いつか仰し のう、

綱手――百城様のような方が、味方なら、そちゃ、何んとし

やるぞー

「百城様?— さあ」

綱手は、

少し赤らみながら

「嫌いではないであろうの」

「ええ」

**| 益満様とは?|** 

ーそりゃ

ゆえ、よう心してたもれの」 何時お帰りになるか、安否を知りたいし― 「やさしゅうて、真実のありそうな――然し、明日立って、 |綱手、 大事の前

「はい、もう、更けましたゆえ、お眠みなされませぬか」

眼が冴えて、 何んとなく胸苦しゅうて\_

|妾も||--|

゙御無事であればよいが

「さっきから祈っていました」

「もしものことがあっても、取乱したり、悟られたりすまい

ぞし

口へ出すことは恐ろしかった。そして、そう信じながら一方 斬込んだ武士は、夫と、兄とだと思っていた。だが、それを 二人は、夜具の中で囁き合った。そして、二人とも叡山で

「百城が京から戻りよった。追っつけ参るであろう」

では、その二人でないようにと、祈っていた。

恐ろしいようでもあった。 城が、何をいうか、聞きたいようでもあったし、聞くのが、 いってから、 一刻の余になった。二人は、百

「遅い奴だの、何をしとるのか」

袋持は、すぐ、 袋持が、膝を抱いて、床柱へ凭れた時、草履の音がした。 膝から手を、 床柱から背を放して

百城か」

と、怒鳴った。

「おお、ようよう済んだ、一つ一つ、算盤玉に当られるので、

手間取ってな」

百城は、 庭から上って来た。袋持が、身体を延して、障子を開けた。 旅姿を改めたらしく、新しい着物に、 袴をつけて

> 身体中から、夫の、父の、子の、 と、二人に、声をかけた。二人は、百城の眼から、脣から、 兄の安否を、探そうとした。

「わかりましてござりますか」

二人は、その 短い 声から、返事から、 判断しようとした。

そして、不安な胸を打たせていると

「現場へも、 参った」

「比叡山の、何の辺?」 百城は、 女二人の問 いに答えないで、 袋持に話しかけた。

一尺七寸、深さ四寸というのが、 「頂上――物の見事に、斬ってあったそうじゃ。袈裟がけに、 返す太刀で斬ったらしく、

じゃー 下から上へ斬上げてあったのは、 人間業でないと、

「下から上へ、左様なことができるかのう」

「陶山が、見た話ゆえ、確かであろう」 七瀬と、綱手とは、待ちきれなかった。

「して、その狼藉者は?」

に、二人の方を振向いて 百城は、黙って、じっと、袋持の胸の辺を見ていたが、 急

「狼藉者は

――いいや、そういう名で呼んでは勿体な

斉

彬派の忠臣として、 それだけいって、 多勢を目掛けて、命を捨てに参ったのは 二人から、 眼を離し、 袋持の方へ

「仙波八郎太父子」

七瀬と、綱手との顔色が、 少し変った。だが、七瀬は、 す

落ちついた声で

210

「二人きりでございましたか」

御覚悟は、ござろうが、何う挨拶申し上げてよい 百瀬は、 俯向いた。袋持は、 腕組して、 天井を眺めて、 かー 吐

「八郎太殿は、斬死、 小太郎殿は、 生死不明 息した。

生死不明とは?」

うなされたか? 「斬り抜けるには、斬り抜けられたらしいが、それから、 牧氏の人数が、 二十余人、その中へ、二人 何

での斬込では

「二十余人?」

綱手の声は、 顫えていた。

「八郎太は、斬死」

七瀬は、ここまでいうと、 声がつまってしまった。四人は、

暫く黙っていた。

「八郎太は、 斬死致しましてござりますか。本望でござんし

よう

七瀬は、こう云うと、 微笑した。

頑固一徹の性で-何う諫めましても、 聞き入れませず

百城が

小太郎殿は、京の近くに、 知辺でもござろうか」

母子の顔を見較べた。

いいえ、 知辺など―

うむ-知辺もないと――\_

百城は、 腕組をして俯向いた。

> は存ぜんが、武士としては、 ぬ。深い山だからのう-一さあ |深手で、 - 坊主共が捜したらしいが、 山の中へでも、倒れておられるのではあるまいか」 御二人の前ながら、 かくありたいもの、 かいくれ、 八郎太殿の性 行方が判ら のう袋持」

善悪はさておき」

を失うなど、悪逆無類の業ではないか? それに対して、 あろう。 詳しゅうは存ぜぬが、一家の内の争として、 「いや、善悪から申しても、わしは、八郎太殿へ味方する。 それは、 互角じゃ。申し分を互角とすれば、 申し分は双方に 御幼君

ŧ 悪いが、 彬方の人々が、お由羅様でも殺したとあれば、 わしでも立ちたくなろう。のう、 陰謀は一方のみじゃ。 さすれば、八郎太殿ならずと 七瀬殿\_ それは双方が

「有難う存じまする」

出して来る涙を押えているのを見せないためでもあった。 「叡山と申す山は、高うござりましょうか」 七瀬は、 百城の同情に、暫く頭を下げてい た。 それは流

綱手が、 少し蒼白めた顔で聞いた。

高い山でもないが

お母様 ―お兄様を捜しに参りましては?」

<sup>'</sup>なりませぬ

綱手は俯向いた。

「小太郎殿を、 しい。 捜しに? :家老へお願い致さば、 その儀ならば、 五日 某が手助けして 七日の暇は下さ

るであろう」

百城は、こういって、 七瀬に

捜してはなりませぬか」

れ

「浪人者の上に、無分別な父へつきました不孝者――」

ても、 兄としての情義、真逆-うしたことを離れて、ただの子として、親として、妹として、 人の道に外れましょう。それと同じように、小太郎殿の生死 「いいや、それとは、事がちがう。正義とか不正義とか、そ 一遍の念仏も唱えずに、無分別な夫と、足蹴にしては、 ――例えば、八郎太の死骸を葬るとし

見を るがえ いるがえ 道に――正道ではなくとも、 させるのが、これ、人の道、母の情ではござらぬか」 七瀬殿としては、小太郎殿の意

が不明なら、これを求めて、

もし、逢えたなら、諫めて、正

百城は、 いつにも似ず、雄弁であった。

「はい」

「袋持、そうではあるまいか」

ーうむ」

ではござりませんか」 い。もし、出たなら、 「御家老に、申し上げて見よう。お許しが出ずば、是非もな 七瀬殿、 綱手殿と共々、捜しに参ろう

「有難う存じまする」

に外れることは、 「生であれ、死であれ、わが子の運命を見届けるのが、 人倫

百城は、立上った。

お許しの程、 ただ今聞いて参ろう」

てしまった。 二人の女が、 頭を下げるのを後に、 百城は足早に出て行っ

お母様

「お前一人で行けますか」

綱手は、決心の眼で、母を見た。

「妾は、お国許へ早く戻らねばなりませんから、 お前一人で、

お供をして――」

と、七瀬がいった時、 袋持が

「百城は

と、いったまま、じっと、前の壁を見て、 暫く考えていた

が、綱手へ顔を向けて

「十分覚悟して、行きなさるがよい」

二人は、袋持の言葉に、 百城を信じていた。 一寸、不安を感じたが、それより

羨ましそうに、感心したように、じろじろ眺めた。 茶店にいた人々は、似合いの夫婦らしい、百城と綱手とを、

頬を赤くしながら、 の腰掛へ通った。婆が、 二人は、冬の山風に吹かれながら、薄く額に汗を出して、 人々の、周章てて引込める脚の前を、 茶をもって来ると、 百城が 奥

「この間の斬合のう」

゚はいはい」

「聞いとります。 「あの時、一人、逃げた者があったであろう。存じておるか」 今も、 それで、 話をしてましたが、貴下、

「怖いとは?」

親子の縁と申すのは、怖いようどすえ」

まで、誰も引取手が無かったのを、 引取られましたが、貴下、お年寄のだけが、明くる日の夕方 さん云うて、えらい、お坊さんが、 「あの大勢の方の方の死骸は、 すぐ、下から、 貴下はん、 おしてなあ。何んと、不 お山に、 お侍衆が来て

思議や、おへんか、この義観さんが、もう、 にもならしたかのう、爺さん」 かれこれ、 七十

婆は、 土間にしゃがんで、煙草を喫ってる爺を振向いた。

·そんなら、六十八か。大分、お前よりも、 達者やなあ」

「うん、わしと、六つちがいや」

「いびりよる婆がいんからのう」

とぼけんとき。 いびるのは、 お前やあらへんか」

百城が

「その義観が?」

を——」 あ、爺さん、血だらけで、虫の息で、誰も、 一人逃げよった奴を、 「その義観さんが、貴下はん、その前の日に、今、お話の、 救うてお出でなさったやおへんか。な 、かまいて無い の

見つけて、京の屋敷へ引渡そうというたのを、義観さんが、 まあまあいうて、御自分の庵室へ、連れ戻りなされたんやが 「婆さん、ちがうがの。道側に倒れていたんを、 それで、 お侍様\_ お坊さんが

爺が、立上った。

その倅の方を、貴下、義観さん一人で手ずから介抱してなさ で降りて来なさったやおへんか。そして、庵室の前へ埋めて、 上へ、お越しなされて、何うどす、血みどろの死骸を、 捨ててあるのは、この人の父親にちがいないと、一人で、 「その若いお侍を連れて戻ると、何んと、義観さんは、 山に 頂

「いや、「忝ない。そして、 その義観の庵室は」

るそうやが、これは義観さんでないと出来んことやと、

「根本中堂の下どす。あんた行きなはるか」

うむ」

ははあ、 ゙けったいなお坊どすえ」 何う、 けったいな」

一風、二風、三風、 も変ってますね。 物をいわなんだら、

日でも、黙ってる

「有難うございます。御綺麗な、 綱手が、立上った。百城も、鳥 目を置いて立上った。 京にも、 こんな御綺麗な、

夫婦衆は、一寸、見られまへんどすえ。有難う存じます。何

うえ、このお美しさは」

婆さんは、そう云って、綱手に見惚れていた。

膝頭を押えるようにして、その一つ一つを登って行った。 くつも、杉丸太が二三段ずつ横にした、段があった。綱手は、 にしたところに建っていて、その堂へ行く細い苔道には、 大きい堂が、古色を帯びて建っていた。傾斜した山 杉木立の、鬱々とした、山気と、湿気との籠めている中に、 [地を、

静かに、清らかに、 上ったところは、どこにも無かった。皆、 てあろうかと、 「お頼み申す」 何んの答えも無かった。綱手は、どこに、父の亡骸が埋め 見廻したが、そうしたらしい、新しい土の盛 黙っていた。 草と、苔とが、

お頼み申す」

高い梢を渡る風の音しかしなかった。 百城が、前より大きく叫んだ。遠くに鳴く、 義観と仰せられる方のお住居は」 小鳥の声と、

微かに、 部屋の中で、音がした。深い、屋根の下、高い杉

朽ちかけた板は、湿っていた。物音はしたが、又、そのまま、 の下に陽を遮られて、障子の色は沈鬱であったし、 縁側の、

静まり返ってしまった。

「誰方か、 おられませぬか」

狭いところを、 百城は、こういいながら、縁側と、急傾斜な土手との間 堂の後方へ廻りかけた。微かな人の呼吸らし の、

いものが聞えた。

「お頼み申す」

をかけながら、猿のように、 の中でした。二人が、見上げると、老僧が、枝から、枝へ手 った。その時、 百城が、立止まった。綱手は、きっと、兄の呻きだと、思 ばさっと、葉にすれる音が、 急傾斜な山の茂みの中を降りて 堂の真上の木立

(これが、義観だ)

来た。

と、二人は思った。

ないで、杉の幹に手を当て、灌木の枝を掴み、大きく飛び降 道の無い山に、道が有るらしく、少しも、 、 躊ゅうちょ

百城が、歩きかけると、 滑り降りして、忽ちの内に、堂の後方へ消えてしまった。 僧は、 部屋へ入って来たらしく、

音がした。

「お頼み申しまする」

障子の中から

誰方じゃ? 御用は?」

びに、 「当所において、御介抱にあずかっておりまする者の妹、 付添に参った百城月丸と申す者― お眼にかかれまし 並

義観は、

草を持った手で、次の間を指さした。

ょうなら」

「ああ、さようか、お上りなされ 勝手元は? 足が汚れておりまするが」

ーそのまま

「 は い

左右へ並べて、 を合せ、障子を開けた。七輪に、 二人は、脚絆をはずして、埃を叩いた。そして、 薄汚れた白衣の老僧が、坐っていた。二人が 土鍋をかけて、 草を、 膝の

手をつくと

「ほほう、似ておる」

綱手に、 微笑して、 百城を見たが

御夫婦か」

綱手が、 首を振って

. いいえ」

身寄りか」

「いえ、身寄りでも――」 義観は、じっと月丸を眺めていたが

「利発な方じゃが、瞳中少し、

「剣難」

|剣ではない、 の険

はっ

じるのじゃが いって、正気づいておらん」 「ま、気をつけるがよい。 命に別条はない。 ――その間に、 ただ、熱が高い。これから、 病人は、全身に十二三ヶ所疵 顔だけ見るがよい。 薬を煎

っきり白く浮き立つ繃帯をして、片方の眼だけ、微かに、白臥っていた。頭から、耳、頤へかけて陰気な部屋の中に、く小太郎は、汚れた、白い、薄い、蒲団を被て、つつましく

っていた。そして、時々呻いた。て、江戸の時と、一月にもならぬのに、げっそり痩せてしま顔色は、灰とも、土とも、白いとも、つかぬような色をし

眼を見せて、眠っていた。

護されて、こうしている小太郎は、もう生き返らぬ人のようしめつけた。そうした色彩の中に、医者でもない僧侶に、看命の色のように、しみじみと、悲しく、淋しく、綱手の胸を団、汚い、白い着物。陰気な部屋。それは、自分達一家の宿綱手は、そっと手を額へ当てた。熱かった。汚い、白い蒲

「明日になれば、熱も下って、人心地がつこう」

に思えた。

「山は寒いで、熱には毒じゃが、疵にはよい」義観が、土鍋のところから、声をかけた。

「いろいろと、お世話下されまして、忝のう存じまする」

綱手は、小太郎の側から、礼を云った。

戻るがよい」(「今夜は、この下の寺で泊って、明日、病人と、口を利いて)

っ は い

「父御の墓参りもするかの」

「はい、その、お墓は――」

義観は立上った。綱手は、自分の家の出来事でなく、仲「一寸、降ったところにある、案内しよう」

の世界の出来事を見ているような気がした。一月程の内に、(義観は立上った。綱手は、自分の家の出来事でなく、他人

頭がぼんやりしてしまっていた。く、深く、悲しいことが、引っきりなしに起って来たので、はっきりと、感じる暇もなく――感じるにしては余りに大きの生きているこの世の中の出来事として、その一つ一つを、江戸の長屋から追い出され、道中、父の死、兄の病――自分

一父の墓」

んだとも、斬られたとも思えなかった。 と、云われても、何っかに未だ父が生きているようで、死

義観が、その前に佇むと、綱手は、その土を見た。同時に、二尺四方に近い石を置いて、土の高くなったところがあった。から水の落ちている崖の下を降って、少し行ったところに、汚れた草履を履いて、義観の背後からついて行くと、竹樋

「極楽往生はしておられる」

涙が湧いて来た。

義観は、朗かに、自信ありそうに云った。

無闇に悲しくなって、涙が、いくらでも出て来た。 綱手は、石の前に、。跪 いて合掌した。合掌すると、ただ、

って、この浄らかな山の中で、静かな――ほんとに、静かなんでもよい、死んだ方がよい。このお坊様に、回向してもら(兄もああだし――母がここにいたなら、三人で、ここで死

なに楽しいであろう?)ところに住んで、何も見ず、何も聞かずにおったなら、何ん――何んという騒々しい、いやな、世の中であろう。こんなって、この浄らかな山の中で、静かな――ほんとに、静かな

った。 自分の一家の運命と較べて、綱手は、いろいろのことを思

「それだけ泣けばよい。泣くと、胸が納まる。父御は、極楽

義観は、こう云って、堂の方へ歩み出した。百城は、最後で、今頃、いい御身分になっておられる。安心するがよい」

「綱手殿\_

の合掌をして

なかった。袖で蓋うて、立上った。と、云った。綱手は、泣いた醜い顔を、百城に見せたくは

った。 互に好意をもっている男と、同じ部屋に寝なければならなか 年は、ちがっていたが、初めて他人の男と――それも、お

つけはしたが、鏡が無かった。

いたし、嫌いでない百城の前であったから、風呂で、白粉をの身躾みについても、細かい用意をしなくてはならなかった。の身躾みについても、細かい用意をしなくてはならなかった。 細手は、正気の無い兄、小太郎の身体を案じ、斬り刻まれ綱手は、正気の無い兄、小太郎の身体を案じ、斬り刻まれ

百城の前で、じっと、俯向いて黙っていた。しでつけた白粉の、のり、紅の濃淡、髪の形を気にしながら、「滅入るような、薄暗さと、静けさとの中で、綱手は、鏡無

に。月丸から、話されることを、想像すると、胸が、どきんとし月丸から、話されることを、想像すると、胸が、それでいて、なく淋しいし――話しかけても欲しかったが、それでいて、何か、月丸と、話をしたいし――話でもしなくては、耐ら

(恋であろうか)

れたことが思い出された。 と、思うと、いつか、箱根路の闇の中で、益満の身体に触

(大事の時に、何んという淫らな心――)

羊かこ、頁のP\、床ってくるようこ感じた。暖かい乙女の肌が、その時の感じを喜んでいて、益満の臭が、と、自分を叱ったが、いくら、叱りつけても、滑らかな、

鮮かに、頭の中へ、蘇ってくるように感じた。

を凝視めているような気がした。そしてそう思って、俯向いていると、月丸が、じっと、自分の顔

(白粉が、斑なのかしら)

をつかすようにも思えた。と、思うと、何んだか、それ一つで、月丸が、自分に愛想

「静かだ」

月丸が、呟いた。綱手は

「本当に、静かでございますこと」

てしまった。 と、云いたかったが、いおうとしている内に、いいそびれ

(もう一度、何か、云ってくれたなら――)

綱手が、

こう思った時

綱手が、顔を上げると、月丸が、正面から眺めていた。綱「綱手殿」

「はい」のいた。

と――何んとも申しようも無い。世の中の不仕合せの一切を、とれんこともあるし――七瀬殿のお心、お身の気持を察しるに致せ、あの深手では、不具――悪く参れば、不具とならん亡くなりになったし、小太郎殿は――よし、命を取り止むる「再び、お身を悲しませるようなものじゃが、八郎太殿はお

第だ」 一身、 家に受けておるとしか思えぬ――申しようも無い次

同情の言葉を、 綱手は、身躾みのことも忘れ、月丸のことも忘れて、その 嬉しく、悲しく聞いていた。

某は、 「七瀬殿と八郎太殿とに、何う、意見の相違があろうとも、 - そなたと七瀬殿とが、同意であろうと、無かろうと、 八郎太殿に、又、小太郎殿に、味方したい。これは、

殿に代って、牧の一味を討とうと存ずる」

お身に計るのではない。某、一存の決心

「貴下様が――」

綱手は、 眼を見張った。

待って、談合の上、斉彬派同士の一人へ入りたい あろうが、 「お身は、 見すごし出来ぬものがある。 八郎太殿の志を思い、その働きを思うとき-七瀬殿と、同意ゆえ、某のこの決心には不同意で 小太郎殿、 御回復を 只今、 武

月丸は、低く鋭く云った。

決心致した――御不服か」

綱手は

さぞ喜びましよう) (不服どころか しゅう思いますし、 兄 も、 聞いたなら、

反対ゆえ、と、いいきっていたから と、思いはしたが、七瀬が、固く、

月丸に対して、夫とは

(お頼み申します)

ていたが

とは、云えなかった。だから、月丸のそうした言葉に黙っ

「綱手殿は、御不服であろうが――」

月丸が、もう一度云ったのに対して

(不服でございます)

明瞭と、返事もできなかった。 月丸は、 綱手が、 黙っ

ているので

「一体、お身は、不服か、それとも――」

と、問いつめてきた。綱手は、 何っちとも返事ができなか

ったし、したくもなかった。

―只今より小太郎

夫に従う、これが、婦の道でござろう。まして、何れが正義、「七瀬殿のことを、悪し様に申してはよくないが、嫁しては えと――ただ、利益ゆえで、夫の意見に逆うなど、 に落ちんこともある。では、ござらぬか 何れが不義と、判断のつかぬ騒動、斉興公に従うが、 ——綱手殿 ちと、腑 利益ゆ

月丸は、微笑した。

節婦とも、 「しかしー 称められんこともない―― -女としては、よく決心し、よく計られた。貞女、 と---某は 見てお

るが――

け た。 ったので 月丸は、 綱手は、ようよう返事のできそうなことを、 綱手の上げた眼へ、美しく、澄んだ眼で、笑いか 月丸が云

|と、申しますと――|

ように、微笑して聞いた。 と、月丸の言葉の意味が、 十分に判らなかったから、 同じ

「某は、それが、 七瀬殿なり、

お身の本心じゃ、と思うが

**「それがとは?」** 

何うかの\_

「父兄に不同意と、見せかけて――」

に、笑いを、大きくして行った。 月丸は、腕組をして、綱手を見ながら、だんだん脣に、眼

「見せかけて」

し、月丸を半分信じ、半分怪しみながらも、何かしら、安心綱手は、冷静に、こういったが、月丸の、明察に、感心を

「父兄と、諍って家出したとは、真赤な譃、ちゃんと、貰したような気のするところもあった。

合せて、御家老の秘事でも、探ろうという所存――」

綱手は、胸を衝かれて、少し、赤くなったが

「いいえ」

と、烈しく、首を振った。

「それなら、江戸に止まっておりまする。国へ戻りすがらの

――お恥かしゅうござりますが、路銀も乏しく、御家老様に

お縋りしてと――」

「いや――気に障えられては困る――もし、左様な女丈夫で

あったなら、某――命にかけても――」

全身の血を熱くしながら、月丸が、はっきりと、次をつづけく言葉が、何んであるかを察した。そして、耳朶を赤くし、こういって、月丸は、急に黙った。綱手は、その後につづ

るのを待っていた。月丸は、じっと、腕組をして、俯向いて

地へ間者に入る程の女を女房にしたいものじゃ。当節は、士もちがうものか――のう、綱手殿。武士としては、単身、敵し、八郎太殿の血を受けていながら、兄 妹として、そうまで「左様のことは、芝居話――今の世にあろうとは思えぬ。然

いたが

更けた。臥みなされ」
ぞ――いや、こういうことを、近頃は、野暮と申す。夜も、及ばぬまでも、牧の行方を求めて、小太刀の一本も恨まれぬ雲泥の差ではござらぬか。お身も、小太郎の妹なら、何故、って、上下、赴くところは、惰弱の道のみ、それと、これと、も、旗本の如く、悉く遊芸に凝れば、婦女子も、芸妓を見習

月丸は、こういって、立上った。そして、廊下へ出て

「夬い友じや」

呟いて、厠の方へ行った。

れるのが、辛かった。だが、同時に(綱手は、口惜しかった。好きな月丸であっただけに、罵ら)

(女丈夫――命にかけて――妻にしたい)

と、いう言葉が嬉しかった。

(もし、百城様が、妾の本心を知ったなら)

(いつか、判る時があろう)と、思うと、もう、百城は、自分のもののように思えた。

と、心の中で、微笑したが

(判る時までに――もし、外に、好きな女子が出来たなら)

と、思うと、心臓が早くなった。

いて、百城の戻って来る足音を聞いていた。百城は、障子を綱手は、半分の口惜しさ、悲しさと、半分の嬉しさとを抱

開けて

「早く、 お臥みなされ」

Ł 冷やかに云った。

゙はい、貴下様から―

「何刻であろうか、山中暦日無く、鐘声なし」

半分、 節をつけて呟きつつ、手早く、着物を脱いで

「御免」

んだ。男の体臭が、微かに匂った。 供らしい快活さに、微笑みつつ、脱ぎ棄てた月丸の着物を畳 兎のように、 蒲団の穴へ入ってしまった。 益満のことを、 綱手は、その子 又思い出

して、二人を比較しながら

(益満様を、世にも頼もしい方と思っていたが、ここには、

それにも増して、 頼もしい方がいなさる)

そう思って、月丸の、 後寝姿を見た時

「これは、 恐縮

月丸が、 寝返って、 畳んでいる自分の着物の方へ一寸手を

延した。

「いいえ」

んだ着物を素早く、 綱手は、 眼がぶっつかったので、 蒲団 の裾へ置いた。そして、 周章てて、俯向いて、 月丸に背を 畳

「灯は?」

向けて、自分も、

帯を解きながら

「消す」

半解きにしたまま、二つの床の真中を、静かに通って、行燈 の灯を、手で消そうとした。だが、なかなか、消えなかった。 綱手は、長襦袢姿を、見られたくはなかったので、帯を、

ところで、ぶっつかろうとした。綱手は、周章てて、 月丸が、半身を出して、手を延した。二つの手が、 手を引 火影の

込めた。月丸は、肩を、 胸を、少し現しながら

「なかなか、 消えぬ」

と、呟いて、烈しく、手を振った。火が消えた。

「有難うござりました」

解けたのを、引上げると、 軽く、油煙の臭気のする中で、そうい 月丸が押えているらしく、 って、 綱手 が、 動かな

かった。だが、すぐ

「これは、 御無礼」

と、手を放したらしく、帯が自由になった。 腰紐を解き、

着物を脱いで、床の上に坐った時

「綱手殿 「本心が?」 何うも、

|判りかねる|

「その内に、お判りになりま

「その内に?― 月丸は、 綱手の床の方へ向いているらしかった。 ―その内に?」

暫く、二人は、黙っていた。 冷やかな闇と、深い山 [の沈黙

被て、襦袢の裾で両足をくるんだ。

とが、

凄いまでに感じられた。

綱手は、

固い蒲団を、

肩まで

|綱手殿

綱手は、 月丸の声が、月丸の臥床の端 両脚を固くして、 胸を躍らせながら 綱手の蒲団の近くでした。

「はい」

「本心が、判るとは――何ういう本心、又、それがいつ判る

、か

一さあ」

きを話すのだと思って、安心した。だが、答えられないので、綱手は、月丸が、愛欲のことでなく、さっきの言葉のつづ

そのまま黙っていた。

何故、それに、お身は、母上にのみ、孝行をなさる」「母上は、生きておられる。父上は、然し、斬死なされた。

綱手は、答えなかった。

綱手殿

「何故、返事なされぬ」「何故、返事なされぬ」らといって、外のことでいいまぎらすことも、できなかった。く、口まで出かかっていたが、それがいえなかったし、だか味方してくれる月丸に、打明けたくて、鉄瓶にたぎる湯の如綱手は、まだ答えなかった。こうして、親切に、熱心に、

ないのに困っていた。いと、考えていたし、月丸の同情に対し、自分の答えのでき月丸の無礼を咎めるよりも、月丸に、何んとかうまく答えた「月丸の声が、近々として、蒲団の端が、動いた。綱手は、

「無理かも知れぬ」

そうとしか、某にはとれぬが――綱手殿、そうとってよいか、た、女ながら、天晴れの決心が、わかると、申す意味か――「いつか、判る、と――その意味は?――綱手殿。某の申しこういった月丸の声は、坐っているらしく、上の方でした。

男へ、本心を打明けることのできぬ悲しさからの涙であった。何んとも答えられぬ苦しさからであると共に、自分の愛する薄く、涙が出てきた。それは、他人の熱情的な同情に対して、低いが、熱情的な言葉であった。綱手は、済まぬと思うと、

「綱手殿

手の肩を、ぐっと掴んだ。 異常に、昂丸の手が、綱 異常に、昂奮した声が、低く響くと共に、月丸の手が、綱

「そう取って――取ってよろしゅうござるか」

肩から月丸の手を放すのも、厭なような気がした。然し、そそれが、月丸の手に触れるのが恐ろしかった。だが、自分の綱手は、月丸の手を払おうとして、町分の手を動かしたが、

(だらしのない女)

のままに掴ませておいて

寝返ろうとした。その瞬間に、月丸の手が、綱手の腕を握っと、思われたくなかったので、静かに、身体を引きつつ、

た。そして、耳許へ口が近づいて

「打明けて――

某、命にかけてのこと」

たまま、耳許でさで火のようにして、顫えていた。月丸は、綱手の腕を握っ丸に握られている腕を、引放そうとしながら、全身を恥かしているように、しびれているように――脚を固くしめて、月月丸は、喘ぐように囁いた。綱手は、頭の中が、唸り渡っ

かけての――綱手殿、命をかけて――」腹であろう。恋する者には、対手の肚の中まで読める。命に「命にかえて他言せぬ。きっと――そうじゃ。本心は父と同

月丸は、女の耳朶へ、時々、脣を触れさせつつ、微かに、

いるのを、何うすることもできないで、羞恥と、興奮とで、ら、肩が、腕が、肉体が、血が、男の締める力を快く感じてしめていた。綱手は、顫えながら、そして、軽く抵抗しながだが、情熱的に囁いた。そして、両手で、腕と、肩とを抱き

## 「百城様——\_

物もいえなかった。

「うむ」

月丸は、眠りかけているらしく、鈍い返事しかしなかった。

綱手は

(こうなりました上は、一生、見棄てないで――)

(眠っていらっしゃるなら、丁度いい。そんな恥かしいことと、云いたかったのだが、口へは出せなかった。

が、口へ出せるものか)

を較べてだんだん眼の冴えて来る自分と、もう、眠りかけている月丸だんだん眼の冴えて来る自分と、もう、眠りかけている月丸なかったのが、ひどく物足りないようにも感じた。そして、とも、思ったが、月丸が、ただ、うむと一言だけしかいわ

の大事な時に、こんな気楽なものかしら?)(男というものは、こんな人間の大切な時に――一生に一度

とも思った。

ろ金色の鳥のように羽を拡げて翔け廻った。だが悔は、少しも起らないで、明るい未来の空想だけが、いろいもあるし、幸福にも思えるし――生娘で無くなったという後もあるし、何かが抜け出したような感じもするし――不安で身体中が、熱っぽいようでもあるし、しびれているようで

(兄上は?)

もしたが、それはすぐころが、すぐ、頭近くの外にあると思うと、済まぬような気と、思うと、一寸、暗い気もするし、八郎太を埋葬したと

(でも、この方が、親身になって力を添えて下さって、きっ

と、お志は貫きますから――)

るようにりも、兄と、八郎太とに対して、月丸を獲たことを誇りとすりも、兄と、八郎太とに対して、凡が咎めなかった。それよと、いう弁解をして、大して、心が咎めなかった。それよ

として、申し分の無い方だと思って、許したのでございます。志を継ぎ、兄様の手助けにもなり――それから、妾のよい夫淫らな綱手ではござりませぬ。ちゃんと考えて、お父様のお城様を御覧になったら、決して、お叱りにはなりますまい。っていて下すって――どうぞお喜び下さいませ。お母様は、(よい男で、お強くって、お利口で――本当に、妾を可愛が

(益満――)

と、思うと、はっとした。

何も、妾から、手を、口を出したのではござりませぬ

綱手は、父に、兄に、母に、こう説明をしていたが

それも――それも百城様から――あちらからせがまれて――

生添うて行く、妾の夫――)――益満様は、ただ、一寸、好きな人。百城様は、夫――ーは、操の正しい女ではないのかしら?――いいや――いいや(妾は、益満様を好いていたのに――二人を好くということ

綱手は、微かに聞える月丸の呼吸を、全身で聞きながら、

固くなって、闇の中で、ただ一人、心を、眼を冴えさせていいから、一寸触れたい、と思ったり――だが、つつましく、何か、もっと話して欲しい、といったり、手でも、足でもい

分の寝間着のすれる音の外、何一つ聞えない静寂さであった。時々、梢を渡る風の音と、何んとも知れぬ鳥の叫びと、自

(もう、何刻かしら――)

と、思った。そして

と、思ったりしているうちに、眠入った。月丸が、静かにはお疲れでいらっしゃるだろうから、お眠いのも無理はない)(眠くなった。疲れているから――百城様も、本当に、今日

「えへん」

身体を動かして

(眠ったな)と、小さく咳をした。綱手は、動きも、答えもしなかった。

と、月丸は、思った。そして、静かに、蒲団の中から抜け

出した。

てあった脇差を差した。 月丸は、帯を締め直した。そして、自分の蒲団の中に入れ

には、こういう手段も仕方はあるまい)(この女を利用して、敵党の秘密をさぐり出す――忠義の前

そして、足音を盗んで、障子を忍びやかに開けた。冷たい廊月丸は、暫く、綱手の寝息をうかがってから、立上った。

(だが――わしは、この女に惚れてもいる。それは、本当だ。下、冷たい風の中へ出た。

としては致し方が無い。いいや、それが、武士の辛い道だ好きだ――好きな女を――欺くということ――それも、武士だが、味方をするといって欺きもした――欺いたが、好きは

月丸は、そう思いながら、跣足のまま、苔のついた土の上――然し、この女に、それが判るだろうか?)

(わしの、この――こうした本心を知ったなら?(怒るか、へ降りて、草の中を、庵室の方へ歩み出した。

嘆くか?――怒りもするし、嘆きもしようが――妻は、嫁し、オーローこと。 こ・ー ファッキタ・ファル・ 素ネア

月丸は、綱手を、妻とし、自分をその夫だと考えてみて、ては、夫に従うべき筈だ――)

(あれで---妻であり、夫であるのか)

苦笑した。

人間は、愛欲の世界にいる時は思慮の無い情熱で、憑かれたた同じ言葉も、そういった時は、お互に本気だったと思うと、

と、思ったが、綱手の誓ったそうした言葉も、自分のいっ

(妻でも、夫でも、何んでもよいが、本心を語るのは、少しようになるものだと思った。

わしの父を覘っている小太郎を討ちに行く、と知ったなら、分らの味方と信じて、肌を許したのだ。わしが、こうして、早い――いいや、早いというよりも、あの女は、わしを、自(妻でも、夫でも、何んでもよいが、本心を語るのは、少し

たいとも感じずに、歩いて行った。 月丸は、夜露に濡れながら、高山の冷たい夜気の中を、冷

勿論許しはしなかったであろう)

ことはできることでない。いつかは判ることだ。いつか判る、(それでは、一生、この本心を打明けずにいるか? そんな

その時まで、自然に任せて待つか? それとも、

いい機に打

- 222

明けるか? それとも、小太郎を斬りすてて、父の身体を安 らかにし、敵党の模様をさぐった上で、別れるか?-

別れたくはない――では、何うしたならよいか)

を端折って、帯に挟み そして、星あかりに、庵室が黒く見えると共に、静かに、裾 足で、手で、さぐりつつ、木立の間を、庵室へ近づいた。

(女のことなど、何うでもよい。父を覘う奴を――)

も、小太郎と、義観とに対する注意と、用意とで、いっぱい き、膝をあげて、じっと、耳を澄ますと同時に、心も、身体 と、思った。そして、戸締りもしていない廊下へ、手をつ

奥の方へ、這うように、廊下を伝った。 に抜いて、右手に持ちながら、入口から、 部屋の中の物音は少しもしなかった。月丸は、脇差を静か 小太郎の寝ている

になってしまった。

のところまで来ると、 (あの老僧は、小太郎の部屋にいるか、次の間にいるか?) 夜ざとい老人が、起きては邪魔であった。月丸は、次の間 義観の寝息を窺うため、暫く、じっと、

耳を立てていた。だが、少しの音もしなかった。小太郎の室 からも、 物音は聞えなかった。

(二人とも眠っている)

次の間から 月丸は、右手に脇差を立て、左手を障子へかけた。その途端、 の間の境まで来た。そこに立っている柱が、その境であった。 にでさえ、少しの音も聞えないくらいにして、次の間と、奥 月丸は、それでも、足に、手に、心を配りつつ、自分の耳 月丸の半立ちになった耳のところで、 障 子

重の近さで

「何んの御用かの」

掴みに、身体ぐるみ、冷たい手で掴まれたように感じた。 その声は低かったが、柔しかったが、月丸は、頭から、

その声は、月丸の心の中も、刀も、何も、 義観の声は、月丸の、すぐ耳許でした。 見ているらしく感 余りに近すぎた。

(この真暗な中で――見えるものか)

じられる声だった。

見えている、としか思えないくらいのものだった。 でみたが、余りに近く、余りにやさしい、その不気味な声は、 と、月丸は、周章てながら、もがきながら、頭の中で叫ん

開いても、義観が出て来ても、 しめたまま、全身を固くして、居すくんでしまった。障子が 月丸は、答えもできないし、動きもできないし、刀を握り 手も、足も、 舌も、 動かない

うに、もう一度、月丸へ蘇って来た。 怪力、その鋭い眼 昼間見た、山を降りて来る足取り、あの石を運んだという それは、人間でなく、何かの化身のよ

と感じるくらいに、薄気味悪い、凄い声だった。

しく の中に物が見え、刀を抜いて近々と近づいている者へ、やさ 刀を取っての対手なら、 誰にも負けぬ自信はあったが、 闇

「何の用かな」

と、空々しくい ĺ١ かける老人は、 何う対手にしていいかわ

からなかった。 (しまった)

感じた。

そして、義観が現れたなら、

身体ぐるみ、

- 223

次の言葉が無かった。次の言葉と、義観の出現とを、待っていたが、それっきり、次の言葉と、義観の出現とを、待っていたが、それっきり、っつかってやろうと、しびれるような気持の中で決心をして、

起るようにも思えた。今の、やさしい言葉が、次には鋭い言し、身体を動かしたなら、何かしら、大変なことが、自分に層、不気味になってきた。だが、月丸は、何もいえなかった後はいくら待っていても、次の言葉が聞えないとなると、一は聞えたのに違いなかったのだから、たったその一言だけで、月丸は、自分の耳を疑ってみた。だが、明らかに聞えたの

が、少しずつ、そんなものが、ほぐれかけると月丸は、呼吸をこらし、身体を固くして、じっとしていた

葉になって、自分の刀は折れて、小太郎が出て来る

**―**―そう

いうようにも感じられた。

(義観ぐらい――この刀の下に――)

る勇気は出て来なかった。退くか、義観と戦うか?(その二だが、もう、何うしても、障子を開けて、小太郎の居間へ入)と、いうような勇気が肚の底から、少しずつ湧いて来た。

(もう一度、あんな、薄気味悪い声を聞きたくはない――戻つが混乱して、月丸の頭の中を走り廻った。

ろう)

ていると感じた。 笑われそうな気がした。月丸は、四方から、義観の眼を浴び と、思ったが、戻りかけたなら、何かしら、あははははと、

障子のところから、一寸、二寸と、身体を離しかけた。 少しずつ、恐怖が薄らいで来ると共に、月丸は、声のした

(黙っていろ――声をかけるな)

ほっと、安心し、呼吸をついだ時づくと、月丸は、片脚を延して、土へ触れさせた。そして、れが、卑怯だと叱ってみても、止まなかった。廊下の端へ近と、いうような、臆病な心が起って来たが、何んなに、そ

「馬鹿がっ」

の中を、その内部から撲ったようなものだった。っぱいに拡がった。それは、声でなくて、人間の内臓を、頭ように、響いた。頭の中へは、ぐゎん、という音と共に、いそれは、大きく、鋭く、月丸の肚の中を、拳で突き上げる

そして、立木にぶっつかりつつ、凹地に、躓きつつ、走り出し月丸は、よろめいた。そして、一気に、崖を飛び降りた。

思えた。 義観は、すぐ、その障子の外で、未だ自分を見ているように

魔物の住家に、いるように感じられた。寺へ戻って来たが、

荒い足音、障子を開けたので入って来た冷たい風

は、眼をさました。

「百城様」

狼狽している心臓を押えながら、鞘へ刀を納めて、手早く、月丸は、綱手の声で、心強くなった。周章てている呼吸、

蒲団へ差込んで

「貴方様は――何ちら「未だ、眠らぬか」

「わしか――」

月丸は、綱手も、自分が、小太郎を斬りに行ったのを、知

- 224 -

が 日、二日別れたとて、 抱して上げるがよい。 く戻らねばならぬ」 っているのではないか、 「それは、そうでございますが――」 「小太郎は、 「寒いのう― - 迎えに — では 「妾も――」 「歩くとは?」 「明日は、又、歩かねばならぬから、 「思い出したことがあっての」 でも――来る時は、 大阪へ戻らねばならぬ ほんに、 「冷とうございますから、早う、お臥みなされませ」 わしは、 綱手は、 綱手は、又、暫く黙っていた。 いいや、 綱手は、暫く答えなかったが 綱手は、起き上ったらしく、 月丸は、 衣ずれの音がしたので -帰りは 寒い 媚と、品位とを含んだ、滑らかな口振でいった。 そなたは意のままに それが、 あの 迎えに、 程なく、 自分を添寝に呼んでいるのだ、と思った -妾、一人?」 一生別れる訳でもあるまいに 四五日 京まで参ってもよい。綱手、ここで一 老僧の手当で十分であろう。然し、 わしは、 夜が明けよう」 というように感じた。 いろいろと用があるゆえ、 蒲団の上の方で声がした。そ 早く眠るがよい」 早 介 が立ったなら、 立ってきた。 そして、それを執拗に、 ったが 「土?」 が 「まあ、お枕の方へ――」 「ま、砂が 「でも――」 「狸が」 「 は い 「そこまで見てやろう― 「武士の娘が、狸ぐらいを――」 「まあ、気味の悪い、妾 \_ 寸 '山のことじゃ」 「狸でも入ったのであろう。よいではないか」 厠へか」 何処へ」 月丸は、 月丸は、 綱手は、 綱手は、月丸の枕近くへ寄って来た。 立止まったらしく 綱手は、 綱手を叱ったが、綱手の廊下へ出るのを見に自分 媚びるように、甘い口調であった。 自分の周章てていたことに、怒りが生じてきた。 入ってまいったのでござりましょうか。ひどい土 ---ああ、ここら---一面に」 月丸の枕頭のところを、 障子の外に義観がいるような気がした。 大仰らしく調べている綱手へも腹が ―子供でもあるまいに― 静かな足取りで歩んで行

月丸が立上ると、すぐ綱手に触れた。二人の手は、互に探

7

「まあ、冷たいお手々」

しあった。

綱手は、自分の両手の中へ、月丸の右手を挟んで押えた。

「連衆は、何うした」

と、義観が聞いた。

「用事がござりまして、大阪へ戻りましてござります」

何っかに、変ったところができているように思えた。との仲を知っているように思えた。顔か、身体か、眼か―――綱手は、誰に逢うのも恥かしかった。誰でも、百城と自分

「昨夜は、何んともなかったかな」

赤になった。そして、義観の、柔らかであるが、底光のするは、月丸と二人のことを知っている言葉のように思えて、真義観のこういった言葉は、やさしく、低かったが、綱手に

綱手は、返事ができないで、俯向いてしまった。眼は、すっかり二人の仲の何もかも知っているように思えた。

「あの若者は、利発じゃが、気をつけんといかん」

行くのが感じられた。 前に、ひれ伏す罪人のように、義観の前では、小さくなってめて見た時から、ただでない僧だ、と思っていたが――仏の―綱手は、一々自分のことを指されているのだと感じた。初

くさせたので、百城様の罪ではない、といいたかった。そしいので――百城様に、悪いことがあれば、それは、妾が、悪言葉には、小さく反抗したかった。悪いのは、皆、自分が悪だが、何かしら百城に、悪いところがあるような、義観の

(気をつけぬといけない、と、仰しゃいましても、もう、取

返しのつかぬことになりました)

と、心の中で呟いていた。

「熱が退いて、もう、口が利ける。逢うがよい」

綱手は、少しでも早く、義観の前を去りたかった。

「有難う存じます」

仰向いたまま、細目を、襖の方へ向けた。二人の眼が合った。と、両手をついて、すぐ、次の間の襖を開けた。小太郎が、

(まだ悪いのかしら――見えたにちがいないのに、綱手は、小太郎の鈍い、表情の無い眼を見て

眼の色ー

つ変えないで――)

と、思った。そして、小太郎に、笑いかけて

「よく、お癒りになりました」

だが、小太郎の眼は、冷静であった。と、枕の横へ行って、上から、なつかしそうに覗き込んだ。

「何しに参った」

「ええ?」

それが、何になる?(死ぬものは死ぬ。癒るものなら、癒る。「お前には、お前の仕事があろう。わしに、付添うていて、綱手は、小太郎の口調が、意外なので、はっとした。

愛のためには、動きますまいと――」一旦、袂を分った上は、事成就の暁まで、濫りに、小さい恩そんな覚悟で大事がなせるか――帰れ。母上にも、そう申せ。

になって、眼を閉じてしまった。 綱手の方を向いて、低く、こういうと、くるりと、仰向け

- 226

「たわけっ。お別れする時から、生も、死も覚悟をしておる「でも――お母様は、お兄様の生死を案じなされて――」

も己の仕事をすてて、国許まで、探しに戻るか。た、たわけもし、わしが、国許で、生死不明にでもなったなら、それでのではないか。これが、京と、大阪の間じゃから、とにかく、「オイト」、オ別村でを開から、生ま、 ダモ寛州をしてする

「 は い たっ」

「帰れっ」

義観が、襖を開けて

「そう叱ってはいかん」

と、首を出してから、ゆるゆる立上って入って来た。

「老師」

小太郎は、義観へ、微笑した。

「暁頃に、誰か、忍んで参りましたが――」

「猿じゃろう」

信じているのへ、押返して聞くのは、悪いような気もしたが(義観は、こともなげに答えた。小太郎は、義観が、猿だと)

小太郎は、義観の眼を、下から、じっと凝視めながら「いいえ――老師は、馬鹿と、一喝なされましたが」

「猿ではござりませぬ」

「猿みたいなものじゃ、猿ではないが――」

「忍びよる気配には殺気がござりました」

|感じたか|

「害心無きものの近づく音とはちがっておりました」

「のう、妹御」

と、義観は、綱手の正面から

底から済まぬように感じたが――そう感じた刹那も、兄にはそんなことが、起っているのか、と思うと、心の綱手は、自分が、百城と、愛欲の世界に歓喜している間に

(あの畳の上の土、砂---)

綱手は、全身を蒼白めさせた。

(もしかしたなら、百城様が――いいや、いいや、決して、

そんなことは、そんなことを百城様が)

「心当り?――さあ」

と、口だけで答えて、じっと、俯向いていたが

い、と思えば、怪しいが――百城様が、そんな――あの、や(急に、大阪へ戻ると云って、暁に立って行ったのも、怪し

感じた。遥かの下に渦巻いている深淵へ陥込んで行くような、打消したが、綱手には、立っている崖が崩れかけたようにさしい、頼もしい百城様が、そんな、兄を殺すなどという)

「よく、剣禅一致と申すことを聞きまするが、不立文字にて、ハー絶望さを感じてきた。

ても遠く及ばぬ気魄が、迸っておりまして、某の腹の中へも、の、馬鹿と申された一喝、その気合の鋭さは、剣客の気合と生死を超越する境地は、剣も、禅も同じと致しまして、昨夜

を衝いての一喝、その虚実の妙――」何んの用か、と、やさしく聞いて、敵の意表に出で、後に虚

ぐゎーんと響いて、暫く、呆然としておりました。

最初に、

「よしよし、もう判った。ところで、女、気をつけるがよい

ぞ

- 227

「 は い

「よく考えてみい」

綱手は、自分の身体が真暗な中の空間に引っかかって、手

足を、もがいているような気がした。

「綱手、牧は、何処へ参ったであろうか、存ぜぬか」

「江戸へ参られました」

調所は?」

「矢張り、御勝手方御調べのため、近々に、御江戸へ」

「そうかー ―わしは、二三日、こうしておって、すぐ江戸へ

立とう。益満から、便りでもあったか」

いいえ」

あれも、この辺へ参っている筈だが――」

益満様が?」

綱手は、こういう時に、益満に逢えたなら、 と思った。

「疵は、皆浅手じゃで、心配することは無い」

腹の疵も、少し痛むくらい

小太郎は笑った。

「自分で斬ったのが、一番、深手じゃとは、おかしい、 あは

はは

と判ったが、それに対して、口を利くことさえできなくなっ ていた。月丸のことで、頭の中に熱い風が吹きまくっていた。 綱手は、二人の話によって、小太郎が、自分で腹を切った

> 調所 の死

斉興は、調所が、 襖のところへ平伏したのを見ると

「何うじゃったな」

と、声をかけた。調所は、 それに答えないで、静かな足取

りで、斉興の前へ来て

「御人払いを――」

その眼の中にも、言葉の中にも、 いつもの調所に無かった

ものが感じられた。

「人払いか」

斉興は、軽い不安を感じながら

「皆、退れっ、遠慮致せ」

と、手を振った。近侍達は、一人一人、 礼をして、 作法正 - 228

しく、次の間へ立って行ってしまった。

「何事じゃ。又、わしに隠居をせいと――かな」

調所は、黙って、首を振った。それから、じっと、 斉興の

顔を見て

「手前、営 覚悟致しておりました時節が参りました」

調所は微笑した。

「覚悟しておった?――

何ういう覚悟」

「十余年前に申し上げました覚悟――万一、密貿易露見の暁

には、手前、 一身に負いまして、御家の疵には

と、まで云うと、斉興の眼は、鋭くなって、叱りつけるよ

うな口調で

「そりゃ、 真実か。 真実、 露見致したのか」

致しました」

そいつは伊勢 (老中、 阿部伊勢守) の手に握られているの

か

「はい」

何んとして? 誰が、そのような

「心当りもござりまするが」

誰じゃ、其奴は

「匹夫の業、格別咎め立てしても」

斉興は、 烈しく、首を振って

いいや、 八裂きにしても飽き足らぬ奴。 他国者か、 家中の

者か」

「その詮議は後として、 御 前、 伊勢の手に、証拠が入りまし

た以上は

「何ういう証拠が入ったか?」

然し、 して、手前亡き後の財政処理のこと、又、密貿易を、 然し、緊急の御相談は――密貿易の罪は、手前負うと致しま「しかとは存じませぬが、それにも、心当りがござります。 今のま

た場合の時のこと、又、手前以外の貿易方御取調べのあった 置方、又、もし、公儀より、この件について、 まに続けるか、続けぬか? 何う口を合せるか。それから、手前の務と致しまして、 琉球の処置方、同意町人共の処 御手入のあ

その辺、 短い時日 御意見をお洩らし下されますよう――」 の内に、 山の如くござりますゆえ、 御大儀ながら、 亡き後の物品の処置方、

帳面の整理、引合せ等、いろいろの、

斉興は、 ないぞ」 俯向いて、 じっと、調所の言葉を聞いていたが

> と、低く呟いた声は、 湿っていた。 調所は

はい

Ł 答えて、同じように俯向いた。

来てくれた心底、 「二十年近くの間、 わしにはよく判っておる。 今日死ぬか、 明日死ぬかと、 忝ない。

覚悟をして

改めて礼を申すぞ」

調所は、答えなかった。

「島津を救い、島津の礎を築いてくれた功績は

「家中の者に代り、御先祖代々の御霊に代って、 斉興は、脇息から手を放して、両手を膝の上へ置いた。 礼を申すぞ」

調所は、 畳へ両手をついたままであった。

「笑左 ·然し—

いる調所 斉興は、 手早く、 眼を拭い て、 いつまでも黙って俯向 いて

「何か、 、よい分別はないか」

「手前

と、いって、調所も、 指で眼頭を押えた。そして、少し紅

味がかった眼を上げて、 微かに笑いながら

五年生き延びんがために、 貿易にて死ぬのを、本願と致します。この齢をして、三年、 なまじ、 悪あがきは致したくござ

「勇士は馬前の討死を本望と致しますからには、

手 前

は、

りませぬ」

と、斉興は、大きくうめいた。

一御茶坊主から取立てられまして三千石近い大身となり、 家

229

れば、 従容死に赴いて、死に対する心得のあったことだけは、 老格にも列しました上は、仕事は、まず、十中八九までは成 の思い出、若い者に、示しておきたいと存じまする。ともす べだにも存ぜぬ手前、腹の切りようは、勿論、存じませぬが、 最早思い残すこともござりませぬ。それに、竹刀持つす 坊主上りと、世上の口にかかりますが、その坊主上り 老後

して、その中から、小さい錫の容物を取出した。 いって、調所は、手を懐へ入れた。そして、 紙入を出

の死ざまを見せて、冥途の土産にと、平常から――」

「毒薬でござりまする」

斉興は、黙っていた。

処置方のいろいろに就きまして、掛の者共を、御呼び集め下けしておいて、さようならを致す所存、先刻申し上げました けられましょう」 されますよう。夜長ゆえ、あらましは、二三日にても取片付 がござりましょう。その間に、御奉公の納め仕舞、もう一儲 「伊勢の手にて取調べるにしても、まだ、十日、二十日は命

むのか」 「心得た。 わしも、手助け致そうが、その毒薬を、そちは飲

入れると、すぐ、 ころり

「蘭法にて、

何んとか加里と申すようにござりますが、

試みたか」

いや、こうして居る内にも、時刻は経ちまするから、それと すぐに、ころり。一名、なめころ、と申します。あはははは。 のことゆえ、長い苦しみは致しとうござりませぬ。なめると、 「犬に試みました。 まことに、 鮮かに、往生仕ります。

> なく、暇乞をするところだけは、今日の内に廻って、 々より後始末ということに致しとう存じまする」

> > 明日早

「由羅には、申さぬがよいぞ。死ぬなどと」

「はい、 御部屋様には、 例の方の始末の話もあり、

ただ今よ

り御伺い申しましょう」

調所は、こういって立ちかけた。

「で、ござりましょうが、手前にとっては、 「笑左、伊勢へ、密告した奴は、斉彬に加担の奴ではないか」 よい死際、

奴でもござりませぬ」

「存じているなら、名を申せ」

「さ――いや、ただ心当りと申すだけ 申しますまい」

調所は、立上った。

「笑左、本当か、真実露見致したのか」

「これは、異なことを」

そうして、笑っているお前が **「譃のように思えてならぬ。 お前が、** 毒を飲んで死ぬなどと、

斉興は、独り言のように呟いた。

「拝顔仕りましてより六十年、夢と思えば夢、長いと思えば、

飽き飽きする程、長うござりました」

かであった。 立ったままで、平然として、人事のように、 朗ら

いた。若侍達は、次々に、 斉彬は、七八人の若侍を前にして、 斎彬の写真を回覧しながら 自分の写真を、 見せて

「筆では、 こうは描けん」

「よく、似ておりますな」

来る方へ、透かしてみたりしていた。 とか――斉彬と、写真とを、見較べてみたり、陽のさして

「異国には、もっと、不思議なものがある。十里も、二十里

人々は、斉彬の笑顔を凝視めたまま黙っていた。も離れていても、便りができる。一刻の間に――」

「電信機、というもので、今、わしは、それを造らしておる。

わしは、異国の事物を、悉くも感心はせんが、よいものを、一電信材、というもので、ペーオしに、ネオを近りしてする。

日本人には、それがない。支那人にもない。例えば、釈迦の益々、よくして行くという点には、及ばんと、思うておる。

に、洋学は、その創始者より、次の代の者、その者よりも、後に、釈迦は出ない。孔子祖述者は、皆孔子以下じゃ。然る

近頃の者と、だんだん、その学文が研究され、究理されて、

いた間に、異国は、遥かに、進歩を遂げてしもうた。それは、ことなく取入れておる。だから、日本が、三百年間鎖国して日進月歩しておる。旧習を墨守せず、よいものは、躊躇する

若侍は、一斉に頷いた。

お前達にも、よく判っているであろう」

「じゃによって、これからの若者は、一生懸命に勉強して、

それを取返さねばならん」

「そうでござります」

一人が、感激した声で云った。

「それを取戻すためには、異国へ行かなくてはならん。行く

には、言葉を学ぶ要もある。わしが、行けるものなら、明日

にも行きたいが――」

斉彬は、こういって、そのまま黙っていた。

「お供が出来ましたらと、心得ます」

ってくれるが、わからん人達が多い。つまらんことに、青筋「その中に行ってもらうこともあろう――お前達は、よく判

を立ててのう」

と、いった時

「名越左源太、御目通りに」

と、襖の外で、

取次がいった。

「 許 す 」

若侍は、膝を寄せて、名越の坐るところをこしらえた。襖

「又、ねだっているの」

際で一礼した名越は、人々を、

微笑で見廻して

斉彬が笑いながら

「少し、お耳に入れたい儀がござりまして、参候仕りました」「例の講釈じゃ」

「よい話か、珍しい話か」

「よい話と心得まするが――ほんの暫時、御人払いを――」

「ふむ―\_\_

斉彬が、何んともいわぬ先に、若い人々は、写真を置いて

と、立上りかけた。「遠慮仕ります」

「待て」

斉彬は止めて、名越に

「一言でいえることか」

「申せます」

「では、その隅へ参れ。一同、そのままでおれ」

斉彬は、こういって、立上った。名越も立上った。人々は、

じっと俯向いていた。二人が、部屋の隅へ行くと、名越が

「密貿易の件にて、調所を、御老中へ訴えましたが―― 斉彬の柔和な眼の中に、鋭い光が閃いた。

申すと、その方が――」

いいえ、益満が

(益満のいった通り、お喜びにならぬわい。敵党の巨魁にし 斉彬は、静かに元のところへ引返してきた。名越は

ても、 調所は、偉物は偉物なのだから――)

と、思って、後方からついて来て、斉彬の横へ座った。斉

彬は、暫く黙っていたが

「益満の在所は?」 と、名越へ振返った。

「手前のところに引止めてござりまする」

召出してくれんか」

「かしこまりましてござりまする」

人々は、何か、相当大きい事件が起っているにちがいない、

と思った。名越と同志の二三人の若者は

「何事でござります」

咽喉まで声の出ているのを我慢していた。名越は一礼

して出てしまった。

の力かと申すと、理化学によってじゃ。理化学と申す学文は、仮 「そこで――この写真だの、電信機などの出来たのは、何ん

えば、水は何から出来ているか、ということを研究する」 「水は、水からではござりませぬか」

誰しもそうとしか思えぬ。然し、紅毛人達は、水の無いと

る。これは、何故であろう?」 ころに、水のたまるのへ眼をつけた。仮えば、煙管の中に、 水がたまる。煙と、火ばかりで、 水の縁が無いのに水ができ

「唾気がたまるのでは――」

'唾ではない」

と、斉彬がいうと、二三人が

「それが、何故に水がたまります」

と、口をそろえた。

「それで、いろいろと実験した結果、水は、水素と、 酸素と

申すものから、成立っているということが判った」

」 は あ

一人の若者は、熱心に斉彬の顔を凝視して、呻くように答

えた。

「酸素と申すものは、 どういう形で」

形は無い」

一色は」

'色も無い」

「臭は」

|臭も無い|

「はて、屁玉より掴みどころのない――」

人々は、笑った。だが、その若者は、真面目な顔で

「どうしてそれが判りましょうか」

「詳しいことは、皆方喜作に聞くがよい。

実

験所もできている」 あれの家 には、

ストンの鋳造機、 斉彬は、人に命じて作らせている大蒸汽船、 電信機などの設計図のことなど思い出して 紡織機械、

(調所は、可哀そうに――)

Ł 軽く胸をしめつけられた。

この風が止まぬのか) (当家は代々、内訌によって、いい家来を失うが、いつまで、

ても、 が判らないのかしらと、 思うと、自分が、自分の命を脅かされ、子供を殺され 無抵抗でいるのに、何うして、自分の近侍に、その気 腹立たしいような、 悲しいような気

「益満休之助、御目通りを」

持になってきた。

襖外で声がした。

「益満、 斉彬は、 調笑の事を、御老中へ訴えたと申すのは、真実か」 もう、平素のように柔かな眼をしていた。

「何んと、考えて、訴えたぞ」

「はい」

「はい」

益満は、 頭を上げて、 正面から斉彬を見た。決心と、才気

との溢れた眼であった。

刀にかけて、申訳は仕りまする」 る。素より数ならぬ軽輩の身、もし誤っておりましょうなら、 「これより申し述べますること、御賢察願わしゅう存じます

益満は、 畳から、手を揚げて、 膝の上へ置いた。

下公然として営むことに相成りましょう。 お上の仰せられますが如く、異国との交易は、そのうち、天 上は、ただ一日も、早く死ぬべきものにござりまする。常々、 「最早、かの老人は、有害無益、 為すべきことを為し終った 調所殿の功績は、

> さ、それこそ、調所殿の一生を完っするものに、ござりまし 訴人したる罪を負うて、自裁なされますなら、その最期の潔 調所殿のために惜しみても、余りありますること。今日、某、 るか、当然、調所殿の負わねばならぬ罪にござりまする。 本人の一人として、天より、罰を下されるか、人の手にかか 無くして殺すことは、致しませぬが、この功績と共に、 次第。而して、その時こそ、調所殿の死すべき好機にござり できましたよし。一介の茶坊主より立身して、この功業を為 お由羅方に通謀して、赦すまじき悪逆を企てたる罪、その張 しても、願いまするのは当然のこと。この島津の功臣を、罪 ましょう。この上の長命も、人の情として、又、某と致しま し遂げました上、御家老の列に入り、功成り、名を遂げたる ただこの一点。承りますると、最早三百万両の非常準備金も、 よう。さて――」 益満は、 、お為方の誰かの手にかかり、斬殺でもされましょうなら、 赤い頬をして、米噛に筋を立てていた。斉彬は、

眼を閉じて、一言も云わなかった。その外の人々は、俯向い 言葉をつづけた。 たり、腕を組んだり、益満の顔を見たりしていた。 益満は、

233

ござりまする。第三に、 失墜しておりまする。又、 某、思いまするに、幕府は最早、諸大名に対し、その勢力を 幕府の政策を窺うのは、僭上至極の沙汰に存ぜられまするが、 すか、何うか、 所一人の自裁にて、納まりますや、否や、老中が、差赦しま 「ただ一つ、訴状の筋、禁を犯しましたることが、 軽輩、某の如き身分として、御老中の心中、 お上とはただならぬ交りの仲にござ 御老中阿部殿は、 穏和至極の人に 無事、

家は、 御老中へ拙者より呈出しおる物は、悉く調所殿が咎めを負う ざりまする。第七に、禁を破ることとはいえ、幕府を危くす 致しておりまする。第六に、 りまする。第四に、禁を犯して、密貿易を行っておりまする ることとは異っておりまする。 外にもござりまする。 密貿易は、国益になることにご 第五に、それを、従来より 第八に、密貿易の証 拠として

べき性質のもので、当家へお咎めがござりましょうなら、

斉彬は、

俯向

いて、

黙然としている人々へ、穏か

にこうい

もし、 りまする。 当家と、幕府とは縁者にござりまする。第十に、もし、御当 れだけの思慮を致しまして、 あり、二君あっては、 禁じるようとの仰せを、 ござりまする。常々、 て、この腹一つ切れば、よろしきようにも企んで置きまして 家へ咎めのかかることがあれば、 にても立派に 先ず、身を修め、 過っておりましょうなら、 お耳に逆いましたる段、お詫び申上げ奉りまする」 いい終ると、平伏した。 申し開きの立つものにござりまする。 家を修めて、困難に当るのが順序、某こ お上より、天下大難の時、 一致して、外敵に当り得ましょうか? 蒙ってござりますが、 調所殿を訴え出でました次第、 覚悟は、とくより致してお 証拠書類は、 人々は、ほっとして、身 家中に、 某の謀書とし 家中の 。第九に、 両党 争を

罪をのみ憎んで、 しのために、 「然し、人の上に立つ者として、そうも行かぬ。 「よく思慮した。お前として、天晴れな思案じゃ」 片手で、 調賞の、 人を憎んではおらぬかも知れぬが―― 火鉢の縁 人を憎み、 を撫でながら 罪を憎んでいる。 お前は、 或いは、

わ

わし

体を、

某 な、 というかもしれぬ。そして、調笑も、その張本人の一人だと 頼もしいものじゃ、 ない、救わずとも、 は、お前が頼もしいと同じように、調笑も頼もしい。それは しの子は、四人とも死んだ。 いうかもしれぬ」 調笑が、当家の財政破綻を救ったから、 と思うている。いろいろの噂がある。 わしの性 。お前達にいわせると、殺された、 ――とでも申すか、 頼もしいのでは 家来は、

満、 調笑等の企てよりも、 ある。これは、子として、確かに、父に反く者じゃ。或いは、 来る。そして、 殺した者を憎む情も、持っておらぬことは無い。それは、 が||」 は二途に出ているように、世間は感じておるかもしれぬ。 父、斉興がおわす。今、お前の申した如く、政道筋が、 わしも、 かに、幕府などは、父を差置いて、万事、わしと談合をしに いつつ、自分も、じっと、眼を膝の上へ落した。 「いうかも知れぬでなく、それが、真実かもしれぬ。そして、 人間、自然の情じゃ。然し― 、凡夫である以上、子を殺されては、嘆かわしいし、 わしは、それにいろいろと申し述べることも 罪としては、 一ここをよく聞いてくれ。 深いものかもしれぬ。 だ 確

えられた職責で一 うな気がする。そして、 無論、わしをも、 人心の帰趨、 「だがー ―天下の形勢――つまり、幕府の事情、 動揺を見る時、わしは、父も、子も、 生犠として、この日本を救わねばならぬよ 少し、 ただ、それだけが、 いうのは、 おかしいが、今、 わしの天から与 異国の事情、 家来も、 日本

暫く、言葉を切った。

の手で外敵に当ろうとは思わぬし、それは、出来ないことじにも、家は修まっていぬ。然し、わしは、家を修めて、わし家の中さえ修められずに、外敵に当りうるかと申した。如何の外にない――と、いう自信も、持っている。益満は、只今、において、そういうことを考えているものは、わしら二三人

や。

それを行うには、わしの考えていることを、日本中が、

る。子は可愛いぞ、益満、然し、天下のために、子を斬る時て、わしの思うたことを、微かながら、実現しようとしていの、目を醒ましてくれればよい。日夜、わしは、それを念じつまり、わしが時代の生犠となって、それが、人民の、当路の輿論となれば、それでいいと思うている。実行とは別じゃ。一致して行ってくれることで、わしは、わしの意見が、天下

ŧ がう。 しは、 しゅうもなる。 れを知っていてくれる者は、僅かに二三人じゃ。時々は、 を縛っている。それと闘いつつ、己の、感情と闘いつつ、 人間にはあるぞ。まして、 日夜ただ、そのことのみに突進しておる。そして、 いろいろの、 わしとて、子と共に遊び、父のよい機嫌を見、 拙らぬ、 小さい、 お前達、 煩わしいことが、 軽輩の身軽さとはち わ そ わ

まま、黙っていた。上へ落ちたのを、拭こうとはしなかった。益満は、俯向い斉彬は、微笑していたが、座の一人は、涙を流して、膝

行っておろう。

益満、

判るか、

わしの心が

前途を思うと、そうはしておれぬ。

が惜しい。

身が軽かったなら、わしは、

異国へでも

の

奥と楽しく語らう味を、

知らぬものではない。

こうしている一

刻たりと、日本の

「お察し申しております」

- 益満の声も、少し顫えていた。

「よって――よって、奸物共が、憎うて」

しの心をよく知っていてくれるし、わしの志をも継いでくれしに万一のことがあれば、久光が立つであろう。久光は、わ「お前としては――然し、わしには、憎む暇がない。又、わ

「久光殿と、殿と、較べ物になりませぬ」

るであろう」

益満は、鋭くいった。

「では、わしに万一の事があれば、誰が志を継ぐ? お前が、

「万一のことなどと――よって、奸物共を島津の当主になれるか?」

ある。 判っておらぬらしい。つまり、わしの仕事を助けてく だから、 よる処分もあろう。わしも、 「万一とは、兇刃に倒れることだけではない。 意見の相違による刺客もあろう。 いつも、 申すが、 お身達には、 わしの身辺も、 判っておるようで、 幕府の方針 多事な 薬品の爆発も のじゃ。 の

ても、 救い、 り、 を立てて、 時では、 と、天下のために、生犠となる所存の下に、この国 れも重要なことにはちがいないが、 しの仕事に 福利を計ること。僅か、 の二人、三人の死ぬことに、 ないではないか。 問題 幕府 せぬ 変りはない。 のは、 には の進歩的方針の一助にしようと、考えている 開国するか、 それゆえじゃ。 幕府は、 わしは、幾度、 百万石足らずの家督を争った せぬかの一つではない。 もっと、 しても、 腹を立てたりしておる 保守家ゆえ、 幕府にすすめられ 国民の根本を富 せんでも、 の危機を れるこ

どん作るほかに、天産物に乏しいこの国の福利を計る方法は 造にも、着手している。又、電信と申す、人智では考えられ ぬものにも、 ます、産業の発達法も、わしの外には考えている人がない。 しは、 紡織機械に工夫を凝らしているし、 手を着けておるが、こういう理化学品を、 シリンドル どん の

無い。然し、世の中は、大船を造ることさえ禁じられている。

いつになったら、わしの意見が、輿論となり、実行となるか?

わ とではあるまいか」 はあるまい 有難い志じゃ。然し、 ないか。お前の、只今、申したことは、わしには、よく判る。 しとは、考えていることが、根本的にちがっているのでは それを考えると、 か ? わしの仕事には、 眠る暇も惜しい。 わしには、何んの役にも立たぬことで 何んの助けにもならぬこ のう、 益満、 お前と、

如何致しますれば、 益満は、 俯向いたまま、答えなかった。一人が お助けできましょうか」

もよい 思うているくらいじゃ。又、語学を学んで、よい書物を訳し とじゃ」 てくれるのもよいであろう。又、機械の取扱いに熟練するの て来るのもよいであろう。わしは、 「それは、 何か、 いろいろとある。 有益なものを発明してくれるのも嬉し 異国へ渡って、異国の文物を見 わし自身でも行きたい کر

ました」

には、 時に、 あった。自分達の近づけない、えらい主君であると思うと同 かりはするが、遠いところに灯っている大きい燭光のようで 座の人々は、 誰も、 余りに、 何も、 その距りがありすぎて、斉彬のこうした意見 未だ、黙っていた。 いうことができなかった。 斉彬の言葉は、 よく ゎ

「某の処置は?」

益満 がいった。

「お前

は、

お前

のしたい通りにするがよい。

とめはせぬ。

然

と二人で、 し、うれしいことでもない。 仕事をしたなら、 やりすぎが無うてよいがの」 お前は、 国許におる西郷吉之助

斉彬は、然し、頼もしそうに、

益満を眺めていた。

「遠路、 お疲れなされ たで、 ありましょう」

厚化粧をしていた。 お由羅は、古代紫の綸子の被布を被て、 調所は 齢 に似ぬ大奥風の

疲れを覚えるようにもなりましたが、 「手前は、 御覧の如く、齢をとって皺くちゃになり、 お方様は、だんだん若 従って、

くおなりになりますな」 ずんと、

たからのう」 「お前様のお蔭で、近頃、 くったくが無くなり ) まし

うになりましたし、又、 「結構な至りにござります。手前は、 生きているの ŧ 旅にも疲れを感じるよ 物憂くなって参り

眼を注いでい 調所は、こうい つ て、 お由羅 の側にい る深雪に、 じっと、

「その御女中は お由羅 ボ 近頃、 召抱えになりましたかな」

あれかえ」

眼を、 深雪の方へ顔を向けた。深雪は、 ちらっと見て、 すぐ、 俯向いた。 お由羅と、 胸が波立った。 調所との 調所

が

- 236

「お前は、 仙波の娘ではないか」

深雪は、 調所の言葉にはっとして、耳朶を赤くしたが

「いいえ」

お由羅が、鋭く、深雪を見た。

た仙波と申す者の娘が、大阪へ、わしを手頼って参ったが ゙゚゙ゟがうか 益満休之助と、同じ長屋の隣同士に住んでい

-瓜二つじゃで」

お由羅が、

「仙波の娘が、お前様を、手頼って?」

「母子二人で――」

「そして、何う致しましたえ」

「手前、その娘を、浜村孫兵衛の倅へ、縁づけるよう申し残

しておきましたが、如何致しましたか」

「仙波は、牧様を討とうとして、殺された、八郎太とか申す

者ではござりませぬか」

「ま、その話は後にして、少々、 内密のことを――」

お由羅は、女達に

次へ退りゃ」

ていながらも、深雪は、 た父が殺されたということが、 いう不安よりも、南玉が、半分疑いながら知らして来てくれ と、命じた。女中達が、立って行った。深雪は、立ったの 歩いたのも覚えなかった。 胸をくだかれた。 確実になったので、覚悟をし 見破られたのではないか、と

(この間見た夢のように――)

慮のことが起っているか、知れぬ気がしてきた。深雪は と、思うと、父の外、兄にも、母にも、 姉にも、何んな不

(お由羅を刺せ)

地の悪い老女からかばってくれ、助けてくれ、古参よりも可 愛がってくれるお由羅を、何うしても刺す気にはなれなかっ と、父からいいつけられたが、 何も知らずに、自分を、

(でも、父が、殺された上は)

に、心の底から、憤りを、これらの人々に感じることが出来 興でも、調所でも、 何故あんなに、 そう思って、萎えてくる心を励ましてみても、父が、兄が、 敵党の人々を憎むのか?――お由羅でも、 いい人だのに――と、深雪は、 男のよう

なかった。 (憎め、殺せ、刺せ、悪人だから)

いくら

考えようも、 父が殺され、お家が危い以上、自分のそうした感じを捨てて、 れ、可愛がってくれる人を、殺す気にはなれなかった。然し、 命じられた通りに刺し殺すより外に、小娘の深雪としては、 と、いわれ、悪人だと思ってみても、毎日やさしくしてく しようもなかった。

女中達は、次の間で、二人のところへ持って行くべき、茶

と、菓子とを備えていた。 深雪は

と、思った。

(自分さえ死ぬつもりなら――)

(死んだ方がいい)

とも、思った。そして

·妾が持って参りましょう」

と、菓子台へ手をかけた。

- 237

二人とも、引締った顔をしていた。梅野が、茶を調所へ差出しく開けると、お由羅と調所とが、ちらっと、こっちを見た。その後方からつづいた。梅野の前へ行く女中が、襖をつつましながら、少し、顔色を、蒼白めさせて、菓子台をもって、梅野が、茶をもって先に立った。深雪は、心を、手を顫わ

「深雪、話がある。梅野は、下りゃ」

し、深雪が、菓子を置くと

懐剣の紐の解いてあるのを、見られまいとした。と、お由羅がいった。深雪は、俯向いて手をついて、懐の

「お前、隠しているのではあるまいのう」

はい

いとしそうな顔を信用して召上げたが、まさか、仙波の娘で「小藤次も、あのお医者も、信用のできぬ者じゃが、お前の、

はあるまいのう」

という事も出来なかった。じっと、俯向いていた。調所が情の深い、お由羅を欺くこともできなかったが、仙波の娘だ深雪は、心臓をしめつけられるように、苦しくなってきた。

に見倣って、若者好き――所詮は、暫くすれば軽輩、紙漉武娘としたなら見上げたもの――それに、久光公が、又斉彬公を、これ軽輩上り――。この女の如きも、又、もし、仙波の碌々人によって事を為すの徒ばかり、手前も、又、お部屋様ませぬぞ。将曹殿、平殿、豊後殿――こう指を折ってくると、ませぬぞ。将曹殿、平殿、豊後殿――こう指を折ってくると、判りでよいか、喜んでよいか――つくづく思案致しますと、判りでよいか、軽輩には、却って見上げた人物がいる。その輩が、「いや、軽輩には、却って見上げた人物がいる。その輩が、

士の天下に成りましょうか。今度の訴状の如き、その用意の

もあった。

その上に、密貿易は、斉彬公の仰せられる如く、そのうち、なっても、この軽輩の手より、経世上手が出て参りましょう。じましたが、いろいろと、案じまするに、手前が、よし亡くませぬ。今、少々、生き延びて、御小遣いを差上げようと存ませぬ。家老、家老格が十人よっても、出る智慧ではござり周到さ。御家を傷つけずと、老生のみを槍玉に挙げようとす

にも手前、死んでよい時節となりました」 天下公然としての交易になりましょうが――安心して、明日

頷いたが、調所には、返事をしないで、深雪に、鋭く調所は、一息に、ここまで喋って、茶をのんだ。お由羅は、

「何故、返答せぬ」

「はい」

深雪は、頭の中が、くらくらとしてきた。腋の下にも、「仙波の娘か、娘でないか――」

「娘でござります」にも、汗が滲んできた。そして

と、答えると、身体も、心も、冷たくなったような気がし

た。手も、膝も顫えた。

公に上ったえ?」 「そうかい、それで、何んのために、名を偽ってまで、御奉

深雪は

とも、思ったが、そう思っている心の底には(三人きりで、調所は老人だし、この間に突いてかかろうか)

(済みません、許して下さい)

こ、お由羅の前へ身体を投げ出して、泣きたいような気持

「深雪、何をするために、お上りだったい」

お由羅の言葉が、鋭くなってきた。

「返事が、できませぬか」

ほかはない)(お父上も、殺されなされた――妾も、こうなった上は死ぬ針のついた手で、締めつけてくるように感じる、声であった。いつもの、やさしいお由羅でなく、深雪の身体も、心も、

絶望的な、つきつめた心が湧いて来た。

「責めても、云わせますぞ」

た。 た、深雪は、懐へ手を入れた。そして、立上っ

「御免っ」

と、叫んだ。

深雪の手には、細身の、五寸程の、懐剣が、握られていた。

「あっ」お由羅が

憐みを乞う心との、混じたような眼で、深雪を見た。前に突き出して、深雪の刃を、防ぐようにしながら、恐怖と、と、叫んで、よろめきながら、立上った。そして、両手を、

一お許し下されませ」

乞うている色とを、感じると共に、声を上げて、泣きたいよお由羅の眼の中の、恐ろしがっている表情と、自分に憐みを進むと共に、お由羅は、後方の床の間へ逃げ上った。深雪は、平高く叫んだ。そして、短刀を突き出して、一足

うな気持になってきた。

──可うしたら──) の無い ──許して下さいまし、妾も、何うしていいのか? お殺し申すような、大それた心はありませぬが、これも仕方いじらしい眼で、憐みを乞うて ──妾は、決して、決して、せん。勿体無い ──妾風情に、あんなに恐れて、あんなに、(許して下さいまし。妾も、お後からお供致します。済みま

――何うしたら――)

「こうたぎの」もあり、可哀そうなようでもあり――突いてかかれなかった。った。何故かしら、勿体ないようでもあり、気の毒のようで出して一足進んだきり、お由羅を見つめて、立ったままであ出して一足進んだきり、お由羅を見つめて、立ったままであるんなことが、きらきらと、頭の中に閃いた。短刀を突き

「たわけがっ」

調所は、叫んで、立上った。

「誰か――誰かっ、早く」

と、お由羅が、叫んだ。お由羅が、こう叫ぶと、同時に、

屋様に似ず――)

(見苦しいっ

何んという、

周章てた振舞、

いつものお部

深雪は

立って来た。と、感じた。そして、そう、感じると、何故かしら、腹が

(町人上りの――)

右手を掴んだ。そしてげて一足迫った。その刹那、調所が立上って来て、深雪の、と、微かに、憎らしくもなってきた。そして、短刀を振上

「汝せっ」

二三人の女中が、襖から、中をのぞくとと、叫んで、短刀を持った手を、力任せに、締めつけた時、

あっ」

見ると、その瞬間、懐剣を、 よろめいた。 Ł 叫 んで、駈け込んで来た。深雪は、ちらっと、それを 眼がすっかり、 自分の胸へ突き刺した。そして、 上ずってしまった。顔色は、灰

のと、 抱きすくめるのと、 二三人の女中が、蒼白になりながらも、深雪を、後方から 同時であった。 調 所が、 深雪の手から、 懐剣をもぎとる

色であった。

て、 次の間には、高い声と、 深雪を取巻いたり、 お由羅 それから、 幾人も幾人も入って来

御無事で」

とか

゙如何なされました」

とか、口早に、 騒がしく喋った。 調所が

「医者を呼んで、 手当をしてやれ。 一同、出い。これしきに、

何を騒ぐ一

Ł 怒鳴って、 未だ、 何 か、 声高に云いつつ、 深雪を、 運

静かにせんか」

んで行く女中達へ

と、叱りつけた。

ながら、 お由羅は、蒼白な顔に、 脇息を引寄せて、 元の座へ坐った。 固い微笑をして、 着物をつくろい

大外れた――」

いう呼吸が、喘んでいた。

「お方を斬れと、命じられたのでござりましょう。 然し――」

|目をかけてやっておるに---

読むのに忙がしかったばかりでござろうがな。 ずに、狂人にして、宿へ下げてしまいなされ。 二人、罪にしたところで、手柄にはなりませぬ。 かけられて、親からは、何か申しつけられて、 「だから、斬るに、斬られず。察しておやりなされ。あの女 ―お方など、あの娘盛りには、 地をかえて、 あの女になったとして! 四国町の小町娘で、付文を きつい処分をせ 小女の一人、 十七や、 あはははは」 平生慈悲を 八で

「許してやりなされ。よい、功徳になりまする」

お由羅も、

笑った。

「許しましょう」

有難うござりました」 「有難うござりました。 お由羅は、 調所も、 老いてしまったものだ、 齢寄りの手前として、 それが何より、 と思った。

書いた位牌が、中央にあった。 箔の光る先々代、 いた。白い菊の供え花、 仏壇の中の黄金仏は、つつましく、燈明の光に、微笑ん 島津重豪の「 餅、梨、米-「大信院殿栄翁如証大居士」と ―それから、 新しい金 で

その机と、 襴の表装をした経巻一巻と、遺書を包んだ袱紗とが、置かれ、 経机が置いてあった。そして、その上には、紺紙金泥に、 の刀掛けに、 金梨地の六曲屛風で、 枕との間には、 掛かっていた。 死の床を囲って、枕元には、 豊後国行平作の、 大脇差が、 朱塗の

壇の前で、 調所は、 白麻の袷を重ね、 黙祷していたが、 手を延して、 白縮緬の帯をしめて、 経机の下から、

の高蒔絵をした印籠を取出した。そして

「お流れ頂戴仕ります」

が、そのいじっている一粒を、静かに、口の中へ入れた。 た。それから、指の先で、摘み上げて、暫く、いじっていた めたり――そして、微笑して、口のあたりへ、掌をもってき 屋の中を、静かに、見廻したり、俯向いたり、又、丸薬を眺 籠を開けると、黒い、小さい丸薬が、 Ł 調所は、それを、掌の上へ明けて、 小声でいって、仏壇に供えてあった水を取下した。印 底の方に、七八粒あっ 暫く眺めていた。 部

次の間には、茶釜が、微かに鳴っていた。 して、両手を、膝の上に置いて、じっとしていた。 かしてから、ちょっと、眉を寄せて、水を、一口飲んだ。そ 人々は、寝静まっているらしく、何んの物音もしなかった。 皺の多い、 筋肉のたるんだ、歯の少し抜けた脣を、暫く動

の無いのにも、 であったし、もう、これから後に、自分が出ようとする仕事 調所は、 、自分のして来た努力の完成したことに、十分満足 十分、安心ができた。

めてから、もう一度、 腹の中が、少し熱くなったようであった。調所は、脣を嘗 おあとを、 仏壇へ御辞儀した。そして お慕い申しまする」

じように、頭を下げて と、いった。それから、 膝を斉興の居間の方へ向けて、同

泰にござりまする。 御帰国、遊ばしませ。これにて、 御寿命の後は、冥途にて、又、 御家は、 御奉公を 安

そういってから、 暫く、言葉を切っていたが 勤めまする」

の 段、 まに、御消費下されますよう。三年越しにて参りましたる江 戸の形勢は、仰せの如く、開けて参っておりまする。御賢明 の世にて、お詫び申し上げまする。老人の亡き後は、 「斉彬公にも、つつがなく、在しますよう。御幼君には、あ 当家のために、祝着至極、老人、思い残すところ、一 意のま

笑していた。遠くで、時計が、三つ鳴った。 を、暫く、拭きもしないで、じっと、 調所は、脣に微笑を浮べて、眼に、涙をためていた。それ 襖を凝視めたまま、

つも、ござりませぬ」

綿の上蒲団であった。その上へ、仰向きになって、眼を閉じ へ坐った。白い木綿の下蒲団の上に、甲斐絹の表をつけた木だ。そして、仏壇と、斉興の方とへ、御辞儀をして、床の上 て、 た。幾度か枕を直してから、身動きもしなくなった。 調所は、 仰向いた。掌が空になると、 膝の上に置いている毒薬の入った掌を、口へ当て 水を取上げて、 一息に飲ん

(楽に死ねると、いっていたが――) だんだん、胃が熱くなって、呼吸が、せわしくなり出した。

感じるくらいに、呼吸が烈しく、肩が、自然に動き出した。 そして、脈へ手を当てると、脈、搏は、急であった。自分でも、 調所は、熱さを増して来る胃の腑を、じっと、眺めていた。

倦くて、堪らないから、揉みたい、と思ったが、もう、手を 然し、胃は、それ以上に、熱くなって来なかった。 身体中が、少しずつ、倦くなってきた。 厭であった。 関節が、

(いよいよ毒が、 廻ってきた。この位で死ねたら―― 動かすのも、

いたし、呼吸が早いが、低くなっていた。そして、だんだん の感じがなくなって、 と、思った。倦さが、 いつの間にか、 少しずつ薄らぐと、手の先、足の先 胃は、 熱くなくなって

(深雪を、赦してやれと、いったが、 調所は、 少し、口を開けて、 静かに、呼吸をしていた。 赦したかしら?)

眠さが、

拡がってきた。

(鬱金、 十二貫目

にあったりするのを見た。 調所は、袋に入れた、 鬱金の包が、近くにあったり、 遠 く

女は 斉彬公の御味方になれるか? (将曹は、奸物じゃ。然し、斉興公の御引立を蒙ったわしが、 益満か――御金蔵に、火がついた?) 奸物と申しても、 綱手と申す

調所は、脣に、 微笑をのせて、 少し、口を動かした。

や、死んで行くのじゃ。ちがう、今死んでは、島津の家を、 (わしは、何を、 考えていたか? 夢をみたのか?-いい

何うする?-— 島津· ――島津というのは――)

て行った。二三度、微かに、蒲団が、動いた。 白眼を開けて、薄く、脣を開いたまま、だんだん冷たくなっ 調所 の、 眼の下に、脣に、薄い関取りが出てきた。 細く、

にも、 人声は低く、物音は高く。それは、邸内のみでなく、 四つの時計が鳴って暫くすると、邸の中が騒がしくなった。 馬の嘶き、 馬蹄の音、話声がしていた。

長い廊下の端から、 調所の部屋へ、近づく足音がして

その度に、

Ł

いう声がした。 お願い仕りまする」

> 暫く、 そういったまま、 黙っていたが、返事が無いので、

立去った。

物音も、 人声も、 だんだん高くなってきた。そして、 小走

りに、走って来る足音がして

「調所殿

と、叫んだ。返事が無かった。

「御免下され」

襖が開いた。 仏壇の明りは、 微かになって、 またたいてい

「御出立でござりまするが――」

侍は、 臥っている調所に、こう声をかけて、 じっと、

眺めていたが

「調所殿

を見た。胸へ手を差込んだ。そして、立上ると、廊下を、 滑るように、近づいて、額へ手を当てた。素早く、経机の上 と、叫んだ。そして、さっと、顔色を変えて、膝を立てて、 け

たたましく走って行った。 暫くすると、忙がしく、大勢の足音がして来た。 参覲交代

らしていたが、 のために、帰国する旅支度の斉興が、躓くように、 いで、小走りに走って来た。手燭を持った若侍が、足許を照 いで来た。眼を光らせて、 斉興の足とすぐ、 唇を顫わせて、危い足取りを、急 ぶっつかりそうになって、 廊下を急

- 242 -

「綱手」

百城は、床柱に凭れて、膝を組みながら

て、思うままには、逢えぬ。それで、ここで、ゆっくり、話「大阪へ戻っては――存じておろうが、取締りが、厳しゅう

をしたいが――御国許で、同志の人々は?」

外には、高瀬川が、音もなく、流れていた。綱手は、

女に、云いつけて買わした、京白粉、京紅で、濃い化粧をし

.

「母から、聞いておりますには――」

ちらっと、百城の顔を見た。そして

(男らしい――やさしい――)

と、思って、眼の底に残っている、百城の顔を楽しみつつ、

俯向いた。

「それを聞かしてくれぬか? 同志の人々も、存ぜずには、

手段も、廻らせぬ」

「でも、母は、女のことゆえ――」

眼に、十分の愛を――媚を現して、下から見上げて

「しかと、しましたことは――」

重だった人の名さえ聞いておけばよい」「いいや、母上は、男優りであるし、御存じであろう

「では、心憶えのままに――」

綱手は、首をかしげた。

. 少し待て、硯を——」

百城は、床の間の硯をとった。

「水が、ござりましょうか」

硯の中は、乾いていた。百城が、手を叩こうとするのを

「これを――」

と、化粧した使い残りの水を、鉢から、指の先で、硯へ落

して

「いいえ、妾が――」

百城が、墨をとったのを見て、硯を、自分の方へ引いた。

百城は、微笑して

宿の

「手が、汚れるに」

綱手は、百城の差出した墨の端を、指ではさんでいたが

「まあ」

と、低く叫んで、やさしく睨みつつ、墨を引張った。そし

て

「お手々が、汚れます」

二人は、墨をもったまま、一寸、顔を見合せたが、百城が

「お互に、汚れた」

綱手は、真赤になって俯向いた。

「綱手」

百城は、左手を延して、綱手の手首を、握った。

「今夜は?」

略

綱手は、

首を斜めにして、

襟元の美しさを、

見せながら、

黙っていた。

「戻るか――それとも―

·どちらなりと——」

243 -

御意のままに 綱手は、 百城は、 小さい声で 手と墨と両方を放して 弟御 屋久島奉行 村野伝之丞 吉井七郎右衛門

懐中から紙を 掛見習 島津清太夫 山口及右衛門 吉井七之丞

広敷横目付 宗門方書役 兵具方目付 野村喜八郎 肱岡五郎太 土持岱助

取出して、 「未だ、

筆を、硯へ入れた。

綱手は、

黙って、

墨を摺り出した。

百城は、

·さて、同志の面々は?」

郡見廻 地方検見 松元一左衛門 山内作二郎(山内八二祖父)

製薬掛兼庭方 琉球館掛 放書役 高木市助 八田喜左衛門(八田知紀) 大久保次右衛門 (大久保利通の父)

Ł

云って、硯を静かに、

百城の前へ押しやった。 濃くなりますように」

では

貴下様の手で 筆を置いて、 まあ

綱手は、

眼を見張りつつ

そなたの、

情のように――

薄う、ござります」

関勇助 (関広国

それから―― 諏訪神社宮司 軽輩の方々では 井上出雲守

百城は、 書き終って、じっと、 眼を通していたが

成る程、 いや、 忝ない」

そういって、頷いた眼の色には、 決心が、 十分に現れ こい

「おお、 兄と、 「はい、 百城は、 聞き遅れたが、 明日にも、 緒に、 紙を懐へ仕舞った。 お力添えを願いまする」 下山して、 小太郎殿は? と申しておりました」 よい 方かの」

- 244 -

百城 町奉行兼物頭、 百城は、 従、 片膝を立てて、 紙

近藤隆左衛門か」

めた。

では、

濃くしようか、

濃くなるかの」

綱手の肩を、

引き寄せた。

軽輩は、

よい

綱手は、俯向いて、

少し、

膝を百城から反向けた。

「 は い

摺ってはくれぬのか

―怒ったか?」

御同役 それから?」 の、 田田

郎右衛門様

船奉行の高崎五郎右衛門 島津壱岐 様 (高崎正風の父)

同

赤山靱負

二階堂主計

「刀が、

使えるかな」

十分と申しておりました」「脚の疵が、癒りきらず、少し、危うござりますが、腕は、

「流儀は?」

「鏡心明智流でござります」

「桃井春蔵の?」

「一刀流も、習いましたそうで――」

るが」
「目録か、免許か、その上か。なかなか、よく使えると見え

「脚は? 跛を引くくらいに?」

゙はい、少しばかり」

「右か、左か」

一さあ」

「右でござりましたかしる」(細手は、右を見たり、左を見たり、百城の脚を見たりして)

「右でござりましたかしら」

「右と、左によって、懸り方がちがってくるが――」

ていた。かっって来るのに対して、何う外して、どこを攻めるかを考えかって来るのに対して、何う外して、どこを攻めるかを考え「百城は、小太郎の太刀筋と、右の跛を引きながら、斬りか

「何が、後悔?」

「何を、

お考え?

後悔なさいましたのでは、ござりませぬ

「妾とのことを――」

「後悔か――」

百城は、じっと、綱手を見た。そして「後惟か」」

切れば救われる」それでよい。なしたいことに、悪はない。悪と感じても、押程のことに後悔するような悪はない。なしたいことをなす。「綱手、如何なることがあろうと、後悔するな。人間の致す

綱手は、黙っていた。

「綱手と申す女は、その方か?」

「F1、早」、2、兵力にヨー2ぎ、そのに2して、火鉢へ、片肱をついて、片手に、火箸をいじりながら越しに、綱手を見て、老人らしい、人のいい笑顔をした。そ善調所に代った新任の大阪の留守居役、中島兵太夫が、眼鏡

綱手は、心臓を、握りつぶされたように感じた。いつか、「昨日、堺町人の、浜村と申すのが、参っての――」

じてくれた調所の親切が、憎く、悲しくなって来た。もう、先方へ、通じてあったか、と思うと、自分の行末を案なく、あんなに軽い戯談のような口振で、話しておきながら、 245調所のいった、浜村孫兵衛との縁談が、その場かぎりの話で -

あはははは、 ろうし、と、申して、 られたえらい方じゃで、この志を無にしてはならぬし-を起したことから、小は、お前達の身の上までも、案じてお おるが 何も存ぜぬから、奥役に聞くと、確かに、使したと、申して したくなるものじゃ」 いましょうかと、浜村め、申して参った。わしは、来て早々、 調所殿より、 ――存じてもおろう、 お前の母も、 怒るな、 お話のあった、お前との、 国へ戻って、 美しい女を見ると、 このわしが、慰めても、聞くまいし、 調所殿の急死 お前一 人では、淋しくもあ 戯談の一つも、 ――大は、御当家 . 如何でござ

綱手は、蒼くなって、俯向いていた。 兵太夫は、 人の上に立つ者として、 返事が、できなかっ 女中の身の上の始末

などは、意のままになると

取計らってとらせる。浜村の倅は、なかなか、おっとりとし であろう。支度、その外、万端のことは、浜村と、わしとで のつもりをして、支度をするがよい。母も、 「それで、来月早々が、よかろう、と返事しておいたが、そ よい男じゃ。この辺の、隼人と、柄がちがう。 聞いたら、 心得たか」

綱手は、頷いておくより外に、方法がなかった。

の若い者の中では って悪うない。国の女子にしては、 「嬉しいであろう、はははは、 ―のう、袋持」 娘時分と申すものは、 珍しく美しいが、 当屋敷 見てお

兵太夫は、こういって、 片隅の机で、 何か書物をしている、

袋持へ、話しかけた。

「はい」

牧の倅と、 よい夫婦だがのう」

「百城氏とで、ござりまするか」

綱手の、 身体中の、 血管が、凍えて、止まってしまった。

—百城)

、牧の倅

·女共が時々、

噂しておるげじゃが、

調所殿の、

二世さんで

「いえ、 決して左様な」

もあったかな」

袋持は、 気の無さそうに答えて、机 向 った。

. 牧の倅を存じておろう。 百城月丸」

綱手の、 眼は異様に光って、 脣が、 顫えていた。

百城様は 牧様とは、 あの、 牧 仲太郎様の

> 兵太夫は、眉をしかめて、 じっと綱手を見ていたが、

「何んとした」 只事でない綱手の顔を、

如何したのじゃ。 大層、 顫えておるではないか」

じっと見て

「何処ぞ、悪いのかの」

綱手は、

蒼白になって、

膝も、

手も、

口も顫わせていた。

じっと、 綱手は、 綱手を睨みつけるような眼で眺めていた。 黙って、首を振った。袋持が、振向いた。 そして、

冷たくて、 ったし、 綱手の頭には、 何処にいるのかも、 眼は、 熱い火が、狂い廻っていた。しかし、 空虚であった。 判断できなかった。 何を見ているの か判らなか 額は

(月丸様は、 牧様の御息子――)

そんなことが、世の中にあろうとは思えなかった。

(あのやさしい月丸様が、父を殺した敵の倅?――)

が、そんな月丸とは、思えなかった。 月丸の言葉を、 眼を、振舞を、 いろいろに想い出してみた

**(**譃 何かの、 間違いであろう)

綱手は、 真暗な、 地獄の中に喘ぎながら

(ちがいます、 ちがいます)

と、絶叫した。その途端、その闇の、底の中に、毒紅 のよ

うな火が、 火の、炎々としているのは、 ちらとした。綱手は 恐怖と、 よく見えていた。 脅えとに、眼を閉 それ

(月丸様が、 同志の名を聞いた 疑えば 妾を、 欺して

は

と、語っていた。綱手は、両手で、眼を閉じて

(そんなことはない)

と、悲鳴を上げたが、毒の火は、冷笑するように、燃え上

悶えている自分の姿が、 っていた。いつの間にか、赤裸にされて、 見えてきた。 地の底の闇の中に、

「綱手殿、 何とした」

耳許で、袋持の声がした。

「はい」

いつの間にか、自分でも、判らないうちに、 綱手は、袖を、

顔へ当てて、泣き伏していた。

「困った女だのう」

Ł いっている兵太夫の声が、聞えた。

「袋持、何か、 訳があろうが、 聞いてやるがよい」

「はっー 綱手殿、次へござれ」

袋持が、肩へ、手をかけた。

「参ります――ふと、いろいろの事を、 思い出しまして、御

眼を汚し、申訳、ござりませぬ」

綱手は、手をついた。

「何々、正気づけばよい。少し、 血の道の気かの。はははは。

嫁入すると癒る。心配致すな」

綱手は、立上った。

(死ぬ外はない)

と、思った。だが、すぐ

(一目、月丸様に、逢って・ ――真偽を、ただして)

綱手は、袋持の後方から、廊下へ出ると共に

7

(月丸様を殺して、死ぬ―― いいや、あの方は殺せぬ、 自 分

> りの恋ではない) お息子であっても、 一人で――いいや、それよりも、あの方が、よし、牧様の、 ― いやいや、牧様のお息子であっても、 そうでないと、 仰しゃって下さったなら あの方の恋は、 偽

ていた。底には、醜悪な臭の火が燃えていた。 綱手は、 もがいた。真暗な中に、宙ぶらりになって、 悶え

(あっ――)

綱手は、全身で、悲鳴を上げた。

ことであろう――このことでないかしら、いつかは知れる身 (後悔するな――後悔するな、と、仰しゃった言葉 ーこの

の上だと、思うて――そうにちがいない。後悔するな。

するな――)

綱手は、月丸の、 その時の顔、 言葉つきを思い出した。

「坐るがよい」

綱手は、袋持の声に、はっとして、頭を下げて、つつまし

< 坐った。

|綱手 ―お身は」

と、云って、袋持は、暫く、言葉を切った。綱手は、

など、何を云っても、何をしてもいいと思っていた。 (でも、月丸様は、自分の素性をかくして、妾の素性を知っ

ていなさるのに――)

も思えた。然し、綱手は、自分で、それを、打消した。そし と、思うと、叡山の夜が、月丸の深い巧計から出たように

(仮令、そうであるにしても―― 妾には、月丸様が、憎めな

仇 か た き は、 仇敵のお息子とは思えない)

Ł 思った。

「飾るところなく、申せば - これは、某一存の推察でござ

るが、百城と、お身と、何か、 綱手は、考え込んでいたが、 百城という名に、はっとして、 お係り合いがござらぬか?」

心を澄ますと、係り合いがないか、と聞かれて

「係り合いとは?」

「さ、それは、 いろいろとあって、 申せることも申せないこ

ともござるが-

| |さあ||--|

某の無礼を、 お咎めなければ申そうが」

いいえ、咎めるの、 何んのと――」

では――」

いって、袋持は、 じっと、 綱手の眼の色を見ながら

「約束事でも、 あるか、 轟かしたが、もう、袋持も、無いか――したか、せぬか」

女中頭も、 綱手は、 一 寸 兵太夫も 、 胸を、 それから、 世の中さえ、 怖ろしくは 邸も、

なかった。

(死ねばよい)

と、決心してい 冷たい、 微笑を見せて

「仮えば、・「約束とは 夫婦とかっ

明瞭とした声で

致しました」

た。

綱手の顔を、 じっと凝視めたまま、 暫く黙ってい

真実?」

はい

「お身は、 仙波の娘御。 仙波殿は、 牧を討つため斬死なされ

た方ではないか」

「はい」

に、人もあろうに、 「その娘御が、濫りに、男と契るでさえ、不孝、不義である 父の仇敵の倅と、契って、 それを、 恥と

は、心得ぬか」

た。十分に、それくらいのことは、承知していた。自分一人 の呵責だけでさえ、その弱い心を引裂かんばかりであるのに、 綱手は、それで、地獄のような呵責を感じているのであっ

頼もしい同志の一人である、と信じていた袋持が、 その判りきったことを、又、他の人から聞きたくなかった。 憎くなっ

てきたし

(この男も、月丸のように譃をつくのかも知れない)

綱手は、 と、思うと、世の中の、悉くの男が、呪わしくなってきた。 絶望的な反抗心に、燃え上った。

「心得ております」

「それで、 何故に

「これも、 運命で、ござりましょう」

ぬうち、 · 運命? 肌を許して、 奇怪な その不行跡を、 奇怪なことを申す。素性も、 恥じさえせず、 碌に判ら 運 命 ?

不埓なっ、何を申す」

袋持は、顔を赤くした。

「暫く待て、 百城を、 連れて参る。 百城は、 恥を心得ぬ奴で

はあるまい」

248

袋持は、口早に、鋭く、こういって、立上った。綱手は、

眼を閉じた。

(お父様、冥途で、お詫び、申しまする)

涙が、又、湧き上ってきた。

「百城――女は、契ったと申す。それが、真実か――聞きた

<u></u>

向いていた。月丸は、腕組して、眼を閉じていた。 袋持は、昂って来る心を押えて、静かにいった。綱手は俯

「何うじゃ、百城」

た。 何故、こんなに早く、暴露したのか判らないので、黙ってい(「女は、思いがけぬ詰問に、綱手が、何う答えたのか?)

性も、存じておろうな。それでいて、契るなど――それでも、「貴公は、この娘の素性を、存じておろうな――又、己の素

武士か」

月丸は、眼を開いた。そして、袋持へ、冷やかな 閃 きを与う ここ

えて

「存じている」

「存じていて、何故、契った?」

「惚れた」

葉に、うれしさが、いっぱいになった。 綱手は、月丸の、情熱的な、何をも恐れないような強い言

「惚れた?――そうか――よ

袋持は、怒りに、拳を顫わせていた。

「この由、

御留守居役に、申し上げる」

- そうか ――よく申した」

「うむ、処置は、いかようなりとも、受ける。覚悟は致して

おる」

「よしっ」

「惚れてもいる、綱手。然しながら、欺いてもおる。と、申袋持は、立上って、足音荒く、出て行った。月丸は、すぐ

す訳は――」

「お察し、申しておりまする」

ていた。それを、月丸にいわせて、月丸を苦しめたくなかっ綱手は、月丸のいおうとすることが、何んであるか、判っ

た。月丸が

「惚れていたから」

※ が死ぬ以上、月丸を、苦しめたくはなかった。 許した自分の罪は、死にさえすればよかった。そして、自分い と、いった言葉で、総て十分であった。仇敵の倅に、肌を

「察しているとは?」

「父上の同志のことなど、お聞きなされましたこと――」

情熱とを込めて、月丸を見た。綱手は、紅い、莟のように、ふくらんでいる眼瞼から、愛と、

「判っておったのか」

「いいえ、あの時は、少しも――只今、判りましてござりま

する」

「恨むであろう」

「いいえ」

「憎くはないか」

「少しも――」

「欺くつもりでもあった。欺いても、武士の道には、外れぬ。

まで、 うと、打明けようか、明けまいか。 わしは、八郎太殿が不忠者だと信じている。いいや、もっと、 わしには、お身の父の同志にはなれぬ。不義の味方はできぬ。 ことになったなら、と、それが、案じられて、打明けもせな しようと、二股をかけたが あの山の夜 なたの素直 一つの便法 武士の意地を立てねばならぬかと、 綱手、わしは、 さに惚れておった。 ――とも思ったが、 大殿のために一手柄を立て、かねて、 お身と契ったからとて この素直な娘を、かく欺い 既に、その時、心底から、そ いつかは、知れること、と思 もし、打明けて、別れる わしも、苦しんだ。 わしは、 契りも て

驚くことを決心しておる。それは 「ええ」 ――小太郎を討つ」

Ŏ

申すなよ。 悔すなと申したのは、ここのことじゃ。 はいぬが、 もかも申そう―― れに味方する人は不忠者じゃ。 まいが、斉彬公の御振舞は、 あの老僧 しい父につく。然し、お身は、恋しい。お身も、苦しかろう 「あの山の夜、小太郎を討ちに参った。契った上は、わ 妻は、夫に従うものと、説き伏せるつもりであったが、 わしも、 !のために失敗った。お身は女ゆえ家中のことは判る 家の家臣として、飽くまで、わしは、父につく。 お身を、 お身とは仇敵同士として、父の子として 苦しい。 欺いた。いいや、こう申した上は 武士の道と、 わしの味方として、 何うしたならよいか。父とお身との板 よろしくないのだ。それで、 恋との板挟みか 小太郎ものう-恋も、 わしは、 功名も、 欲が深いと わしは、 綱手、後 、欺いて 得た いしい Ĺ 。 正

気地がなさすぎる。邸の表から申せば、お前は、

ただの家来 か、女は、

では

から、そういう処置もできぬ。

親許へ下げて、

まず、

処置するところであるが、

国許へ戻す

噂が拡

点まる。 ない

番、

困るのは、

拙者じゃ。

中島兵太 処置はで

な、この

不義へは、

何 そ

いのじゃ。

然し、こうなっては

わしのことを、

考えてくれ。又、父仲太郎殿の誠忠無比、

睨みが利かなくなる。よいか

月丸、 Ł いった時

「女も――」 と、袋持が、呼んだ。

二人は、すぐに立上った。

暫く、 「困ったことが起きたのう、 遠慮せい。両人、もっと、 百城、 前 へ参れ」 困ったことが 袋持、

ミイラに、 くと、 調所殿のあずかり子として、なかなか重任がある。 後で、後悔をする、 惚れるでのう。後前の見境もなく、一緒になってしまって、 すぎるくらいにおる。齢が若いと、 べたしている身でもなければ、時でもない。尤も、袋持に 無い。が、 よい聟が――と。しかし、二人は、よう揃うておる。申分は の邸だけでなく、広い世の中に、 「別れぬか、何うじゃな。 袋持は出た。二人は、敷居際から、少し前へ進んだ。 なかなか、苦肉の計であるらしいが、ミイラ取りが、 いささか成った形では、 無いが、牧、お前は、 もっとよい女が嫁に貰えたの、もっと、 男も、 、 女も、 いっぱいおる。少し、 牧仲太郎の子として、 すぐ、手近いところに、 少し、 いろいろとおる。こ 武士としても、 女にべた 又 聞 - 250 -

命を賭しての呪術を思い、又、己の行末のことを、思うたな ここは、 一番、 、女と別れるのが、 何よりの孝行、 忠義じ

「女も同じことじゃ。孫兵衛の倅は、よい男じゃ。 気に、こういって兵太夫は、冷たい茶を飲んだ。 気前

から、 るが、 月丸の武士を立てさせ、その方の身の上も固めると、三方、 肌がよくなるものじゃで― 殿へ申訳がないから、その方は、母親へ送り届けて、母親諸 ここで、わしの申すことを聞かぬと、わしも、留守居として、 四方よいように、さらりと、別れるのじゃ。よいかな、 去る者、 城も可愛かろうが、 調所殿の相談対手にもなった大町人じゃ。申し分は無い。百 武士らしい。調所殿が、見込まれた聟じゃし、その親爺も、 暫く、窮命じゃ。又、百城とて、片手落の捌きはできぬ 仲太郎の許へ戻して、処置をつけてもらわにゃならぬ。 暫く我慢して、外の男と添うておりゃ、又、その男の 日々た疎しと申して、若い娘は、すぐ血の道を上げ 浜村へ行くと、又、浜村が可愛うなる。 ―な、ここは、わしの顔を立て、 もし

「はっ」

何うじゃな、

女は?」

「よく、判りましてござりまする」

紙を取出した。 誓紙を作るがよい。早く、承諾してくれて、落ちついた」 「それでは、 、 兵太夫は、 違い棚から、 別れると、此後一切係り合い無しと、これで、 手文庫を下ろして来て、中から、

恐れながらー

何かの」

「ははあ 「暫時、両人にて、話しとうござりまするが、 -それは、よいが、別れる決心は、 次の間を――」 したのであろ

うの

「はっ」

「なら、少しは ―よかろう。許す」

留守居役の顔になって、暫く、耳を立てていた。 がら、じっと、二人の入った次の間を見た。そして、厳格な、 膝脇へ置いた。そして、自分で、茶をついで、 二人は、平伏してから立上った。兵太夫は、 紙を延して、 飲もうとしな

牧仲太郎は、寝不足の眼を血走らせて、誰も入れない一間

白い絹の上に描かれて行く魔天の線は、所々薄ぐろく、所

々は紅であった。

魔天の像

てい

あった。牧は、その筆に、その血をつけて、一筆を下すたび三人の人間の生き毛と、八種の獣の毛とを合せて造った筆での血との混ったものであったし、魔天を描いている筆は、十淀んでいる赤黒い液体は、犬の血と、牛の血と、仲太郎の腕仲太郎の膝の右には、青磁色の鉢があった。その鉢の中に、

子、今度の呪法に加護候え」

(調所殿が、敵党の奸策にかかって、毒死なされた上は、と、呟いたり、口の中でいったりしていた。

させると同時に、狂憤せしめた。 苦衷を知っている調所の死んだということは、仲太郎を落胆(と、仲太郎は、決心したのであった。ただ一人、仲太郎の非もない)

まして、謂わんや、怪奇にして神業の如き、この呪法の判ろい。調所殿を殺す人間に、本当の、人間の値打は判るまい。(是非もない――かかる上においては、恩師と雖も容赦すま

う道理がない)

ある調所を失ったことが、淋しくもあったし、情なくもあっ牧は、ただ一人の、心からの信仰者にして、且、庇護者で

のは、 庇護者を失って この心を知って、 りつつ、恩師をも敵として、邪法を行っているのは、広く天 破邪に用いんがためであった。自分は、 斉彬公の公子達を呪殺してまで、秘呪の威力を示そうとする ちぢめてまで、この呪法を拡めようとはしたくない。仮にも 下に、この秘呪の正統者を求めんがためであった。調所殿は、 は、御家のためであり、三つには、天下にこの法を拡めて、 かし、正法の呪法は、人を生かし、己をも生かす。それを知 いるが、 (大殿、 、一つは、 斉興公から、 邪法は人を呪殺すると、 調所殿への知己に報いるためであり、二つに 十分の言葉を下された。ただ一人の、その 多少の 加 増があるくらい 己の命を三年ちぢめる。 邪法の呪咀を行って で、 己 の 命 し

と、思うと、牧は、絶望し、自棄した。

(何うにでもなれ。この上は、威力の程を見せて、調所殿の

後を追ってくれる)

是

の襖を開けた。
暫く、それを眺めていたが、それを持って立上って、次の間命とをこめて、小さい大忿怒明王の像を描き終った。そして、牧は、黒い毛氈の上に坐ったまま、一筆一筆に、祈願と、

頭に、答えもしないで、壇上へ手を延して、戒刀を取り上げにかかるのを待っていた。牧は、灰色の顔をして、弟子の叩次の間には、四人の弟子が、祭壇の周囲に坐って、牧が行

た。

することに不安を感じながら、 の、 ただならぬことを察している弟子達は、 見守っていると 牧の

「今日の修法は一人でよい」

火炉の中に積み重ねてある木の下へ、差し込んだ。 ず、戒刀を抜いて、左手に持った。そして、膝の前に、 瞬いている燈へ、段木をつきつけて、火が燃え上ると、 かにいった。そして、 弟子達が立上るのに眼もくれ 微か

洩れていた。 煙 牧仲太郎 は、 部屋の天井を這い廻っていた。異臭は、 、その一点を、 の 眼は、狂人の眼であった。何かを、 部屋の中は、薄暗くて、むせっぽかった。 、じっと、睨んだまま、またたきもし 宙に凝視 襖の外まで め

なかった。その眼は、 ていたが、 人 間 の眼でなく、 悪魔のように、 光っ

た凄さを帯びていた。

なった。 くがく顫えていて、時々、身体を浮かしては、立上りそうに はだけた胸には、 火炉の灰を塗りつけた額には、冷たい汗が、滲んでいたし、 滴って流れていた。 脣も、 手も、 膝も、が

ては、 を噛んで、膝の上へ当てたり、 右手の戒刀を、 顫える手で引込めた。 引っつかん で、 左手の画像を、 時々、振上げかけては、 抛げつけかけ 脣

と争っているのであった。飛びかかるように身体を突き出す 牧は、その凝視めているところに現出 打挫かれたように、 胸を、 臂を引いて、その度 し ている、 見え ぬ 敵

に歯を剥き出した。

た。そして、戒刀を振上げると、 大声で、次の間まで響く声で、 すぐ、 叱咤すると、 崩れるように坐った。 いきなり立っ

肩で呼吸をして、 全身を顫わして

「邪中の正気、見られいっ」

して、戒刀を突き出した。そして、 Ł 叫ぶと、火炉の中へ、堕ちかからんばかりに身体 顔を横に振りながら

垂 迹和光の月明らかに

と、絶叫して、戒刀で上を指した。

終末に及んで、 分段同居の闇 を照らす、 これ、 邪中の正」

こう叫ぶと、身体を引いて

「十方充満の諸天、赦させ給え」

「南無、 そう叫んだ刹那、 明 王 J

く炸裂したかと思うと、左手に握っていた忿怒明王の画 人間の声とも思えぬ絶叫であった。部屋の中へ、 爆弾 の 如

火炉の中へ抛げつけた。

願を聞き入れたようでもあった。その一刹那 ると、一 し出された明王は、牧を睨んでいるようでもあるし、 せられたように、さっと、 画像は、炎々と燃え上っている段木の焔の上へ、落ちかか 煽り煽られた。 そして、 突っ立った。 焔の上へ何者かの手で立た 火焰 の明りに、 牧の祈

「ええいっ」

切れて、 牧の手の戒刀が、 倒れ落ちると共に、 画像へ閃くと、明王の頭から、真二つに その裾から、 燃え上ってしまっ

## 「成就

戒刀の尖で、親指の甲を切った。血が、噴き出してきた。牧 たが、片手で礼拝した。そして、燃えつくしたのを見終ると、 牧は、人間らしい眼に戻って、画像の焼けるのを眺めてい

それを、画像の灰の上へ、そそぎかけた。

っとしていたが、静かに、上げて来た眼に、微かに涙が光っ と、よろめいた。首を垂れて、暫く、右手をついたまま、じ した。そして、立上ろうと、壇へ手をついたが、腰を浮かす 戒刀を下へ置いて、火炉の灰を疵口へつけて、三度、黙祷

埋まって、臥っていた。静かな寝息、暗い行燈、何んの物音 もしない部屋、部屋。 加治木玄白斎は、疲労と、風邪と、その熱とで、白い中に その中で、急に、 手を蒲団の外へ突き

## 一市助」

出すと、鋭い眼付をして

そう叫 んだ瞬間、 よろめきつつ、起き上っていた。

「はっ」

用意っ」

危い足つきをしながら、帯をしめ直している玄白斎を見上げ 市助は、 次の間から襖を開けて、膝をついて、蒲団の上で、

「修法の?」

7

者共を、起せつ」

はいっ」

市助が、 走って出た。玄白斎は、咳き入りながら、 市助の

> 手さぐりに、火炉の上へ登った。 開けておいた部屋へ入って、行燈の微かな明りだけの中を、

廊下に、けたたましい足音がして、三人の門人が入って来

「修法を-- 今から」 た。

「牧を、折、伏致す。早く致せ」

郎が、祭壇へ黙祷して、 火炉の中の、焚木は、いつも用意されてあった。 その前に供えてある木切をとって、 和田仁十

燧石から火をつけると、すぐ、火炉の乳木へ移した。 玄白斎は、片手を、 炉べりへついたまま、首垂れて、肩で

呼吸をしていたが

「戒刀を――」

の光るのを持って来て、差出した。 と、微かに云った。市助が、片隅の暗いところから、 金具

「和田、高木、よく見ておけ」

気の無い顔をさらしたが、すぐ眼を伏せて 玄白斎は、静かに、こう云うと、燃え上って来た火焔に、脂肪

「和田、 高木」

「はっ」

二人は、返事をしなかった。 わしは、死ぬかもしれぬ」

修法を致しておる」

「又、致されておりますか」

わしを――呪殺しようと」

先生を?-

「旺んな気力じゃ。わしは、この身体で 闘えぬであろう」

いて、返事が出来なかった。 三人は、玄白斎の力無げに、俯向いて云っている言葉を聞

(そうなるかもしれぬ)

いっぷらいっし。こご、「お目所が、ごうしいにないこと、こ人とも感じた。だが、自分達の力では、何うするこ

のか――三人は、それが、真実とも思ったし、あり得ぬことのか?(こうして、物を云っている老師が、何うなって死ぬともできなかった。ただ、玄白斎が、どうしてそれを感じた

「牧 ――その力を ――」とも思った。

ではないかと、感じた一刹那、さっと、玄白斎の顔に、赤み玄白斎が、呟いた。人々は、玄白斎が、夢でも見ていたの

願くは、分段同居正邪の闇を照らさせ給え」「南無諸天、十方世界、円光の内に坐して、光明魏々たり、

がさすと

同時に、病に伏していた老人と思えぬ早さで、戒刀が閃いた。何処からか、不思議の力の入って来る玄白斎の声であった。

空間を睨んだ玄白斎の顔は、精気と、凄気とに充ちていた。め給え。いかに、牧っ」「南無、赤身大力明王、邪修を摧破して、剣刃下に伏滅せし同時に「宛に付していた老人と思えぬ早さて「飛刀が閃いた

三人の弟子は、膝を掴み、

唾を飲んで、じっと、凝視めた。

そして、半分立上って、火炉の中へ、倒れかからんばかりに、ながら、苦痛に耐えぬように、眉を歪め、手を顫わしていた。 玄白斎は、口早に、何かを叫んだり、口の中で呟いたりし

三人は、眼を見合せた。和田が、壇のところへ立って肩で、荒い呼吸をしては、俯向いてしまった。憤った眼で、何かを凝視めながら、刀を突き出すかと思うと、

しく、血が流れていた。和田は、振向いてと、云った。そして、顔を覗き込むと、脣を噛み切ったら

「いかん」

「不心得者っ。知己は、千載に待って、猶空しっ」かけた。その刹那と、二人の顔を見た。二人も立って来て、左右から、手をと、二人の顔を見た。二人も立って来て、左右から、手を

壇へ片脚をかけてニ人のかけていた手から、恐ろしい力で立上った。高木が、

させながら(玄白斎は、右手の刀を、振るように、顫えるように、上下)

「死ねっ、死ねっ、死ねっ」

「先生」

と同時に、和田が、袖を掴んだ。が、素早く、飛び上って、よろめく玄白斎の背後から抱えた。へ抛りつけたはずみに、火炉の中へ、片足を突込んだ。高木つづけざまに絶叫した。そして、左手にかけた珠数を空間

っている脣を顫わせて 玄白斎は、二人を引きずるように、身体を延して、血の滴

ちぎれそうなので、玄白斎の帯と、左手とへ、手をかけた。いるのであった。二人は、袖を持っているくらいでは、引き部屋の中のどっかに現出している牧の生、霊を、叱責して「知己を失って、悪逆を重ねて、それが、兵道の統棟かっ」

先生一 -先生っ」

が、玄白斎の痩せた身体の力は、二人の手に余った。二人は、 二人は、 力を出して、火炉の中から、引戻そうとした。だ

不思議な力に、脅えるような、気持になってきた。

「乳木が消える」

れかかる枯木のように、玄白斎が、凭れかかった。二人が、 市助が、一人に、こう注意した刹那、二人の手の内へ、倒

手に力を入れて、支えると、今まで、あの力の籠った声を出 あの力で二人を引きずっていた玄白斎が、眼を濁らせ、

口を半分開いて、 荒い呼吸をしているだけになっていた。

「先生、 、如何なされました」

を見つめた。そして、 玄白斎は、力のない眼を開くと、すぐ、元のように、 何か口の中でいっていたが、 空間

刀を振りかざすと、 と、叫んだ。二人が、押えようとした瞬間、玄白斎は、戒 凝視めていた一点へ、斬りつけた―

「危いっ」

人が

み入って、よろめきながら、 と、絶叫した。同時に、玄白斎は、段木の燃えた中へ、 刀を取落していた。

踏

れかかるのを、抱きとめて

と、 叫 んで、 抱き上げると、 二人が、よろめくくらいに、

急に身体が軽くなっていた。 いけないっ。 皆を呼べつ」

白色の頬をして、二人の腕の中に、 と、二人が怒鳴った。一人が、走って出た。玄白斎は、 眼を閉じていた。

灰

達は、 床へ横たえられた玄白斎は、そのまま眼を閉じてしまって 枕頭、 ただ、 呼吸だけは微かに通っていたので、 次の間に詰め切っていた。 家人、弟子

「危いか」

と、医者に聞くと

「何処と云って――これと云って悪いところもないが、 衰弱

が烈しい」

医者は、首を傾けた。

「あまりに、御気力を、 お使いすぎになったのだろう。 実は

市助が

と、呪法のことを話すと

「そうかな、成る程 医者は、玄白斎の顔を、じっと眺めていたが

の衰弱ではない。お齢が、 「御城内なり、 御親族なりへは、 お齢ゆえ」 知らせた方がよいの。

眼の縁に、薄黒い影が滲み出し、 玄白斎の白い髯は、いつの間にか、光沢を失っていたし、 頬の艶が無くなり、 咽喉仏

「保つまいか」

の骨が、とげとげしく突き出していた。

ー さ あ

仁十郎と、医者とが、こう云った途端

一うーむ」

玄白斎の頬に、 血の色が差して、眼を開いた。 その

眼には、もう生気が無くなっていた。 玄白斎は、じっと、そ 眼

の疲れた眼で、 天井を眺めていたが、 仁十郎の方へ一寸、

を動かして

「刀を――」

「 は い

と、云った。

仁十郎は、何故、刀を持てと云ったのか判らなかったので、

返事をしたまま、立たなかった。玄白斎も、そう云ったまま、

暫く、黙って、眼を閉じていた。

このまま、よくなればよい

(平生から、 御壮健な方だから、

Ł 人々は思った。

刀

「何故、持って参らぬ。このままわしを、不忠者として、殺

す所存か」

玄白斎は、 寸 寸 頭を仁十郎の方に向けて睨みつけた。

只 今 L

仁十郎が立上ろうとすると

一人が床の間から、 刀を持って来た。 仁十郎は、 それを枕

辺に置いた。

「起してくれんか」

「老師、それは、なりませぬ。このまま、このまま」

に、蒲団から、 手を出して、 蒲団の上から押えた。玄白斎は、 両手を出して、その手を除けて 力無さそう

> 「わしを、生かそうと――それは、忝ないが、 無駄じゃ」

「左様なことを――」

無うなった。ただ未だ、腹は――切れる」 「仁十、後方から、抱き起してくれ。もう、体力も、 気力も

て判った。 人々は、 はっとした。刀を持って来いという意味が、 初め

「先生、腹を召すなどと――」

き上ろうとしかけた。仁十郎と、 玄白斎は、それに答えないで、 市助とが、左右から 身体を横にして、自分で起

「先生」

と、云いつつ、抱きかかえた。

「長年わしの下におって、わしの心が、判らんか」

玄白斎は、そう呟きつつ、じりじり身体を立ててきた。

玄白斎は、床の上へ坐って、人々の顔を見廻した。それか

b

「皆、よく聞け」

と、云ったまま、咳き入った。二人が、背を撫でた。

「わしは、見る通り、最早、己一人で、 起き直る力も無うな

った。又——」

んで来た薬湯を、仁十郎の手から一口飲んで 「人に優った気力も、使い果してしもうた。 肩で、大きい呼吸をして、暫く、黙っていたが、 兵道家として、 女中の運

最早、命数が尽きた。抜け殻の身じゃ」

の声のように、微かであった。 静かな、というよりも、 墓穴の中から、 話しかけている人

-御奉公は勤まらぬ」

玄白斎は、 俯向いて、 ゆるやかに、首を振った。

「勤まらぬのみではない、不忠者にも、なった。牧の性根を、

見損じた。あれを―

玄白斎は、仁十郎を見た。

わしは、あれを赦してやったが、あいつは、わしを赦さない。 「久七峠で、斬らなんだ――わしの、生涯の失策であった。

の、老いた気力を見込んで、呪殺しようとしおった。わ

しは、呪法争いに負けた」

人々の顔に、 微かな殺気が立って来たが、誰も、 口を利か

なかった。

数も危い。 「わしが、精力を尽し果して倒れるからには、斉彬公の御命 これ、皆、この玄白の至らぬ業じゃ。 わ しの罪じ

彼奴を赦したわしの落度じゃ」

玄白斎は、俯向いた。

わしが兵道家としての、 「一つは、その、落度を、 君公に詫びる上から――二つには、 最期を、飾りたいがため 腹をす

思わなかった。それで、とにかく、一生懸命になだめて、身 誰も、この枯木のような玄白斎に、 人々は、玄白斎が、こう云ったのを、悲しく聞いていたが、 腹を切る力があろうとは

体を元通りにしたなら、と、考えていた。

いいえ、先生、 と、玄白斎が、手を延した。一人が 御身体を、もう一度

まで、云うと、玄白斎は、鋭く睨みつけて

「たわけ者めがっ」

怒鳴った。そして

「仁十郎、貸せ」

仁十郎は、

玄白斎の背に、 軽く、 手をかけて、 身体を支え

ていたが

「先生、それは

「か、貸さぬかっ」

玄白斎は、 立上りかけた。 一人が、 刀を、 自分の膝の上へ

持ち上げた。医者が

「とにかく、 御本復なされて――」

とを、 玄白斎は、 狂人のように打ち払った。そして、よろよろと、 黙って、痩せた手で、仁十郎の手と、 市助 の手

ると

「牧っ」

と、叫んだ。手を顫わして

ちて、悪鬼と化しても、争うぞ。 「現世のみならず、永劫の争いじゃぞ。共に、 一旦の勝を、 無間地獄に墜 勝と思うな。

三界、三世に亙って争うぞ」

い終ると、よろめいた。二人が抱えると 「刀を――げ、玄白斎の最期の血を、魔天に捧げて、あの世 いつもの玄白斎の気魄の充ちた声であった。 だが、 そうい

の呪いとなしくれる。か、 刀を――」

まま、 息を殺していた。

人々は、

悪霊に憑かれ

たような玄白斎を、

じっと見つめた

かさぬかっ。己ら、 この玄白を見殺しにするかっ。 放

258

二人を振切るはずみ、玄白斎は、朽木の如く、 倒れかかっ

た。人々が

「あっ」

と、叫んだ。三四人が、手を出して支えようとした。

「この毛を、悪神に供え――」

玄白斎は、微かに、こういって、 自分の頭の毛を掴もうと

したが、もう、手に力がなかった。

「この舌を――」

半分、口の外に現れていたが、もう噛み切る力もなかった。 白眼を見せて、灰色の顔に、死の蔭が、濃く彩っていた。 人々が、抱き上げると、玄白斎は、舌を噛んでいた。舌が